

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（131）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－XXVII

（市来IC～薩摩川内都IC）

しも つき でん                      みやこ ばる  
**霜月田遺跡・都原遺跡**

（薩摩川内市）

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



霜月田遺跡 遠景（西から）



霜月田遺跡 縄文時代早期土器



都原遺跡 縄文時代早期土器



都原遺跡 須恵器（骨蔵器）

## 序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道川内道路建設に伴って、平成12年度～15年度にかけて実施した薩摩川内市（旧川内市）に所在する霜月田遺跡及び都原遺跡の発掘調査報告書の記録です。

この遺跡は、川内平野の南側にあたる、標高約50mの台地上に位置します。近くには成枝氏が居城した都城があったと伝えられています。

霜月田遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡です。縄文時代では早期の中原式土器や押型文土器など、晩期の深鉢や浅鉢など多様な遺物が出土しました。さらに古代から中世の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、落とし穴、土坑などが検出されています。

また、都原遺跡は縄文時代早期から近世にかけての複合遺跡です。縄文時代早期の山形押型文土器や変形撚糸文土器等の他、特に古代の骨蔵器と思われる須恵器壺が、埋納された状態で出土しています。また、両遺跡からは白磁、青磁、青花などの輸入磁器が出土しました。これらの遺物は、中世全般において薩摩国の海外交易を考える上で重要な資料となりました。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助として大いに活用されることになれば幸いです。

最後に、調査に当たり御協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所、薩摩川内市（旧川内市）教育委員会、及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 宮 原 景 信

# 報告書抄録

ふりがな	しもつきでんいせき・みやこぼるいせき							
書名	霜月田遺跡・都原遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道川内道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXVIII							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	(131)							
編集者名	岩屋高広・木之下悦朗・松元佑輔・鶴田静彦							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 0995-48-5811							
発行年月日	平成20年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
しもつきでん 霜月田遺跡	かごしまけんさつませんだいい 鹿児島県薩摩川内 しみやこちょう 市都町6701-1他	462021	6-152-0	31° 46'15"	130° 17'48"	確認調査 19991004~19991008 本調査 20001003~20001226 20030616~20040226	139㎡ 3,000㎡ 8,000㎡	南九州西回り自 動車道川内道路 建設
みやこぼる 都原遺跡	かごしまけんさつませんだいい 鹿児島県薩摩川内 しみやこちょう 市都町6646-4			31° 46'19"	130° 17'56"	確認調査 20001204~20001207 本調査 20020821~20021213	144㎡ 4,000㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
霜月田遺跡	集落地	旧石器時代第Ⅰ文化層				ナイフ形石器, 台形石器, スクレイパー, 剥片石器, 石核, 磨石・敲石		
		第Ⅱ文化層		礫群1基		細石刃, スクレイパー, 磨石, 敲石		
		縄文時代早期		集石3基		中原式, 条痕文, 山形押型文・楕円押型 文, 平橋式, 塞ノ神式, 石鏃, スクレイ パー, 使用痕剥片石器, 打製石斧, 礫器, 磨石, 敲石, 石皿		
		縄文時代中期・後期		集石1基		阿高式, 南福寺式土器		
		縄文時代晩期		集石2基		粗製深鉢, 精製浅鉢, 組織痕, 石鏃, 石 匙, スクレイパー, 楔形石器, 使用痕剥 片石器, 石斧, 礫器, 磨石, 敲石, 石皿		
		古代~中世		掘立柱建物跡5棟 竪穴建物跡4基 落とし穴3基 土坑3基 焼土域1か所		土師器(甕, 碗, 皿)須恵器(播鉢), 陶器(播鉢), 陶磁器(青磁, 白磁, 青花)		
		近世		溝状遺構3条		陶器(備前焼, 薩摩焼)		
近・現代		古道1条		銭貨				
都原遺跡	散布地	縄文時代早期		集石1基 土坑3基		山形押型文 変形燃糸文, 手向山式, 石鏃, スクレイパー, 石核, 磨石, 敲石, 石皿		
		古代		埋納遺構(骨蔵器)		須恵器		
		中世		道跡 1条 溝状遺構 1条		土師器(皿), 陶器(播鉢), 陶磁器(青 磁, 染付)		
		近世		溝状遺構 1条		陶器(肥前焼, 薩摩焼)		
遺跡の概要	霜月田遺跡は、主に旧石器時代ナイフ形文化期から近世までの遺構や遺物が発見された複合遺跡である。縄文時代では早期と晩期の遺物が豊富に出土し、古代~中世においては掘立柱建物跡や竪穴建物跡・落とし穴等が確認された。都原遺跡は縄文時代早期から近世にかけての遺構・遺物が発見され、縄文時代早期の遺物は山形押型文や変形燃糸文土器等が出土した。特に古代の骨蔵器と思われる須恵器の壺が埋納された状態で検出された。							



第1図 霜月田・都原遺跡位置図



## 例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道川内道路（市来 I C～薩摩川内都 I C間）建設に伴う霜月田遺跡及び都原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県薩摩川内市都町（旧川内市都町）に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、建設省九州地方局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 霜月田遺跡の発掘調査は、平成11年10月4日から10月8日まで、平成12年10月3日から12月26日まで、平成15年6月16日から平成16年2月26日までに実施した。都原遺跡の発掘調査は、平成12年12月4日から12月7日までと平成14年8月21日から12月13日までに実施した。
- 5 遺物番号、挿図番号、表番号は各遺跡ごとに通し番号とし、写真図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真は、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 9 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測・浄書は整理作業員の協力を得て整理作業担当者が行った。本報告書に使用した写真図版のうち、遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 10 周辺地形図・トレンチ配置図等のデジタルトレースは整理作業担当者が行った。
- 11 石器類の実測・トレースは、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 12 遺構内から出土した炭化物、貝殻の放射性炭素年代測定及び炭化物の樹種測定は株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 13 本書の執筆・編集は、霜月田遺跡を岩屋高広と松元佑輔、都原遺跡を木之下悦朗、鶴田静彦が担当した。
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、霜月田遺跡の遺物注記の略号はシモツキ、都原遺跡はミヤコである。

# 目 次

序文	
報告書抄録	
例言	
目次	
第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 遺跡と位置と環境	5
第Ⅲ章 霜月田遺跡の発掘調査成果	11
第1節 調査の成果	11
1 調査の経過	11
2 調査の組織	11
3 調査の方法及び概要	13
4 調査の経緯(日誌抄)	14
第2節 遺跡の層位	19
第3節 旧石器時代の調査	23
1 第Ⅰ文化層の調査	23
2 第Ⅱ文化層の調査	27
第4節 縄文時代の調査	30
1 早期の調査	30
2 中期・後期の調査	50
3 晩期の調査	53
第5節 古代～中世の調査	73
第6節 近世の調査	99
第7節 近・現代の調査	104
第8節 調査のまとめ	105
放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)	109
第Ⅳ章 都原遺跡の発掘調査成果	117
第1節 調査の成果	117
1 調査の経過	117
2 調査の組織	117
3 調査の経緯(日誌抄)	119
4 発掘調査の概要	121
第2節 縄文時代の調査	126
第3節 古代・中世の調査	145
第4節 中世～近世の調査	147
第5節 都原遺跡のまとめ	152
放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)	154
あとがき	

## 挿 図 目 次

第 1 図	霜月田・都原遺跡位置図 (1/25000)	4
第 2 図	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図	9
第 3 図	遺跡の位置及び周辺遺跡	9
<b>(霜月田遺跡)</b>		
第 4 図	グリッド配置及び確認トレンチ位置図	17
第 5 図	平成12年度調査位置図	18
第 6 図	平成15年度調査位置図	18
第 7 図	柱状模式図	19
第 8 図	土層断面図(1)	20
第 9 図	土層断面図(2)	21
第10図	土層断面図(3)	22
第11図	第 I 文化層石器群の石材の割合	23
第12図	第 I 文化層のブロック主要石器出土分布	24
第13図	第 I 文化層の出土石器(1)	25
第14図	第 I 文化層の出土石器(2)	26
第15図	第 II 文化層石器群の石材の割合	27
第16図	第 II 文化層の礫群	27
第17図	第 II 文化層の遺構位置図及びブロック主要石器出土分布	28
第18図	第 II 文化層の出土石器	29
第19図	縄文時代早期の遺構配置図及び土器出土分布	31
第20図	縄文時代早期の 1 号集石遺構	32
第21図	縄文時代早期の 2 号集石遺構	33
第22図	縄文時代早期の 3 号集石遺構	33
第23図	縄文時代早期の I 類土器出土分布	34
第24図	縄文時代早期の I 類土器	35
第25図	縄文時代早期の II 類土器	36
第26図	縄文時代早期の III 類土器出土分布	37
第27図	縄文時代早期の IV 類土器出土分布	37
第28図	縄文時代早期の III・IV 類土器	38
第29図	縄文時代早期の V・VI・VII 類土器	39
第30図	縄文時代早期の石器出土分布	42
第31図	縄文時代早期の出土石器(1)	43
第32図	縄文時代早期の出土石器(2)	44
第33図	縄文時代早期の出土石器(3)	45
第34図	縄文時代早期の出土石器(4)	46
第35図	縄文時代早期の出土石器(5)	47
第36図	縄文時代早期の出土石器(6)	48
第37図	縄文時代中期・後期の遺構配置及び出土遺物分布	50
第38図	縄文時代中期の集石遺構	51
第39図	縄文時代中期の遺構内遺物 VIII 類土器	52
第40図	縄文時代後期の IX 類土器	52
第41図	縄文時代晩期の遺構配置図及び土器出土分布	54
第42図	縄文時代晩期の 1 号集石遺構	55
第43図	縄文時代晩期の 2 号集石遺構	56
第44図	縄文時代晩期の土器(1)	57
第45図	縄文時代晩期の土器(2)	58
第46図	縄文時代晩期の土器(3)	59
第47図	縄文時代晩期の石器出土分布	61
第48図	縄文時代晩期の出土石器(1)	62
第49図	縄文時代晩期の出土石器(2)	63
第50図	縄文時代晩期の出土石器(3)	64
第51図	縄文時代晩期の出土石器(4)	65
第52図	縄文時代晩期の出土石器(5)	66
第53図	縄文時代晩期の出土石器(6)	67
第54図	縄文時代晩期の出土石器(7)	68
第55図	縄文時代晩期の出土石器(8)	69
第56図	縄文時代晩期の出土石器(9)	70
第57図	縄文時代晩期の出土石器(10)	71
第58図	古代～中世の遺構配置図	74

第59図	1号掘立柱建物跡	75
第60図	2号掘立柱建物跡	76
第61図	3号掘立柱建物跡	77
第62図	4号掘立柱建物跡	78
第63図	5号掘立柱建物跡	79
第64図	1号竪穴建物跡	80
第65図	2号竪穴建物跡	81
第66図	3号竪穴建物跡出土遺物	82
第67図	3号竪穴建物跡	83
第68図	4号竪穴建物跡	84
第69図	1号落とし穴	85
第70図	2号落とし穴	86
第71図	3号落とし穴	86
第72図	1号土坑	87
第73図	2号土坑	88
第74図	3号土坑	89
第75図	3号土坑内遺物	90
第76図	焼土域	90
第77図	古代～中世の出土遺物(1)	91
第78図	古代～中世の出土遺物(2)	93
第79図	古代～中世の出土遺物(3)	94
第80図	中世の磁器出土分布	95
第81図	古代～中世の出土遺物(4)	96
第82図	古代～中世の出土遺物(5)	98
第83図	近世の遺構配置図	100
第84図	礎石と古銭を伴うピット	101
第85図	近世の溝状遺構	102
第86図	近世の出土遺物	103
第87図	近現代の出土遺物	104
第88図	縄文時代早期の土器出土点数の割合	105
第89図	中国窯・港湾位置図	108

(都原遺跡)

第1図	トレンチ配置図	119
第2図	柱状模式図	121
第3図	土層断面図(1)	122
第4図	土層断面図(2)	123
第5図	周辺地形及び発掘範囲	124
第6図	全遺構配置図(縄文時代～近世)	125
第7図	縄文時代早期の遺構配置図	126
第8図	縄文時代早期の集石、土坑検出及び土器出土状況	127
第9図	縄文時代早期の土坑及び集石遺構	128
第10図	縄文時代早期のⅡ-1類土器(1)	130
第11図	縄文時代早期のⅡ-1類土器(2)	131
第12図	縄文時代早期のⅡ-2類土器(1)	132
第13図	縄文時代早期のⅡ-2類土器(2)	133
第14図	縄文時代早期のⅡ-2, Ⅱ-3類土器	134
第15図	縄文時代早期のⅢ・Ⅳ類土器	135
第16図	縄文時代早期の出土石器(1)	138
第17図	縄文時代早期の出土石器(2)	139
第18図	縄文時代早期の出土石器(3)	140
第19図	縄文時代早期の出土石器(4)	141
第20図	縄文時代早期の出土石器(5)	142
第21図	縄文時代早期の出土石器(6)	143
第22図	埋納須恵器の出土状況	145
第23図	埋納須恵器	145
第24図	埋納須恵器出土位置図	146
第25図	中世の遺構配置図	147
第26図	中世の道跡	148
第27図	中世の溝状遺構	148
第28図	近世の土坑及び溝状遺構	149
第29図	中・近世の出土遺物	150
第30図	近世の出土遺物	151

## 表 目 次

第 1 表	南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	3
第 2 表	周辺遺跡地名表	8
	<b>(霜月田遺跡)</b>	
第 3 表	旧石器時代の石器観察表	30
第 4 表	縄文時代早期の土器観察表(1)	39
第 5 表	縄文時代早期の土器観察表(2)	40
第 6 表	縄文時代早期の石器観察表	49
第 7 表	縄文時代中期・後期の土器観察表	52
第 8 表	縄文時代晩期の土器観察表	59
第 9 表	縄文時代晩期の石器観察表(1)	71
第 10 表	縄文時代晩期の石器観察表(2)	72
第 11 表	1 号掘立柱建物跡観察表	75
第 12 表	2 号掘立柱建物跡観察表	76
第 13 表	3 号掘立柱建物跡観察表	77
第 14 表	4 号掘立柱建物跡観察表	78
第 15 表	5 号掘立柱建物跡観察表	79
第 16 表	3 号竪穴建物跡出土遺物観察表	82
第 17 表	1 号土坑出土遺物観察表	87
第 18 表	3 号土坑出土遺物観察表	89
第 19 表	その他の遺構内遺物観察表	91
第 20 表	古代～中世の出土遺物観察表(1) (土師器・須恵器)	97
第 21 表	古代～中世の出土遺物観察表(2) (陶磁器)	97
第 22 表	古代～中世の出土遺物観察表(3) (金属製品)	98
第 23 表	近世の出土遺物観察表 (陶磁器)	104
第 24 表	近・現代の出土遺物観察表	104
第 25 表	県内竪穴建物跡検出遺跡一覧表	107

### (都原遺跡)

第 1 表	縄文時代早期の土坑観察表	129
第 2 表	縄文時代早期の土器観察表	136
第 3 表	縄文時代早期の石器観察表	144
第 4 表	古代以降の土器・須恵器・陶磁器観察表	151

## 図 版 目 次

### (霜月田遺跡)

図版 1	遺構検出状況空中写真	161
図版 2	土層断面図, 旧石器時代のブロック検出状況, 礫群検出状況	162
図版 3	縄文時代早期の集石遺構, 遺物出土状況	163
図版 4	縄文時代中期の集石遺構検出状況	164
図版 5	縄文時代晩期の集石遺構検出状況	164
図版 6	古代～中世の落とし穴完掘状況	165
図版 7	古代～中世の竪穴建物跡検出・完掘状況	166
図版 8	古代～中世の掘立柱建物跡完掘状況	167
図版 9	近世の溝状遺構検出・完掘状況	168
図版 10	旧石器時代の石器	169
図版 11	縄文時代早期の土器(1)	170
図版 12	縄文時代早期の土器(2)	171
図版 13	縄文時代早期の石器(1)	172
図版 14	縄文時代早期の石器(2)	173
図版 15	縄文時代中期・後期の土器, 縄文時代晩期の土器(1)	174
図版 16	縄文時代晩期の土器(2)	175
図版 17	縄文時代晩期の石器(1)	176
図版 18	縄文時代晩期の石器(2)	177
図版 19	古代～中世の遺構内遺物 (土師器・須恵器)	178
図版 20	古代～中世の出土遺物(1)(2), 古代～中世の金属製品	179
図版 21	古代～中世の出土遺物(3), 中世の出土遺物 (土師器皿等集合)	180

### (都原遺跡)

図版 22	都原遺跡の遠景, 縄文時代早期の集石	181
図版 23	縄文時代早期の 2 号土坑, 土器出土状況	182
図版 24	古代の骨蔵器出土状況	183
図版 25	中世の道跡, 中世の溝状遺構	184
図版 26	近世溝状遺構検出状況, 完掘状況	185
図版 27	近世の土坑, 都原遺跡から霜月田遺跡を臨む	186
図版 28	縄文時代早期の土器(1)	187
図版 29	縄文時代早期の土器(2)	188
図版 30	縄文時代早期の石器	189
図版 31	古代出土の須恵器 (骨蔵器), 中世・近世の出土土器・陶磁器	190

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、市来～隈之城間に南九州西回り自動車道川内道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課に照会した。この計画に伴い、文化財課が平成8年8月に市来ICと隈之城IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、8か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化財課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成10年度から平成15年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下のとおりである。

## 第 2 節 遺跡の概要

- 1 市堀……………いちき串木野市港町に所在し、標高約40mのシラス台地上に立地する。調査面積は3,040㎡である。縄文～中世、各時代の遺物が出土したが少量であった。縄文時代早期では、集石1基・落とし穴と想定される土坑1基が検出された。遺物は、前平式・貝殻条痕文土器と磨石等が出土した。晩期では入佐式・黒川式土器が、弥生時代中期では黒髪式土器が、古墳時代では成川式土器が出土した。古代～中世にかけてのピットが多数有ったほか、溝状遺構1、焼土域2か所、土坑10基が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。また、古墳時代～古代で双孔棒状土錘・管状土錘が出土した。
- 2 安茶ヶ原……………いちき串木野市川上に所在し、標高約25mのシラス台地上に立地する。調査面積は16,000㎡である。縄文時代早期・後期の前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式土器が出土したほか、晩期の層位から佐賀県腰岳産の黒曜石10点が集中して見つかり、交流または交易によってもたらせられたものと考えられる。そのほか、古墳時代の成川式土器も出土したが、注目されるのは古代～中世にかけての遺構・遺物である。『日置厨』と墨書された須恵器の坏が土坑内に遺棄された状態で出土したほか、矩形に掘り込まれた溝と、2棟の四面庇建物跡がほぼ南北に並んで検出されたほか、その東側では、北側に庇が取り付く片庇建物跡も見つかり、2間×3間を主とする掘立柱建物跡5棟も確認され、須恵器・土師器・陶磁器・染付等多くの遺物も出土していることから本遺跡は、古代末から中世初期の在地領主層の居宅跡と推定される。
- 3 菖蒲掛……………いちき串木野市上名に所在し、標高約70～75mの台地上に位置する。平成11年2月に地形等を考慮して2m×3mのトレンチを4か所、2m×4mのトレンチを設定し

て確認調査を実施した。その結果、表層下位はシラスであり、遺物包含層は残存せず、遺構も検出されなかった。

- 4 **栴城跡**……いちき串木野市上名に所在し、五反田川中流域沿いの標高約10mの低地部から標高約50mのシラス台地上にかけて立地する。遺跡から東へ約800mのところには坂下城跡が、西へ約500mのところには串木野城跡がある。調査面積は約50,700㎡である。遺跡は台地部・微高地部・低地部の大きく3つで構成される。台地部からは二面庇付掘立柱建物跡2棟のほか、溝状遺構・方形竪穴建物跡・竈・中世墓等が検出された。微高地部からは、石切場跡が検出された。これは鹿児島県で初の調査事例となった。低地部からは近世墓167基・良福寺住職の墓石が検出された。また中世ではカムイヤキ・東播磨系須恵器・樺万丈・青磁・白磁など中世の外来系土器が多数出土したほか、古代では墨書・刻書土器も出土した。これらのことから、遺跡は大きく城関連の遺構・石切場・寺院関連の遺構で構成され、古代以降において重要な場所であったことが推定される。
- 5 **今熊**……いちき串木野市上名に所在し、標高約24～26mの西傾斜面に立地する。平成11年10月に地形等を考慮して2m×3mのトレンチを5か所設定して確認調査を実施した。その結果、表層下位はすぐに岩盤またはその風化した礫及び粘質化した土壌となっており、遺構・遺物は発見されなかった。
- 6 **霜月田**……薩摩川内市都町に所在し、標高約49mのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代、縄文時代、古代～中世、近世の遺構・遺物が発見された。旧石器時代ではブロックが検出され、細石刃・剥片等が出土した。縄文時代では計6基の集石が検出され、中原式・押型文・塞ノ神式等の土器や石鏃・石斧・石皿・磨石等が出土した。古代～中世が本遺跡の主となるところで、掘立柱建物跡5棟・竪穴建物跡4基・落とし穴3基・土坑3基・焼土域1か所が検出され、遺物も土師器・須恵器・陶磁器等が出土した。近世では溝跡や道跡とともに陶磁器が見つかった。
- 7 **都原**……薩摩川内市都町に所在し、標高約50mのシラス台地上に立地する。調査面積は4,000㎡である。主に縄文時代早期や古代～中世の遺構・遺物が発見された。縄文時代早期では集石1基、土坑3基が検出され、石坂式・手向山式・塞ノ神式土器や石鏃・石斧・磨石・石皿が出土した。古代では骨蔵器と考えられる9世紀の須恵器壺が埋納の状態で検出された。口径10cm・器高20cmを測る。中世では方形竪穴状遺構・溝状遺構が検出された。方形遺構は内部に炭化材と焼土域が見られた。溝には土師器・青磁・白磁片が出土した。これらは成枝氏居城の都城跡との関連も考えられる。
- 8 **玉前**……薩摩川内市都町に所在し、標高約18mの河岸段丘上に立地する。平成18年10月に工事区域センター杭を基準にして、5か所のトレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、表土中にローリングを受けた土師器の小片が見られたが、表層下位はシラス及びシラスの二次堆積であり、遺構・遺物ともに発見されなかった。

第1表 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

(市来IC～隈之城IC)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	調査員	時代	概要
1	市堀	市来町湊町	3,040	確認 H13.12 全面 H14.5～7	繁昌・宮田 石丸・相美	縄文 古墳 古代～中世	糸痕文・黒色研磨土器 成川式土器 土師器・須恵器(甕)・青磁・染付 (県埋文センター117 2007刊行)
2	安茶ヶ原	市来町川上町	19,500	確認 H11.1 全面 H11.1～3 H11.5～10 H12.5～8 H13.5～H14.1	繁昌・栗林 繁昌・栗林 繁昌・野邊 繁昌・元田 繁昌・石丸	縄文 古墳 古代 中世	前平式・石坂式・押型文・深浦式・市来式 成川式土器 掘立柱建物跡・貝殻土坑, 墨書土器・須恵器 竪穴遺構・溝状遺構, 陶磁器・染付・瓦器 (県埋文センター118 2007刊行)
3	柵城跡	串木野市上名	50,700	確認 H11.10 全面 H12.11～H13.1 H13.5～H14.3 H14.5～H15.3 H15.7～H16.3	前迫・森田 繁昌・森田 平木場・三垣・石丸 ・西・松本 森田・拔水・吉岡・ 星野・平・相美 森田・星野・平	旧石器 縄文 古墳 古代 中世 近世	三稜尖頭器・剥片 落とし穴, 石坂式・押型文・轟式・黒川式土器 成川式土器 須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・砥石 石切遺構・鍛冶炉跡・掘立柱建物跡・五輪塔礎 石・墓坑, 青磁・白磁・染付・瓦質土器・滑石 製品・羽口・鉄滓・鑿・楔 石切遺構・石垣・一字一石経塚・墓坑, 陶磁 器・古銭・楔
4	霜月田	薩摩川内市都町	11,000	確認 H12.6 全面 H12.6～8 H15.6～H16.2	宮田・三垣 宮田・三垣 寺原・國師・石原田	旧石器 縄文 中世	礫群, ナイフ形石器・台形石器・細石刃・スクレイパー 集石, 貝殻糸痕文・押型文・燃糸文・粗製土器 ・石皿・石鏃・石斧・礫器・磨石・敲石・石皿 掘立柱建物跡・竪穴建物跡・落とし穴, 土坑・ 焼土域, 土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品 本報告書
5	都原	薩摩川内市都町	4,000	確認 H12.5 全面 H12.5～6 H14.8～12	宮田・三垣 宮田・三垣 星野・菅牟田	縄文 古代～中世 近世	集石・土坑, 石坂式・手向山式・貝殻糸痕文・ 塞ノ神式・石鏃・磨石・石皿・石斧 埋納遺構(骨蔵器)・道, 溝状遺構, 土師器(皿) ・陶器(播鉢)・陶磁器 溝状遺構, 陶器(肥前焼・薩摩焼) 本報告書





第2図 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査位置図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

霜月田遺跡及び都原遺跡は、薩摩川内市都町に所在する。日笠山・冠岳・火立ヶ丘・平原山等の山々に囲まれ、川内平野の南、標高約50mのシラス台地上に位置する。眼下には、川内川の支流、木場谷川が流れ、国道3号線隈之城バイパスが通っている。都町一帯を含む木場谷川流域（都以外に青山・中福良・尾白江などを含む）は、肥沃で、水害に対しても強く、格好の稲作地帯と言える。また、北東側には北薩の最高峰・紫尾山を望むことができる。また、都町の東方1kmに位置する田重岳は、隈之城平野のランドマークになっており、条里施行の際に基点となったとの指摘（藤井1965）もある。

薩摩川内市都町について、『角川日本地名大辞典』には以下の様に記述される。「市の南東部。市街地の南に位置し、東は尾白江町、南は木場茶屋町、西は青山町に接する。中央を都川が北流し、都川沿いは水田が開け、西部は高江山地に続く台地で畑が多い農業地域。神社には都八幡神社、日枝神社がある。地名は大和朝廷の直轄地として屯倉（ミヤケ）が置かれた所と伝えられる字都による。」（竹内理三編1983）

遺跡が所在する薩摩川内市（旧川内市）は薩摩半島の北西部に位置し、緯度は北緯31度46分、経度は東経130度18分である。人口は102,242人、面積は68,350km<sup>2</sup>である（平成19年4月1日現在）。北及び北東は紫尾山に続く出水山地で、薩摩川内市東郷町が阿久根市、出水市、さつま町と境をなし、東は寺山（上床山地）を中心に標高300mの山々が連なり、薩摩川内市樋脇町に至っている。南は修験場として古くから有名な冠岳を主峰とする標高500mの山々や、高江山地によっていちき串木野市と接している。東シナ海に面し、川内川を有する薩摩川内市は、古くから陸上・水上交通の要所であり、現在でも北薩地域の政治・経済の中心地となっている。

地形は、山岳地帯、台地、沖積平野、砂丘に大別される。山地の麓には、平野を取り巻くように権現原台地や国分寺台地など低いシラス台地が発達し、宅地や畑地として利用されている。シラス台地は山地から河川によって浸食を受けるため台地の間には狭小な谷底平野が発達すると共に、台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し、急崖をなし、沖積平野へと移行する。これらの台地上では、薩摩国分寺跡や計志加里遺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。

市の中心地は三方を山に囲まれた盆地状の地形をなし、これらの山々は川内川が注ぐ東シナ海側に向かって開けている。中心地の中央を流れる川内川は本県最大の河川で、熊本県白髪岳に源を発し、広範囲に沖積平野を形成している。また、川内川は、白和町付近で大きく西に流れを変え東シナ海に注いでいる。その両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約8kmにわたって自然堤防が形成される。中でも、自然堤防が最も発達した大小路町、向田町周辺は現在の市街地の中心部である。近年の調査では、自然堤防上で多くの遺構・遺物が発見され、古くから人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。下流域に広がる平野は川内平野と呼ばれ、山地が多く平野の少ない南九州において大口盆地、出水平野、肝属平野と肩を並べる穀倉地帯である。川内川は、下流で大きく川幅を広げ、河口の両岸には川内砂丘が発達し、薩摩川内市の特徴的な地形となっている。

## 第2節 歴史的環境と周辺遺跡

霜月田遺跡は、薩摩川内市都町字霜月田に、都原遺跡は同字都原に所在する。都原遺跡は、田重岳より西方向に位置する平坦な台地上にあり、標高は約49mである。霜月田遺跡は都原遺跡の南西約150mに位置し、北北東約2kmには成岡遺跡が所在している。

遺跡の位置する都町の西側には、慶長の役で島津義弘の帰陣に際し、朝鮮半島から伴われて渡来した人々の墓（高麗墓）が所在する。そして、東側には成枝名の領主であった成枝氏が居城したと伝えられる都城跡がある。なお、成枝氏は延元年間（1336～1340年）に永利山田に移ったとされるので、その後の都城については明らかではない。また当地は、瓊瓊杵（ににぎ）尊の宮居（都八幡）という伝承と、薩摩国府の初めの所在地という説（藤井1965・1967）がある。

都という地名は、建久8（1197）年に作成された薩摩国建久岡田帳には、薩摩郡の中に「都浦十町」とあり、さらに室町時代には宮古村や都町等と呼ばれていた。なお、地名研究者からは、この地域一帯の都原・玉前・御領田・京手・二月田・霜月田などという字名によって古代屯倉の中核都市であったという指摘もあるが、明らかではない。以下各時代の流れにそって概略を説明する。

### 旧石器時代

旧石器時代としては馬立遺跡が挙げられる。ここでは県内で初めてこの時代の尖頭器が発見され、注目を浴びた。また成岡遺跡、西ノ平遺跡、上野城跡、大原野遺跡、前畑遺跡で剥片尖頭器、三稜尖頭器、ナイフ形石器、細石刃、細石刃核などが発見されている。

### 縄文時代

前期には、大原野遺跡や前畑遺跡で、轟B式土器が出土している。西海岸の交流の活発さを示す遺物が発見されており、特に前畑遺跡では、中九州系の土器である中原式土器（早期）や、北陸地方に特徴的な新崎式土器（中期）が出土した。

また後期になると、楠元遺跡や麦之浦貝塚で土坑墓や、骨角器が発見されている。これらの遺跡では市来式土器のほかに、北久根山式や鐘崎式土器が多く出土している。

### 弥生時代

川内川の自然堤防上に位置する大島遺跡では、前期の土器や石庖丁が出土した。若宮遺跡でも石庖丁や石鎌が採集されており、すでに前期にはこの地域で水田稲作が行われていたことを示している。また、京田遺跡や、楠元遺跡で木製農具が発見されたことから、中期後半以降にも水稲稲作が行われていたことが明らかとなった。

### 古墳時代

弥生時代終末から古墳時代にかけては日吉、安養寺丘、赤沢津、日暮丘などの遺跡に土器の散布がみられる。これらの中には、赤沢津遺跡のように広大な低台地上にあるものもあって、この隈之城平野に生産の基盤を置いた人々の集落が周辺の台地上に形成されたであろうことをうかがわせる。また、古墳時代の墓については横岡遺跡が著名である。ここでは5世紀から7世紀の地下式板石積石室墓（石棺墓とする説もある）が7基発見されている。それから、前方後円墳の可能性のある端陵・中陵や、船間島古墳、安養寺古墳などの円墳が知られているが、正式な調査が行われていないために詳細は不明である。そのほかに御釣場遺跡では古墳時代初頭の石蓋土坑墓が検出され、若宮遺跡では石棺が検出されている。

川内平野に在地の墓制である地下式板石積石室墓や、中央の墓制である高塚古墳が存在しているということは、注目すべきであろう。地方における古墳文化の様相を考えるうえで、川内平野は重要な地域である。

### 奈良時代・平安時代

奈良時代には、御陵下町・国分寺町に薩摩国府が置かれた。さらに奈良時代末には薩摩国分寺が建立され、この地は薩摩国の政治・文化の中心地となった。昭和43～45年（1968～70年）には発掘調査が行われ、国府跡においては築地塀などの遺構が、国分寺跡において伽藍配置が、鶴峯窯跡において創建時の瓦を焼いた様子が明らかになっている。

古代には、高城郡と薩摩郡が川内川を境として分かれていたとされており、これらの主要な役所・寺が置かれていた川内川以北は高城郡であった。これに対して、霜月田遺跡、都原遺跡が所在する川内川以南は薩摩郡とされている。高城郡を見てみると、計志加里遺跡では、円形周溝墓や土坑墓、古道跡が発見されている。また、自然堤防上に立地する大島遺跡からは、高城郡の中心部を構成すると考えられる竪穴建物を中心とした集落跡が発見されている。京田遺跡では、条里制に関する内容を記した告知札と呼ばれる木簡が県内で初めて出土し、川内平野においても条里が平安時代から存在したことが明らかとなった。その他に、越ノ巢遺跡・屋形原遺跡からは骨蔵器が発見されている。

一方、川内川以南の薩摩郡を見てみると、西ノ平遺跡で整然と並ぶ掘立柱建物跡群、輸入陶磁器（越州窯系青磁、荊州窯系白磁）、鈔帯、鉄鉢などが発見されており、薩摩郡の郡衙であった可能性が指摘されている（池畑1986）。また、鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶炉とともに多くの鉄製品が出土した。都原遺跡では、古代の骨蔵器が1点出土している。このように、近年になって川内平野全域で調査例が増加しており、大きな成果があがっている。

### 中世

前期には、島津氏、渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士と、武光氏や薩摩氏などの在地領主との間で、領地支配の争いが絶えなかった。上野氏の居館である上野城跡の発掘調査では、多くの掘立柱建物跡と、竪穴建物跡、白磁・青磁などが発見されている。成岡遺跡や西ノ平遺跡からも、この時代の建物跡や遺物が見つかっている。なお、霜月田遺跡でも同様の遺構・遺物が発見されている。

後半（南北朝時代以降）になると、争いは激しさを増し、この地域には碓山城や、二福城（隈之城）、高江城など多くの山城が築かれた。霜月田遺跡、都原遺跡からもこの時期の青磁（龍泉窯）、青花（景德鎮・漳州窯）などの輸入陶磁器が出土している。

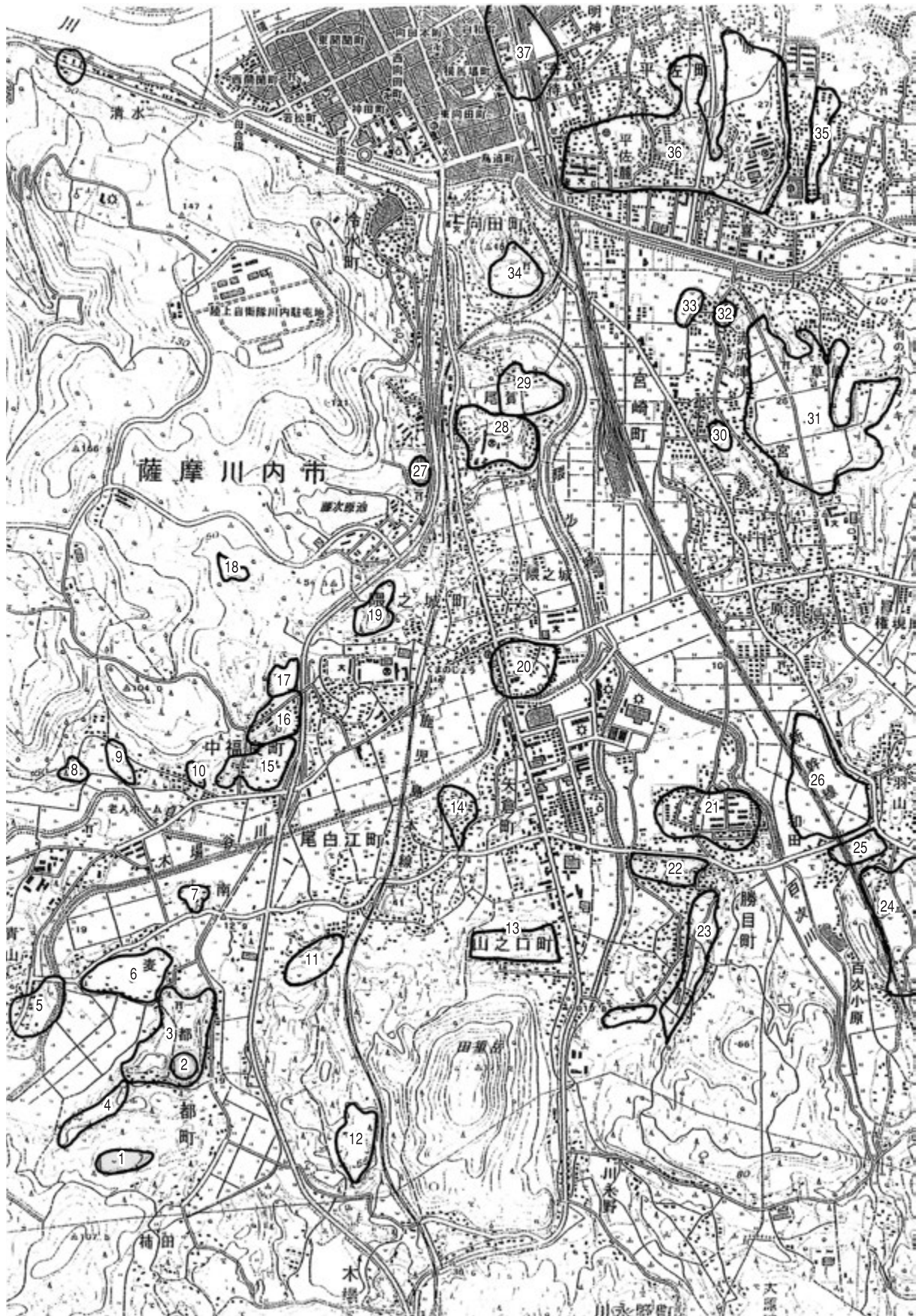
### 近世以降

藩政時代には商業が発達し、中心地の向田町は水陸交通の要衝として賑わった。川内川河口の久見崎には、船手奉行所が置かれ、藩の造船所があった。当地は朝鮮の役の際、薩軍が船出した港として有名である。この役で夫を亡くした婦人によって始められたと伝えられる盆踊り「想夫恋」は、県の無形民俗文化財に指定されている。

天明年間（1781～88年）には伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いている。平佐焼と呼ばれるこの磁器は、県内各地に流通し、隆盛を誇った。近年の調査で、作業小屋や石垣、窯の形態が

第2表 周辺遺跡地名表

番号	ふりがな 名 称	所在地	地 形		遺 構 ・ 遺 物	備 考
			時 代			
1	しもつきでん 霜月田	薩摩川内市都町霜月田	台地 旧石器～近世		竪穴建物跡・掘立柱建物跡 土器・土師器・陶磁器	平成12・15年度調査
2	みやこぼる 都原	薩摩川内市都町都原	台地 縄文（早）～近世		骨蔵器埋納遺構・溝状遺構 土器・須恵器・陶磁器	平成12・14年度調査
3	みやこじょう 都城	薩摩川内市都町都原	丘陵 不詳		堀切跡	
4	やまぐち 山口	薩摩川内市都町山口	台地 古墳～中世			
5	やまにた 山仁田	薩摩川内市青山町山口仁田	台地 古墳～中世			
6	しとくじょうあと 総徳城跡	薩摩川内市都町麦・灰原・門前屋敷田	丘陵 不詳		堀切跡	別称「南城」「麦城」
7	むぎ 麦	薩摩川内市都町麦	低地 縄文～中世			
8	あつまり 集	薩摩川内市中福良町集	台地 縄文～中世		土器・陶器・黒曜石	
9	たていし 立石B	薩摩川内市中福良町立石	段丘 縄文～中世		土器・石鏃・黒曜石	
10	たていし 立石A	薩摩川内市中福良町立石	段丘 縄文～中世		土器・土師器・青磁	
11	よんたんだ 四反田	薩摩川内市尾白江町四反田	低地 平安～近世		土師器・青磁・染付	
12	せとやま 瀬戸山	薩摩川内市木場茶屋町瀬戸山	台地 古墳～近世		土師器・須恵器・青磁	
13	やまぐちぼる 山口原	薩摩川内市山之口町山口原	台地 古墳～近世		土器・青磁・染付	
14	やぐらじょう 矢倉城	薩摩川内市矢倉町矢倉城	平地 不詳		不詳	消滅
15	なりおか 成岡	薩摩川内市中福良町成岡	台地 旧石器～近世		須恵器・青磁・細石刃	県埋文報(28)
16	にしのひら 西ノ平	薩摩川内市中福良町西ノ平	台地 旧石器～近世		土師器・青磁・細石刃核	県埋文報(28)
17	うえのはら 上ノ原	薩摩川内市中福良町上ノ原	台地 旧石器～戦国		土器・須恵器・青磁・染付	県埋文報(28)
18	ゆのたに 湯之谷	薩摩川内市隈之城町湯之谷	山腹緩斜面 平安		土師器	
19	にしのくち 西ノ口	薩摩川内市隈之城町西ノ口	台地 古墳			
20	にふくじょう 二福城	薩摩川内市隈之城町城	丘陵 鎌倉～戦国		曲輪跡	別称「隈之城」
21	こじょう 小城	薩摩川内市勝目町小城ほか	低地 不詳			
22	かこいじょう 椿城	薩摩川内市勝目町小城・外園原	低地 不詳			
23	かつめばる 勝目原	薩摩川内市勝目町椿・集ほか	丘陵 古墳～近世		須恵器・青磁・染付	
24	うえのじょう 上野城	薩摩川内市百次町上野ほか	丘陵 旧石器～近世		掘立柱建物跡ほか 土器・青磁・白磁・鉄製品	別称「百次城」「岩田ヶ城」 県埋文報(68)
25	じょうした 城下	薩摩川内市百次町城下	丘陵 縄文～近世		土器・須恵器・陶器	県埋文報(57)
26	くすもと 補元	薩摩川内市百次町	低地 縄文～近世		土器・木製品・石鏃	県埋文報(57)
27	いけじり 池尻	薩摩川内市隈之城町池尻	丘陵 古墳～近世		須恵器	
28	かこいじょう 椿城	薩摩川内市隈之城町尾賀	丘陵 不詳		堀切跡	
29	おがだ 尾賀台	薩摩川内市隈之城町尾賀・後原ほか	丘陵 縄文～中世		一部貝塚 土器・須恵器・染付・石鏃	
30	あかでんばる 赤殿原	薩摩川内市宮崎町赤殿原	低地 古墳～中世		土器・土師器	
31	みやざききたはら 宮崎北原	薩摩川内市永利町若宮東	台地 古墳～中世（室町）		土器・須恵器・陶器	
32	せとぐち 瀬戸口	薩摩川内市宮崎町瀬戸口	低地 縄文～平安		土器・土師器	
33	あかざわつ 赤沢津	薩摩川内市宮崎町赤沢津	低地 縄文（中）～古墳		並木式土器・須恵器・石斧	
34	ひぐらしおか 日暮丘	薩摩川内市向田町鉢本・諏訪平	台地 古墳～江戸		土器・須恵器・染付	
35	きいればる 喜入原	薩摩川内市平佐町喜入原	台地 縄文～近世		土器・須恵器・染付	
36	ひらさじょうあと 平佐城跡	薩摩川内市平佐町藤崎・庵ノ城・寄侍	丘陵 中世（鎌倉中）～安土桃山		空堀跡	
37	かじやばば・はるた 鍛冶屋馬場・春田	薩摩川内市平佐町	低地 縄文～奈良・平安		土師器・陶磁器・鉄滓	県埋文報(39)
38	きよみずきょうずか 清水経塚	薩摩川内市宮里町清水	山腹 平安			清水寺経臺 市指定



第3図 遺跡の位置及び周辺遺跡

0 10km

明らかになっている。そのほかに、近世、近代の鍛冶遺跡として古原遺跡、鍛冶屋馬場遺跡がある。このように川内川は、平佐焼や鍛冶などの生産に関わる原料の搬入と製品の搬出に積極的に利用され、古来より商工業の発展に大きな役割を担ってきた。

霜月田遺跡、都原遺跡の南部に位置する木場茶屋町には、藩政時代に藩主が参勤交代などで東上する際の休憩所（茶屋）が置かれた。また、隈之城郷には郷士集落である麓が形成された。両遺跡付近に2007年3月には、南九州西回り自動車道の薩摩川内都インターが完成している。鹿児島市から20分の所要時間で到着することが可能となり、今後の薩摩川内市の発展が期待されている。最後に、ここで紹介できなかった遺跡や詳細については、各遺跡の発掘調査報告書を参考にされたい。

#### 〈参考文献〉

##### 郷土史・概説本など

- |             |      |                                      |
|-------------|------|--------------------------------------|
| 川内郷土史編纂委員会編 | 1976 | 『川内市史』上巻                             |
| 川内市歴史資料館編   | 1985 | 『川内市文化財要覧』                           |
| 川内市郷土史研究会編  | 1984 | 『千台』第12号                             |
| 竹内 理三編      | 1983 | 『角川日本地名大辞典・46鹿児島県』角川書店               |
| 芳 即正・五味 克夫編 | 1998 | 『日本歴史地名大系第47巻・鹿児島県の地名』平凡社            |
| 河口 貞徳       | 1988 | 『日本の古代遺跡・38鹿児島』保育社                   |
| 藤井 重寿       | 1965 | 『薩摩の古府』薩摩字絵図研究会                      |
| 〃           | 1967 | 『薩摩国衙領考六題』薩摩字絵図研究会                   |
| 池畑 耕一       | 1986 | 「西ノ平遺跡と薩摩郡衙(上・下)」『隼人文化』16・18 隼人文化研究会 |
| 鹿児島県教育委員会   | 2005 | 『先史・古代の鹿児島(資料編)』                     |
| 鹿児島県教育委員会   | 2006 | 『先史・古代の鹿児島(通史編)』                     |

##### 発掘調査報告書

- |                |      |                                      |
|----------------|------|--------------------------------------|
| 鹿児島県教育委員会      | 1975 | 『薩摩国府・国分寺跡』                          |
| 鹿児島県教育委員会      | 1983 | 『成岡遺跡・西ノ平・上ノ平遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28) |
| 鹿児島県教育委員会      | 1984 | 『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30)     |
| 鹿児島県教育委員会      | 1985 | 『成岡遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(35)          |
| 川内市教育委員会       | 1985 | 『国指定史跡 薩摩国分寺跡 環境整備事業報告書』             |
| 川内市土地開発公社      | 1987 | 『麦之浦貝塚』                              |
| 川内市教育委員会       | 1991 | 『御釣場古墳(2号墳)』川内市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)       |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2002 | 『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)    |
| 〃              | 2002 | 『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39)   |
| 〃              | 2003 | 『前畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(56)      |
| 〃              | 2004 | 『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(68)      |
| 〃              | 2005 | 『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)      |
| 〃              | 2005 | 『京田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(81)      |

霜 月 田 遺 跡



## 第三章 霜月田遺跡の発掘調査成果

### 第1節 調査の成果

#### 1 調査の経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所に改称）鹿児島国道工事事務所（以下、鹿児島国道事務所）は、「南九州西回り自動車道川内道路建設事業」の計画に基づいて、市来IC～薩摩川内都IC間の建設工事を進めた。

工事区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、鹿児島県教育庁文化財課と鹿児島国道事務所との協議に基づき、鹿児島県知事と鹿児島国道事務所との間で発掘調査に係わる委託契約が結ばれた。これを受けて鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が埋蔵文化財の確認調査と本調査を進めた。

平成8年8月に市来IC～薩摩川内都IC間の分布調査が実施され、事業予定地内に8か所の遺物散布地や確認調査の必要な地点が存在することが判明した。この結果に基づき、霜月田遺跡の確認調査は平成11年10月4日から10月8日まで実施した。

本調査は、年次的・計画的に実施することとし、平成12年度は調査区域のうち3,000㎡、平成15年度は8,000㎡を対象として、埋文センターが実施した。

平成12年度の調査は平成12年10月4日から12月26日まで、平成15年度の調査は平成15年6月16日から平成16年2月26日まで実施した。

#### 2 調査の組織

起回事業主体 { 建設省 九州地方建設局 鹿児島国道工事事務所（平成12年12月まで）  
国土交通省 九州地方整備局 鹿児島国道事務所（平成13年1月から）}

##### 〈確認調査・平成11年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼 調査課長	戸崎勝洋
	〃	課長補佐兼 第一調査係長	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼 第三調査係長	青崎和憲
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	宮田洋一
	〃	文化財研究員	三垣恵一
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成12年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上明文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼	新東晃一
	〃	調査課長	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼	牛ノ濱 修
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	第三調査係長	宮田洋一
	〃	文化財主事	三垣恵一
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	
	〃	総務係長	有村 貢
	〃	主 査	今村孝一郎

〈発掘調査・平成15年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木原俊孝
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼	牛ノ濱 修
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	第三調査係長	寺原 徹
	〃	文化財研究員	石原田高広
	〃	文化財主事	(~10月)
	〃		〃 國師洋之
	〃		(11月~)
調査事務	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野浩二
	〃	主 査	脇田清幸
労務管理担当	新和技術コンサルタント株式会社	埋蔵文化財部調査課係長	別府哲二

〈整理作業・報告書作成作業・平成19年度〉

調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮原景信
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	平山 章
	〃	次 長	新東晃一

	／	調査第二課長	立 神 次 郎
	／	文化財主事	牛ノ濱 修
	／	兼第二調査係長	
	／	主任文化財主事	宮 田 栄 二
整理担当者	／	文化財主事	岩 屋 高 広
	／	文化財調査員	松 元 佑 輔
調査事務	鹿兒島県立埋蔵文化財センター	総務課係長	寄井田 正 秀
	／	主 査	蒲 池 俊 一
報告書作成検討委員会 平成19年12月17日 宮原所長ほか 11名			
報告書作成指導委員会 平成19年12月13日 新東次長ほか 3名			
企画担当者 寺原 徹, 黒川 忠広			
指 導 者	大阪府堺市教育委員会	主 査	森 村 健 一

### 3 調査の方法及び概要

- (1) 調査期間 平成12年10月4日(月)～12月26日(火) (実働59日)  
平成15年6月16日(月)～平成16年2月26日(木) (実働153日)
- (2) 作業員数 延べ4,599人
- (3) 調査面積 11,000㎡
- (4) 出土遺物量 パンケース35箱

調査は川内道路実施設計図(串木野IC～隈之城IC間)と用地買収図面をもとに、地番6685-4と6701-6の境界線を結ぶ線を基軸に、南北方向にA・B・C～、東西方向に1・2・3～とする10m間隔の調査用区割り(グリッド)を設定した。

発掘調査当初は、平成12年度調査時に未買収地であった区域についてトレンチを設定し、人力により確認調査を実施した。

平成12年度及び15年度には本調査を実施した。その結果、旧石器時代の礫群を検出し、黒曜石の剥片やチップ等の遺物が集中して出土したために、A～D調査区において下層確認を行った。

調査方法は、伐採等の環境整備を行い、表土を重機によって除去した後、表土直下で精査し遺構検出を行った。その後、各調査区とも基本的に遺構検出まで人力(ジョレン・ねじり鎌)による掘り下げを行った。検出した遺構については、移植ゴテなどを用いて丁寧に掘り下げた後、写真撮影や図面作成などの作業等を行った。さらに下層確認を行い、旧石器時代の遺物が出土した地点については周辺を拡張して調査を行った。

#### (5) 検出遺構の概要

A-14区ではⅥ、Ⅴ層より黒曜石の剥片やチップなどが集中して出土し、旧石器時代のブロックが検出された。また、古代から中世にかけて掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡4基、落とし穴3基などが検出された。C-12区から検出された落とし穴1基には、埋土中から十数個の貝殻が出土したために、貝殻は炭素14年代測定を行った。

このほか、旧石器時代の礫群1基、縄文時代早期の集石遺構3基、中期の集石遺構1基、縄文時

代晩期の集石遺構 2 基などが検出された。

#### (6) 出土遺物の概要

調査区域内を掘り下げたところ、旧石器時代は第Ⅰ文化層（ナイフ形石器文化期）の黒曜石製ナイフ形石器や台形石器，第Ⅱ文化層（細石刃文化期）の細石刃やチップ等が出土した。また，縄文時代早期の中原式土器・条痕文土器・押型文土器・塞ノ神式土器など，縄文時代中・後期や晩期と考えられる土器が出土した。石器は，縄文時代早期，晩期の打製石鏃，磨製石斧，磨石，石皿等が出土した。古代から中世は土師器や須恵器，中国の輸入磁器等が発見され，更に近世の陶磁器等も確認された。

## 4 調査の経緯（日誌抄）

調査の経過は調査日誌をもとに主な出来事を記したい。

### (1) 確認調査〈平成11年10月4日～10月8日〉

10月4日 1～9のトレンチを設定し，表土剥ぎを行った。1～7トレンチは南尾根，8，9トレンチは北尾根のものである。1トレンチから3基のピットが検出され，出土状況の写真撮影を行う。2トレンチからピット，硬化面（古道），イモ穴が検出される。青崎係長，繁昌文化財主事，野邊文化財主事来訪。

10月5日 前日に同じく作業を進め，各トレンチ掘り下げを行った。2トレンチを拡張し，遺構検出状況の写真撮影を行う。3トレンチから土師器片2点が出土，遺物出土状況の写真撮影を行う。遺構はなく再度掘り下げを行う。5トレンチからピットが2基（Ⅴ層）検出され，遺構の出土状況の写真撮影を行う。

10月6日 前日に同じく作業を進めた。新たに南尾根に10，11トレンチを設定し，各トレンチの位置図を作成した。4トレンチでⅢa層を掘り下げたところ，遺物（土師器片2点）が出土し，出土状況の写真撮影を行った。

10月7日 1～5トレンチの平板実測を行い，遺物の取り上げを行った。北尾根の8，9トレンチは遺構の有無，包含層の残存状況を確認したが，いずれも確認されなかった。遺構が見つかり拡張された1～5トレンチからは，黒曜石の剥片，土師器片，内黒土師器，須恵器，青磁，鉄石英片等が検出された。ただし，縄文土器は発見されていない。

10月8日 雨天のため，作業中止。現場内の整備作業。

### (2) 発掘調査〈平成12年10月3日～12月26日〉

10月 事務所を設置し，備品を搬入。重機による伐採や表土剥ぎ終了後，西側からⅢa層上面の精査を行う。D～E-8区とE-6区に焼土域を検出する。また溝状遺構を3条検出する。E～F-7～8区のトレンチの掘り下げを行ない，遺物を検出する。ピット，土坑，イモ穴，などの主な遺構の実測作業を行う。雨天には水洗い作業を行なう。牛ノ濱係長，彌榮係長，繁昌文化財主事，森田文化財主事が来訪。

11月 完掘した焼土域の実測作業を行い，遺物を検出する。C～D-7～8区で1号掘立柱建物跡を検出する。D～E-8区，E-6区の焼土域の実測作業を行う。またF-8区のⅤ層上

面からは石皿が出土し、実測作業を行う。

12月 1号竪穴建物跡の写真撮影及び、実測作業を行なう。また、遺物のとりあげを行う。新たに2号掘立柱建物跡と3号掘立柱建物跡を検出し、共にピットが確認された。主に埋土遺物の取り上げ、遺構の実測作業を行った。調査最終日はプレハブ周辺的环境整備と撤収作業を行う。川内市教育委員会の中島氏ほか2名が現地査察のため来訪。井ノ上所長、牛ノ濱係長、彌榮係長が来訪。

### (3) 発掘調査<平成15年6月16日～平成16年2月26日>

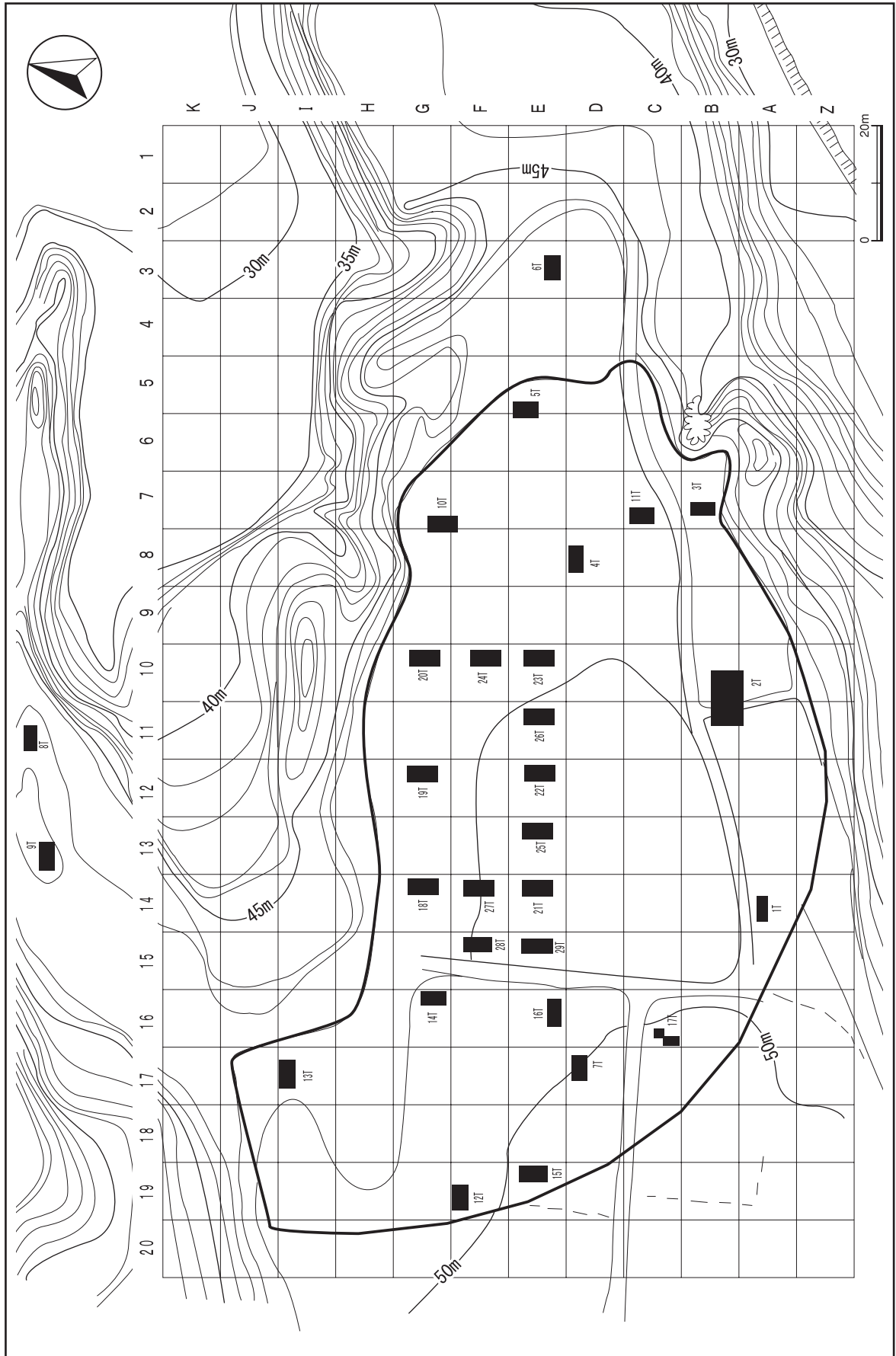
- 6月 事務所を設置し、備品を搬入する。重機による伐採や表土剥ぎ終了後、調査区北側からトレンチを設定して掘り下げる。黒曜石・石鏃・土器片等が出土する。国土交通省甲斐監督官、上馬庭係長、瀧川氏ほか1名が視察のため来訪。
- 7月 重機による表土剥ぎを行い、終了した区域から順次掘り下げる。黒曜石の石鏃・青磁・白磁・土師器・薩摩焼・土器片等が出土する。硬化面と溝状遺構をそれぞれ数条検出する。うち1組がほぼ直角に交わり、そこで終了していることから、同時期の道跡である可能性が高い。出土遺物からみて昭和頃までは使用されていたと思われる。8日、木原所長来訪。霧島町教育委員会山下氏が調査に参加（2週間）。鹿児島県教育委員会倉元氏、川内市教育委員会中島氏、大島郡大和村立今里中学校松下教諭来訪。
- 8月 調査区東側の表土を剥ぎコンタ図を作成した（昭和まで使用されていた道がⅢ層にあったため、以前に1回造成を受けていると思われる）。トレンチの完掘状況写真撮影と土層断面図作成を行う。長島町教育委員会尾崎氏が調査に参加（2週間）。台風10号が接近したため対策を講じる（進入路に土留めを敷設。プレハブまでの道路の補修）。国土交通省瀧川氏ほか3名、川内市立隈之城小学校大久保氏ほか2名来訪。鹿児島大学関氏がインターンシップ（職場体験）事業の一環として調査に参加する。新東調査課長、牛ノ濱係長、脇田総務課主査を交えて調査期間について協議を行う。
- 9月 表土より大三角岩盤を採出（安山岩 正三角形 一辺約50cm）する。竪穴状遺構と溝状遺構2条を検出する。3号竪穴建物跡と4号竪穴建物跡を調査する。台風14・15号が接近したため対策を講じる。川内市立隈之城小学校教諭大久保氏ほか、考古学クラブ児童5名が来訪。鹿児島大学理学部3年蓑部氏がインターンシップ（職場体験）事業の一環として調査に参加する。牛ノ濱係長が調査指導を行う。
- 10月 引き続き3号竪穴建物跡と4号竪穴建物跡の調査を行う。7日に空撮（スカイサーベイ九州）を行う。5号掘立柱建物跡と6号掘立柱建物跡の写真撮影と実測を行う。A～D-9～15区表土直下のピット群レベル測量とE-9・10区表土直下ピット群レベル測量を行う。黒曜石のチップが100点以上出土した集中区を検出したので調査を開始する。B-12区表土直下の土坑（貝殻入り）を実測する。土坑の床面長軸方向にピットが3個並んだため落とし穴の可能性が出てきた。貝殻文円筒土器同一個体7点一括出土する。出土状況の写真撮影を行う。国土交通省甲斐監督官、副長、総務課脇田主査、繁昌文化財主事、吉岡文化財主事来訪。

- 11月 C-17区で溝状遺構を検出し、実測を行う。埋土は黒緑色で中世と思われる。B~D-13~15区V層上面の地形図を作成する。4号掘立柱建物跡を実測終了する。国土交通省用地課本坊氏、調査課上馬庭係長、瀧川氏来訪。
- 12月 4号掘立柱建物跡の焼土域を調査したが、焼土域の掘り込みは樹痕であった。上部の焼土は人工的なものと判断した。旧石器確認トレンチ掘り下げを行う。また、A~D-14・15区のV・VI層の下層確認を行う。C-17区の下層確認トレンチで土坑を検出する。検出面からの深さ約80cm、長径約170cm×短径約50cmの土坑のため落とし穴の可能性がある。本年の最終日に、遺跡周辺の道路の草刈りなど環境整備を行った。新東調査課長と脇田主査が視察。
- 1月 A~D-11~12区のIV~VI層の下層確認を行う。一部のトレンチでVI層から遺物が出土する。D-11区で土坑（焼石、土師器甕、炭化物入り）を検出。実測と全掘を行う。A~D-12区、A-11区の地形図を作成する。また、A-11~12区のVI層の下層確認を拡張したところ、旧石器の遺物が出土した。今月は降雪のため2日間発掘調査を中止した。牛ノ濱係長、奈良県香芝市二上山博物館主査（学芸員）佐藤良二氏が来訪。
- 2月 A~D-9~11区のⅢa~VI層の下層確認を行う。D-9区で礎石入りのピットを検出する。調査したところ、古銭が出土した。E-9区から4基の集石を検出したため写真撮影と実測を行う。また、同じ区のIV層から磨石・石皿のセットが出土した。A~D-12区の西壁土層断面図とD-11~12区の北壁土層断面図を作成する。A-10区の落とし穴を調査中に逆茂木跡（5本）が検出した。全区の調査を行い完掘状況の写真撮影を行う。隈之城小学校大久保教諭と考古学クラブの児童4人が来訪。上野原縄文の森内村副園長と菅牟田氏が現場視察。木原所長、牛ノ濱係長、脇田主査が作業員へ調査終了あいさつのため来訪。

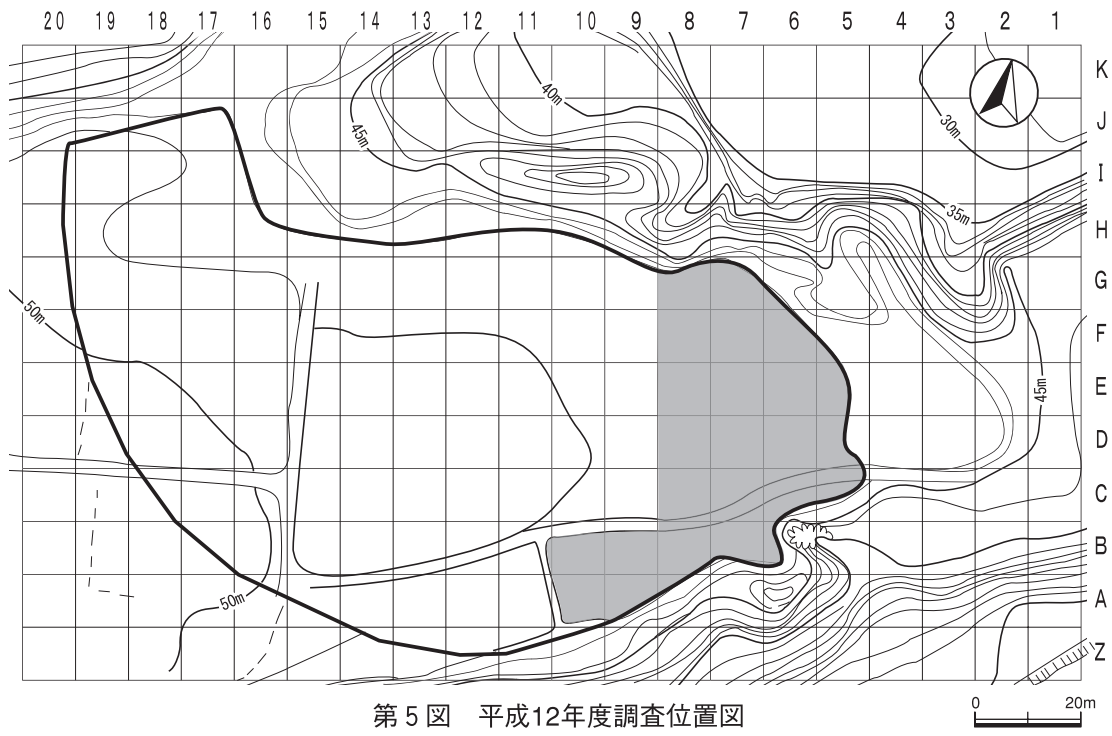
#### (4) 報告書作成作業

整理作業及び報告書作成作業を平成19年4月から平成20年3月にかけて、県立埋蔵文化財センターで行った。

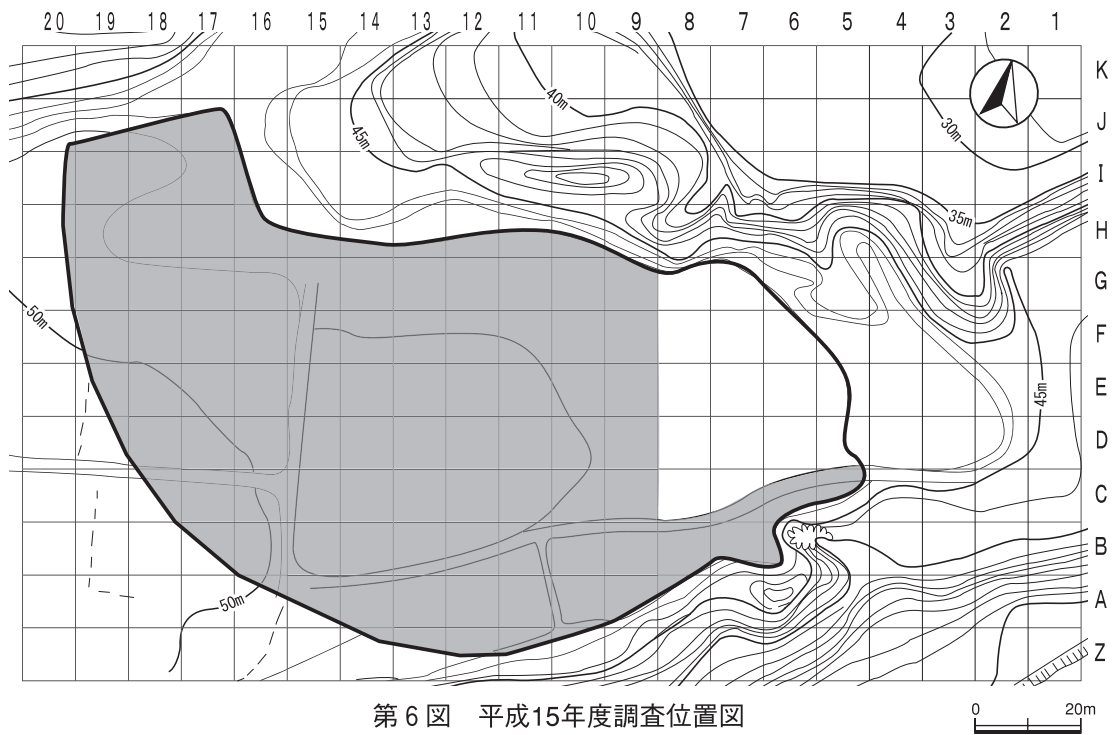
- 4月 整理作業開始。実測図及び遺物の点検、確認。石器実測委託準備。土器の分類。土器の接合。地形図をデジタルトレースで作成する。実測用遺物選別。
- 5月 土器の拓本とり。ドット入力。遺物台帳によりデータをパソコンに入力する。図面整理。
- 6~7月 土器、土師器等の実測。剥片等の分類。接合分布作成。土器の復元。中世遺物の分類。土層断面図トレース。
- 8~9月 拓本貼り、石器計測。土器、遺構トレース。仮レイアウト。
- 10~11月 遺構、土器、土師器等のトレース。文章作成。遺構・遺物のレイアウト。遺物写真撮影。
- 12月 遺構・遺物のレイアウト。文章作成及び修正。入札のための起案。
- 1月 文章確認、修正。入札。校正。一般遺物の収納。
- 2月 校正。現場図面及び遺物の実測図の整理、仮収納。
- 3月 校正。報告書掲載遺物の整理、仮収納。報告書納入。これにより、報告書作成業務の全てを終了する。



第4図 グリッド配置及び確認トレンチ位置図



第 5 図 平成12年度調査位置図



第 6 図 平成15年度調査位置図

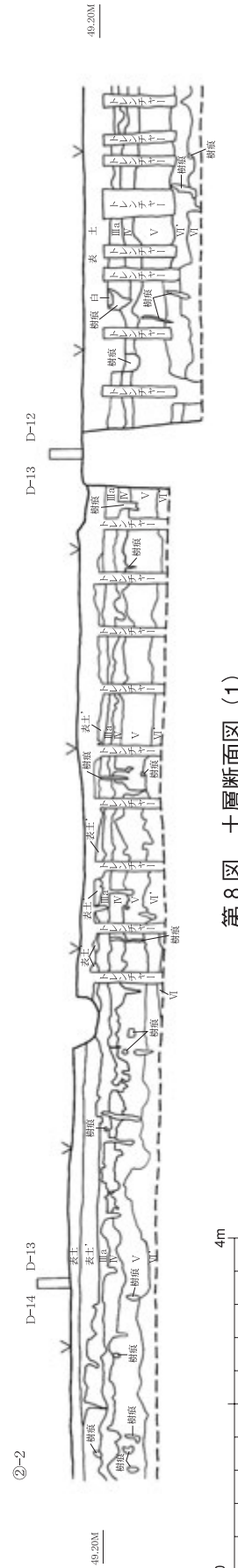
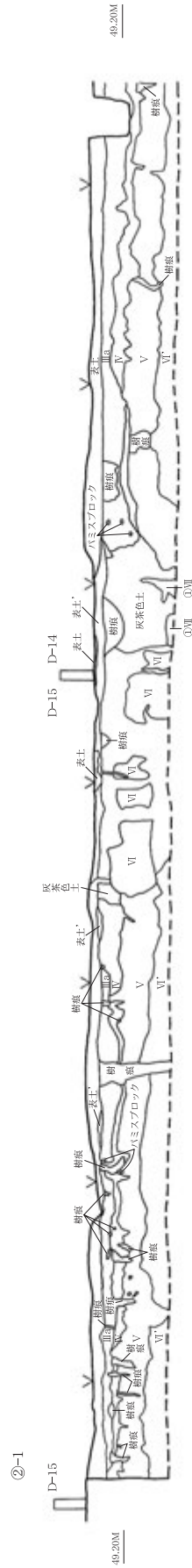
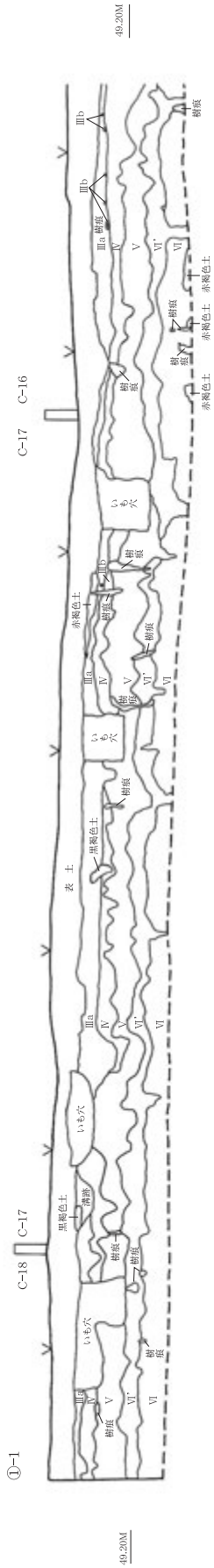


## 第2節 遺跡の層位

霜月田遺跡は、標高49mの平坦なシラス台地上に位置している。調査は北尾根と南尾根に区分された。北尾根は調査前からシラスが露出しており、確認調査の結果、遺物包含層は確認されなかった。平成12・15年度の本調査で、南尾根の調査を実施したところ、遺構や遺物包含層が確認された。地点によって若干の差異があるが、標準的なものをここで示す。第7図は標準的な地層の模式図である。以下、各層の説明を行う。

I層 暗灰色土	やや砂質の表土である。層厚は約25cm。
II層 濃暗灰色土	腐植土である。古代から中世の遺物包含層である。層厚は約5cm。
IIIa層 明黄褐色土	鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（約6400年前）である。縄文時代晩期の遺物包含層である。層厚は約20cm。都原遺跡や成岡遺跡にも同等に堆積している。
IIIb層 黄橙色土	黄橙色パミスで、IIIa層下部にあるアカホヤの軽石層である。連続した堆積はなく、ブロック状になる所も多い。無遺物層である。
IV層 暗黄褐色土	暗黄褐色のふかふかした土層である。縄文時代早期の遺物包含層である。都原遺跡、成岡・西ノ平・上ノ原遺跡でも全体に見られ、遺跡を特徴づける文化層である。層厚は約25cm。
V層 暗褐色土	暗褐色土で、やや粘質である。旧石器時代第II文化期の遺物包含層である。薩摩火山灰を微量に含んでおり、層厚は約25cmである。薩摩火山灰はP-14と呼ばれ、約11,500年前の桜島の噴出によって形成された層である。
VI層 暗黄白色土	暗黄白色土である。やや粘質であり、硬くしまっている。旧石器時代第I文化期の遺物包含層である。層厚は約15cm。
VII層 黄白色土	シラスの黄白色土であり、やや砂質である。淡黄色のパミスを含んでいる。シラスは入戸火砕流の堆積物であり、約24000年の始良カルデラの噴出によるものである。

第7図 柱状模式図

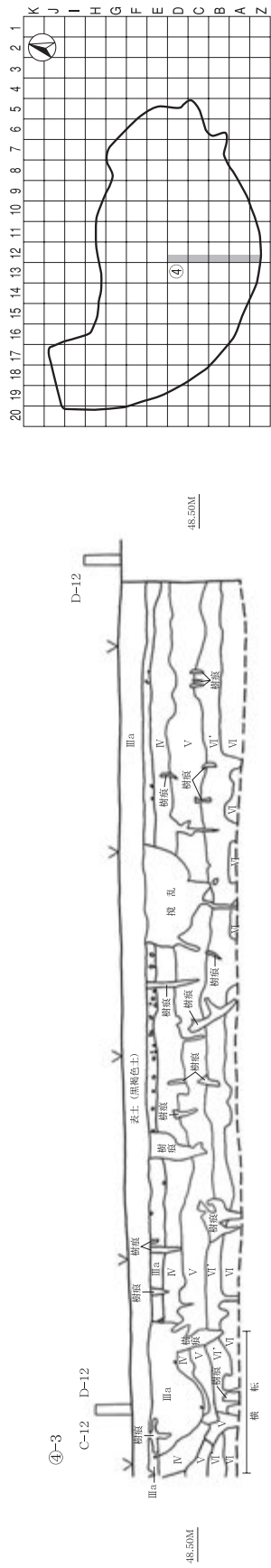
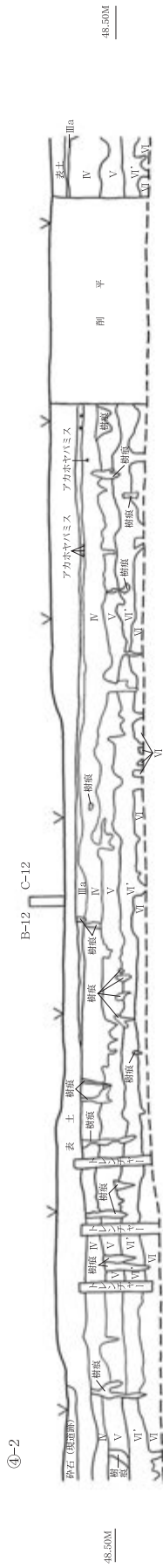
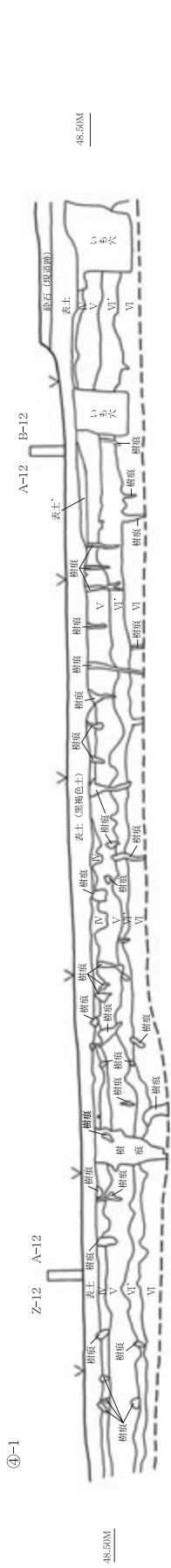


第8図 土層断面図(1)





第9図 土層断面図 (2)



第10図 土層断面図 (3)

### 第3節 旧石器時代の調査

旧石器時代は時期判定が明確な遺物及び、旧石器時代を特定する包含層から第Ⅰ文化層と第Ⅱ文化層に区分された。

第Ⅰ文化層は、Ⅵ層から剥片等のいくつかのまとまりが確認されたが、出土量から1つのブロックを認定した。出土遺物として、ナイフ形石器、台形石器、スクレイパー、剥片、石核、磨石がある。

第Ⅱ文化層は、Ⅴ層から1つのブロックを確認した。出土遺物として、細石刃、スクレイパー、磨石がある。

#### 1 第Ⅰ文化層の調査

出土分布は第12図に示した。等高線はⅤ層上面を使用した。A-14区にブロックが確認され、ブロック内からナイフ形石器（4，5），スクレイパー（9），剥片（10）が出土している。第11図の第Ⅰ文化層から確認された石器群の石材の割合は上牛鼻産黒曜石が大半の69.4%を占め、次いで三船産黒曜石が13.0%である。

#### 遺物

##### ナイフ形石器（第13図 1～5）

1～5は横長剥片もしくは幅広の剥片を素材とした切出し型のナイフ形石器である。1～3は一部自然面が残る比較的厚みのある横長剥片を素材とし、打面部の主要剥離面に対して平坦剥離を行いバルブを除去している。その後、腹面から急角度のブランディングを二側縁に施している。1，2の先端部は僅かに欠損し，4は半損している。

##### 台形石器（第13図 6，7）

6は横長の剥片を素材とし，基部は折断後に平坦剥離を行い整形している。7は腹面から急角度のブランディングを施し，両側縁を直線状に形成したものである。

##### スクレイパー（第14図 8，9）

8，9は上牛鼻産の黒曜石である。剥片の縁辺に二次加工を施し刃部を形成したものである。

##### 剥片（第15図 10）

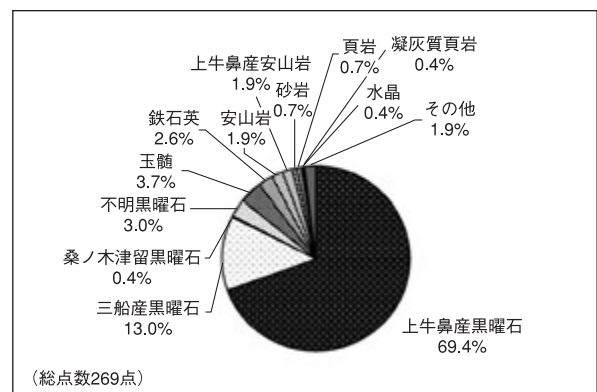
10は凝灰岩質頁岩を素材とする剥片石器である。背面は自然面が多く，腹面は平坦な剥離面である。右側縁に使用痕が認められる。

##### 石核（第15図 11）

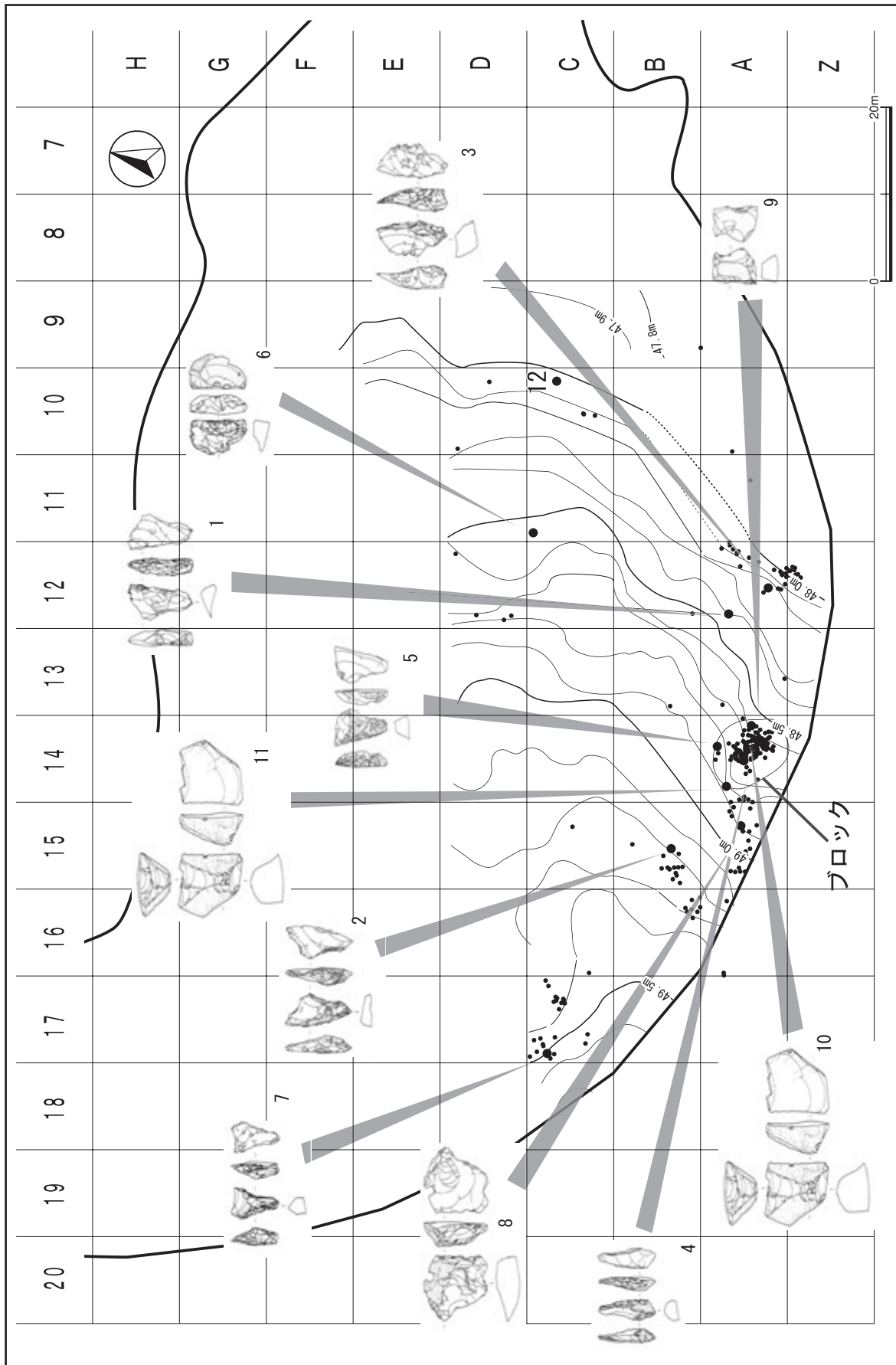
11は，上牛鼻産の黒曜石である。平坦な面を打面とし，作業面を回転させながら剥離面を剥いでいる石核である。

##### 磨石・敲石（第15図 12）

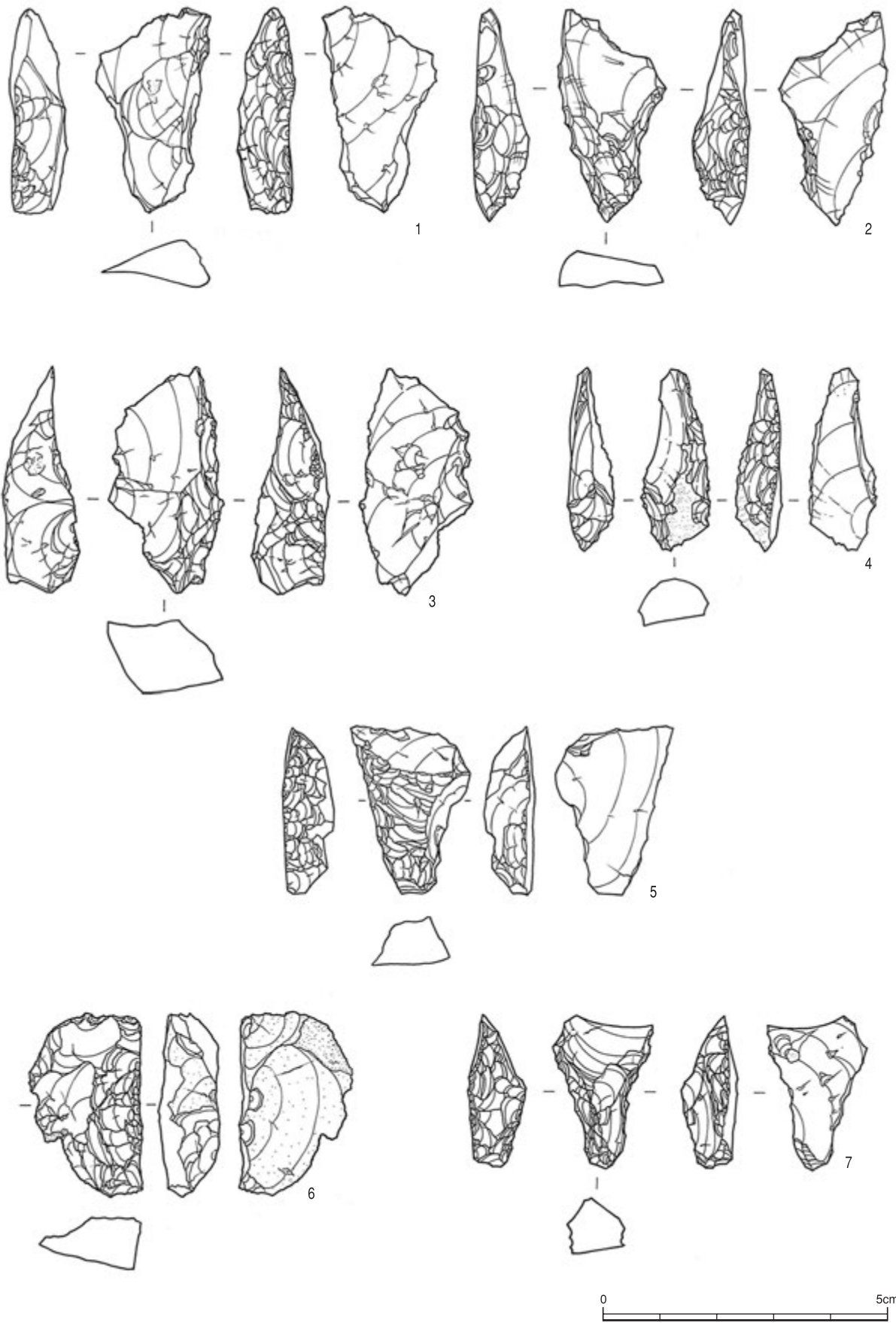
12は安山岩で円礫を用いた磨石と敲石の機能を合わせもったものである。一部敲打の痕跡が認められた。



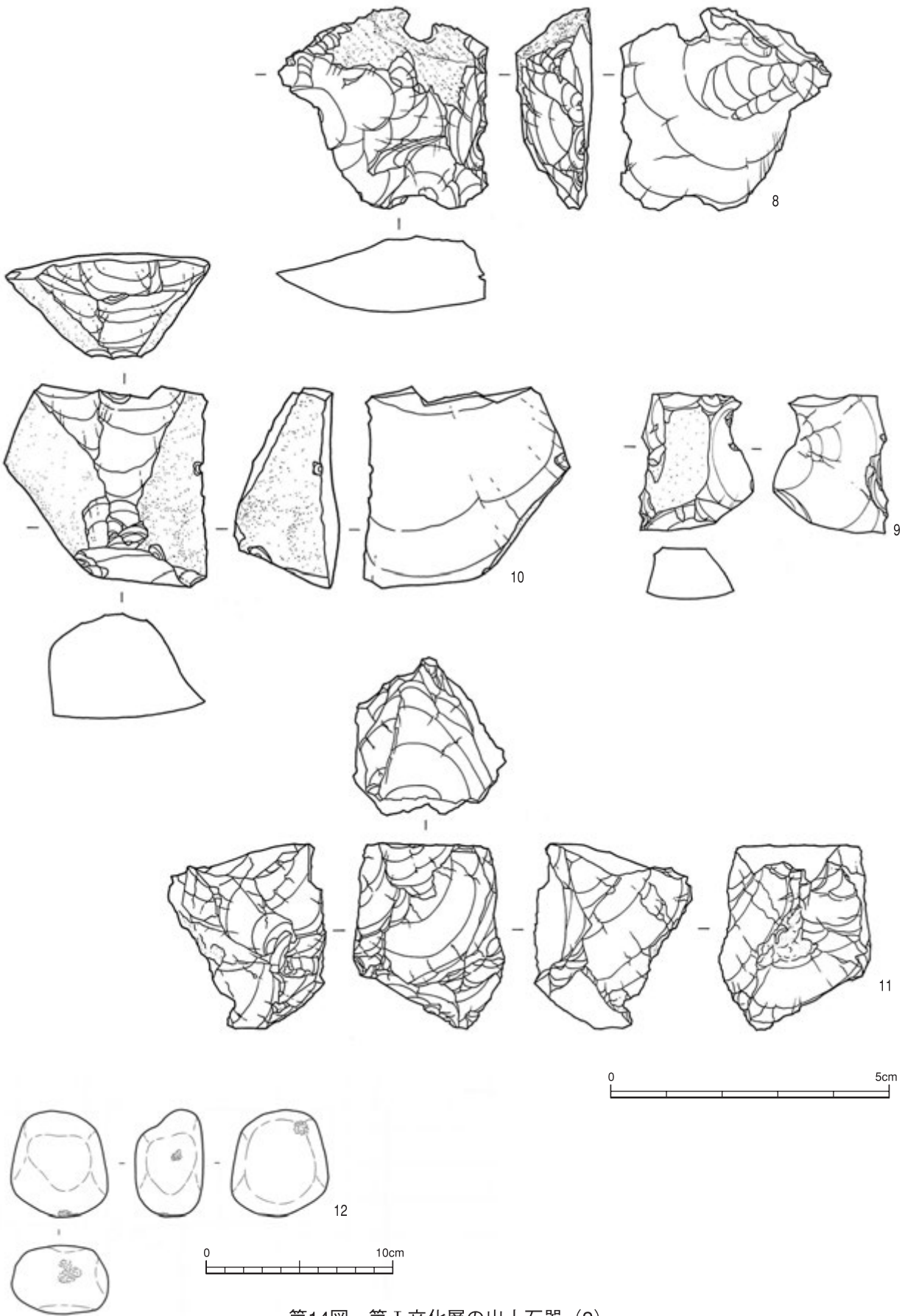
第11図 第Ⅰ文化層石器群の石材の割合



第12図 第I文化層のブロック主要石器出土分布



第13図 第I文化層の出土石器 (1)



第14図 第I文化層の出土石器(2)



## 2 第Ⅱ文化層の調査

出土分布は第17図に示した。等高線はV層上面で計測した。遺構は礫群1基、ブロックがA-14区で確認されたが、ブロック内から定形石器は確認されなかった。遺物は主にV層上面から出土し、細石刃、スクレイパー、磨石・敲石が出土している。第15図の石器群の石材の割合から上牛鼻産黒曜石と三船産黒曜石の割合が少なくなり、石材の種類が増え鉄石英や頁岩等の割合が増えてきている。

### (1) 遺構

#### 礫群 (第16図)

5点の礫から成り、一辺5cmから15cmのものまでである。長軸50cm、短軸40cmの範囲内に散在している。①と②、③、④、⑤が接合された。2点の礫が破碎し形成されたものと思われる。灰色をなし、5点とも赤化はみられない。

### (2) 遺物 (石器)

#### 細石刃 (第18図 13, 14)

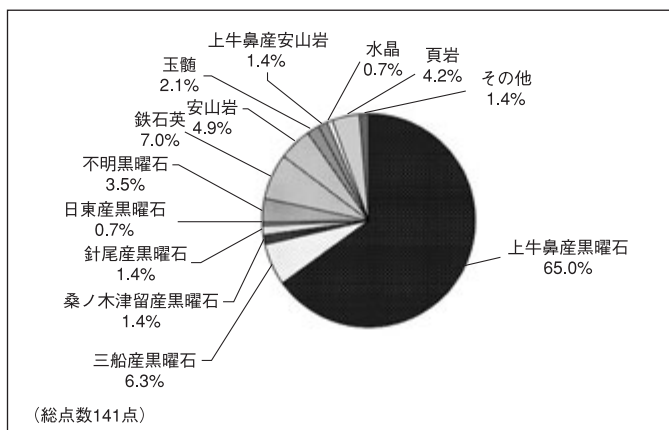
細石刃は2点出土し、使用されている石材は13が腰岳産黒曜石、14が上牛鼻産黒曜石である。2点とも尾部を除去したものであり、両側縁に使用痕が認められる。

#### スクレイパー (第18図 15~17)

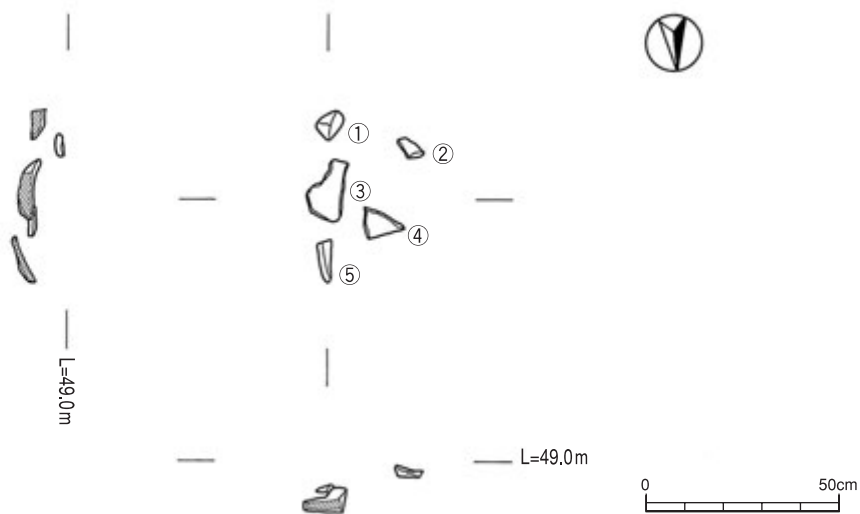
スクレイパーが3点出土し、使用されている石材は15が日東産黒曜石、16が頁岩、17が上牛鼻産黒曜石である。剥片の縁辺に二次加工を施し刃部を形成している。17は右側縁に使用痕が認められる。

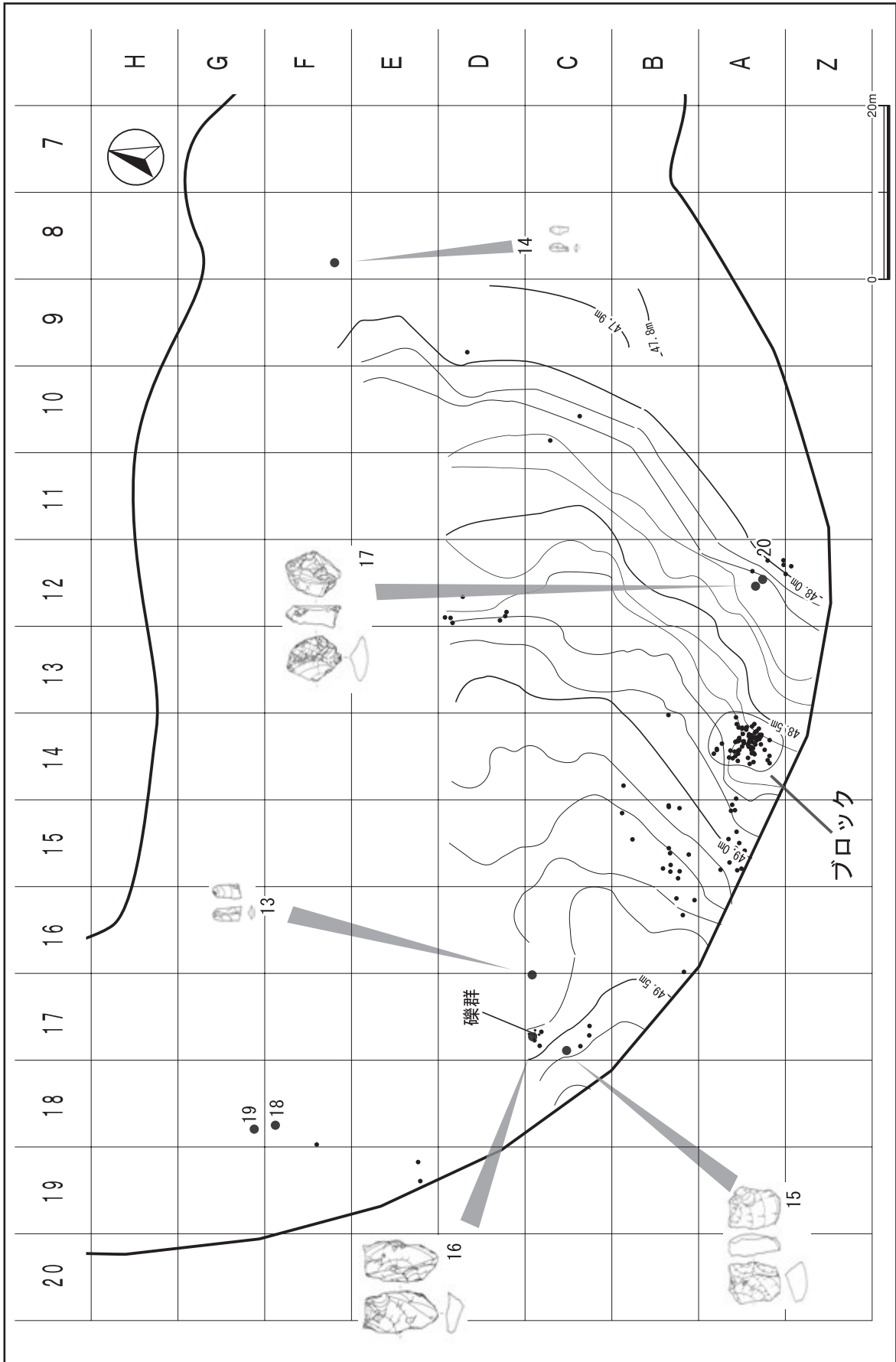
#### 磨石・敲石 (第18図 18~20)

18・19は、安山岩を素材として使用している。18と19は磨石で、20は磨石と敲石の機能を合わせもったものである。側縁に敲打痕集中部が認められる。

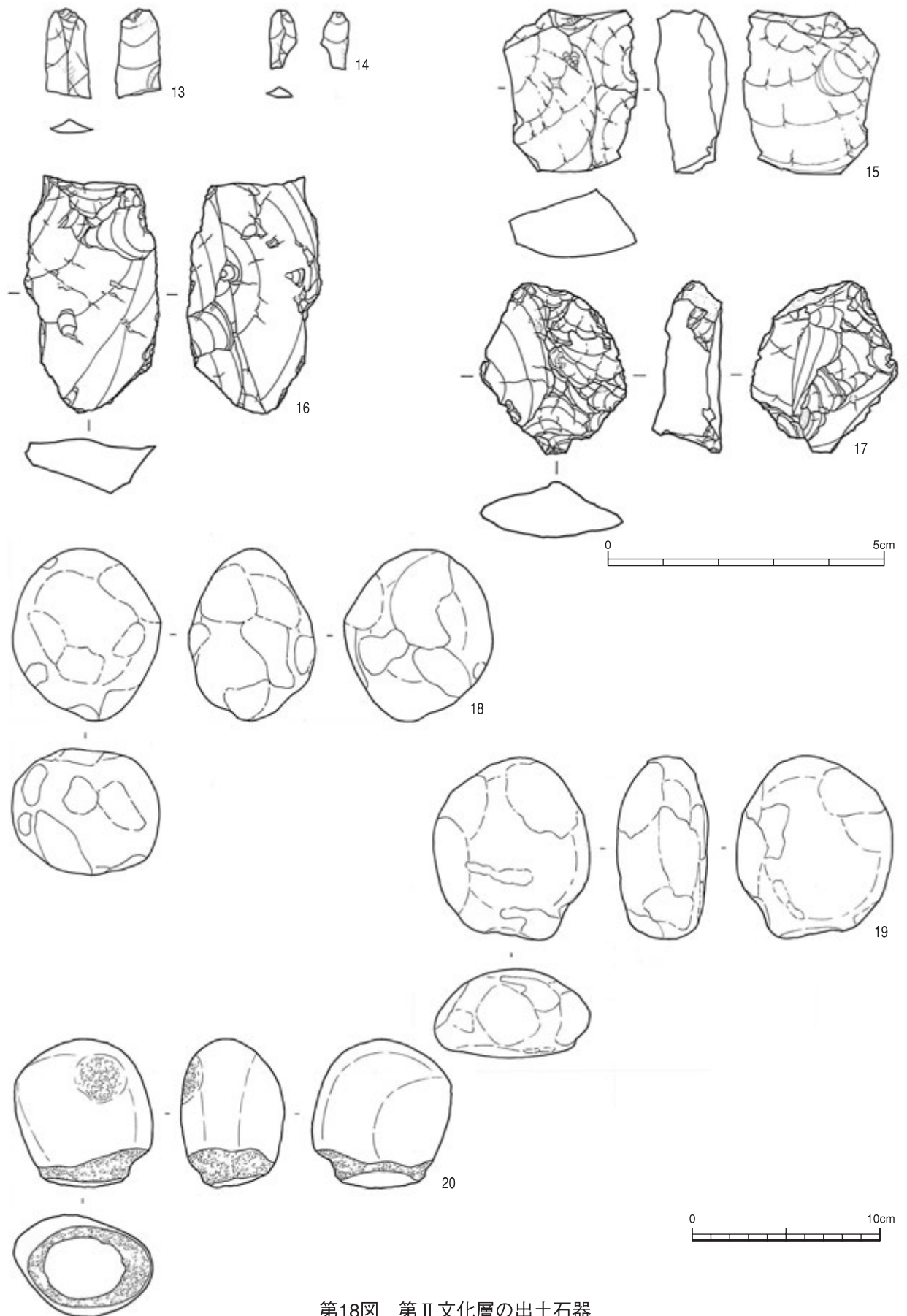


第15図 第Ⅱ文化層石器群の石材の割合





第17図 第Ⅱ文化層の遺構位置図及びブロック主要石器出土分布



第18図 第Ⅱ文化層の出土石器

## 第4節 縄文時代の調査

縄文時代については、Ⅳ層から早期、Ⅲa層から前期、中期、後期、晩期がそれぞれ出土している。

以下、遺構と遺物について、それぞれ時代順に述べていきたい。

### 1 早期の調査

早期は、主としてB～E-9～11区に集中し、集石遺構が3基検出され、Ⅳ層から土器、石器が出土している。

#### (1) 遺 構

##### 1号集石遺構

1号集石遺構はⅣ層上面で検出された。122cm×70cmの範囲に広がり、上下幅は11cmである。16個の礫で構成され、11個に赤化が見られる。構成礫の平均値は、最大長で9.0cm、厚さが4.2cm、重量は281gである。

##### 2号集石遺構

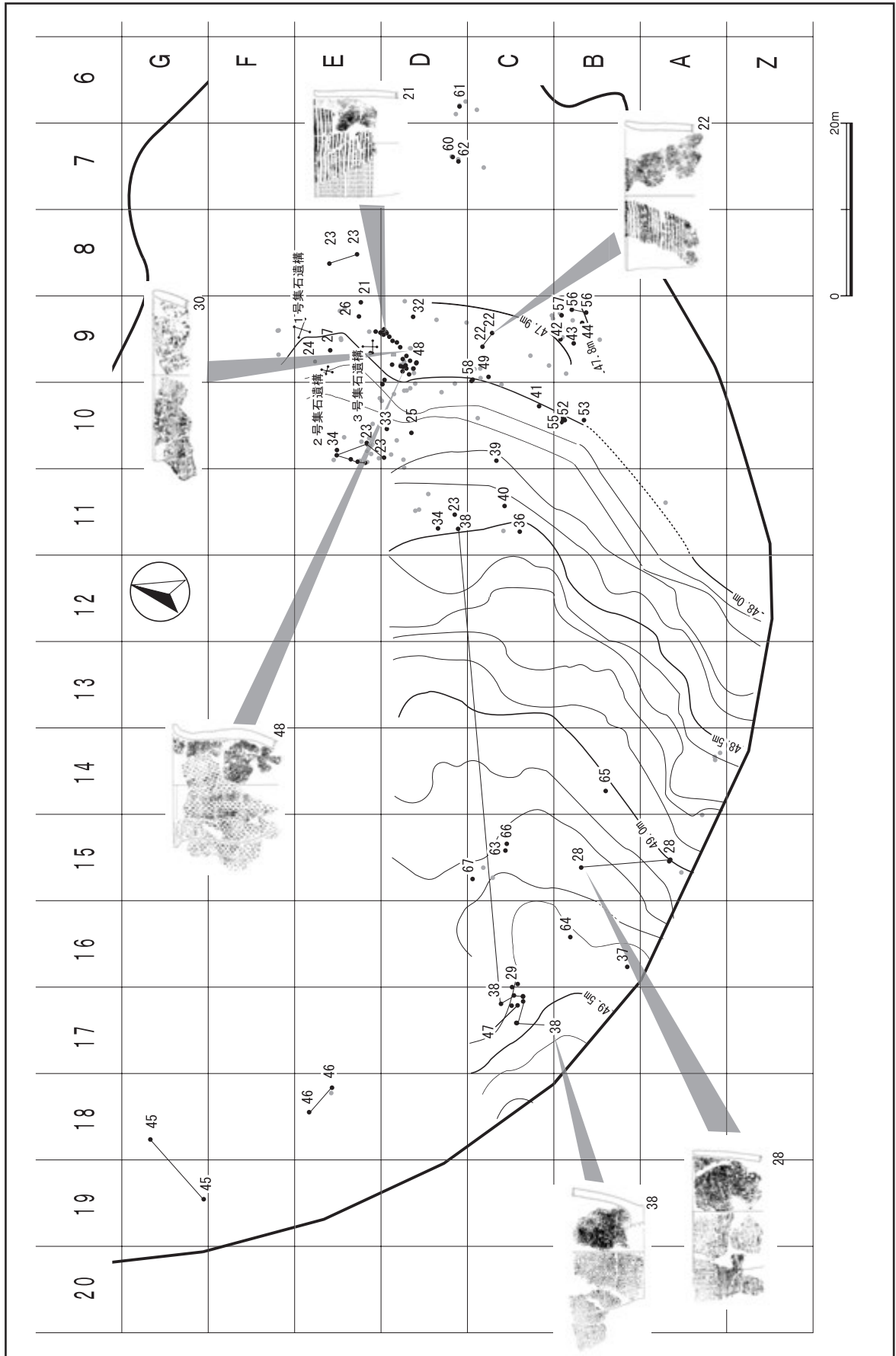
2号集石遺構は138cm×135cmの範囲に広がりをもち、上下の幅は13cmである。83個の礫で構成され、ほぼ全てにおいて赤化が見られた。構成礫の平均値は、最大長で7.8cm、厚さが3.6cm、重量は177.2gである。主に50gから200gのものが突出して多い。掘り込みはみられないが、中央部で過密に集中しており、典型的な集石といえる。

##### 3号集石遺構

3号集石遺構は60cm×55cmの広さを持ち、上下の幅は7cmである。8個の礫で構成され、3個に赤化が見られた。構成礫の平均値は、最大長で9.4cm、厚さが4.6cm、重量は418.8gである。これも掘り込みは見られなかった。密度は疎だが、円を描くように形成されている。

第3表 旧石器時代の石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	遺物名	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	注記番号	備 考
第 13 図	1	A-12	Ⅵ	ナイフ形石器	上牛鼻産安山岩	3.58	2.01	0.84	6.47	3944	
	2	B-15	Ⅲa	ナイフ形石器	上牛鼻産黒曜石	3.78	1.90	0.66	5.16	1360	
	3	A-12	Ⅵ	ナイフ形石器	上牛鼻産黒曜石	4.02	2.02	1.31	8.47	3918	
	4	A-14	V	ナイフ形石器	上牛鼻産黒曜石	3.22	1.16	0.84	2.36	3391	
	5	A-14	V	ナイフ型石器	上牛鼻産黒曜石	2.96	2.10	0.83	4.36	3578	
	6	C-11	Ⅳ	台形石器	上牛鼻産黒曜石	3.26	1.99	1.10	6.53	4125	
	7	C-17	V	台形石器	上牛鼻産黒曜石	2.69	1.73	0.98	3.11	3350	
第 14 図	8	A-15	Ⅵ	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	3.62	3.80	1.34	16.54	3663	
	9	A-14	Ⅵ	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	2.51	2.09	0.94	5.85	3581	
	10	A-14	Ⅵ	剥片石器	凝灰質頁岩	3.60	3.66	1.87	22.99	3372	
	11	A-14	Ⅵ	石 核	上牛鼻産黒曜石	3.32	2.69	2.76	21.65	3628	
	12	C-10	Ⅵ	磨 石	安 山 岩	5.60	5.08	3.54	150.00	4052	
第 18 図	13	C-17	V	細 石 刃	腰岳産黒曜石	1.61	0.84	0.23	0.29	3339	
	14	F-8	V	細 石 刃	上牛鼻産黒曜石	1.05	0.47	0.13	0.06	73	
	15	C-17	V	スクレイパー	日東産黒曜石	2.97	2.43	1.28	9.71	3354	
	16	C-17	V	スクレイパー	頁 岩	4.24	2.39	0.98	8.22	3346	
	17	A-12	V	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	3.05	2.62	1.25	7.58	3920	
	18	F-18	V	磨 石	安 山 岩	9.29	8.04	6.82	600.00	1175	
	19	G-18	V	磨 石	安 山 岩	9.82	8.42	4.89	550.00	1173	
	20	A-12	V	磨石・敲石	安 山 岩	8.00	7.50	5.50	380.00	3919	



第19図 縄文時代早期の遺構配置図及び土器出土分布

## (2) 遺物

### 1 土器

#### I類土器 (第24図 21~27)

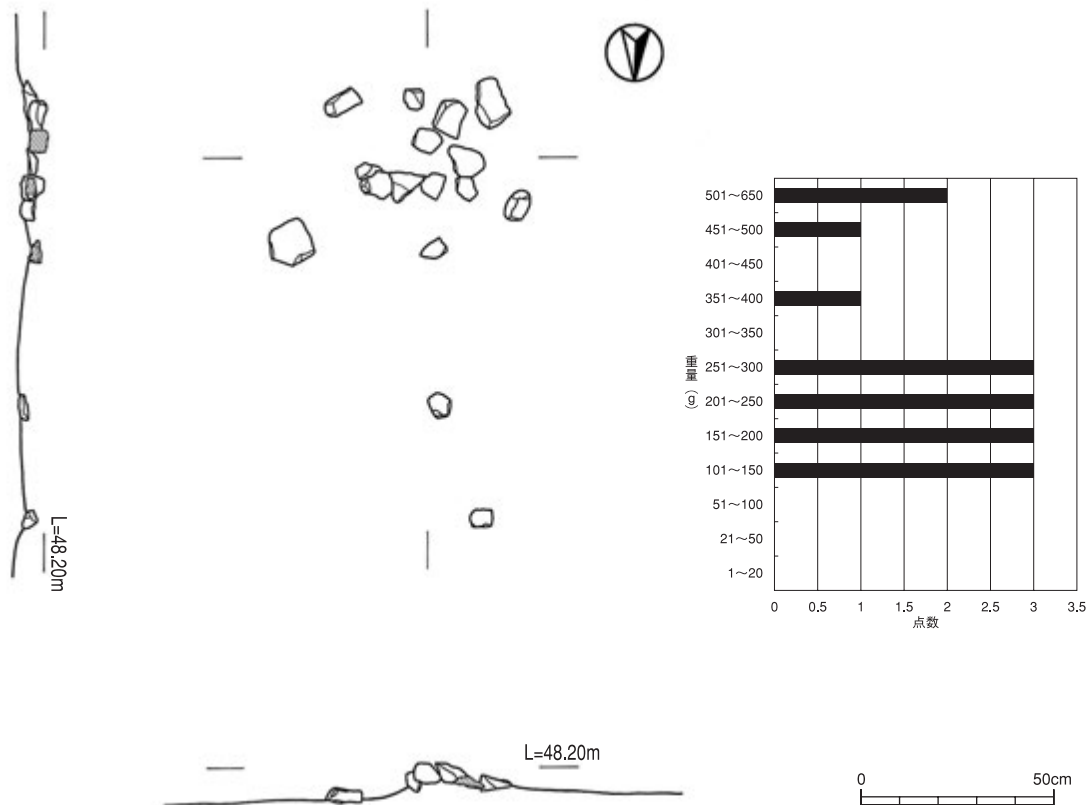
I類土器は、口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁による横方向の条痕文が施され、胴部への施文は特にない。器形は円筒形で、口縁部が直立または外反している。胴部がやや膨み、底部は平底である。主にIV層から27点出土し7点を図化した。

21は、口縁部から胴部下位まで接合できたものであり、口縁直径は18.8cmである。22, 23は、口縁部片である。21, 22は、口唇部が平坦であり、23は丸みは帯びている。24, 25は胴部片である。26, 27は底部片である。26の底径は10.6cm, 27の底径は25.2cmで、両方とも内外面の調整はナデである。

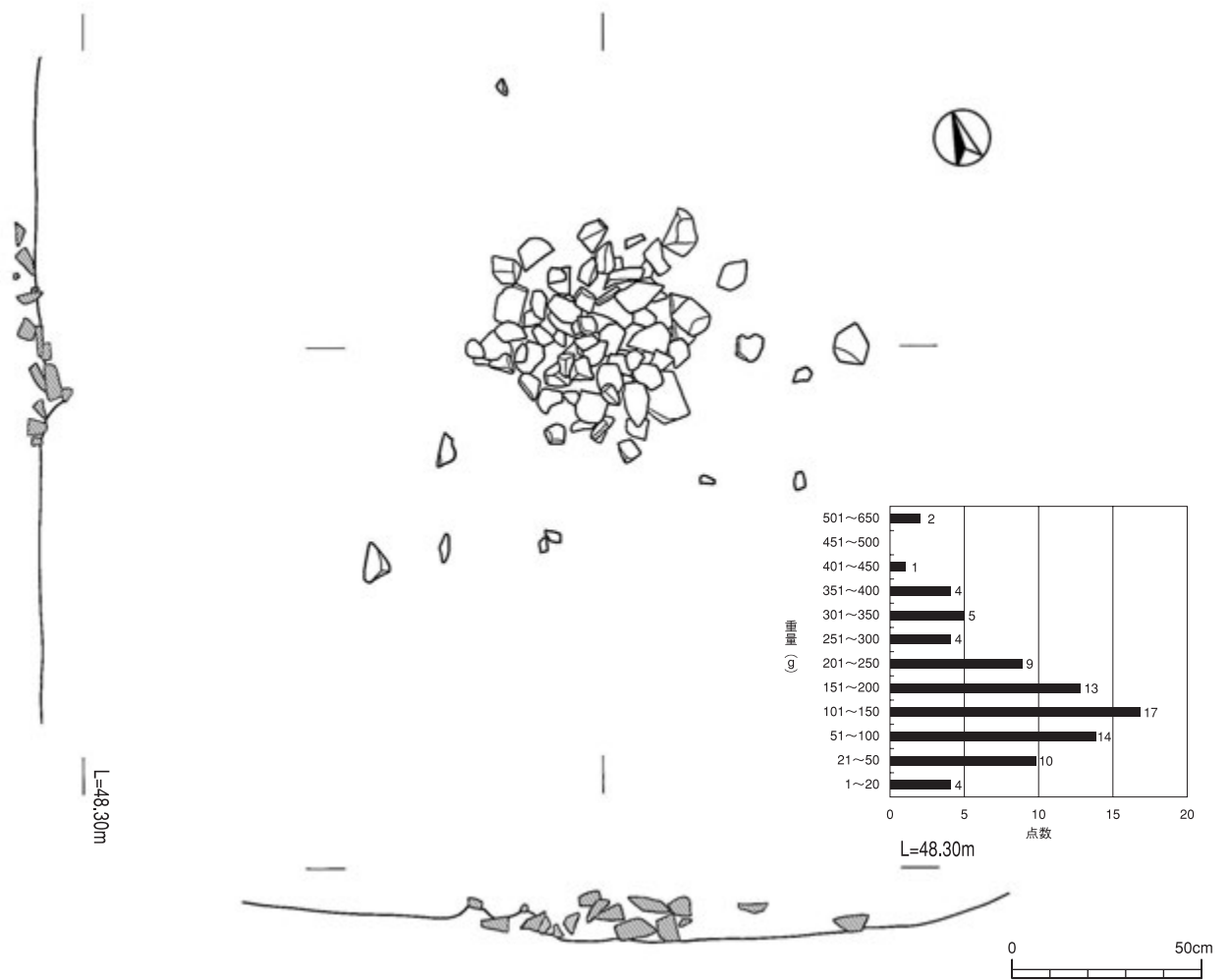
#### II類土器 (第25図 28~37)

II類土器は、口縁部から胴部にかけて貝殻による条痕文が施されている。器形は、円筒形である。主にIV層から48点出土し10点を図化した。

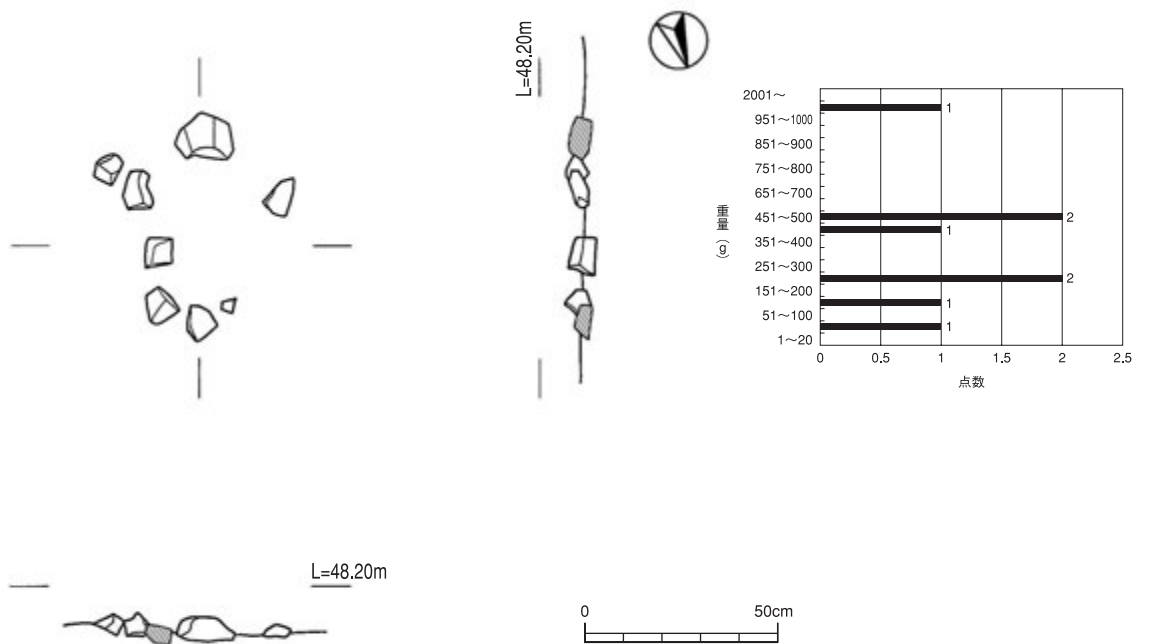
28~30は、口縁部片である。28, 29は、口縁部に縦方向の条痕文が施され、その下は横方向の条痕文が施されている。30は、まず縦方向の条痕文が施された後、横方向の条痕文が施され、器厚も1.2cmである。31~37は、胴部片である。31は、縦方向の条痕文が施された後、横方向の条痕文が施されている。器厚も1.2cmで、30と同一個体であると考えられる。35, 37は、横方向の条痕文が施され、内面調整はナデで、同一個体の可能性がある。



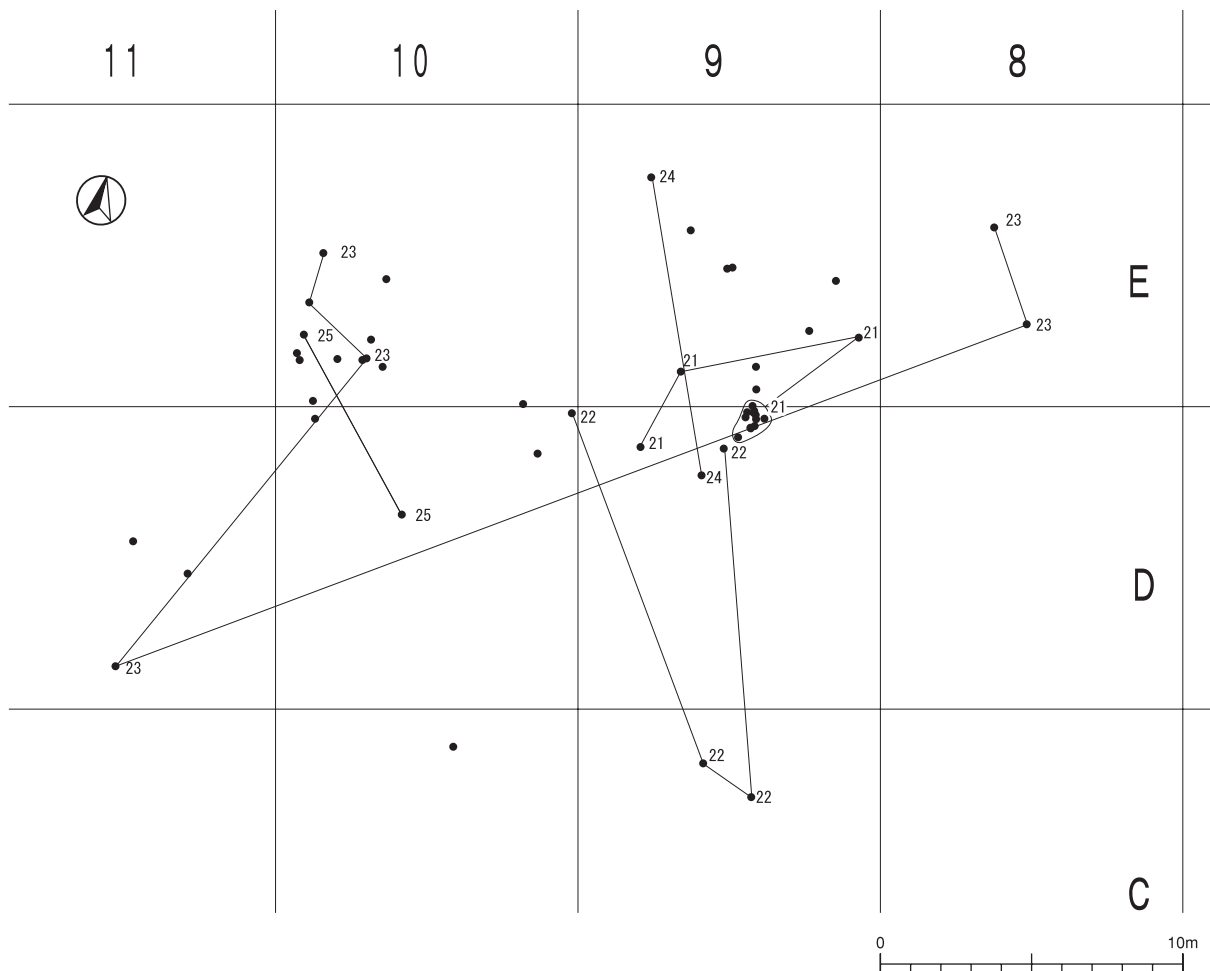
第20図 縄文時代早期の1号集石遺構



第21図 縄文時代早期の2号集石遺構



第22図 縄文時代早期の3号集石遺構



第23図 縄文時代早期のⅠ類土器出土分布

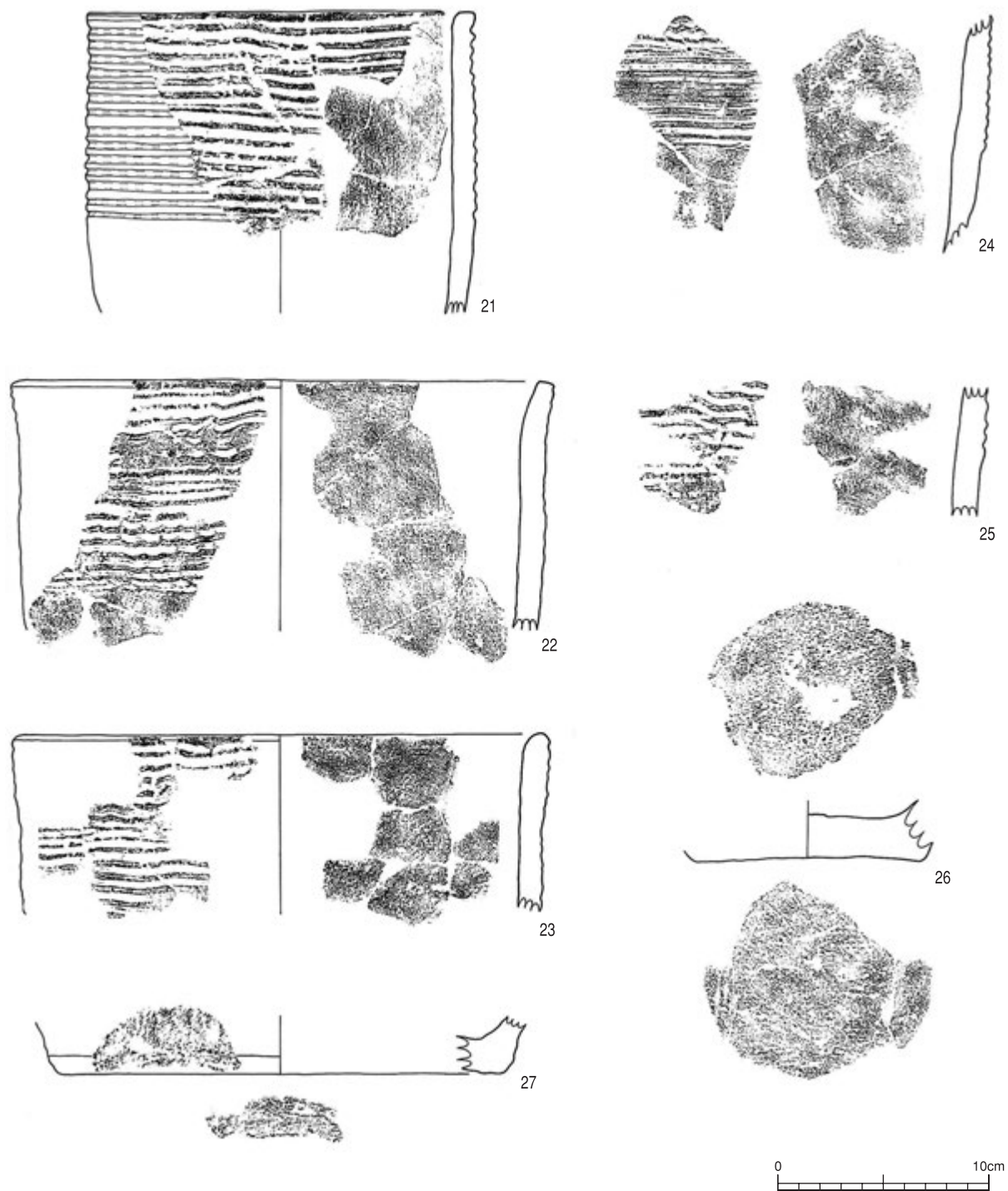
### Ⅲ類土器（第28図 38～47）

Ⅲ類土器は、外面と内面上部に山形の押型文を施文するものである。主にⅣ層から30点出土し10点図化した。39, 40は口縁部が外反し、口唇部は丸みを帯びている。外面は縦方向に施文が施され、内面は横方向に施文が施されている。38は、胴部から底部まで接合できたものであり、底径は約16cmである。外面全体に山形の施文が横方向に規則正しく施されている。器厚も厚く約12cmである。内面の調整はナデである。41～47は胴部片である。44は、山形の施文の下に横方向の沈線文が施されている。

### Ⅳ類土器（第28図 48～55）

Ⅳ類土器は、外面と内面上部に楕円形の押型文を施文するものである。主にⅣ層から41点出土し8点図化した。48は、口縁部から胴部まで接合できたものであり、外面には楕円形の押型文が全面に縦方向に巡らしている。口縁部は外反し、内面の口縁部近くにも押型文が施されている。胴部は幾分膨らみを有する。49は口縁部片で外反し、内外面ともに楕円形の押型文が施されている。50～54は胴部片である。52と53は、細かな楕円形の押型文が施され、内面調整はナデで、同一個体の可能性がある。55は底部片である。外面に楕円の押型文がわずかではあるが見られた。

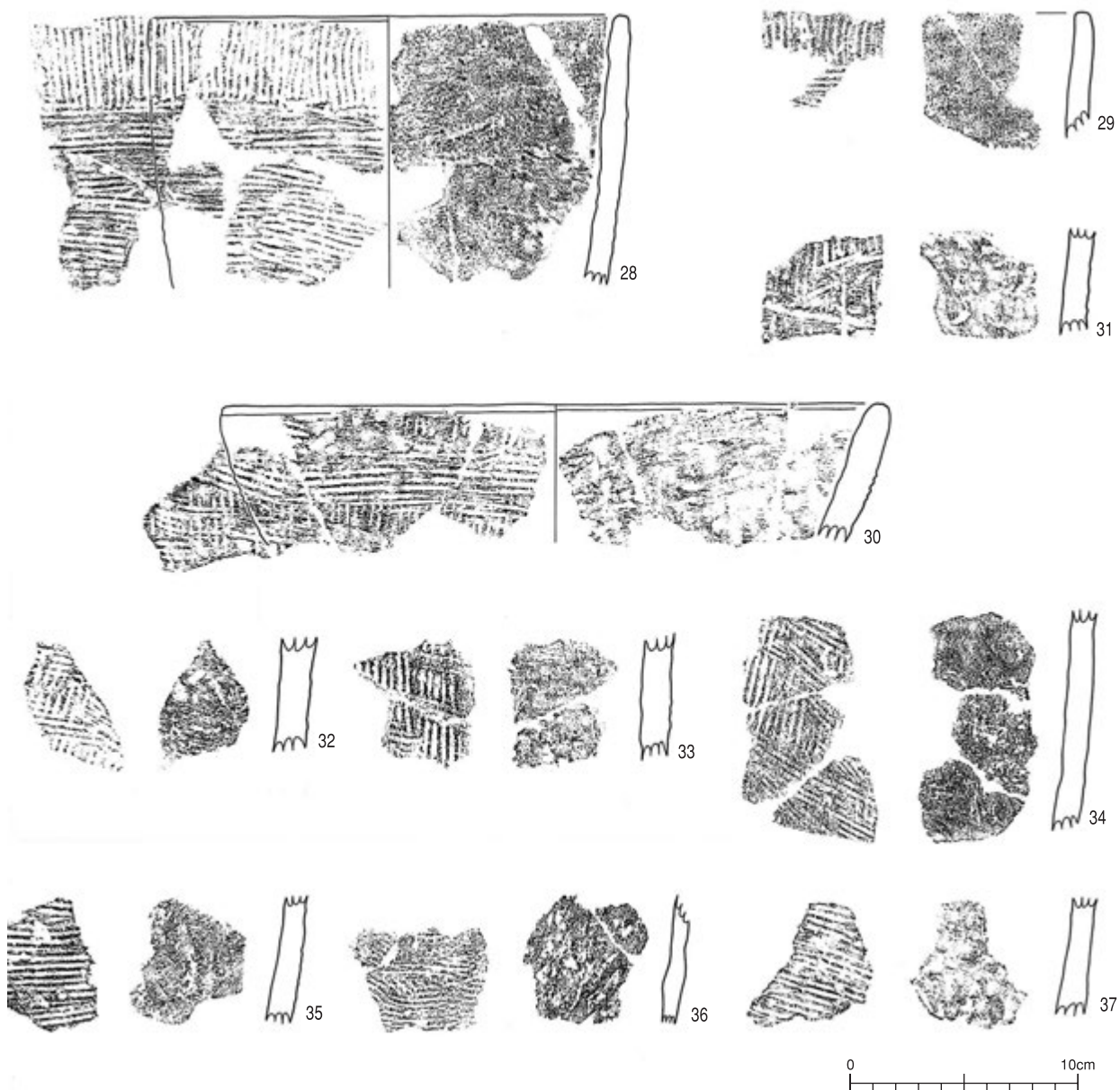




第24図 縄文時代早期のI類土器

#### V類土器 (第29図 56~59)

V類土器は、撚糸文が施されている。主にIV層から16点出土し4点図化した。56は、口縁部片で、外面は縦方向に撚糸文が施され、内面は口縁近くに横方向の撚糸文が施されている。57~59は、胴部片である。57、59は横方向に撚糸文が施され、58は縦方向に撚糸文が施されている。



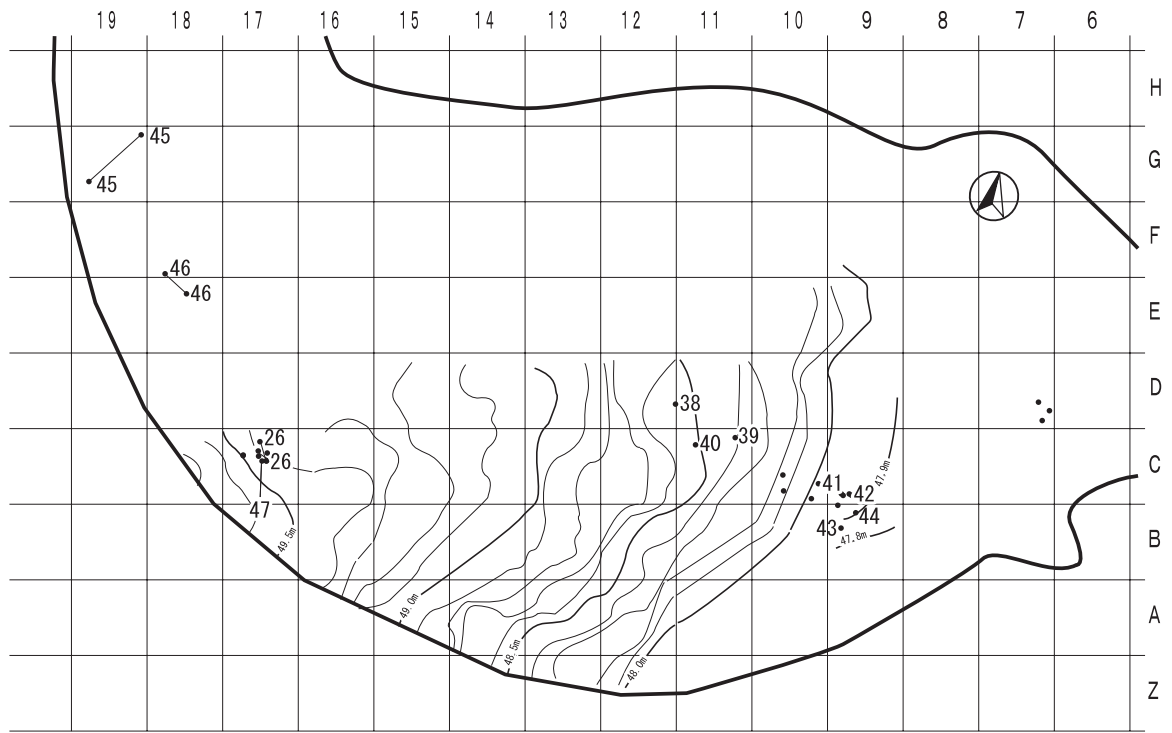
第25図 縄文時代早期のⅡ類土器

Ⅵ類土器 (第29図 60~62)

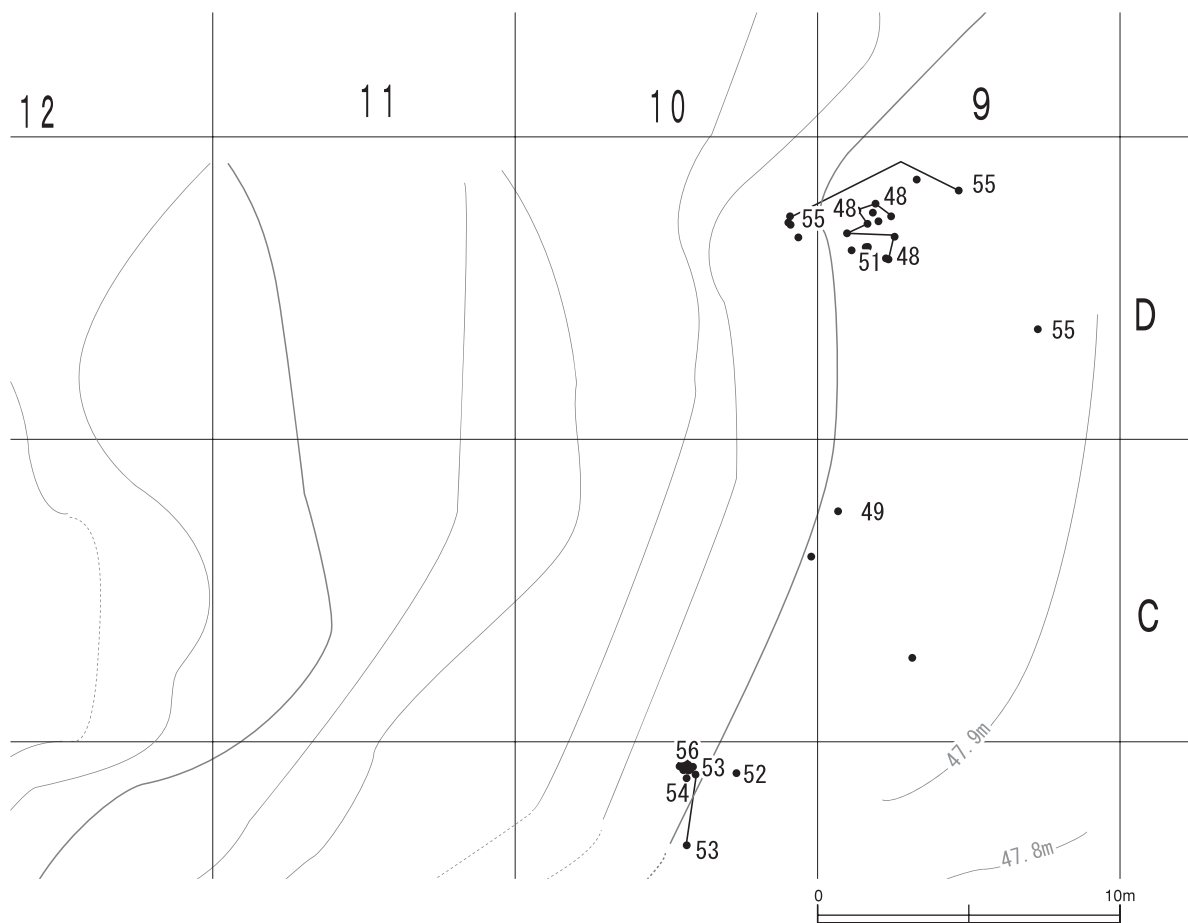
Ⅵ類土器は、外面に縄文が施文されている。60~62は胴部片で外面に縄文が施文され、内面はケズリ後ナデが施されている。

Ⅶ類土器 (第29図 63~65)

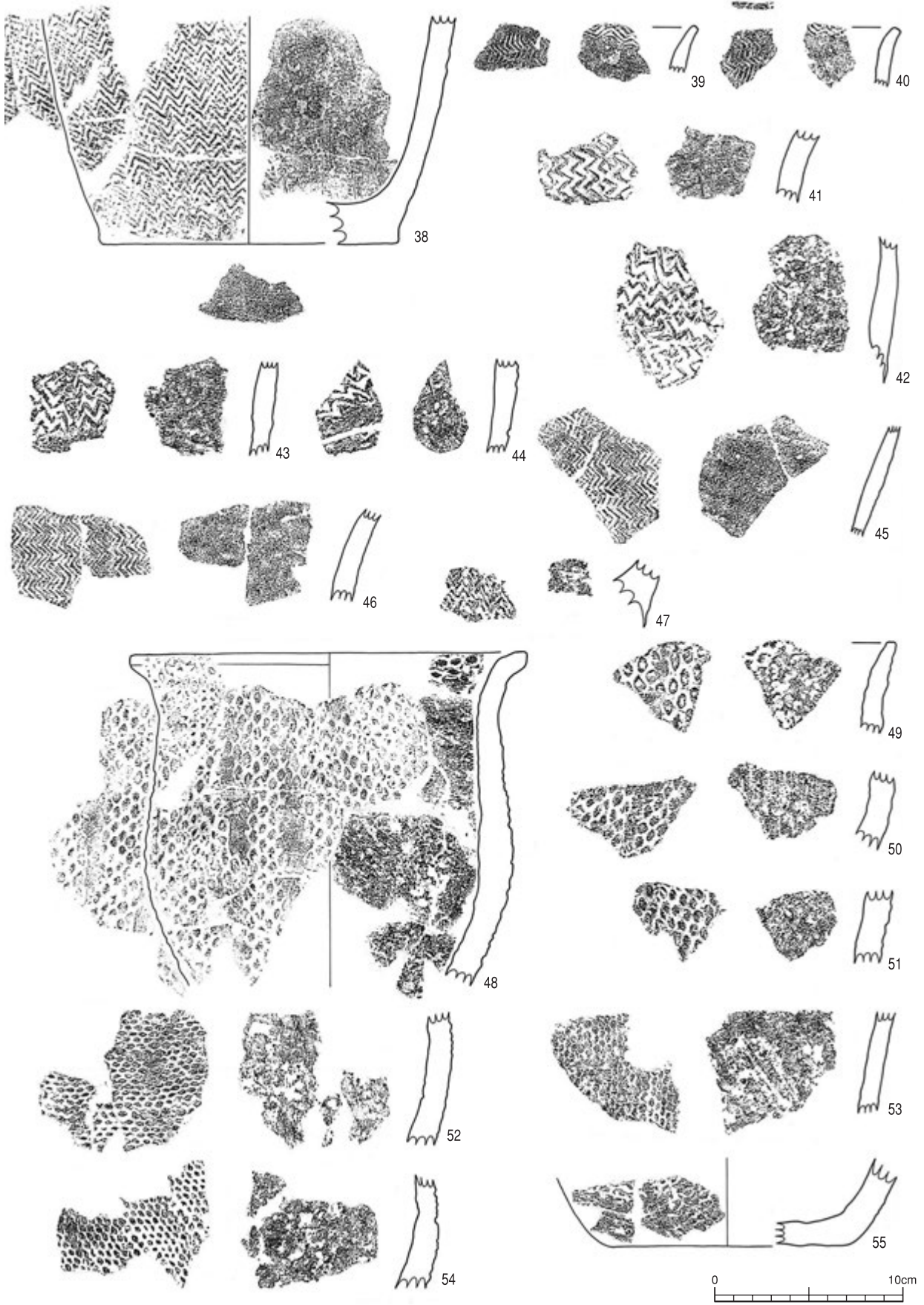
Ⅶ類土器は、沈線文や網目撚糸文が施されている。7点出土し5点図化した。63, 65は口縁部片である。外面は沈線文が施文され、やや外反する。63~67は胴部片である。65の外面は沈線文が施され、66, 67は網目撚糸文が施されている。器厚は約5mmでやや薄めである。



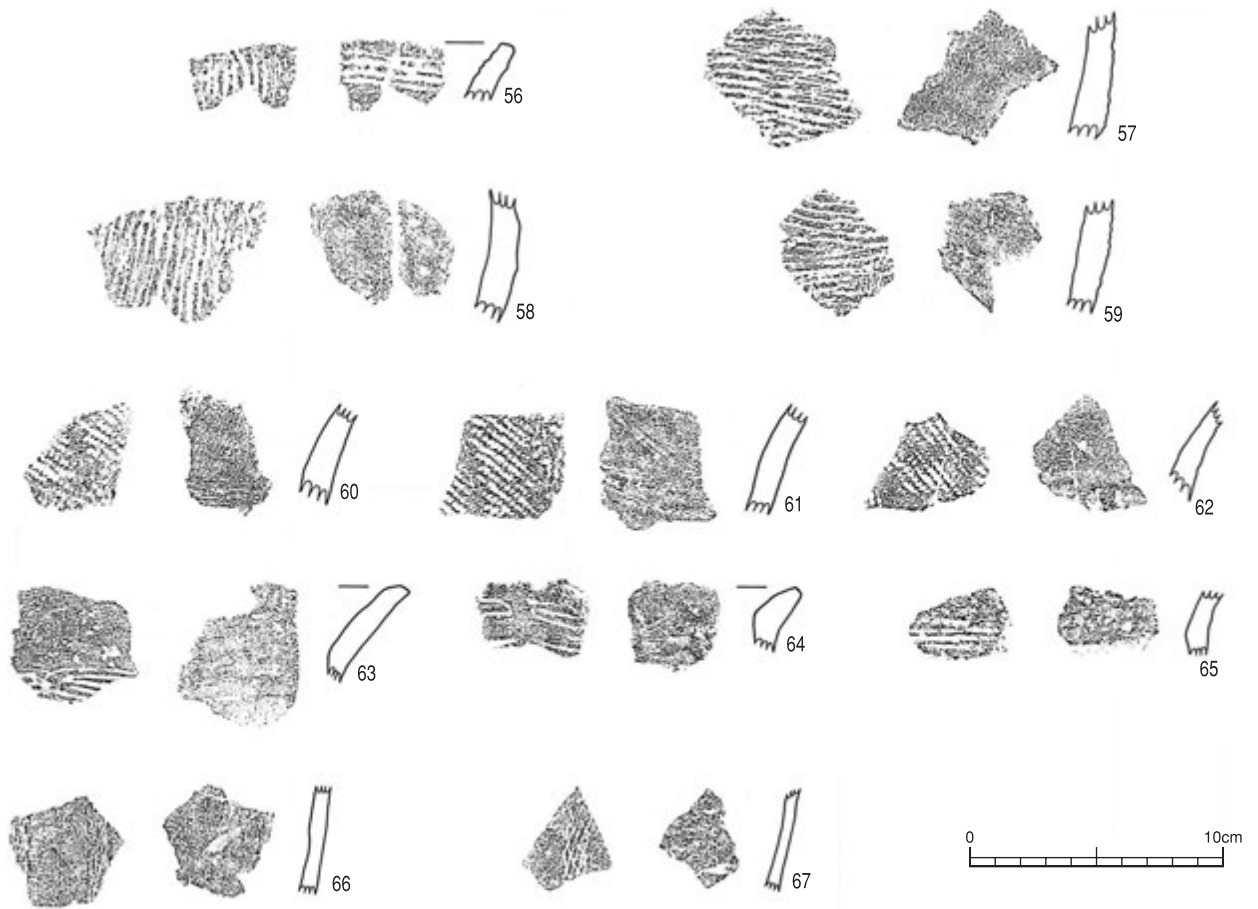
第26図 縄文時代早期のⅢ類土器出土分布



第27図 縄文時代早期のⅣ類土器出土分布



第28図 縄文時代早期のⅢ・Ⅳ類土器



第29図 縄文時代早期のV・VI・VII類土器

第4表 縄文時代早期の土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土				焼 成	調整		備 考
								石英	長石	角閃石	その他		外面・底部	内面	
第24 図	21	D-9,E-9	IV,III	I	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	22	C-9,D-9	III a,IV		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条 痕	ナデ	
	23	E-8,D-11,E-10	IV		口縁部	灰 黄	浅 黄	○	○	○		良	条 痕	ナデ	
	24	D-9,E-9	IV		胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	25	D-10,E-10	IV		胴 部	浅 黄	浅 黄	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	26	E-9	III a		底 部	黄 褐色	暗灰黄色	○	○	○		良	ナ デ	ナデ	
	27	E-9	IV		底 部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○	○		良	条 痕	ナデ	
第25 図	28	A-15	III a,IV	II	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	29	C-16	IV		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	30	D-9	IV		口縁部	にぶい 橙	明 赤 褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	31	D-9	IV		胴 部	明 赤 褐	明 赤 褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	32	D-9	IV		胴 部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	煤付着
	33	E-10,D-10	IV		胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	34	E-10,D-11	IV		胴 部	にぶい黄橙	明 赤 褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	35	一括	表層		胴 部	灰 黄 褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ	
	36	C-11	V		口縁部	にぶい黄橙	灰 褐 色	○	○	○		良	楕円押型文	ナデ	
37	B-16	IV	胴 部	にぶい黄橙	黒 褐	○	○	○		良	貝殻条痕	ナデ			
第28 図	38	C-17,D-10	III a	III	底 部	橙	にぶい 黄		○	○		良	山形押型文	ナデ	
	39	C-11	IV		口縁部	にぶい 褐	にぶい 褐		○	○		良	山形押型文	ナデ	内面口唇部に山形文あり・煤付着
	40	C-11	IV		口縁部	にぶい 橙	にぶい 橙		○	○		良	山形押型文	ナデ	内面口唇部に山形文あり
	41	C-10	IV		胴 部	明 黄 褐	明 黄 褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	

第5表 縄文時代早期の土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土				焼 成	調整		備 考
								石英	長石	燧石	その他		外面・底部	内面	
第28 図	42	C-9	IV	III	胴 部	にぶい 橙	にぶい 橙		○	○		良	山形押型文	工具ナデ	
	43	B-9	IV		胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	山形押型文	ナ デ	
	44	B-9	IV		胴 部	にぶい 橙	にぶい 橙		○	○		良	山形押型文	工具ナデ	下部に沈線文あり
	45	G-19	III a		胴 部	にぶい黄橙	浅 黄	○	○	○		良	山形押型文	ナ デ	
	46	E-18,F-18	V		胴 部	浅 黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	山形押型文	板ナデ・ナデ	
	47	C-17	III a		胴 部	橙	灰 黄		○	○		良	山形押型文	ケズリ	
	48	D-9	IV	IV	口縁部	明 赤 褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナ デ	
	49	C-9	IV		胴 部	にぶい黄褐	にぶい 黄	○	○	○		良	楕円押型文	押型文	
	50	D-9	IV		胴 部	明 赤 褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナ デ	
	51	D-9	IV		胴 部	橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナ デ	
	52	B-10	III a		胴 部	にぶい 褐	にぶい 褐	○	○	○		良	楕円押型文	工具ナデ	
	53	B-10	IV		胴 部	明 赤 褐	にぶい黄褐		○	○		良	楕円押型文	ナ デ	
	54	B-10	IV		胴 部	にぶい 褐	にぶい 褐	○	○	○		良	楕円押型文	ナ デ	
	55	B-10,D-9	IV		底 部	褐	にぶい 褐	○	○	○		良	ナデ・ケズリ	ナ デ	
第29 図	56	B-10	IV	V	口縁部	明 黄 褐	明 黄 褐		○	○		良	撚 糸 文	撚糸文	
	57	B-9	III a		胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	撚 糸 文	ナ デ	
	58	C-9	IV		胴 部	明 黄 褐	明 黄 褐		○	○		良	撚 糸 文	ナ デ	
	59	B-9	一括		胴 部	にぶい 褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	撚 糸 文	ナ デ	
	60	D-7	IV	VI	胴 部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	撚 糸 文	ケズリ・ナデ	
	61	D-6	IV		胴 部	にぶい黄褐	浅 黄 褐	○	○	○		良	撚 糸 文	ケズリ・ナデ	
	62	D-7	III a		胴 部	灰 黄 褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	撚 糸 文	ケズリ・ナデ	
	63	C-15	III a	VII	口縁部	浅 黄	にぶい 黄	○	○	○		良	沈 線 文	ナデ・磨き	
	64	B-16	III a		口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈 線 文	ナ デ	
	65	B-14	III a		胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		良	沈 線 文	ナ デ	
66	C-15	III a	胴 部		灰 黄	灰 黄	○	○	○		良	網目撚糸文	ハケ・ナデ		
67	C-15	IV	胴 部	にぶい黄橙	黄 褐		○	○		良	網目撚糸文	ナ デ	煤付着		

## 2 石 器

縄文時代早期の石器は、主にIV層より石鏃、スクレイパー、使用痕剥片、石斧、礫器、磨石、敲石、石皿が出土している。

### 石鏃(第31図 68~85, 第32図 86~88)

石鏃はZ~F-5~19区に散布しており、22点出土し、21点を図化した(図31・32)。素材は黒曜石(9点)、安山岩(6点)、玉髓(2点)、砂岩(2点)、鉄石英(1点)、珪質頁岩(1点)である。さらに黒曜石の原産地を細分すると上牛鼻産(5点)、西九州産(2点)、桑ノ木津留産(1点)、針尾産(1点)である。

石鏃の分類は、本遺跡の報告書における統一的な分類に従うことにする。(石鏃分類表P41 参照)

#### A-a-b(第31図 68~75)

長幅比が1~1.5で、形状がほぼ正三角形である。基部は浅い抉りとなっている。

#### A-a-c(第31図 76)

長幅比が1~1.5で、形状がほぼ正三角形である。基部は深い抉りとなっている。

A-a-d (第31図 77~81)

長幅比が1~1.5で、形状がほぼ正三角形である。基部はU字状に抉れている。

A-b-b (第31図 82~85)

長幅比が1.5~2で、形状がほぼ二等辺三角形である。基部は浅い抉りである。

A-b-c (第31図 85)

長幅比が1.5~2で、形状がほぼ二等辺三角形である。基部は深い抉りである。

B-a-d (第32図 86)

形状がほぼ五角形である。長幅比が1~1.5であり、基部が深い抉りである。

その他 (第32図 87, 88)

87, 88は頭部や基部が欠損しているため分類ができないものである。

スクレイパー (第32図 89~92)

89は上牛鼻産黒曜石を使用し、左側縁に二次加工が施され、下部に剥離痕が残る。90は玉髓を使用し、右側縁から下部にかけて丸く刃部が作り出されているが、わずかに欠損している。91, 92は安山岩を使用し、91は左側縁に二次加工が施され、右側縁は自然面が残る。92は右側縁から下部にかけて丁寧な二次加工を施し、刃部を形成している。背面は自然面を残す。

使用痕剥片 (第33図 93, 94)

93は日東産の黒曜石を、94は上牛鼻産の黒曜石を使用している。93は、右側縁から下部にかけて、94は左側縁に微細剥離が確認できる。さらに94の腹面には平坦剥離が施されている。

磨製石斧 (第33図 95, 96)




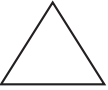






95は安山岩の自然礫を使用し、下部に剥離加工を施し刃部を形成している。96は表裏面に入念な研磨が施され、両側縁から整形剥離を施した局部磨製の石斧である。

礫器 (第33図 97~100)

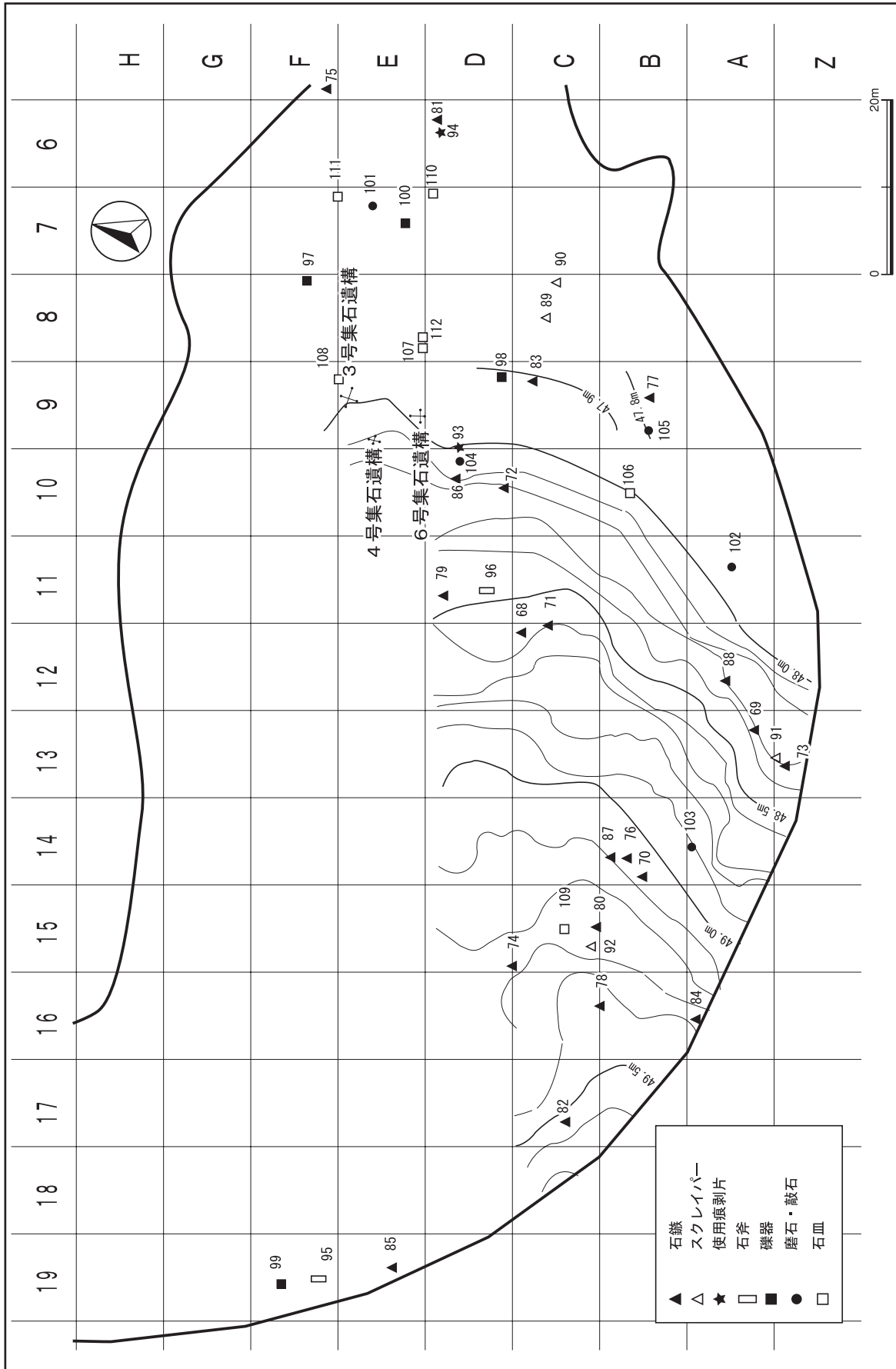
97~100は両面に自然面を残すもので、97は右側縁に、98は下部に剥離を施している。99には接合できる破片が一点出土している (図化はしていない)。自然礫を使用し下部に剥離を施した後、半分に割れている。100は自然礫の両側と下部に剥離を施し、下部に刃部を形成している。

磨石・敲石・凹石 (第34図 101~105)

101, 102は円礫を用いた磨石、敲石の機能をもつもので部分的に敲打の痕跡が確認される。103, 104は自然礫を使用し、103は側面に敲打の痕跡がみられ、104は部分的に敲打の痕跡がみられる。105は磨石の機能を持つもので、表裏面に磨面が確認される。

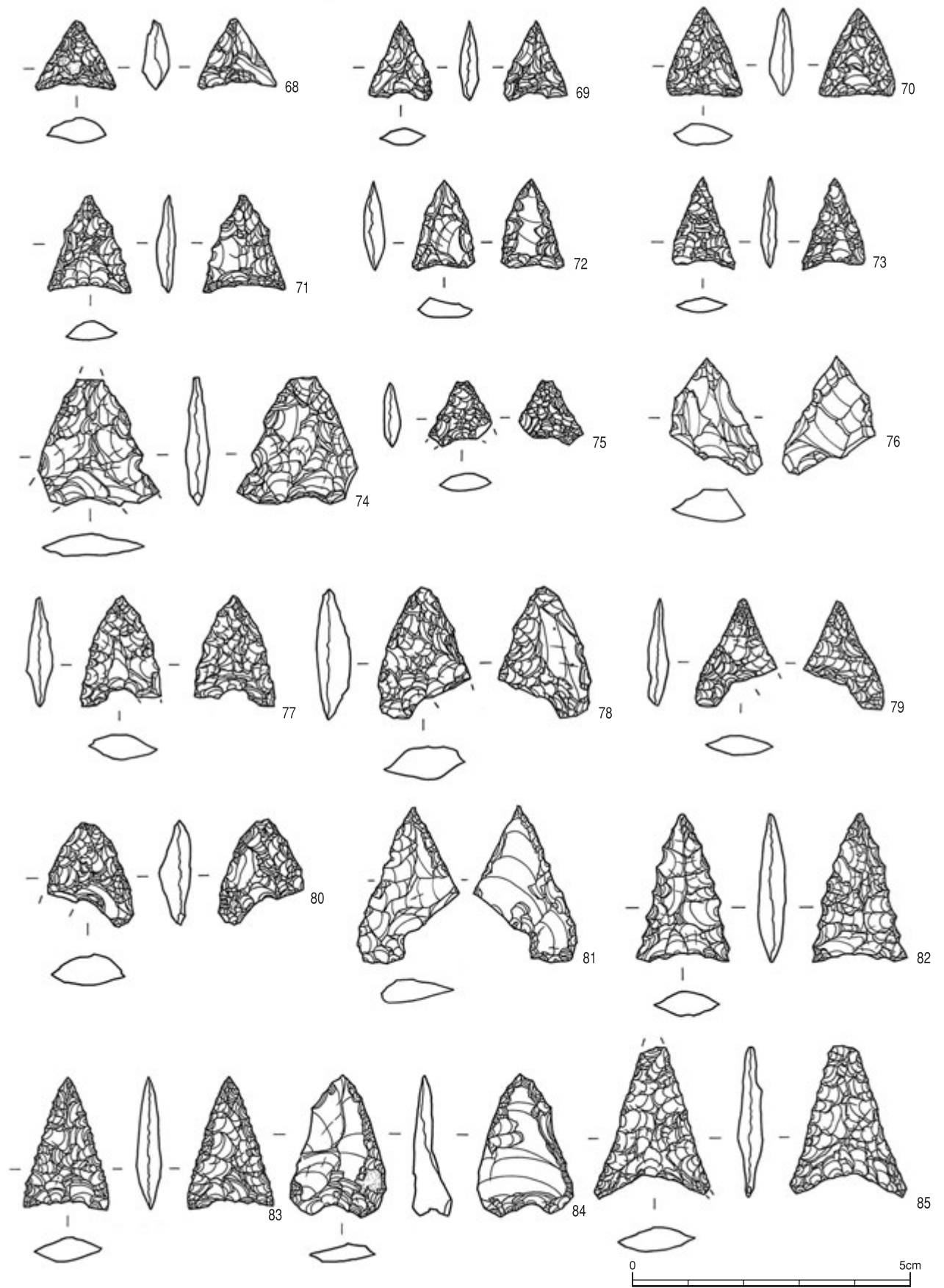
	A 三角形	B 五角形	C 丸形
形態			
長幅比 (鋸長/幅)	a 正方形 (a < 1.5)	b 二等辺三角形 (1.5 ≤ b < 2)	c 縦長な三角形 (c ≤ 2)
			
基部形状	a (平坦)	b (浅い)	c (深い)
			
			d (U字形)
			

※ 農業センター遺跡群報告書(98)石鋸分類表より

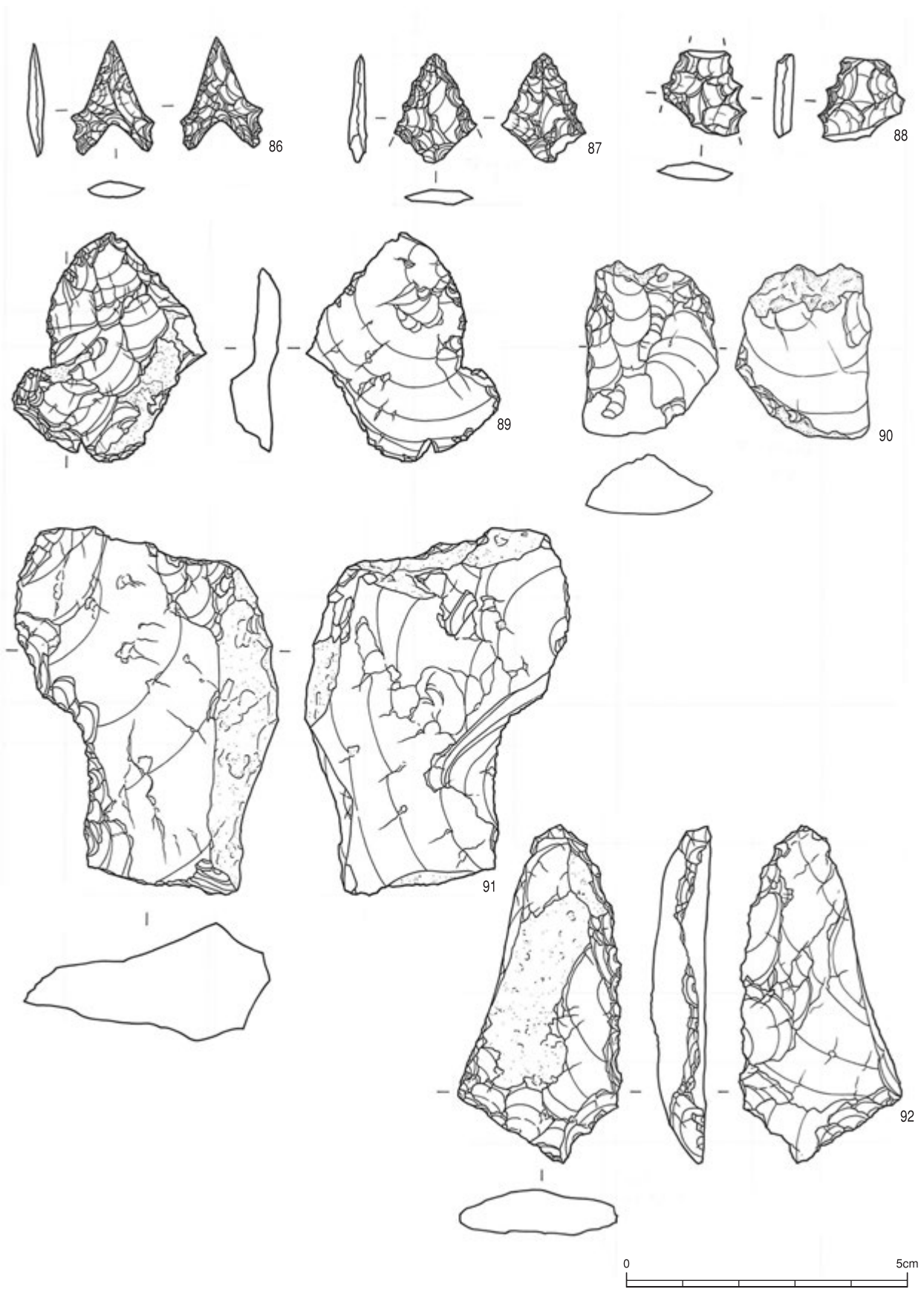


第30図 縄文時代早期の石器出土分布

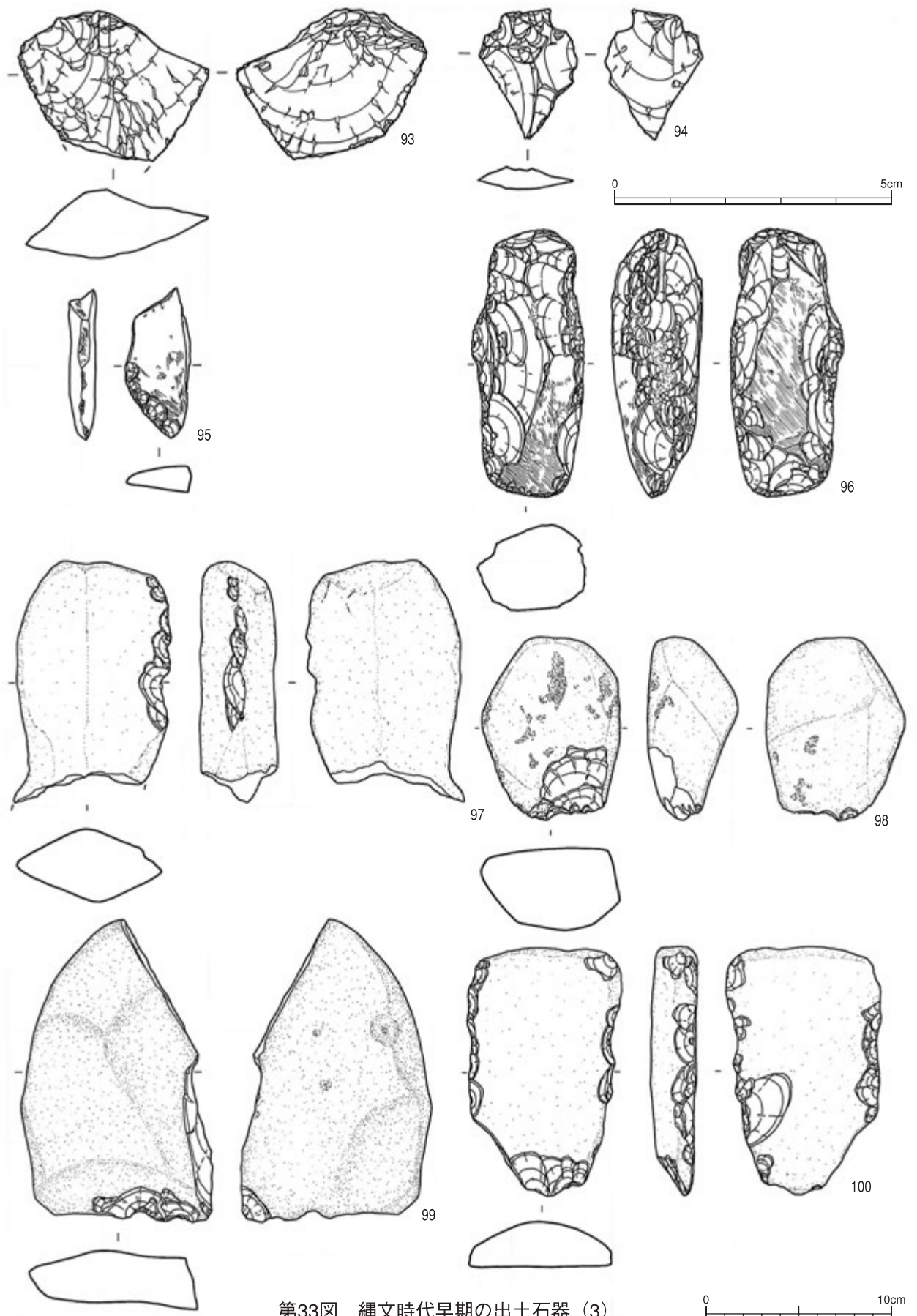




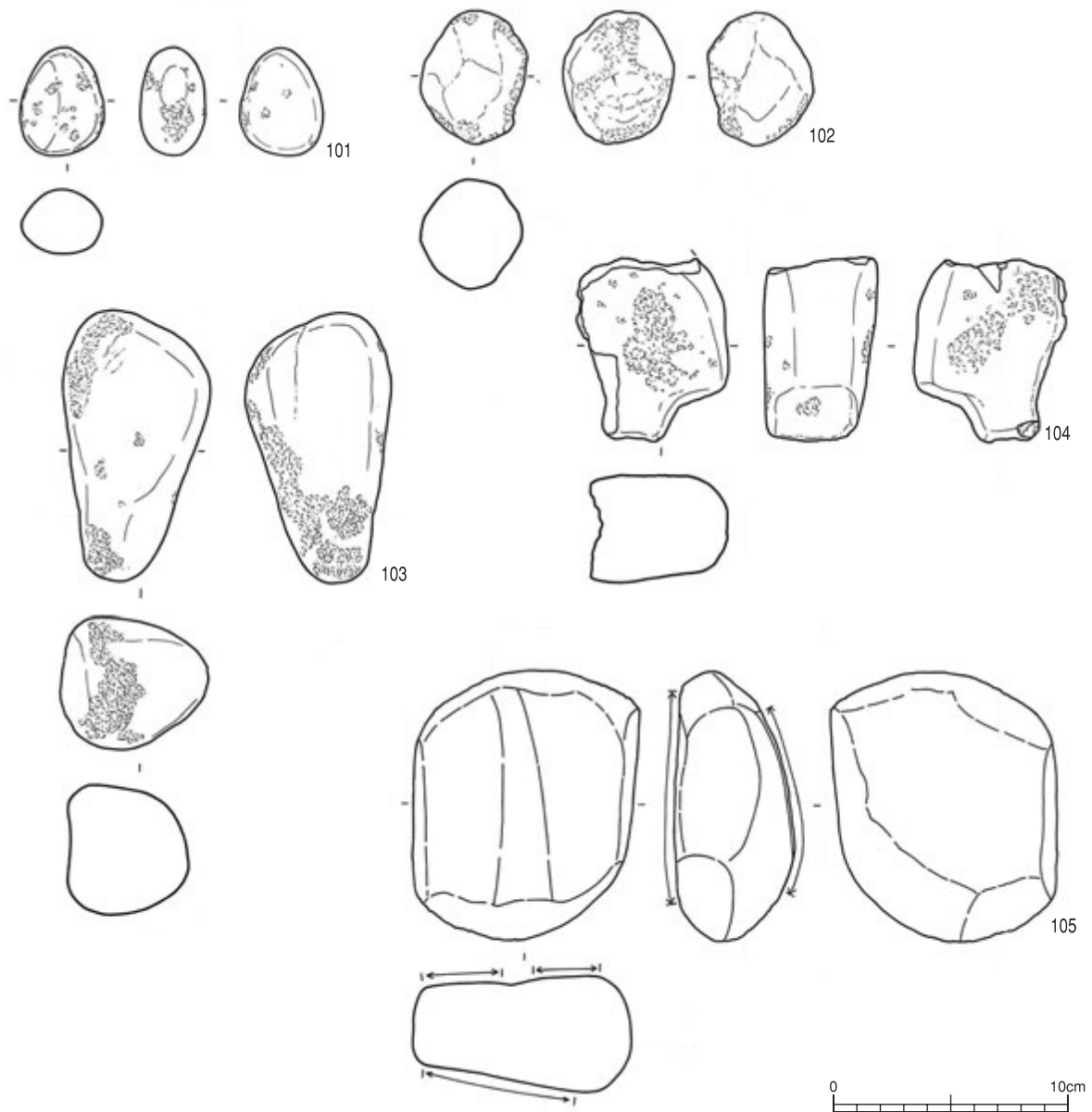
第31図 縄文時代早期の出土石器 (1)



第32図 縄文時代早期の出土石器 (2)



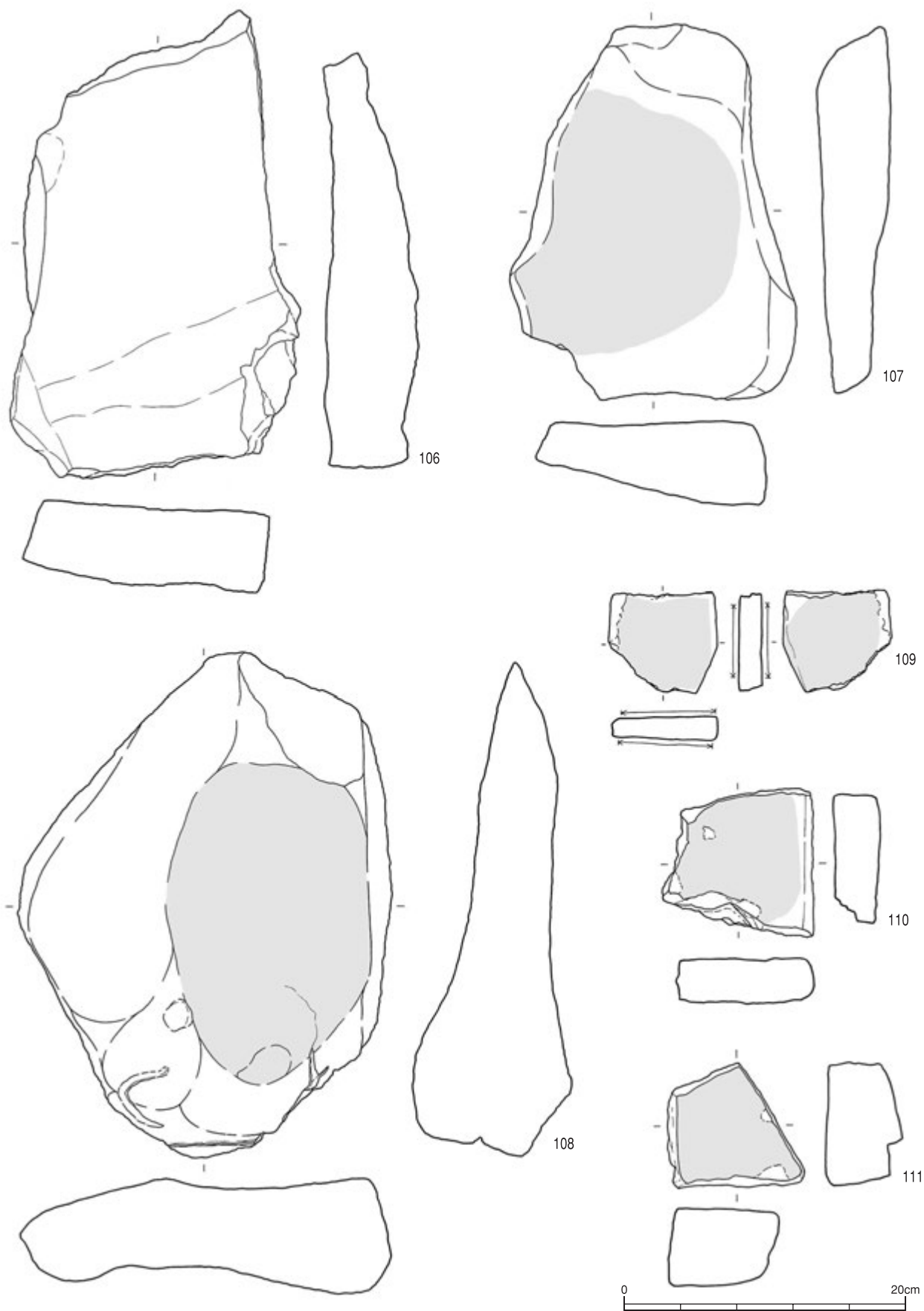
第33図 縄文時代早期の出土石器 (3)



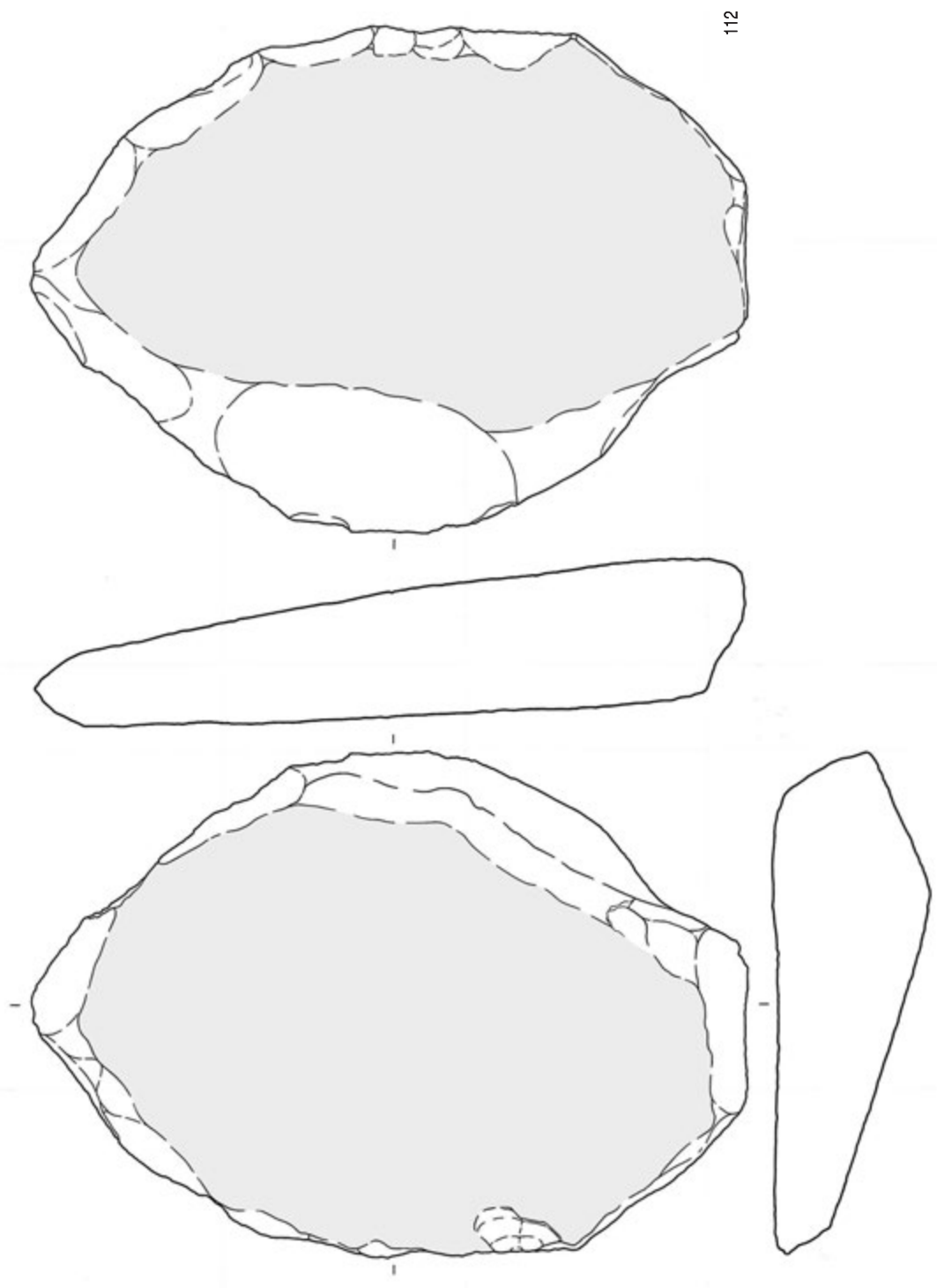
第34図 縄文時代早期の出土石器 (4)

石皿 (第35図 106~111, 第36図 112)

106~112は石皿で、素材は安山岩を使用し、ほとんどが石の目がつぶされたなめらかな面があり、窪みや擦痕がみられる石器である。106~108, 112は大型の礫を使用し、106, 107, 112は皿部がほぼ平坦な石器である。108は皿部が窪む石器であり、長軸方向で斜面の低い方に「掃き出し口」が明瞭に作られている。109~111もまた、大型の礫を使用し、皿部が平坦になる石器であると考えられるが、細かく割れて出土した。



第35図 縄文時代早期の出土石器 (5)



第36図 縄文時代早期の出土石器 (6)

第6表 縄文時代早期の石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	遺物名	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	注記番号	備 考
第31図	68	C-12	IV	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	1.24	1.41	0.47	0.49	4166	
	69	A-13	IV	石 鏃	西九州産黒曜石	1.43	1.12	0.35	0.40	2895	
	70	B-14	IV	石 鏃	玉 髓	1.58	1.33	0.43	0.66	2732	
	71	C-12	IV	石 鏃	玉 髓	1.74	1.48	0.33	0.55	4263	
	72	D-10	IV	石 鏃	西九州産黒曜石	1.60	1.09	0.37	0.55	4055	
	73	Z-13	IV	石 鏃	針尾産黒曜石	1.72	1.00	0.26	0.29	2872	
	74	C-15	IV	石 鏃	砂 岩	(2.31)	(2.18)	0.41	1.77	1794	
	75	F-5	IV	石 鏃	桑木津留黒曜石	(1.17)	(1.14)	0.30	0.29	353	
	76	B-14	IV	石 鏃	安 山 岩	2.19	1.65	0.60	1.66	2712	
	77	B-9	IV	石 鏃	砂 岩	1.98	1.46	0.45	0.91	4914	
	78	B-16	IV	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	(2.38)	(1.65)	0.61	1.91	3266	
	79	D-11	IV	石 鏃	鉄 石 英	(1.96)	(1.44)	0.36	0.60	4102	
	80	C-15	V	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	(1.90)	(1.50)	0.55	1.29	3504	
	81	D-6	IV	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	2.85	1.92	0.42	1.41	358	
	82	C-17	IV	石 鏃	安 山 岩	2.71	1.68	0.49	1.61	3281	
	83	C-9	IV	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	2.38	1.50	0.43	1.07	4046	
	84	A-16	IV	石 鏃	鉄 石 英	2.48	1.69	0.70	1.58	3313	
85	E-19	V	石 鏃	珪 質 頁 岩	(2.72)	2.10	0.42	1.20	1187		
第32図	86	D-10	IV	石 鏃	安 山 岩	1.99	1.44	0.30	0.42	4006	
	87	B-14	IV	石 鏃	安 山 岩	(1.92)	(1.44)	0.30	0.66	2093	
	88	A-12	IV	石 鏃	安 山 岩	(1.49)	(1.52)	0.30	0.75	3768	
	89	C-8	IV	スクレイパー	上牛鼻産黒曜石	4.05	3.42	0.86	9.52	309	
	90	C-8	IV	スクレイパー	玉 髓	3.14	2.43	1.08	8.42	304	
	91	Z-13	IV	スクレイパー	安 山 岩	6.48	4.69	2.10	56.19	2877	
	92	C-15	IV	スクレイパー	安 山 岩	5.94	2.91	0.78	16.77	3710	
第33図	93	D-9	IV	使用痕石器	日東産黒曜石	2.67	3.42	1.22	8.44	4348	微細剥離痕
	94	D-6	IV	使用痕石器	上牛鼻産黒曜石	2.30	1.74	0.39	1.14	365	微細剥離痕
	95	F-19	IV	石 斧	安 山 岩	8.08	3.48	1.48	45.00	1040	
	96	D-11	IV	石 斧	頁 岩	14.41	6.02	4.88	540.00	4108	
	97	F-8	IV	礫 器	安 山 岩	12.87	8.48	4.19	540.00	196	
	98	D-9	IV	礫 器	安 山 岩	9.80	7.41	4.82	390.00	4383	
	99	F-19	IV	礫 器	安 山 岩	16.20	10.22	3.21	690.00	1042	未製品
	100	E-7	IV	礫 器	安 山 岩	13.36	8.35	2.53	390.00	96	
第34図	101	E-7	IV	磨石・敲石	安 山 岩	4.67	3.55	2.79	50.00	182	
	102	A-11	IV	敲 石	安 山 岩	5.80	4.58	4.76	150.00	3872	
	103	A-14	IV	敲 石	安 山 岩	11.90	6.27	5.72	450.00	1331	
	104	D-10	IV	磨 石	安 山 岩	7.80	6.55	4.81	350.00	4010	
	105	B-9	IV	磨石・敲石	安 山 岩	11.57	9.63	5.17	790.00	4918	
第35図	106	B-10	IV	石 皿	安 山 岩	32.95	20.50	6.60	600.00	4083	
	107	E-8	IV	石 皿	安 山 岩	26.60	20.10	5.20	420.00	-	
	108	E-9	IV	石 皿	安 山 岩	35.60	26.60	11.30	1020.00	4838	
	109	C-15	IV	石 皿	安 山 岩	7.10	7.70	1.70	160.00	3505	
	110	D-7	IV	石 皿	安 山 岩	10.60	10.80	3.20	620.00	328	
	111	E-7	IV	石 皿	安 山 岩	8.80	9.70	5.40	700.00	178	
第36図	112	E-8	IV	石 皿	安 山 岩	42.70	30.40	10.05	1580.00	-	

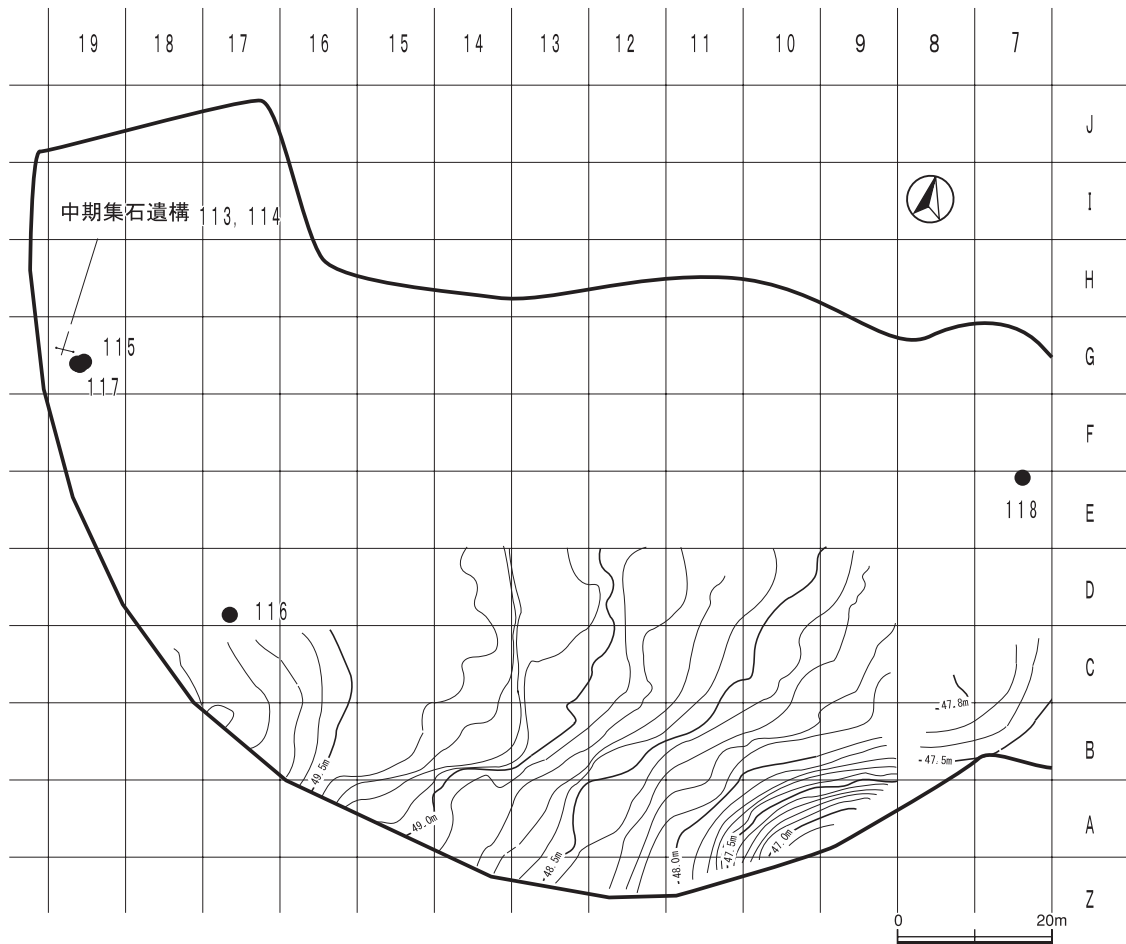
## 2 中期・後期の調査

中期は、F-19区のⅢa層で集石遺構が1基確認され、遺構内からⅧ類土器が2点出土した。縄文時代後期は4点出土し、図化した。

### (1) 遺構

#### 集石遺構（第38図）

集石遺構は120cm×100cmの範囲に礫が散在している。19個の礫で構成され、11個に赤化が見られた。構成礫の平均値は、最大長で6.8cm、厚さが3.5cm、重量は116.6cmであった。掘り込みは見られなかった。また第37図に見られるように、120cm×95cmの範囲からは、Ⅷ類土器が連なるよう出土した。



第37図 縄文時代中期・後期の遺構配置及び出土遺物分布



## (2) 遺構内遺物 VIII類土器 (第39図 113, 114)

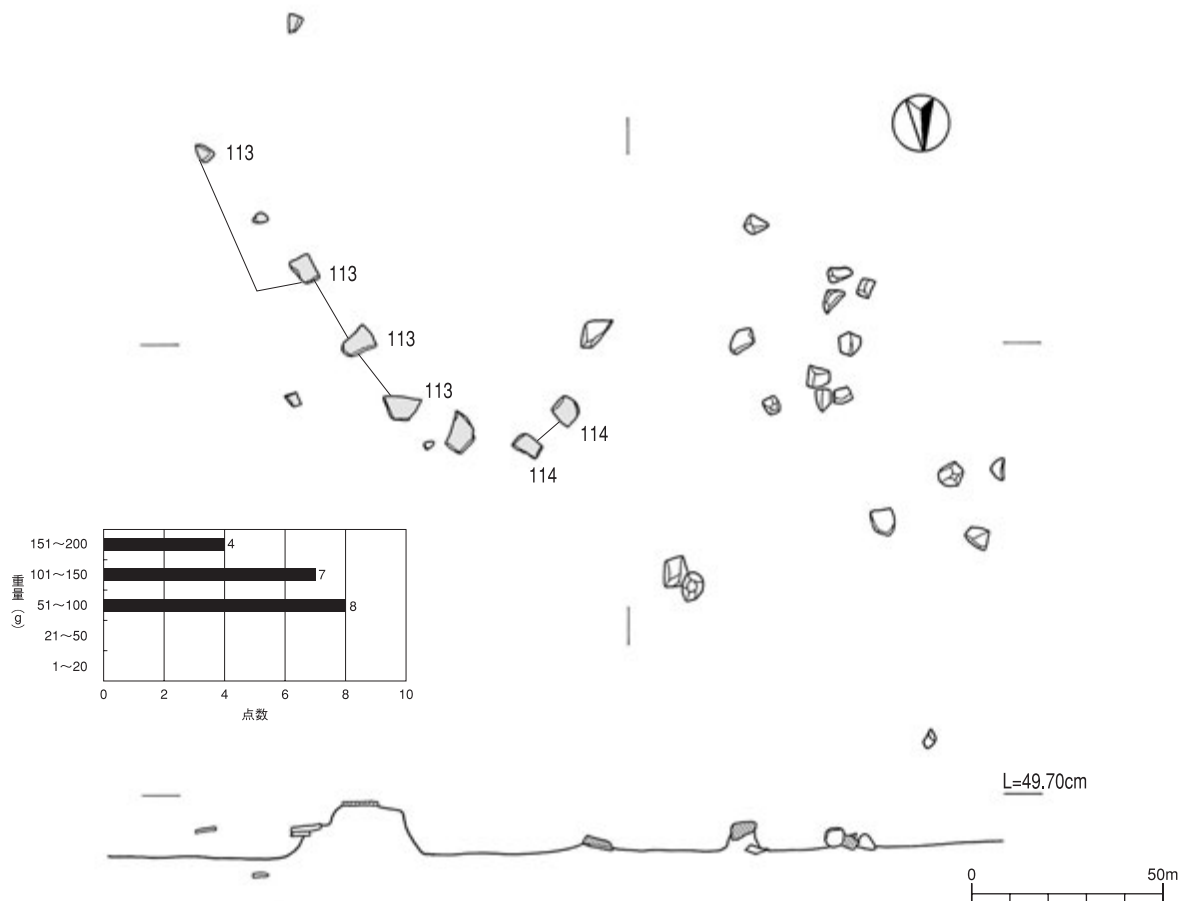
VIII類土器は深鉢形の土器で、口縁部は波状口縁を呈するものがある。外面は楕円形の指頭による押圧や沈線文が施されている。遺構内遺物として4点出土し、2点を図化した。113, 114は胴部片で、表裏ともにナデ調整である。色調は、表裏ともにぶい赤褐色であり、胎土から角閃石と滑石が確認された。口縁部は指圧文が見られ、口唇部には波状口縁を呈している。

## (3) 遺物

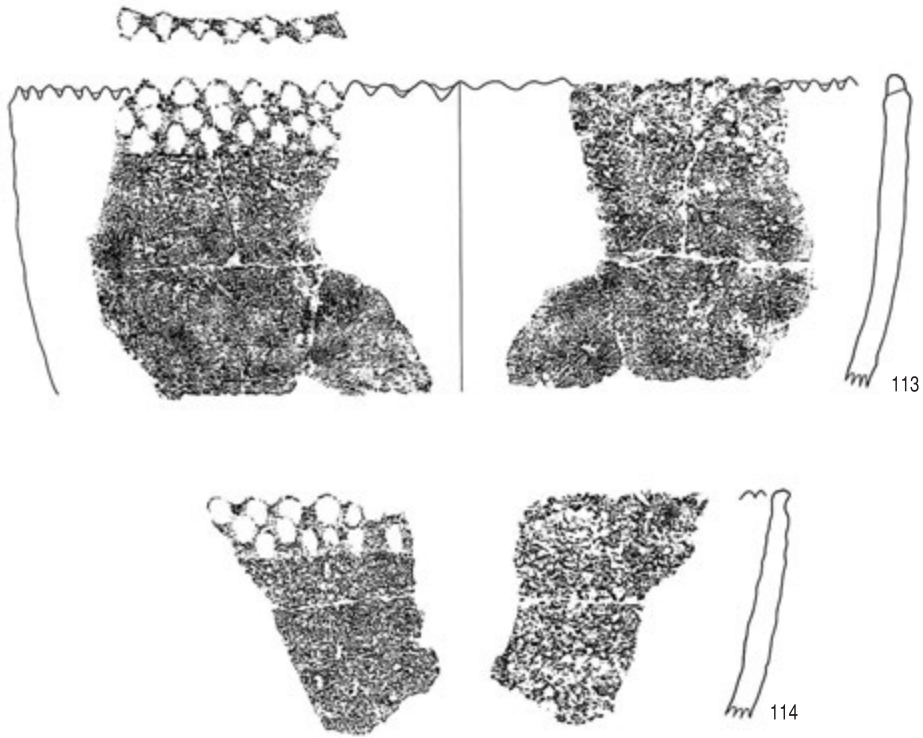
### 土器

#### IX類土器 (第40図 115~118)

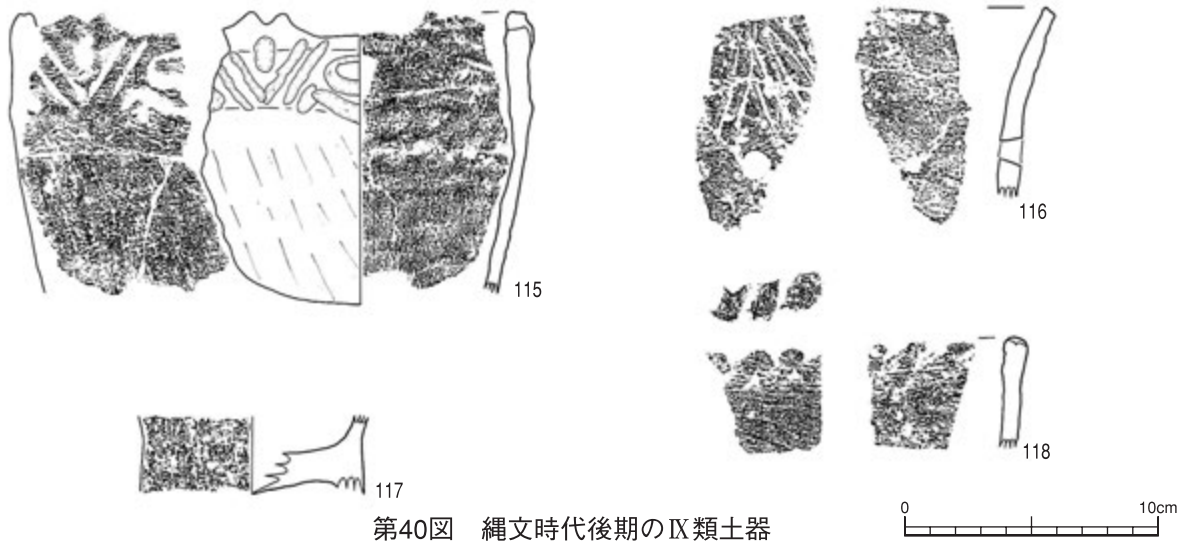
IX類土器は、口縁部分の外面に細い沈線文や指圧文等の文様が集約された深鉢形の土器である。115, 116, 118は、口縁部片である。115は文様が集約され外面に指圧文が施文され、沈線文が短い。口唇部は部分的に山形の突起を有し平坦である。外面調整はケズリである。116は、線刻が施され口唇部は平坦である。直径が約8mmの補修孔が確認された。118は、口唇部に練り状の波状口縁が見られた。



第38図 縄文時代中期の集石遺構



第39図 縄文時代中期の遺構内遺物Ⅷ類土器



第40図 縄文時代後期のⅨ類土器

第7表 縄文時代中期・後期の土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土				焼 成	調整		備 考		
								石英	長石	角閃石	その他		外面・底部	内面			
第 39 図	113	G-19	2号集石	Ⅷ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○	○	良		ナ	デ	滑石	
	114	G-19	2号集石		口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐					○	良	ナ	デ	ナ	デ
第 40 図	115	G-19	Ⅲa	Ⅸ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	沈	線	ナ	デ	
	116	D-17	Ⅲa		口縁部	橙	にぶい 橙	○	○	○		良	条	痕	ナ	デ	補修穴あり
	117	G-19	Ⅲa		底 部	橙	にぶい黄褐		○	○	○	良	ナ	デ	ナ	デ	火山ガラス(透明・黒褐色)
	118	E-7	Ⅲa		口縁部	にぶい 褐	にぶい黄橙		○	○	○	良	条	痕	ナ	デ	火山ガラス(黒褐色)

### 3 晩期の調査

晩期は、集石遺構が2基が検出され、Ⅲa層から深鉢形や浅鉢形の土器や、石鏃、スクレイパー、礫器、磨石、石皿等の石器が出土した。

#### (1) 遺構

##### 1号集石遺構（第42図）

1号集石遺構はB-9・10区のⅢa層で検出され、335cm×220cmの範囲に礫が散在している。44個の礫から構成され、ほぼ全ての礫に赤化が見られた。構成礫の平均値は、最大長で9.0cm、厚さが3.7cm、重量は、628.1gであった。掘り込みは見られなかった。

##### 2号集石遺構（第43図）

2号集石遺構はH、G-16区のⅢa層上面で検出され、130cm×90cmの範囲に広がり、上下の幅は10cmである。22個の礫で構成され、16個に赤化が見られた。構成礫の平均値は、最大長で8.0cm、厚さが4.0cm、重量が195.0gであった。

#### (2) 遺物

##### 1 土器

晩期の土器は、深鉢と浅鉢に形態を分類できる。概して深鉢は粗製、浅鉢は精製である。主にⅢa層から出土し、深鉢は24点中15点、浅鉢は20点中3点を図化した。また、組織痕土器も確認され、25点中4点を図化した。

##### ① 深鉢（第44図 119～123）

119～123は、深鉢の口縁部である。119～123は内外面ともナデ調整であり、口唇部は丸みを帯びている。120、121は内弯気味に外反するものである。123は波状口縁となり直線状に立ち上がっている。

124～133は、深鉢の胴部である。129、131の外表面は貝殻条痕で調整され、内表面は貝殻条痕後、ナデ調整が施されている。127、128、130は屈曲部の稜が明瞭である。

##### ② 浅鉢（第45図 134～136）

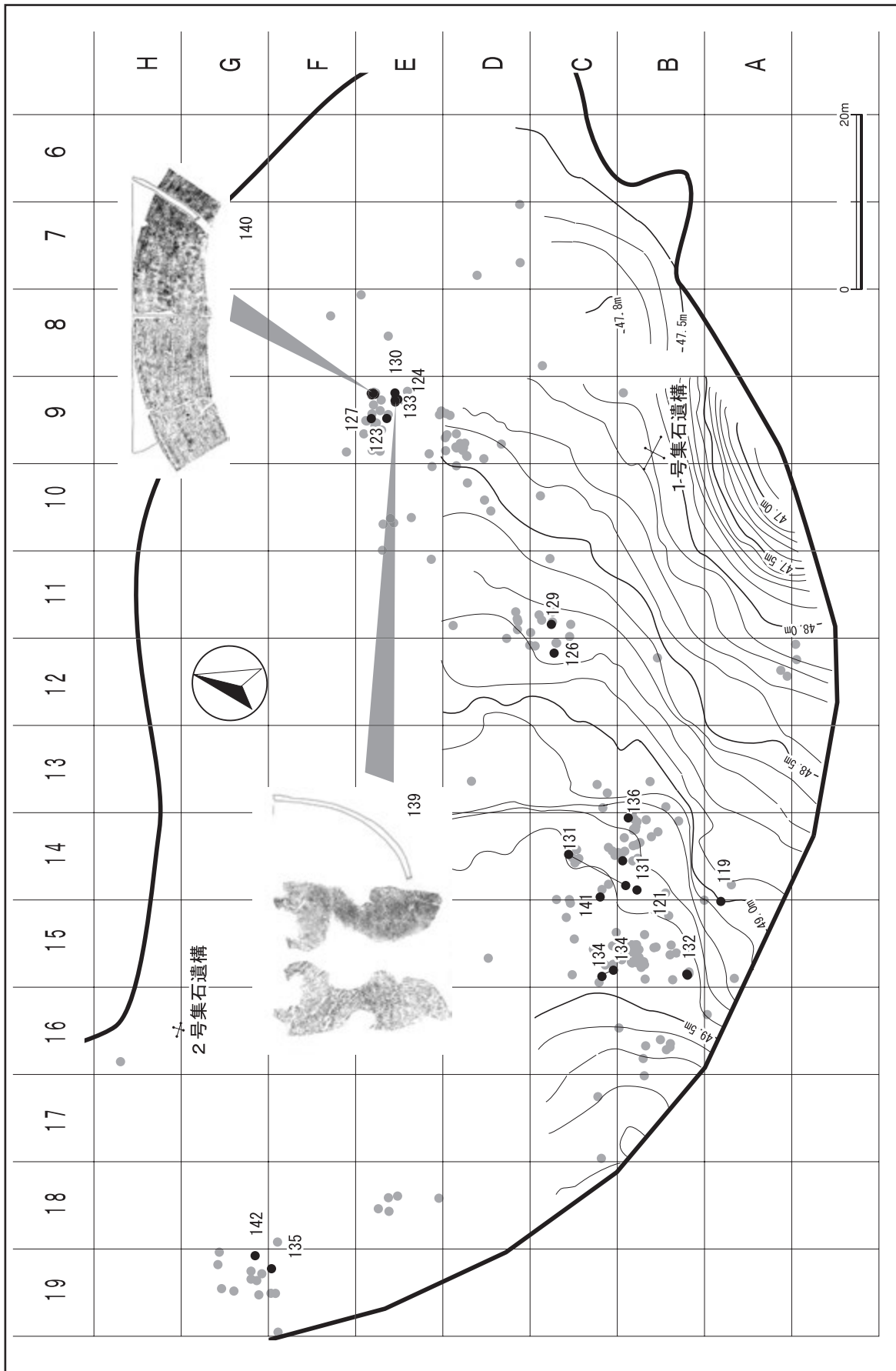
浅鉢は、ほとんどが内外面に丁寧なミガキを施す精製土器である。134～136は口縁部で、口唇部は玉縁状の口縁を呈し、135は外表面の口縁下部に沈線を施している。

##### ③ 組織痕土器（第45図 137～139、第46図 140）

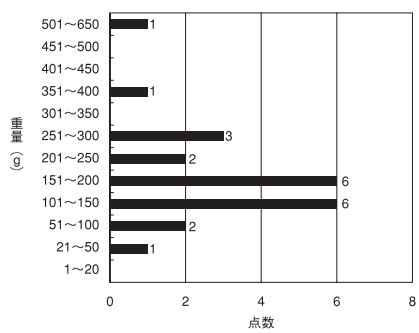
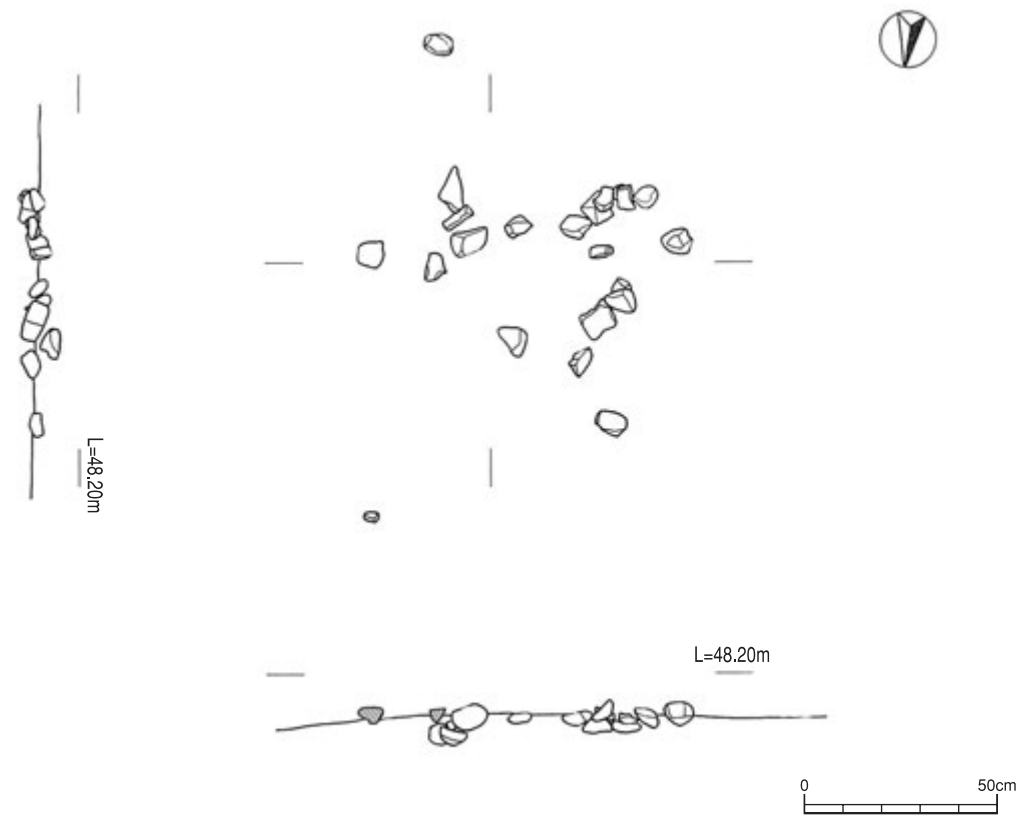
組織痕土器は、中華鍋形の器形を呈し、口縁部下位に組織の圧痕がみられる。137～140は口縁部である。137は、小破片で器形や大きさは不明であるが、外表面にハケメ調整がみられ、内表面はミガキが施されている。138～140は大型の組織痕土器である。138、139の外表面の組織痕は不明であるが、口縁部上部に貝殻条痕の調整が施され、内表面は部分的にミガキが施されている。また、胴部下位から口縁部にかけてやや垂直に外反する。140は口縁部から胴部まで接合できたものであり、口縁径が約45cmである。上位は貝殻条痕で調整され、内表面は条痕調整後、全体的にミガキが施されている。

##### ④ その他の土器（第46図 141～143）

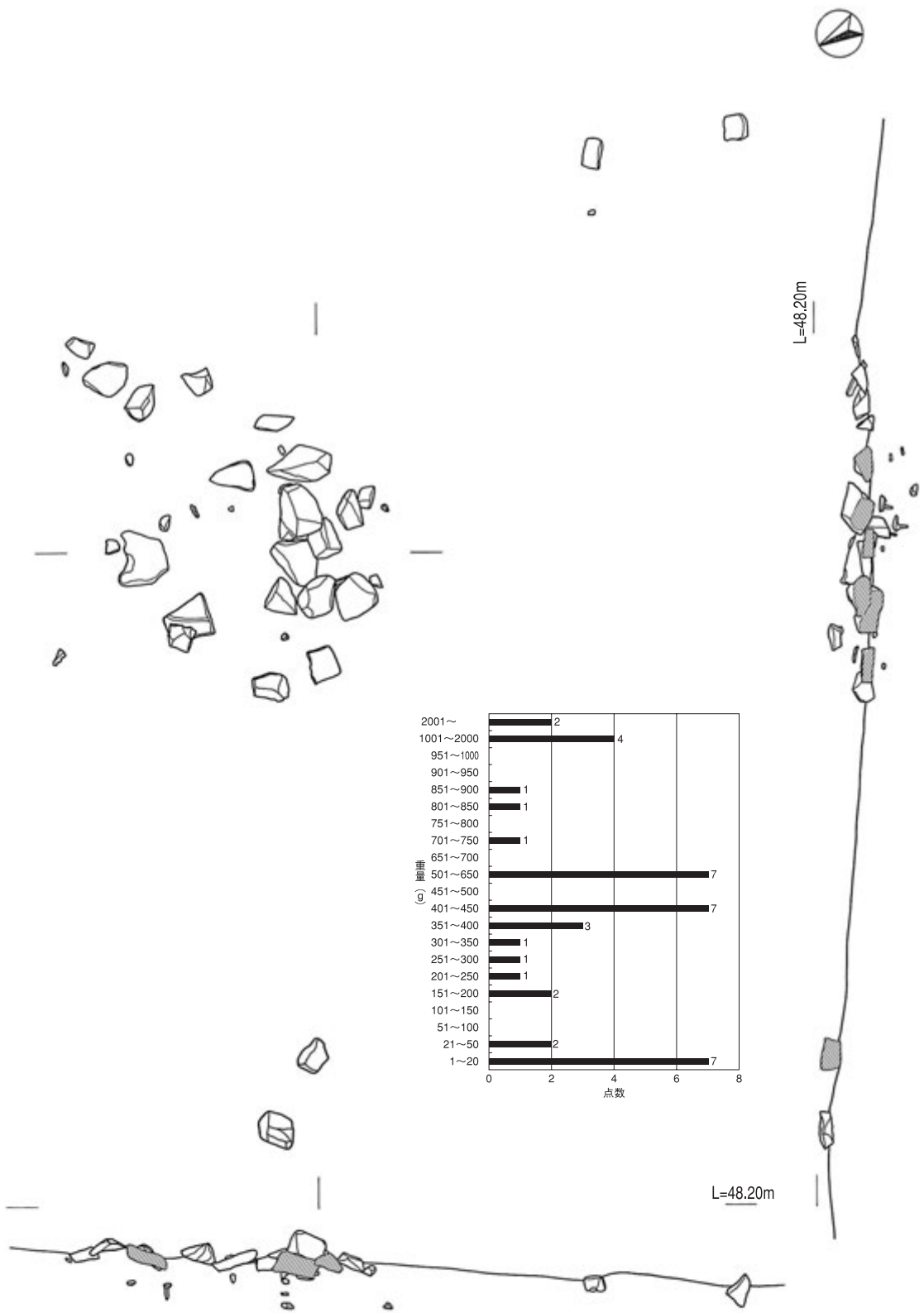
141は屈曲する明瞭な稜がみられる胴部片である。屈曲の上部にわずかではあるが突帯文が残っている。142、143は深鉢の底部と思われる。内外面ともナデ調整で施されている。



第41図 縄文時代晩期の遺構配置図及び土器出土分布

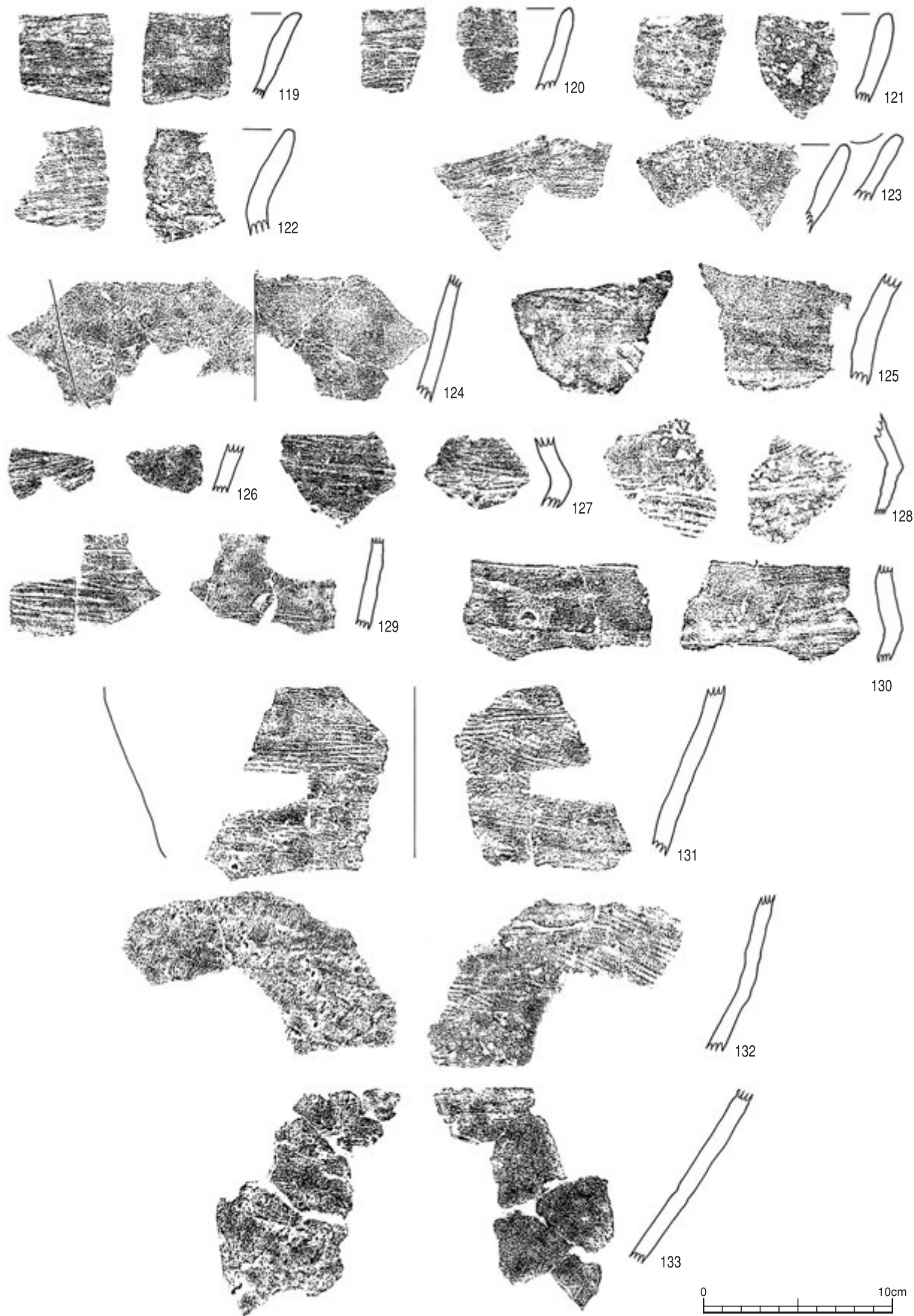


第42図 縄文時代晩期の1号集石遺構

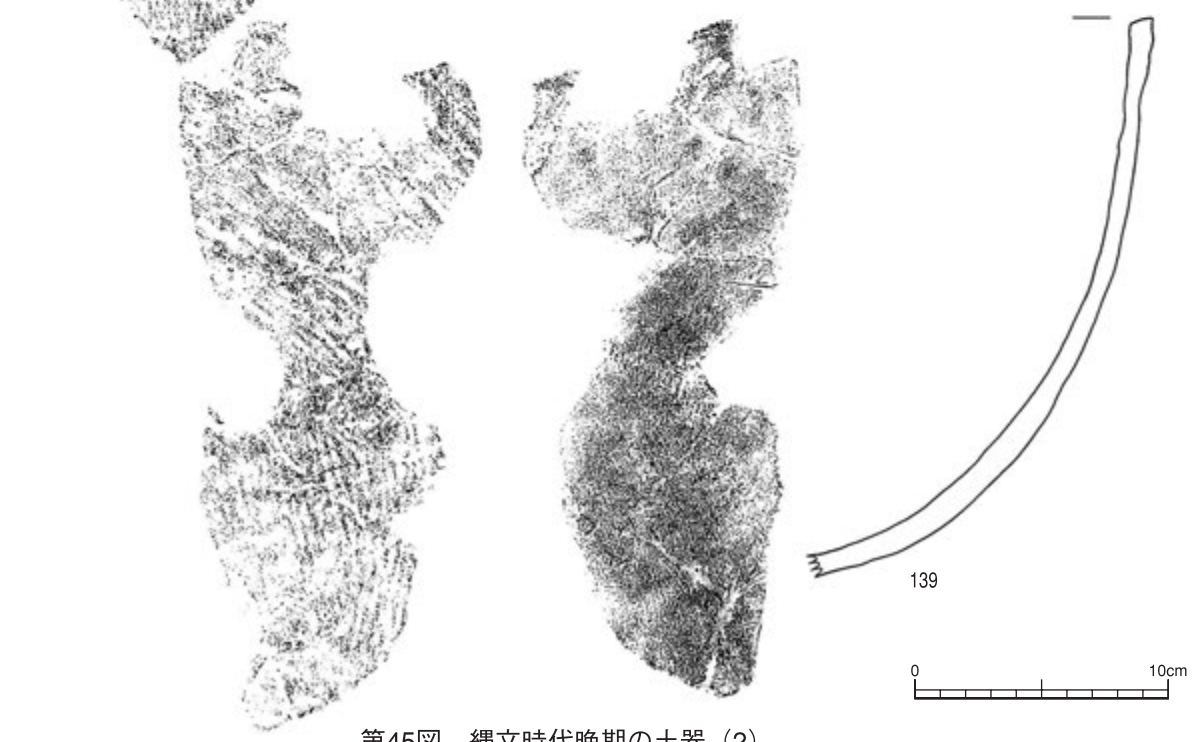
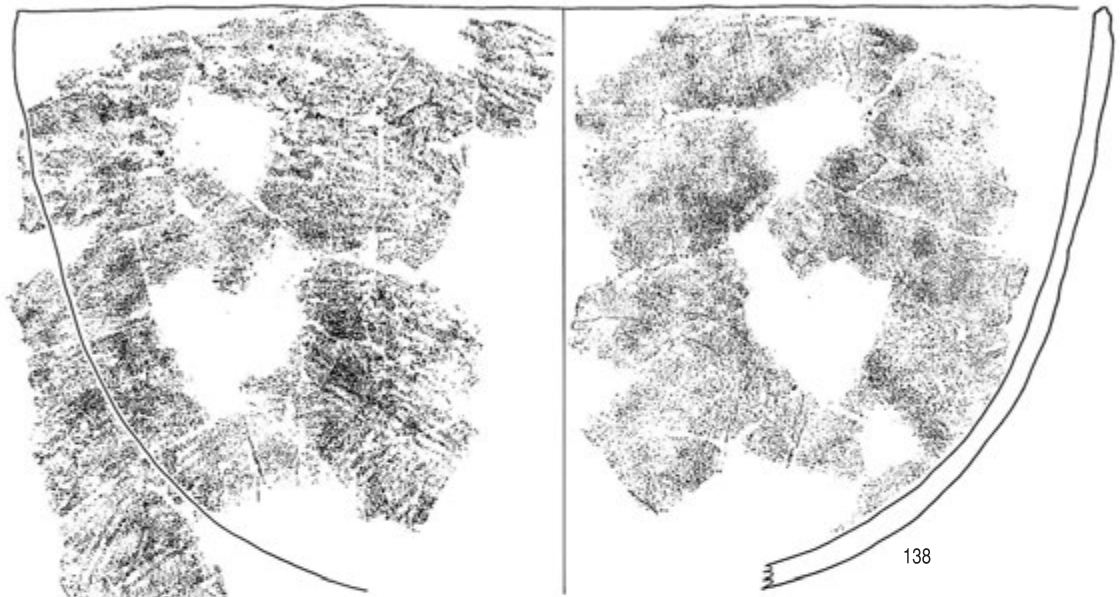
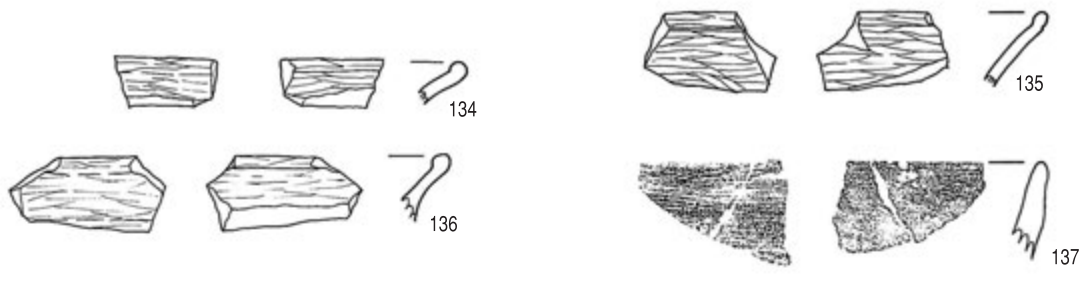


第43図 縄文時代晩期の2号集石遺構



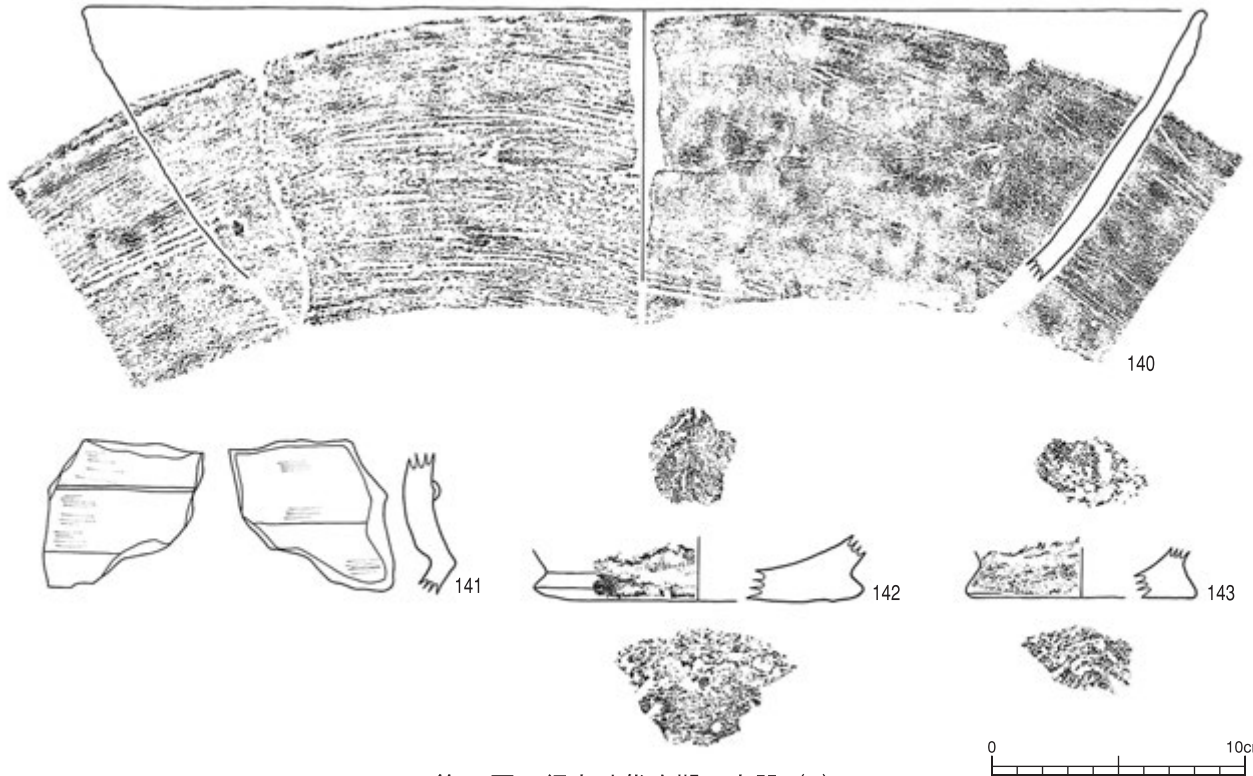


第44図 縄文時代晩期の土器 (1)



第45図 縄文時代晩期の土器 (2)





第46図 縄文時代晩期の土器 (3)

第8表 縄文時代晩期の土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	部位	色 外面	調 内面	胎土				焼 成	調整		備 考		
								石英	長石	角閃石	その他		外面・底部	内面			
第44 図	119	A-15	V	縄 文 時 代 晩 期 土 器	口縁部	にぶい 橙	にぶい 橙		○	○		良	ナ	デ	ナ	デ	
	120	E-9	一括		口縁部	灰 黄 褐	灰 黄 褐		○	○		良	ハ	ケ	ナ	デ	
	121	B-14	Ⅲa		口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	板	ナ	デ	板ナデ	
	122	表層	一括		口縁部	灰	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナ	デ	ナ	デ	
	123	E-9	Ⅲa		口縁部	黄 灰	暗 黄 灰	○	○			良	ミガキ・ナ	デ	ナ	デ	
	124	E-9	Ⅲa		胴 部	にぶ 黄 橙	にぶ 黄 橙	○	○	○		良	ミ	ガ	キ	ナ	デ
	125	B-13	一括		胴 部	にぶい黄橙	浅 黄	○	○	○		良	ハ	ケ	・	ナ	デ
	126	C-12	Ⅳ		胴 部	黒 褐	灰	○	○	○		良	ミ	ガ	キ	ナ	デ
	127	E-9	Ⅲa		胴 部	にぶい黄橙	にぶい 黄	○	○			良	ミ	ガ	キ	ミガキ・板ナデ	
	128	F-8	Ⅱ		肩 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条	痕	ナ	デ	
	129	C-11	Ⅲa		胴 部	灰 黄	灰	○	○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナ			
	130	E-9	Ⅲa		胴 部	にぶい黄橙	黄 灰	○	○	○		良	ハ	ケ	・	ナ	デ
	131	C-14	Ⅲa		胴 部	にぶい 黄	黄 灰		○	○		良	貝殻条痕文	貝殻条痕文・ナ			
	132	B-15	Ⅲa		胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	条痕・ナ	デ	条 痕		
	133	E-9	Ⅲa		胴 部	灰 褐	にぶい 褐		○	○		良	ケ	ズ	リ	ナ	デ
第45 図	134	C-15	Ⅲa	口縁部	にぶい黄橙	オリーブ黒	○	○	○		良	ミ	ガ	キ	ミガキ		
	135	F-19	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ミ	ガ	キ	ミガキ		
	136	B-14	Ⅲa	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ミ	ガ	キ	ミガキ		
	137	C-15	Ⅲa	口縁部	にぶい黄橙	オリーブ黒	○	○	○		良	条	痕	ミ	ガ	キ	
	138	E-9	-	口縁部	にぶい 橙	にぶい 橙	○	○	○		良	ハ	ケ	・	ナ	デ	
第46 図	139	E-9	Ⅲa	口縁部	にぶい 橙	にぶい 橙	○	○	○		良	ナ	デ	ナ	デ		
	140	E-9	-	口縁部	にぶい黄橙	明 黄 褐	○	○	○		良	条痕・ナ	デ	ナ	デ		
	141	C-14	Ⅲa	胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	ケ	ズ	リ	ナ	デ	
	142	G-19	Ⅲa	底 部	にぶい黄褐	黒	○	○	○		良	ナ	デ	ナ	デ		
	143	BC-16・17	Ⅱ	底 部	にぶい黄橙	明 灰 黄	○	○	○		良	ナ	デ	ナ	デ		

## 2 石器

縄文時代後期の石器は、主にⅢa層で、石鏃、石匙、スクレイパー、楔形石器、二次加工剥片石器、使用痕剥片、石斧、礫器、磨石、敲石、石皿が出土している。

### 石鏃（第48図 144～160, 第49図 161～167）

石鏃は主にA～F-11～19区に散布しており（図47）、24点出土し、すべて図化した。素材は黒曜石（11点）、安山岩（5点）、玉髓（2点）、砂岩（2点）、鉄石英（1点）、頁岩（1点）である。更に黒曜石の原産地を細分すると上牛鼻産（4点）、針尾産を含む西北九州産（5点）、三船産（2点）である。

石鏃の分類は、本遺跡の報告書における統一的な分類に従うことにする。（石鏃分類表P41 参照）

#### A-a-a（第48図 144～148）

長幅比が1～1.5で、形状はほぼ正三角形である。基部はほぼ平坦である。

#### A-a-b（第48図 149～153）

長幅比が1～1.5で、形状がほぼ正三角形である。基部は浅い抉りである。

#### A-a-c（第48図 154～158）

長幅比が1～1.5で、形状がほぼ正三角形である。基部は深い抉りである。158は基部が欠損しているが、残された形状からA-a-cに分類できる。

#### A-a-d（第48図 159～160）

長幅比が1～1.5で、形状がほぼ正三角形である。基部はU字状を呈する。

#### A-b-c（第49図 161, 162）

長幅比が1.5～2で、形状がほぼ二等辺三角形である。基部は深い抉りである。

#### A-c-c（第49図 163）

長幅比が2以上で、形状がほぼ二等辺三角形である。基部は深い抉りである。

#### B-a-d（第49図 164～166）

形状がほぼ五角形で施されている。長幅比が1～1.5で、基部はU字状を呈する。

#### C-a-b（第49図 167）

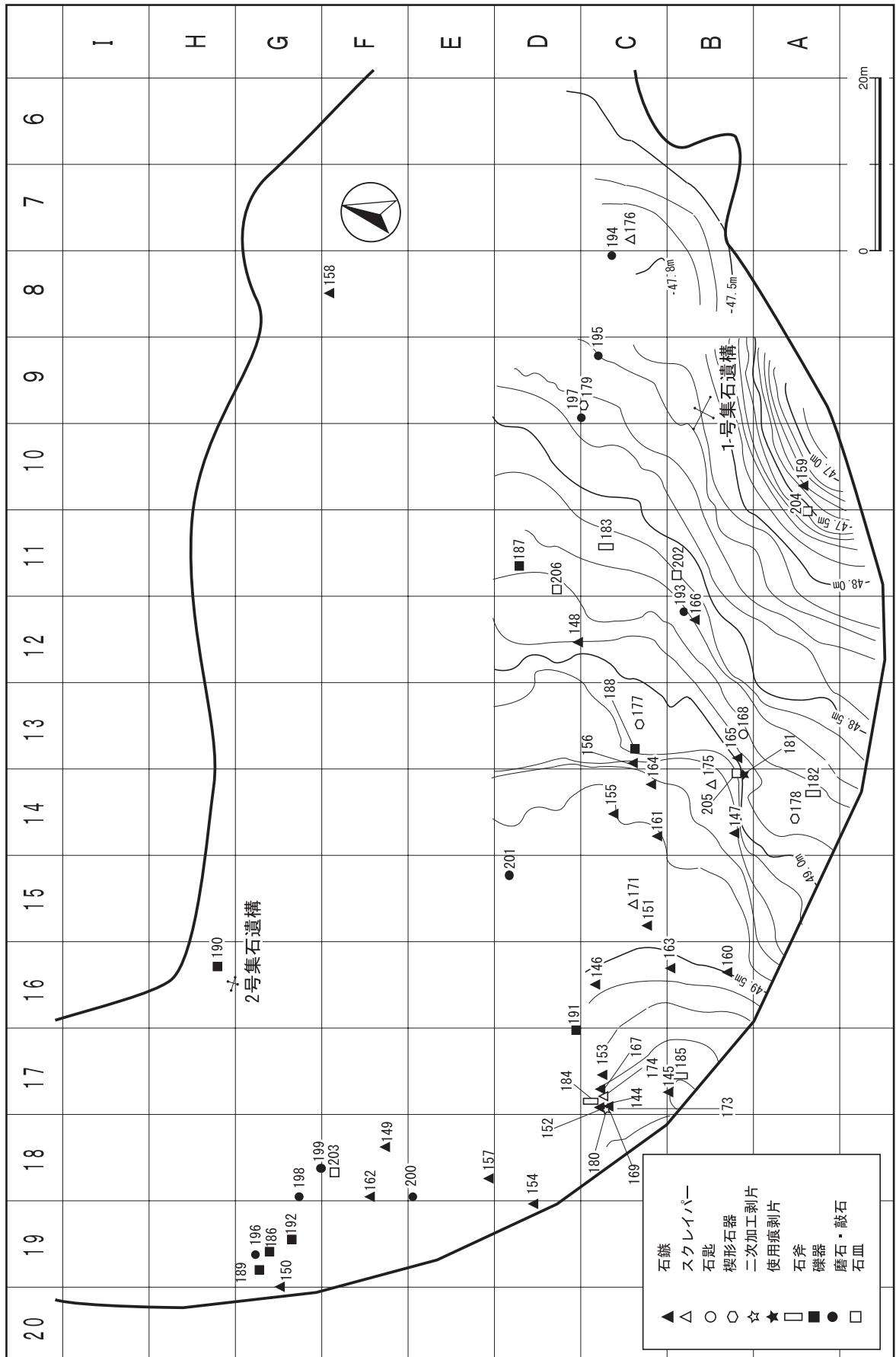
先端部が丸みをおびたものである。長幅比が1～1.5であり、基部は浅い抉りである。

### 石匙（第50図 168）

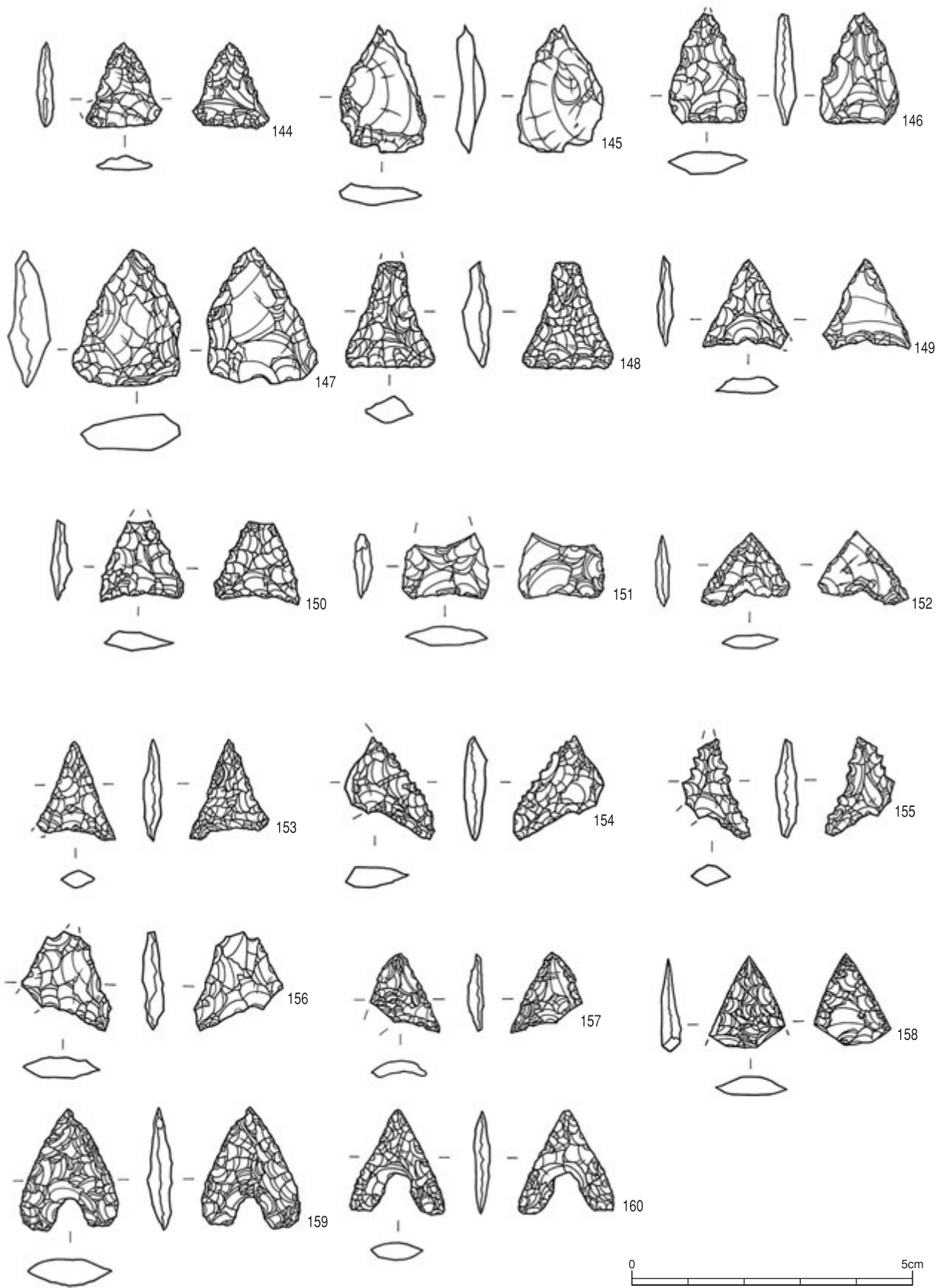
168は頁岩の縦長剥片を素材とするもので、両側縁に二次加工を施し刃部を形成している。つまみ部分は粗い剥離により抉りを作り出している。

### スクレイパー（第50図 169～174, 第51図 175～176）

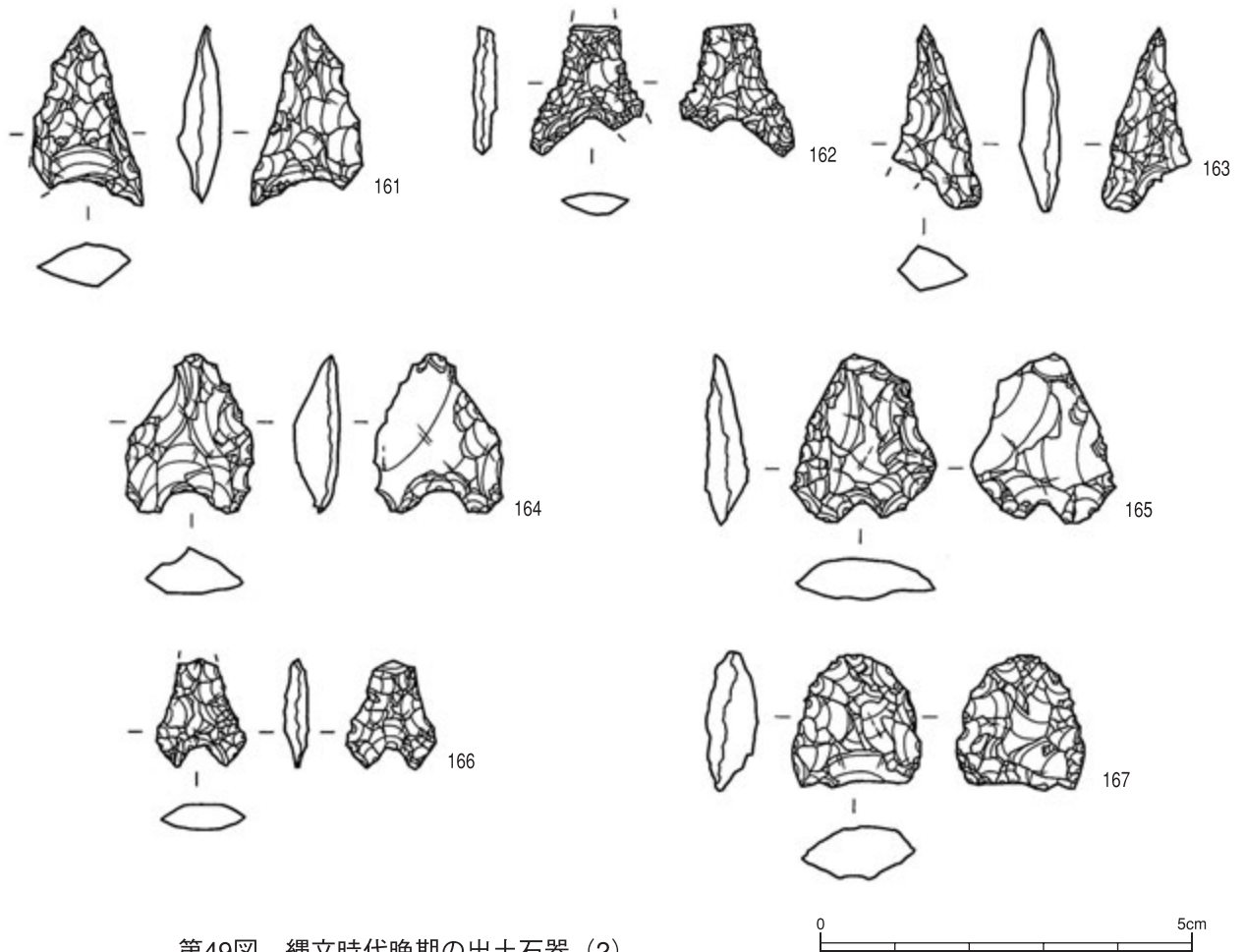
169, 173は上牛鼻産黒曜石, 170, 174は西北九州産黒曜石, 171は頁岩, 172はサヌカイト, 174は碧玉, 176は鉄石英を素材とするもので、主要剥離面から二次加工を施し、刃部を形成している。169, 170, 173は右側縁に細かな剥離が施されている。171は左側縁から下部にかけて二次加工が施され丸く刃部が作り出されている。172は横長剥片を使用し、下部に両面から二次加工が丁寧に行われ鋭い刃部を形成している。176は、剥片の末端に急角度の二次加工が施されている。



第47図 縄文時代晩期の石器出土分布



第48図 縄文時代晩期の出土石器（1）



第49図 縄文時代晩期の出土石器 (2)

#### 楔形石器 (第51図 177~179)

177は安山岩, 178は水晶, 179は上牛鼻産黒曜石を素材とするもので, 縦長の素材を使用したものである。177, 178は表裏面ともに上下からの剥離面がみられ, 潰れ痕も認められる。

#### 二次加工のある剥片 (第51図 180)

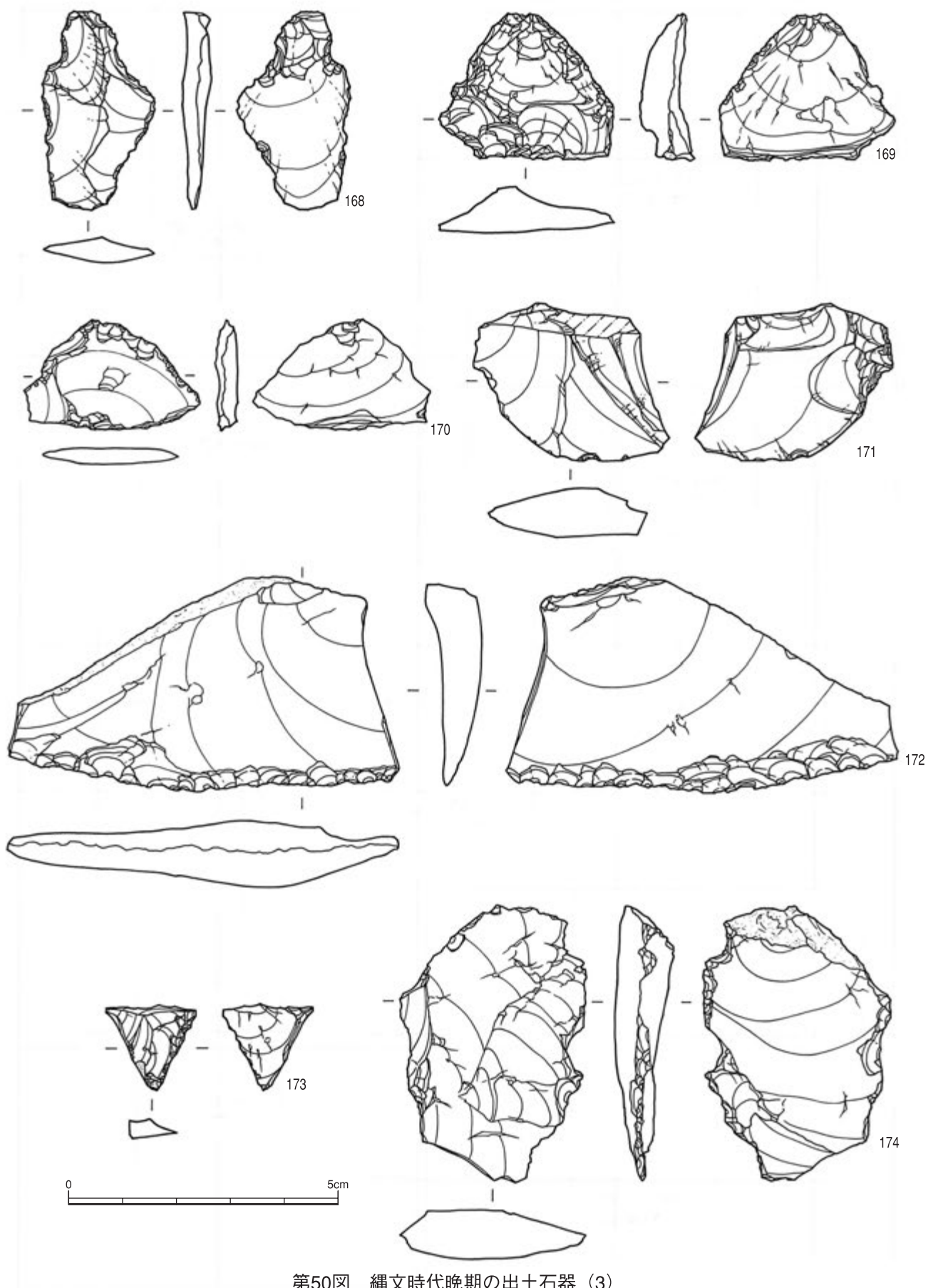
180は上牛鼻産安山岩を使用し, 風化面の多い剥片である。表面にノッチ状の加工を施されている。

#### 使用痕剥片 (第51図 181)

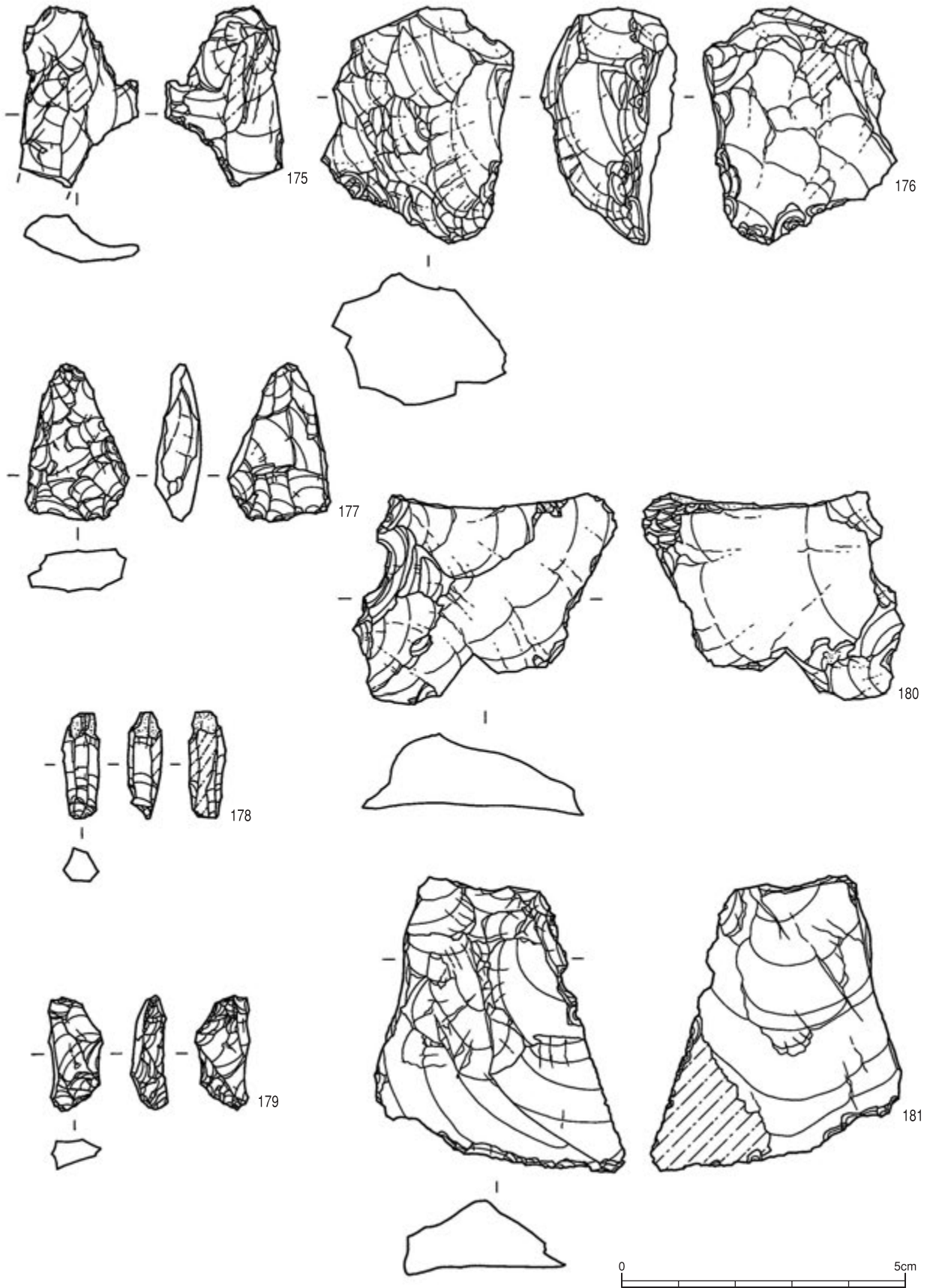
181はチャートを使用し, 右側縁と下部に微細剥離がみられる。また, 鋭い剥片の先端部に使用痕が確認できる。

#### 石斧 (第52図 182~185)

使用されている素材は182, 183は頁岩, 184は砂岩, 185は蛇紋岩である。183~185は磨製石斧であり, 183, 184は裏面より器形調整のための剥離を加えており, 表面に研磨がみられる。185は全体的に研磨が施されているが, 基部のみであり刃部は折損している。182は局部磨製石斧であり, 丁寧な敲打による整形をしたあと, 部分的刃部周辺に研磨を施している。



第50図 縄文時代晩期の出土石器 (3)



第51図 縄文時代晩期の出土石器 (4)



第52図 縄文時代晩期の出土石器 (5)

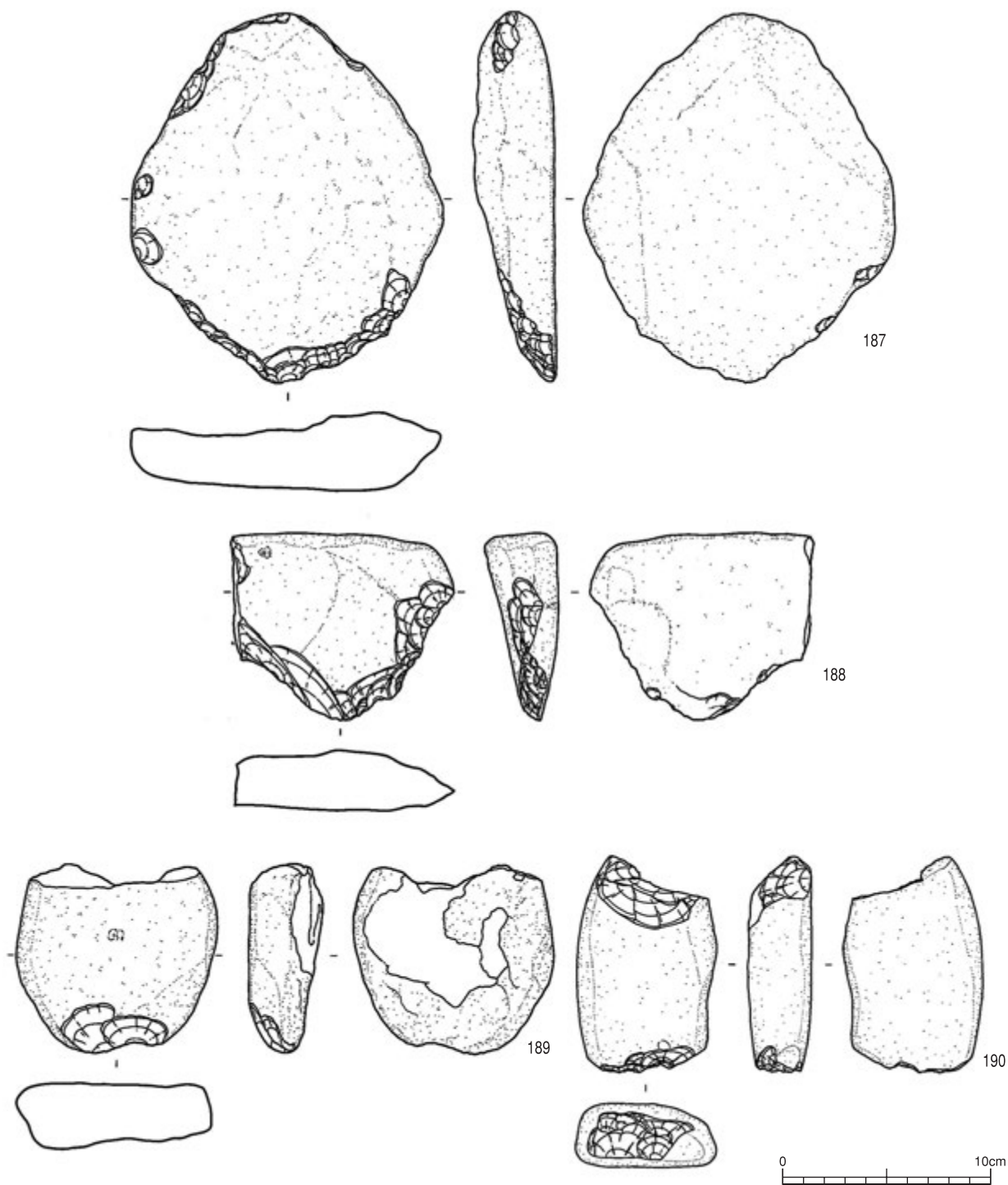
礫器 (第52図 186, 第53図 187~190, 第54図 191~192)

礫器は7点出土し、すべて両面に自然面を残し、素材は安山岩が使用されている。186~190は表面の下部に剥離を施し、刃部を形成している。187, 188は表面の両側縁から丁寧に剥離を施している。190の刃部は欠損されたものである。191, 192は両面から剥離を施し、191は急角度の刃部を形成している。

磨石・敲石 (第54図 193~195, 第55図 196~201)

193~201は磨石もしくは敲石であり、使用されている素材は安山岩である。193は扁平な亜円礫を、194, 195は楕円形の礫を使用したものである。193~195は両面に磨面があり、194, 195には側面に敲打痕が認められている。196~199は側面に敲打痕と磨面が確認された。200, 201は方形の礫であり、磨面が平坦面を形成するまで使用されている。

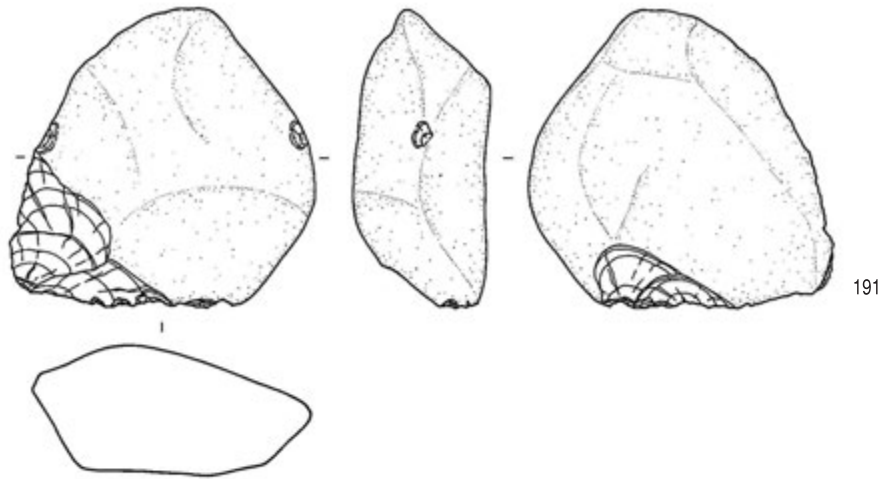




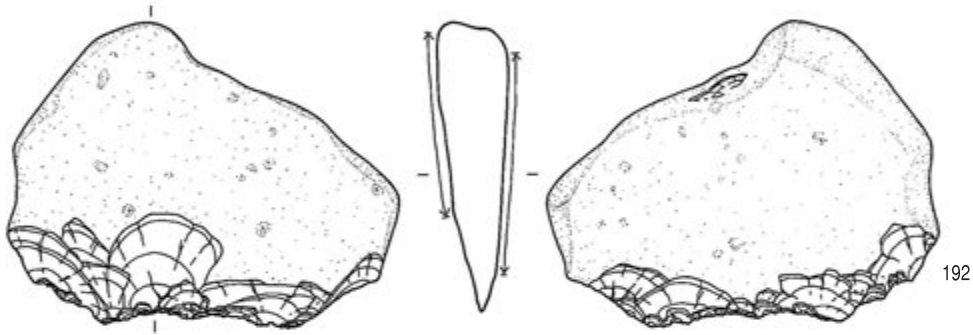
第53図 縄文時代晩期の出土石器 (6)

石皿 (第56図 202~205, 第57図 206)

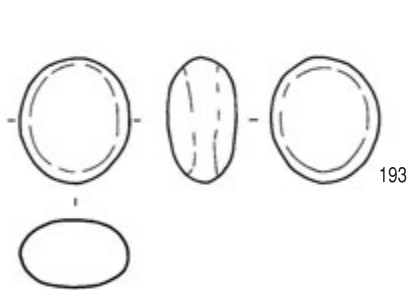
202~206は石皿であり、素材は安山岩である。大型の礫を使用し、皿部がなめらかな平坦になっている。204, 205は細かく割れて出土した。202, 203は裏面も作業面として使用しなめらかな面になっている。



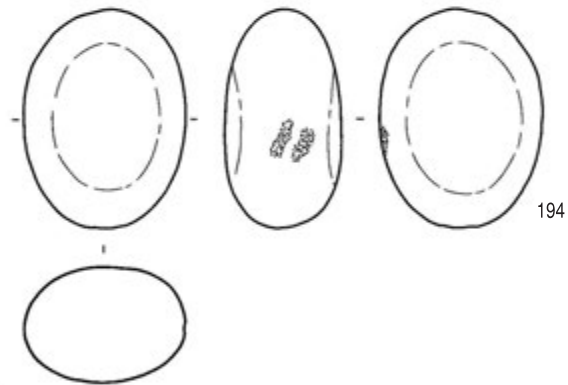
191



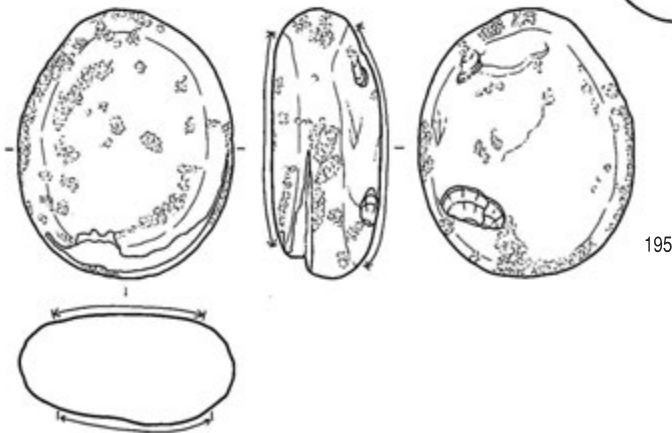
192



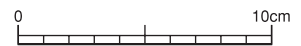
193



194



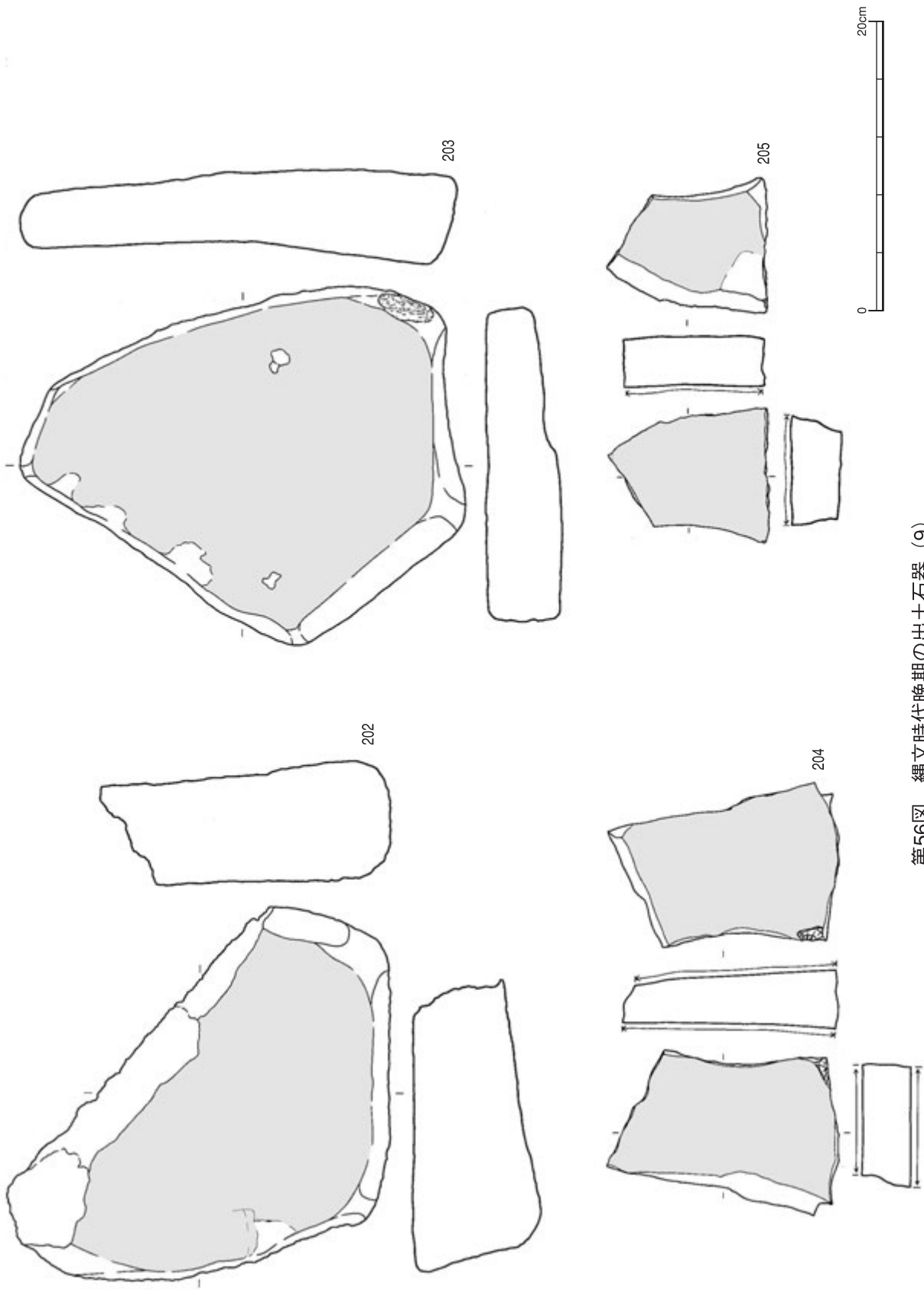
195



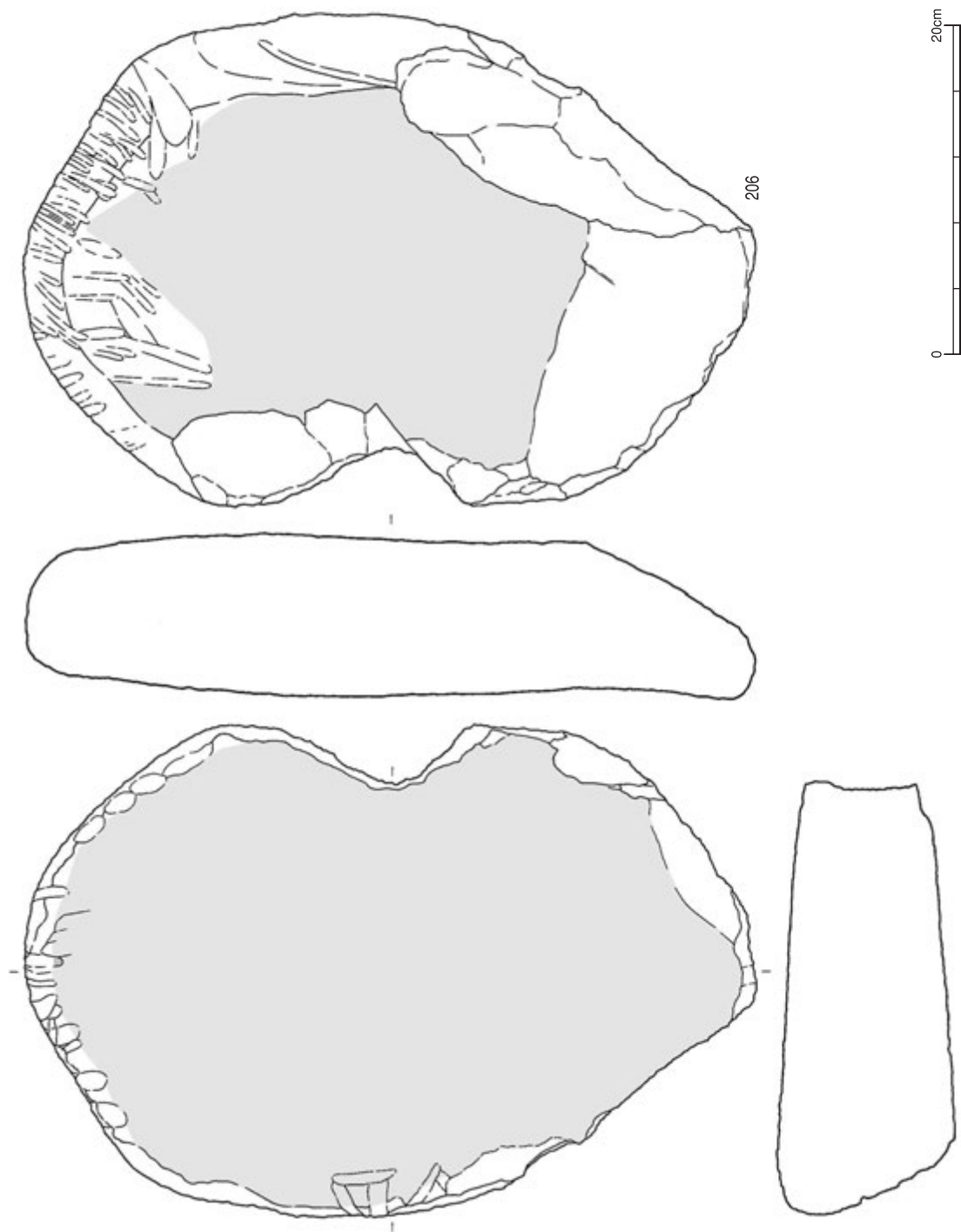
第54図 縄文時代晩期の出土石器 (7)



第55図 縄文時代晩期の出土石器 (8)



第56図 縄文時代晩期の出土石器 (9)



第57図 縄文時代晩期の出土石器 (10)

第9表 縄文時代晩期の石器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	遺物名	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	注記番号	備 考
第 48 図	144	C-17	Ⅲa	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	1.50	(1.32)	0.27	0.38	3060	
	145	B-17	Ⅲa	石 鏃	三船産黒曜石	2.23	1.50	0.45	1.28	3121	
	146	C-16	Ⅲa	石 鏃	安 山 岩	(1.92)	1.38	0.42	0.82	3191	
	147	B-14	Ⅲa	石 鏃	玉 髓	2.35	1.88	0.70	2.72	2369	
	148	D-12	Ⅲa	石 鏃	チャート	(1.90)	1.62	0.53	0.88	3551	
	149	F-18	Ⅲa	石 鏃	砂 岩	(1.53)	(1.52)	0.28	0.42	1034	
	150	G-19	Ⅲa	石 鏃	鉄 石 英	(1.39)	1.44	0.32	0.51	1139	
	151	C-15	Ⅲa	石 鏃	西九州黒曜石	(1.18)	1.52	0.37	0.53	1391	

第10表 縄文時代晩期の石器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	遺物名	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	注記番号	備 考
第48 図	152	C-17	Ⅲa	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	1.32	1.59	1.28	0.29	3260	
	153	C-17	Ⅲa	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	1.83	(1.42)	1.33	0.45	3090	
	154	D-19	Ⅲa	石 鏃	上牛鼻産黒曜石	(1.76)	(1.59)	0.39	0.64	1124	
	155	C-14	Ⅲa	石 鏃	砂 岩	(1.71)	(1.17)	0.38	0.39	1831	
	156	C-13	Ⅲa	石 鏃	安山岩	(1.68)	(1.53)	0.36	0.72	1982	
	157	E-18	Ⅲa	石 鏃	三船産黒曜石	1.41	(1.27)	0.32	0.28	1118	
	158	F-8	Ⅲa	石 鏃	頁 岩	(1.61)	(1.33)	0.34	0.56	72	
	159	A-10	Ⅲa	石 鏃	西九州産黒曜石	2.13	1.78	0.48	1.15	4967	
	160	B-16	Ⅲa	石 鏃	針尾産黒曜石	1.85	1.69	0.32	0.53	2958	
第49 図	161	C-14	Ⅲa	石 鏃	安山岩	(2.43)	(1.45)	0.58	1.18	1825	
	162	F-18	Ⅲa	石 鏃	西九州黒曜石	(1.73)	(1.48)	0.29	0.55	1024	
	163	B-16	Ⅲa	石 鏃	上牛鼻産安山岩	2.49	(1.21)	0.61	0.86	2944	
	164	C-14	Ⅲa	石 鏃	上牛鼻産安山岩	(2.08)	(1.70)	0.58	1.72	1849	
	165	B-13	Ⅲa	石 鏃	安山岩	2.30	1.96	0.56	2.17	2490	
	166	B-12	Ⅲa	石 鏃	玉 髓	(1.46)	1.20	0.34	0.47	1286	
	167	C-17	Ⅲa	石 鏃	針尾産黒曜石	1.88	1.74	0.69	2.40	3088	
第50 図	168	B-13	Ⅲa	石 匙	頁 岩	3.58	2.07	0.50	2.79	1306	
	169	C-17	Ⅲa	スクレイパー	上牛鼻産安山岩	2.66	3.20	0.83	5.91	3056	
	170	D-12	Ⅲa	スクレイパー	西九州黒曜石	2.05	2.28	0.41	2.26	3548	
	171	C-15	Ⅲa	スクレイパー	頁 岩	2.83	3.58	0.92	10.49	1448	
	172	13T	Ⅲ	スクレイパー	サヌカイト	3.68	3.68	1.23	27.42	1010	
	173	C-17	Ⅲa	スクレイパー	上牛鼻産安山岩	1.53	1.65	0.38	0.82	3046	
	174	C-17	Ⅲa	スクレイパー	西九州黒曜石	5.02	3.39	1.03	15.25	3026	
第51 図	175	C-16	Ⅱ	スクレイパー	碧 玉	3.15	2.03	0.80	3.78	2939	
	176	C-7	Ⅱ	スクレイパー	鉄石英	4.14	3.45	2.34	26.83	35	
	177	C-13	Ⅲa	楔形石器	安山岩	2.75	1.77	0.74	3.85	2478	
	178	A-14	Ⅲa	楔形石器	水 晶	1.88	0.63	0.59	0.84	2839	
	179	C-9	Ⅲa	楔形石器	上牛鼻産安山岩	1.98	0.96	0.62	1.11	4353	
	180	C-17	Ⅲa	二次加工剥片	上牛鼻産安山岩	3.64	4.65	1.45	19.50	3059	
	181	B-14	Ⅲa	使用痕石器	チャート	5.21	4.35	1.31	19.69	1307	
第52 図	182	A-14	Ⅲa	石 斧	頁 岩	13.04	5.64	2.02	210.00	1336	
	183	C-11	Ⅲa	石 斧	頁 岩	8.66	7.50	2.26	200.00	1263	
	184	C-17	Ⅲa	石 斧	砂 岩	11.48	4.55	1.59	110.00	3259	
	185	B-17	Ⅲa	石 斧	蛇紋岩	(4.56)	(4.16)	(2.13)	50.00	3132	
	186	G-19	Ⅲa	礫 器	安山岩	17.00	12.30	5.54	1170.00	1157	
第53 図	187	D-11	Ⅲb	礫 器	安山岩	17.90	15.00	3.95	1130.00	1210	
	188	C-13	Ⅲa	礫 器	安山岩	9.00	10.72	3.53	390.00	2479	
	189	G-19	Ⅲ	礫 器	安山岩	9.12	9.70	3.59	420.00	1196	
	190	H-16	Ⅲa	礫 器	安山岩	10.48	6.81	3.09	330.00	4845	
第54 図	191	D-17	Ⅲa	礫 器	安山岩	11.66	12.01	5.44	800.00	3286	
	192	G-19	Ⅲa	礫 器	安山岩	12.00	15.40	2.77	570.00	1076	
	193	B-12	Ⅲa	磨石・敲石	安山岩	4.95	4.26	2.71	80.00	1283	
	194	C-8	Ⅲa	磨 石	安山岩	8.56	6.34	4.57	360.00	18	
	195	C-9	Ⅲa	磨 石	安山岩	10.64	8.46	4.25	530.00	4045	
第55 図	196	G-19	Ⅲ	磨 石	安山岩	8.89	9.17	5.86	680.00	1197	
	197	C-9	Ⅲa	磨 石	安山岩	6.05	5.19	4.78	190.00	4037	
	198	G-18	Ⅲa	磨 石	安山岩	11.52	8.29	5.40	590.00	1104	
	199	G-18	Ⅲa	磨 石	安山岩	6.32	6.37	4.40	230.00	1092	
	200	E-18	Ⅲa	磨 石	安山岩	8.90	8.26	6.22	530.00	1022	
	201	D-15	Ⅲa	磨 石	安山岩	11.12	9.52	4.62	700.00	1790	
第56 図	202	B-11	Ⅲa	石 皿	安山岩	26.60	25.90	8.60	7800.00	3874	
	203	F-18	Ⅲa	石 皿	安山岩	30.80	24.80	6.50	6400.00	1132	
	204	A-11	Ⅲa	石 皿	安山岩	16.00	11.40	4.05	570.00	3950	
	205	B-14	Ⅲa	石 皿	安山岩	11.10	9.40	3.50	1070.00	2516	
第57 図	206	D-11	Ⅲa	石 皿	安山岩	44.50	30.10	10.80	19600.00	4929	

## 第5節 古代～中世の調査

Ⅲa層上面で、掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡4棟、落とし穴3基、土坑3基、焼土域1か所を検出した（第58図参照）。遺物は、遺構の集中するC～E-6～13区の範囲で出土した。土師器や須恵器が主であるが、黒色土器や中国産の磁器も出土している。

### (1) 遺構

#### ① 掘立柱建物跡（第59～63図）

古代から中世のものと思われるものが5棟検出された。この内4棟の主軸方向がほぼ東西であるのに対して、2号掘立柱建物跡のみやや南北に設定されている。また、この遺構のみは南面に庇を持つものであった。2間×3間の規模のものが3棟、1間×3間が1棟、2間×2間が1棟である。

##### 1号掘立柱建物跡（第59図）

本遺構はC・D-7・8区で検出された。2間×3間の広さであり、主軸方向はほぼ東西である。D-7区に主軸の異なる2号掘立柱建物跡が確認できる。梁間柱間は平均で3.19m、桁行間は4.63mである。柱穴は平均で長径が31.20cm、短径が27.10cm、深さは42.29cmである。掘り方は、楕円形のものから円形までまばらである。また、同区には、1号竪穴建物跡が隣接している。主軸方向も同じであることから、同時期のものであると考えられる。遺物は確認されなかった。

##### 2号掘立柱建物跡（第60図）

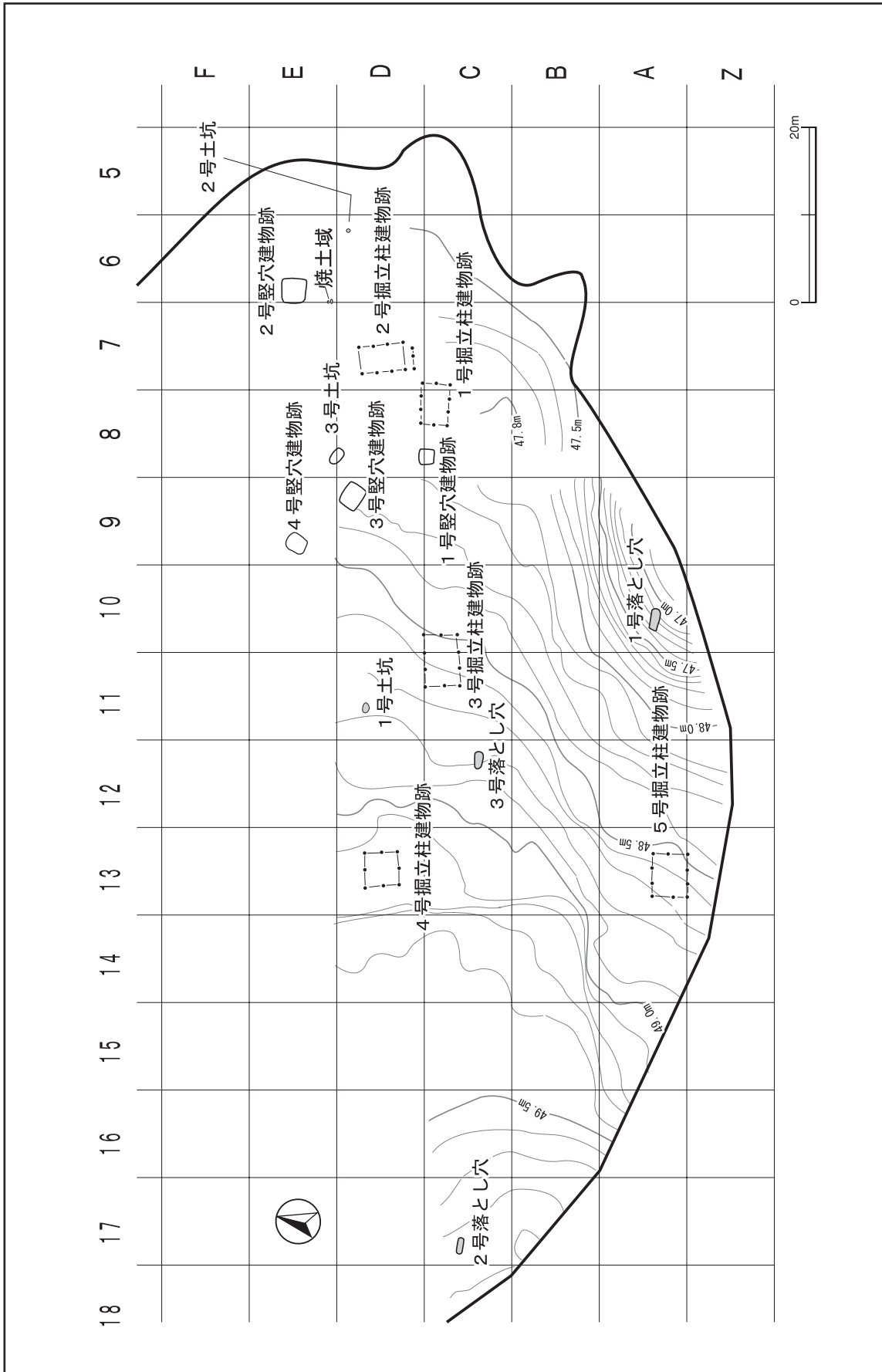
本遺構はD-7区で検出された。1間×3間の広さである。主軸方向はほぼ南北であり、ほかの4棟とは異なる。また、この遺構のみ南面に半間の庇を設けている。梁間柱間は平均で、3.14m、桁行間は5.05mである。棟部と底部との間隔は100cmである。中央部内にはピットが1個ある。柱穴は平均で長径が34.83cm、短径が26.50cm、深さが57.67cmである。また、庇の柱穴は棟部のものに比べると規模が小さいことがわかる。そのことから柵の可能性もある。掘り方は楕円形のもものが主である。遺物は確認されていない。

##### 3号掘立柱建物跡（第61図）

C-10・11区で検出され、2間×3間の広さである。主軸はほぼ東西である。建物の規模は他の建物跡と同様であるが、梁間柱間が平均で3.93m、桁行間が5.76mと最も大きいものである。柱穴は平均で長径が33.40cm、短径が26.60cm、深さが49.33cmである。遺物はP9から粘土塊と思われるものが3点出土している。隣接してC-10区にピットが1個ある。一括層から薩摩焼1点、土師器3点、不明の土器1点が出土している。いずれも小破片であるため、図化は行っていない。

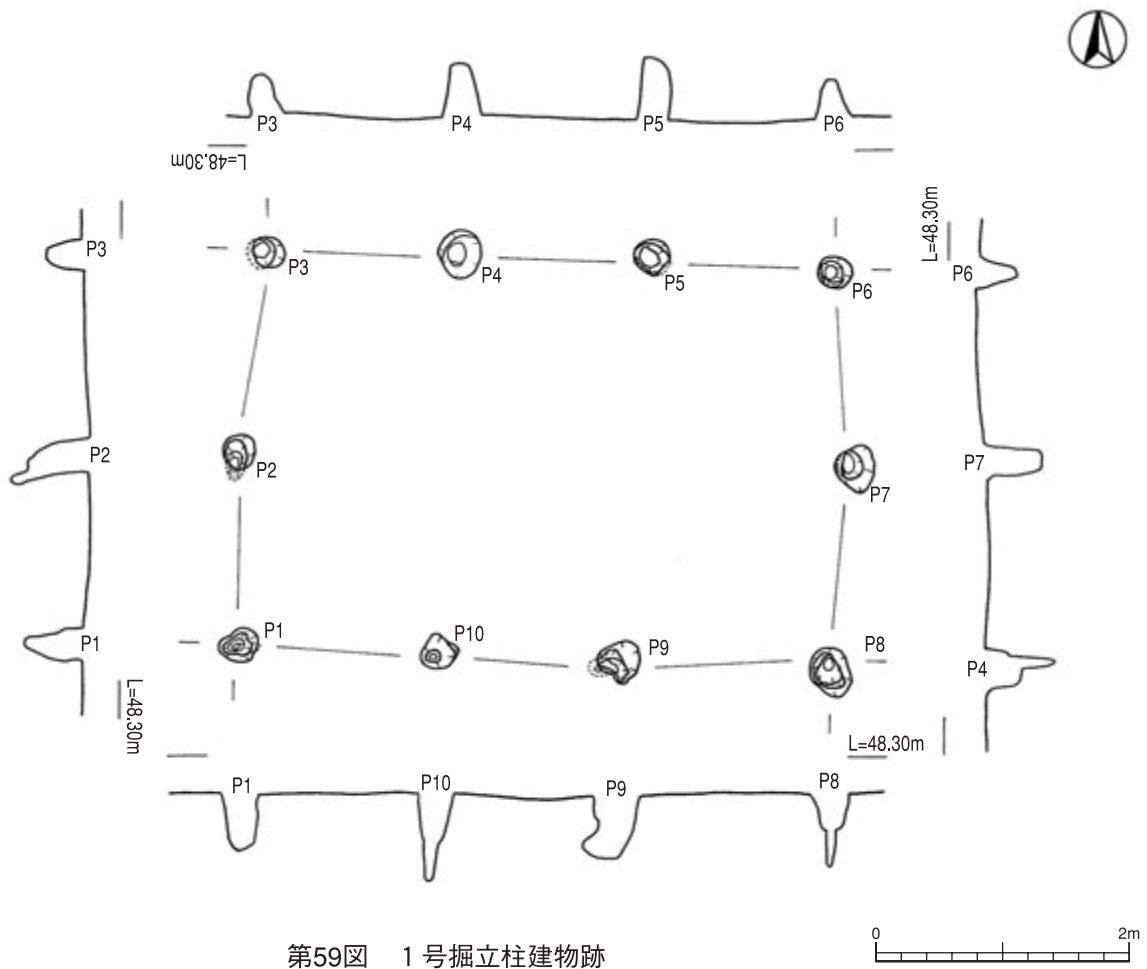
##### 4号掘立柱建物跡（第62図）

D-13区で検出され、2間×2間の広さである。主軸はほぼ東西である。梁間柱間が平均で3.78m、桁行間が3.85mとほとんど差がなく、正方形の建物である。柱穴は平均で長径が、31.13cm、短径が27.0cm、深さは32.25cmである。掘り方は楕円形から円形のものまでである。遺物は、P5から黒色土器Aが1点、黒色土器Bが1点、土師器が1点出土している。全て小破片であり、図化は行わなかった。



第58図 古代～中世の遺構配置図

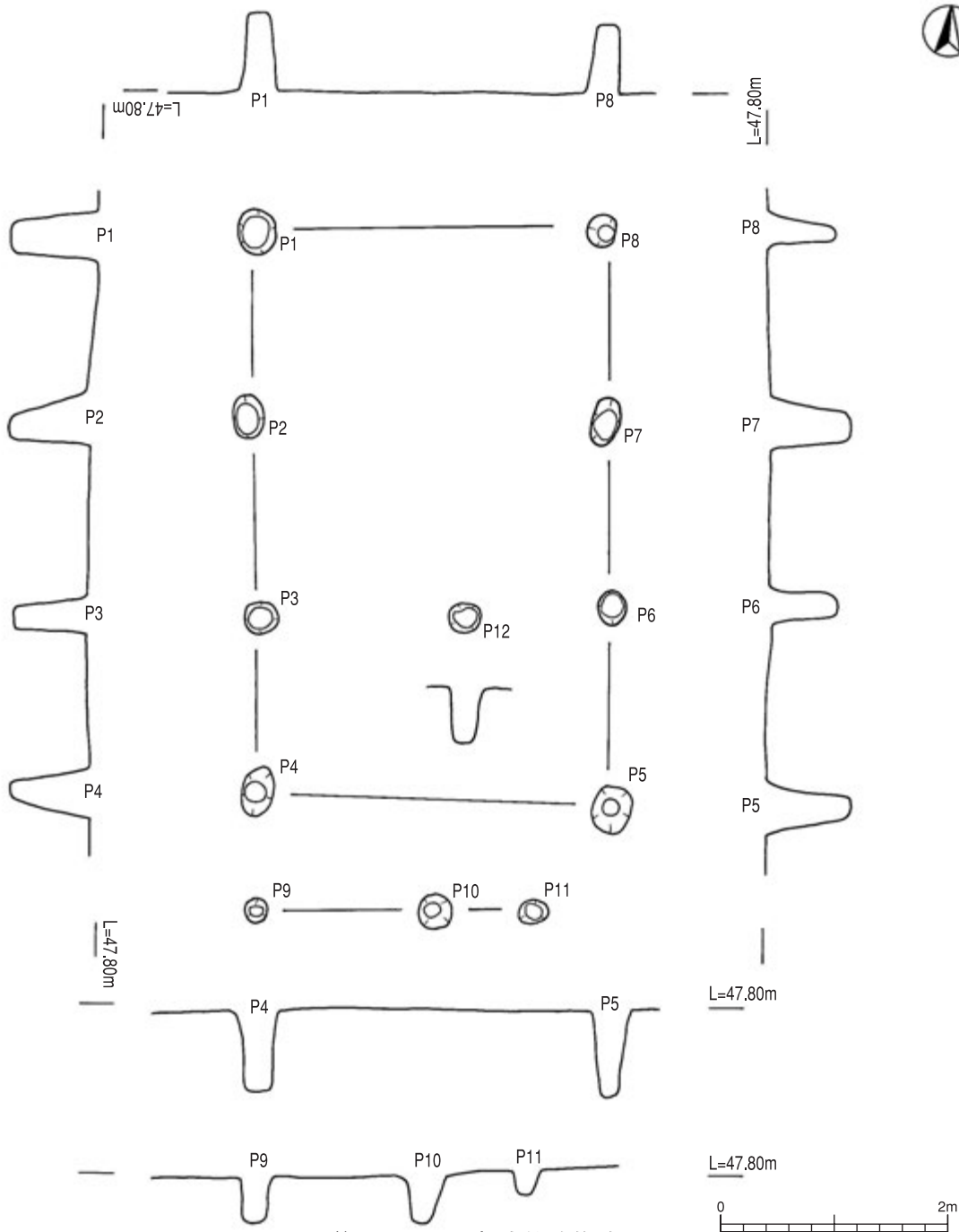




第59図 1号掘立柱建物跡

第11表 1号掘立柱建物跡観察表

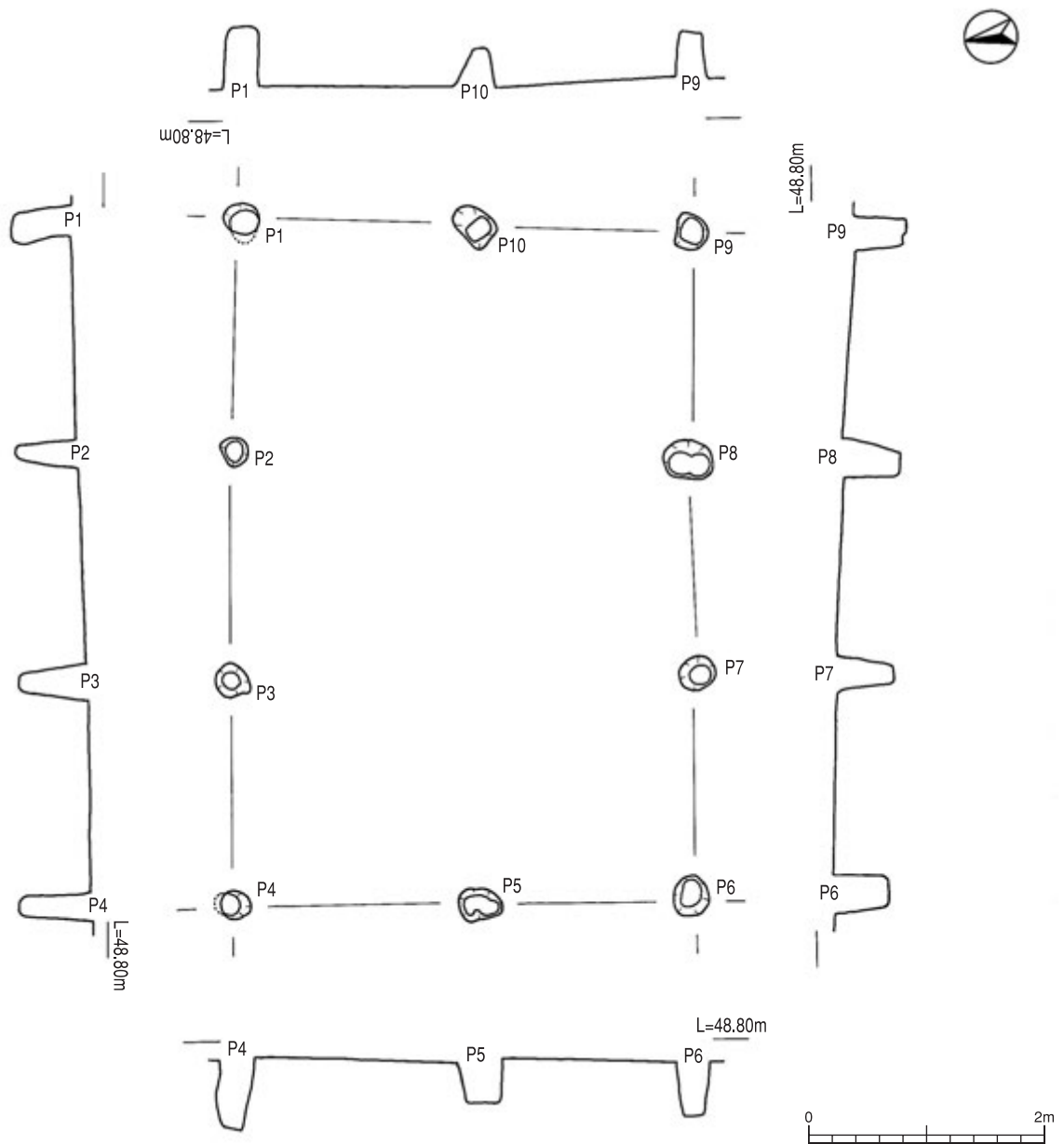
柱穴番号	柱穴 (単位: cm)			柱穴番号	梁間柱間 (m)	柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)
	長径	短径	深さ(細深)					
1	30	26	48	P1~3	3.15	P3~4	1.60	4.55
2	26	24	48 (60)	4~10	3.20	4~5	1.55	
3	28	24	30	5~9	3.25	5~6	1.46	
4	40	30	42	6~8	3.15	8~9	1.74	4.70
5	32	28	45			9~10	1.45	
6	26	24	34			1~10	1.58	
7	30	27	47	平均	3.19		1.56	4.63
8	38	32	28 (56)					
9	34	30	50					
10	28	26	40 (70)					
平均	31.20	27.10	42.29					



第60図 2号掘立柱建物跡

第12表 2号掘立柱建物跡観察表

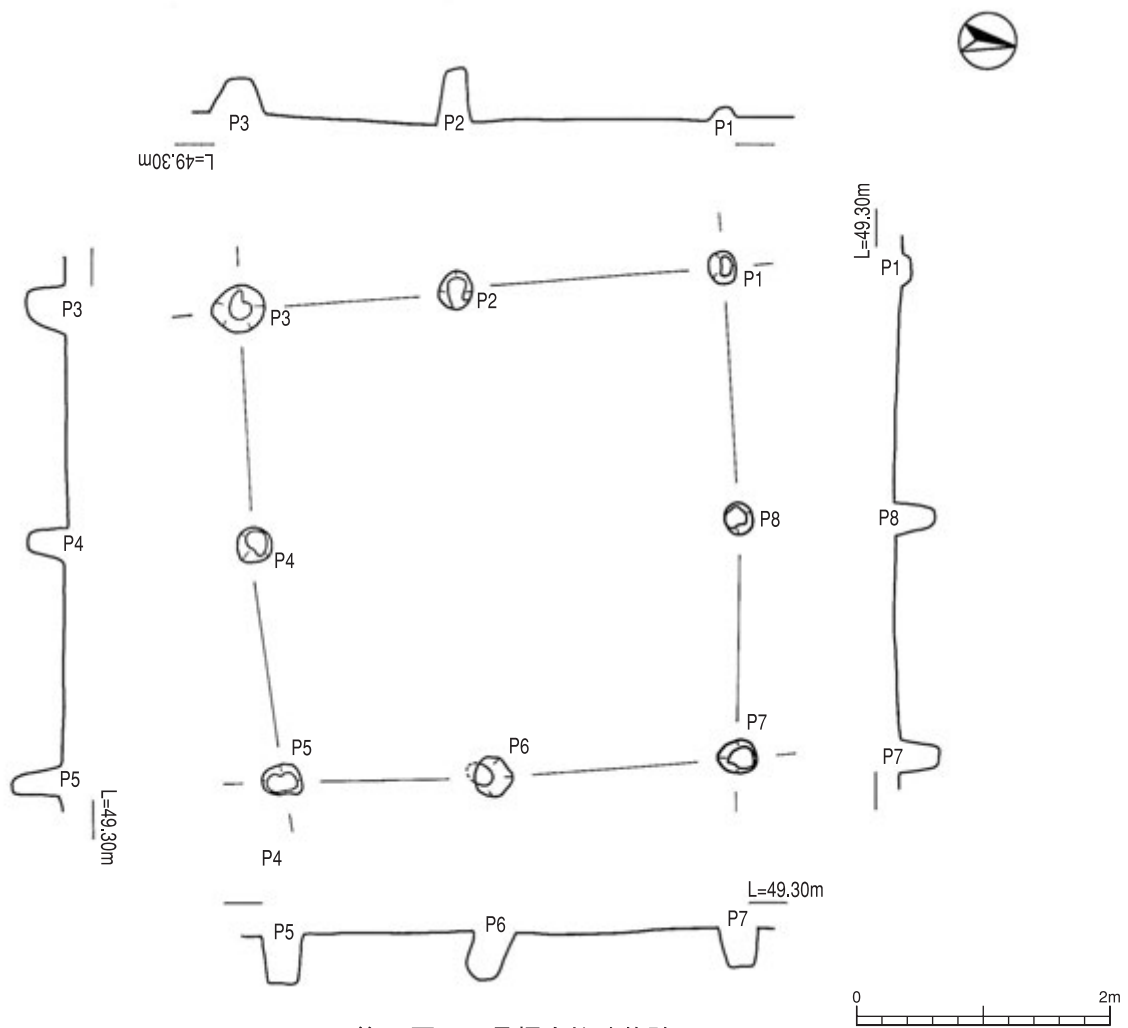
柱穴番号	柱穴 (単位: cm)				柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)	
	長径	短径	深さ (細深)					
1	40	32	72	棟部	P1~8	3.10	P1~2	1.70
2	38	26	70		2~7	3.18	2~3	1.80
3	30	27	64		3~6	3.12	3~4	1.54
4	46	28	70		4~5	3.16	5~6	1.80
5	43	32	74				6~7	1.62
6	42	33	60	平均			7~8	1.70
7	43	23	70	底部		3.14		1.69
8	28	24	60		P9~10	1.60		
9	22	20	40		10~11	0.90		
10	31	29	42					
11	26	20	20					
12	29	24	50					
平均	34.83	26.50	57.67					



第61図 3号掘立柱建物跡

第13表 3号掘立柱建物跡観察表

柱穴番号	柱穴 (単位: cm)			柱穴番号	梁間柱間 (m)	柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)
	長径	短径	深さ(細深)					
				P1~9	3.85	P1~2	2.00	5.86
1	31	26	53	2~8	3.90	2~3	2.00	
2	26	21	54	3~7	4.00	3~4	1.90	
3	32	27	60	4~6	3.95	6~7	1.90	
4	26	24	60			7~8	1.80	5.66
5	38	26	38			8~9	2.00	
6	35	30	48	平均	3.93		1.93	5.76
7	31	27	48					
8	42	32	49					
9	33	27	40(45)					
10	40	26	34					
平均	33.40	26.60	49.33					



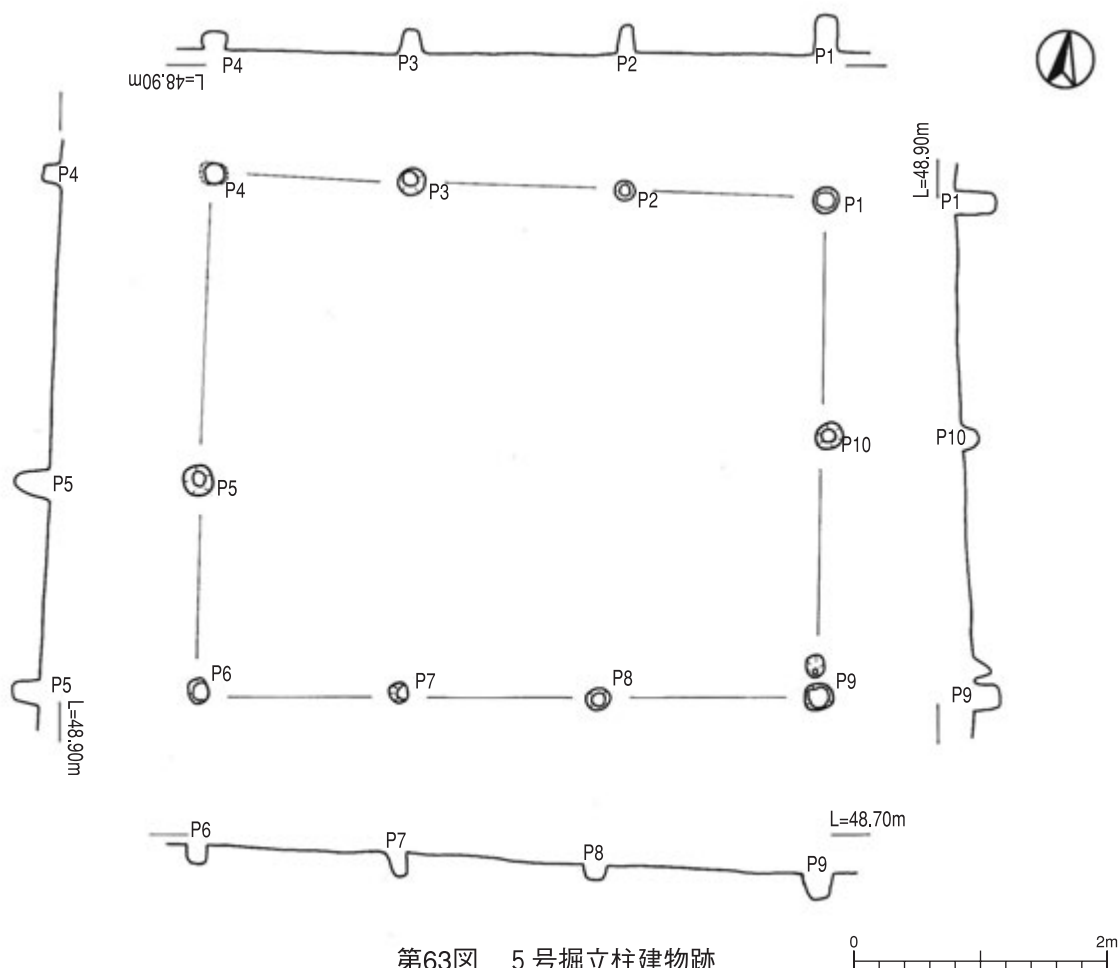
第62図 4号掘立柱建物跡

第14表 4号掘立柱建物跡観察表

柱穴番号	柱穴 (単位: cm)			柱穴番号	梁間柱間 (m)	柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)
	長径	短径	深さ(細深)					
1	26	22	9	P1~3	3.90	P3~4	1.90	3.80
2	30	27	44	2~4	3.80	4~5	1.90	
3	42	36	30	5~7	3.65	7~8	1.90	3.90
4	29	28	31	平均	3.78	1~8	2.00	
5	32	24	40				1.93	3.85
6	33	29	40					
7	31	28	32					
8	26	22	32					
平均	31.13	27.0	32.25					

### 5号掘立柱建物跡（第63図）

A-13区で検出され、2間×3間の広さである。主軸はほぼ東西である。梁間柱間が平均で4.04m、桁行間が4.88mである。柱穴の規模は、平均で長径が21.20cm、短径が18.40cm、深さは20cmである。ほかの4棟に比べて規模が小さい。遺物は確認されなかった。



第63図 5号掘立柱建物跡

第15表 5号掘立柱建物跡観察表

柱穴番号	柱穴（単位：cm）			柱穴番号	梁間柱間（m）	柱穴番号	桁間柱間（m）	桁行間（m）
	長径	短径	深さ（細深）					
				P1~9	3.95	P1~2	1.6	
1	22	20	30	2~8	4.05	2~3	1.7	4.86
2	17	16	24	3~7	4.06	3~4	1.55	
3	23	19	19	4~6	4.1	6~7	1.6	
4	18	16	14			7~8	1.6	4.9
5	26	23	28			8~9	1.75	
6	21	17	21	平均	4.04		1.63	4.88
7	18	16	19					
8	20	16	12					
9	23	21	20					
10	24	20	13					
平均	21.20	18.40	20.0					

② 竪穴建物跡（第64～68図）

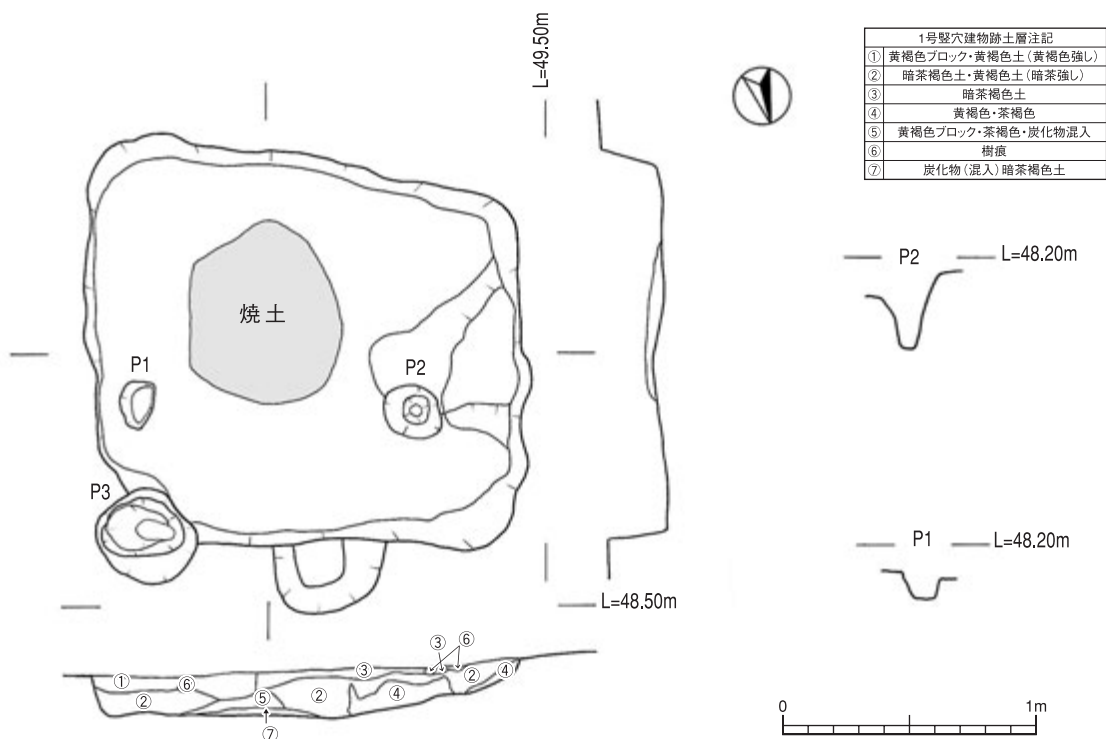
古代から中世のものと思われる竪穴建物跡が4基検出された。平成12年度に調査した遺跡の東部に集中する。いずれも検出面は掘立柱建物跡と同様にⅢa層上面である。

1号竪穴建物跡（第64図）

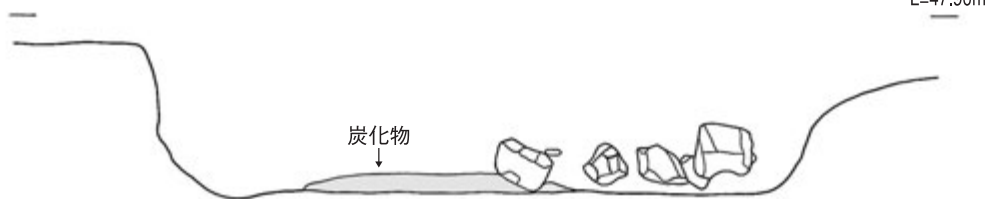
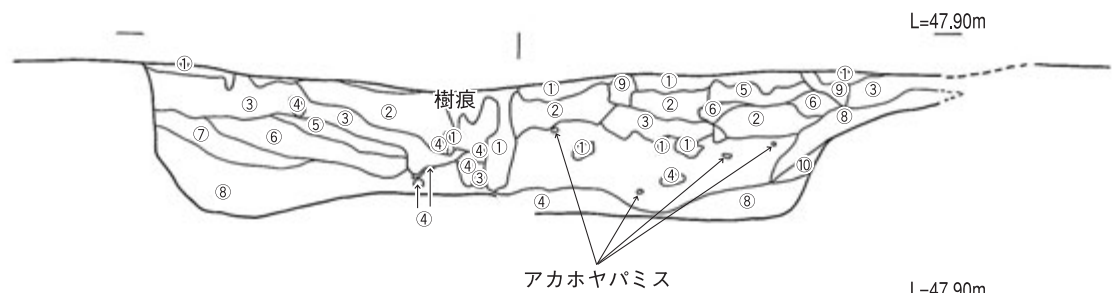
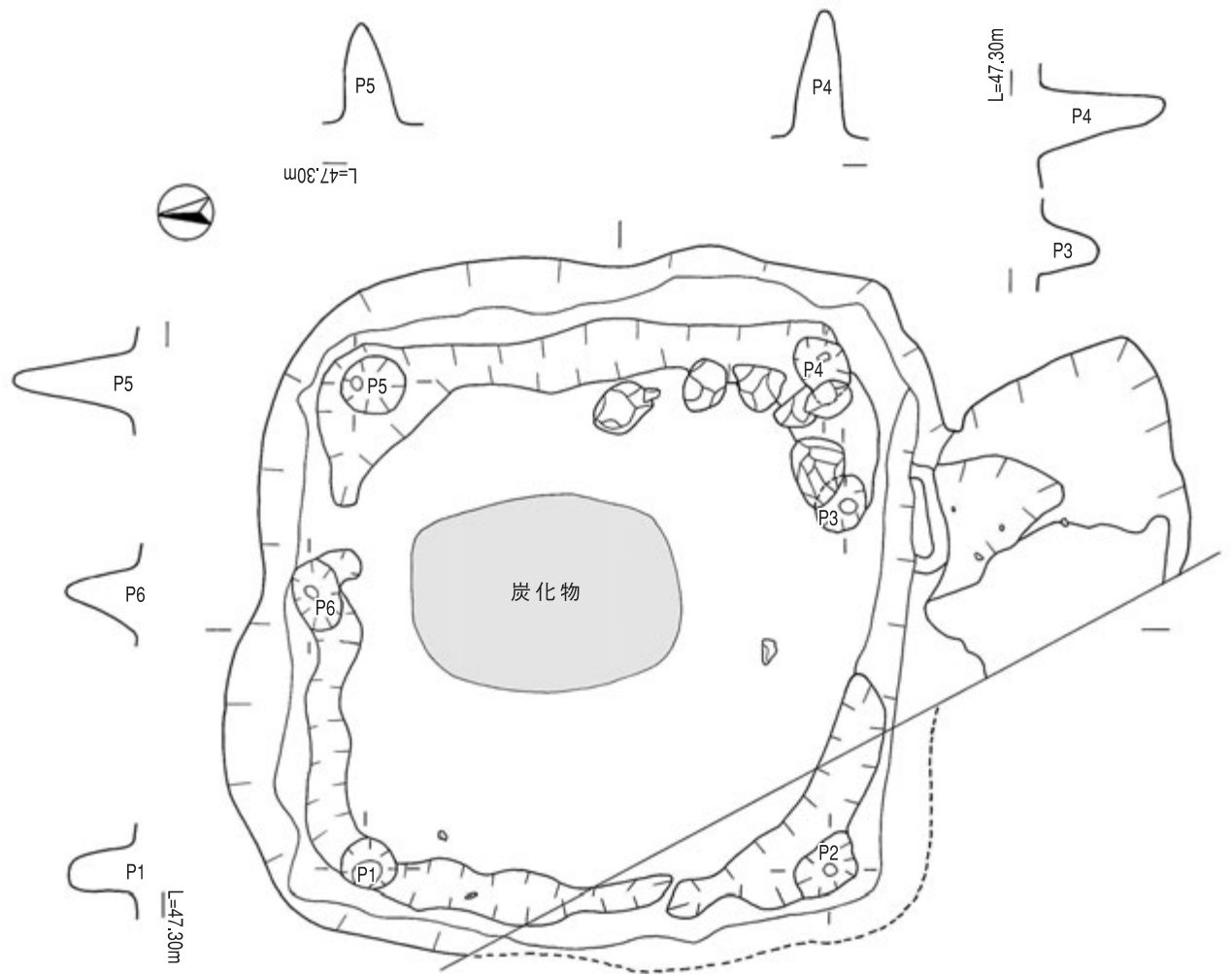
本遺構はC・D-7・8区に検出した。平面形は方形を成し、規模は1.72m×1.58m、深さは約25cmある。P1は径が18cmで深さが12cmと浅いが、削平を受けたためと思われる。P2は径が26cmで、深さは30cmであった。中央部には暗褐色の焼土が確認された。床面には炭化物の混入した暗褐色土が5cm程堆積している。西側は壁面から床面に向かってなだらかに傾斜しており、硬化面が確認された。また、北側に張り出し部が確認された。遺物は、土師器が1点と須恵器が1点出土したが、図化は行っていない。

2号竪穴建物跡（第65図）

本遺構はE-6区に検出した。平面形は隅丸方形であり、規模は2.8m×2.75m、深さは約50cmである。壁面沿いに柱穴と思われるピットが6個確認できる。いずれも径は25cm前後で、深さは25cmから52cmのものまで様々である。南側には張り出し部が確認された。南側の壁面に段状の造作がみられることから、出入り口の可能性が考えられる。埋土は、褐色土を中心に様々な層が認められる。掘り込みの土であるアカホヤ火山灰をブロック状に含み、炭化物が混入している。床面Ⅵ層（暗黄褐色土）まで掘り込まれており、硬化が認められる。遺物は、人頭大の礫が5点ほど出土した。他には、石鏃が1点、土師器の破片や粘土塊も数点出土している。



第64図 1号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡土層注記	
①	暗褐色土
②	褐色土・アカホヤバミス含・暗褐色土
③	褐色土
④	黄褐色土(アカホヤ2次ブロック)
⑤	褐色土(ややしまっている) ・黄褐色土多い(アカホヤ2次)
⑥	褐色土・黄褐色土少ない(アカホヤ2次)
⑦	褐色土
⑧	暗褐色土
⑨	黒褐色土
⑩	褐色土
⑪	暗褐色土・褐色土・黄褐色土



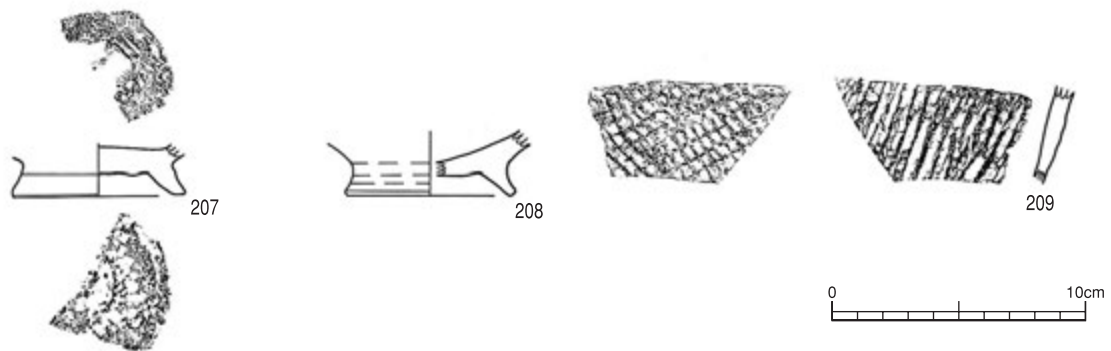
第65図 2号竪穴建物跡

### 3号竪穴建物跡（第67図）

本遺構は、D-9区で検出した。平面形は方形を成し、規模は2.8m×2.2m、深さは、約45cmである。壁に沿って、7個の柱穴が確認できる。径は25cm前後で、深さは約20～40cmのものまでである。中央付近に焼土らしきものがあり、炭を含んだ土がみられた。炉があった可能性が考えられる。また、本遺構に隣接して、D・E～8区には焼土を伴う3号土坑が検出されている。本遺構と何らかの関連性が考えられるがはっきりしない。埋土は主に明褐色土で、炭やアカホヤを含んでいる。表面近くには、一部に黒緑色土がみられた。また、P4には明茶褐色土が斜めに流れ込んでいることから、北東側からの堆積が考えられる。遺物としては、中央付近に礫が4点出土している。本遺構は柱穴により中世の遺構と思われる。遺構内遺物は土師器や須恵器があり、その内3点を図化した。

### 3号竪穴建物内出土遺物（第66図 207～209）

遺物は、中央の床面直上から礫が4点出土した。他には土師器や、須恵器が出土している。以下説明を行う。207は土師器碗の底部である。高台直径は6.8cm、器高は2.0cmである。調整は表裏ともに、ナデである。色調は内面がにぶい橙、外面は浅黄である。208も土師器碗の底部である。高台直径は6.6cm、器高は2.5cmである。高台は「ハ」字状に広がるものであるが、欠損が目立つ。調整は表裏ともに、ナデである。色調は表裏ともに、にぶい黄橙色である。焼成は良い。209は須恵器の胴部である。出土した4点の内、1点を図化した。外面は格子叩き、内面は条痕状の当て具痕が施されている。色調は内面が黄灰色、外面は褐色をしている。焼成は良い。

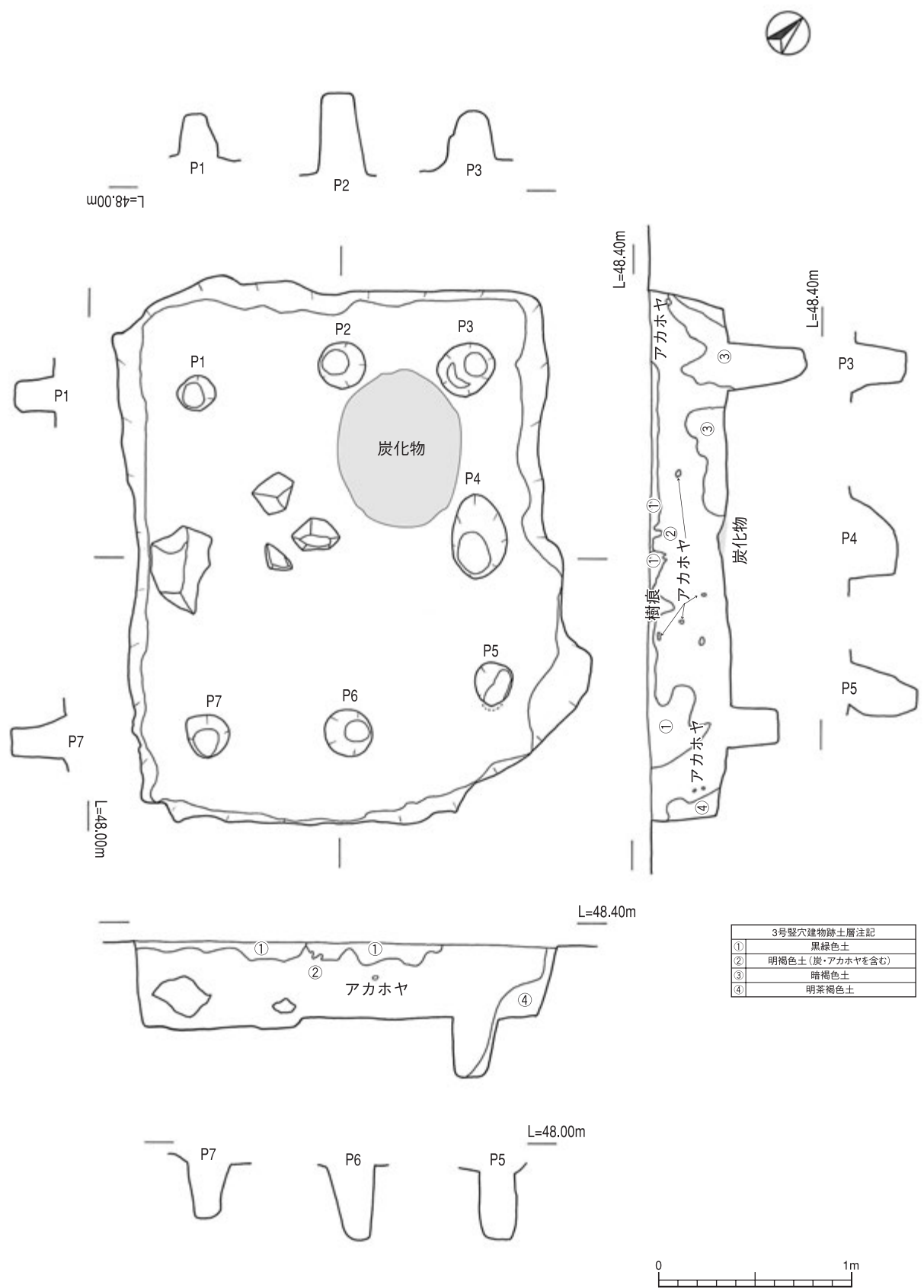


第66図 3号竪穴建物跡出土遺物

第16表 3号竪穴建物跡出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土区	層位 遺構	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		焼 成	調整		備考
										外面	内面		外面	内面	
第 66 図	207	土師器	碗	D-9	住居内一括	底部	—	6.8	2.0	浅黄	にぶい橙	良	ナ	デナ	デ
	208	土師器	碗	D-9	住居内一括	底部	—	6.6	2.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ナ	デナ	デ
	209	須恵器	—	D-9	住居内一括	胴部	—	—	—	褐	黄灰	良	格子叩き	条痕状の当て具痕	

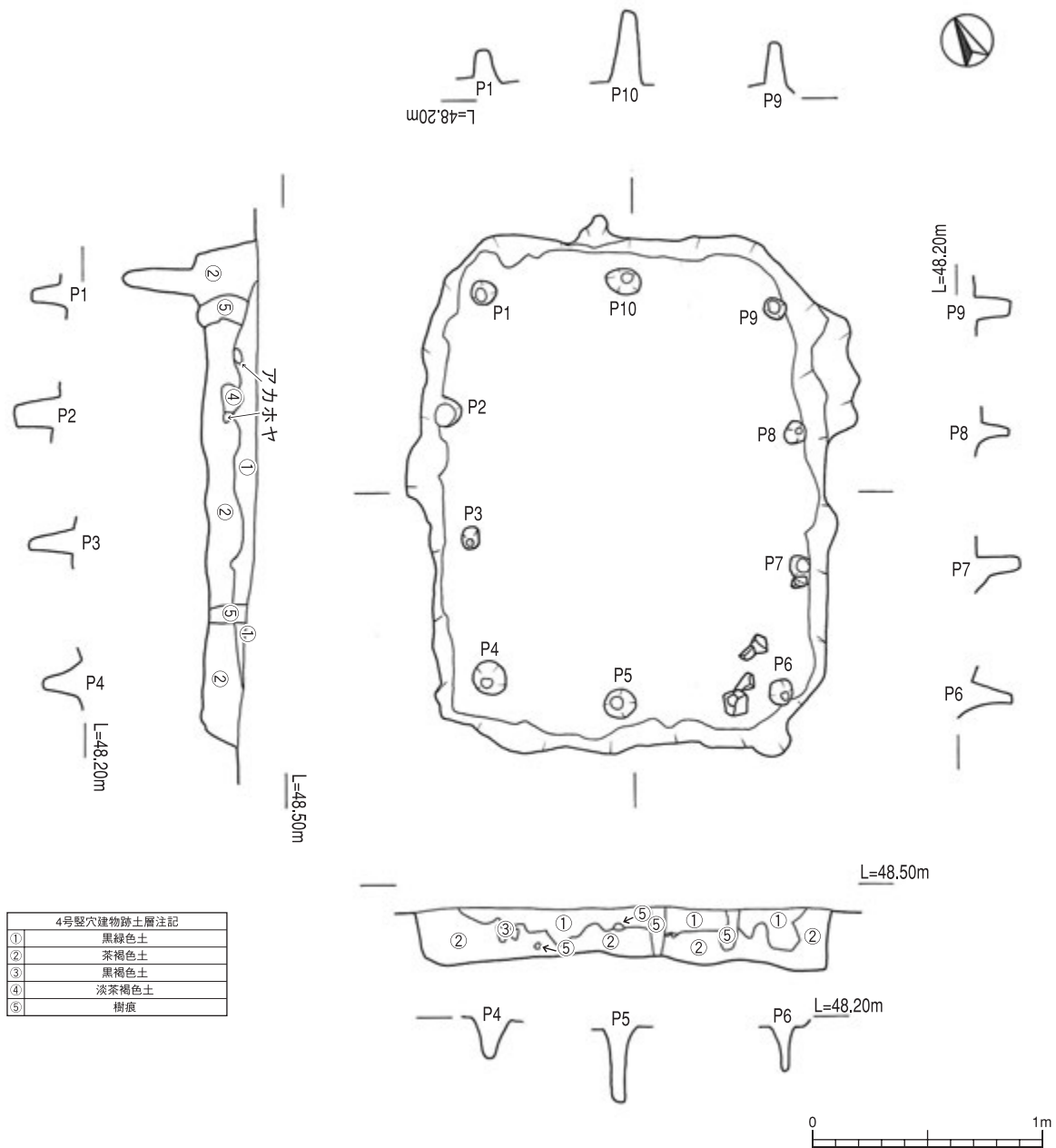




第67図 3号竪穴建物跡

#### 4号竪穴建物跡（第68図）

本遺構はE-9区に検出した。平面形は長方形を成し、規模は2.25m×1.84m、深さは約25cmである。壁に沿って、10個の柱穴が確認できた。径は10～16cm、深さは20cm前後のものが主であるが、34cmのものもある。埋土は黒緑褐色土と茶褐色土からなり、粘質はそれほど強くない。一部に淡茶褐色土やアカホヤパミスが含まれる。また、埋土中にはいくつかの樹痕が見られる。遺物は土師器甕の口縁部片が1点出土している。そのほかに、P6、P7付近には礫が集中している。これは柱穴に柱を立てる際に、支えとして使用した可能性が考えられる。



第68図 4号竪穴建物跡

### ③ 落とし穴 (第69～71図)

本遺跡で検出された土坑の内、底面に施設としての小穴が確認できるものを落とし穴とした。計3基が検出されており、それらの分布は集中していない。3基とも主軸が東西であるという特徴がある。

#### 1号落とし穴 (第69図)

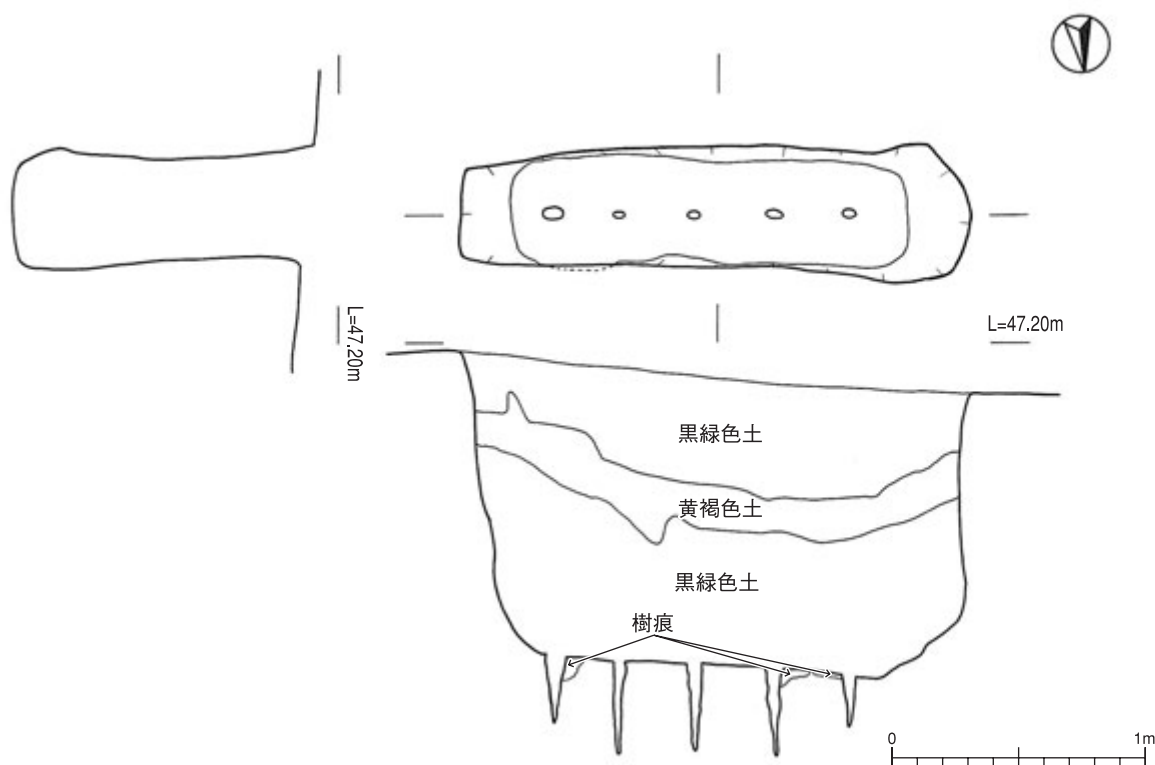
本遺構はA-10区から検出された。全調査区で最も標高の低い場所に位置する。平面形は楕円形を呈し、壁面は直線的である。長軸の最大長は2mで、床面までの深さは約1.2mである。底面には逆茂木と考えられる小穴が5本確認された。小穴の直径は5～8cm、深さは20～36cmである。

#### 2号落とし穴 (第70図)

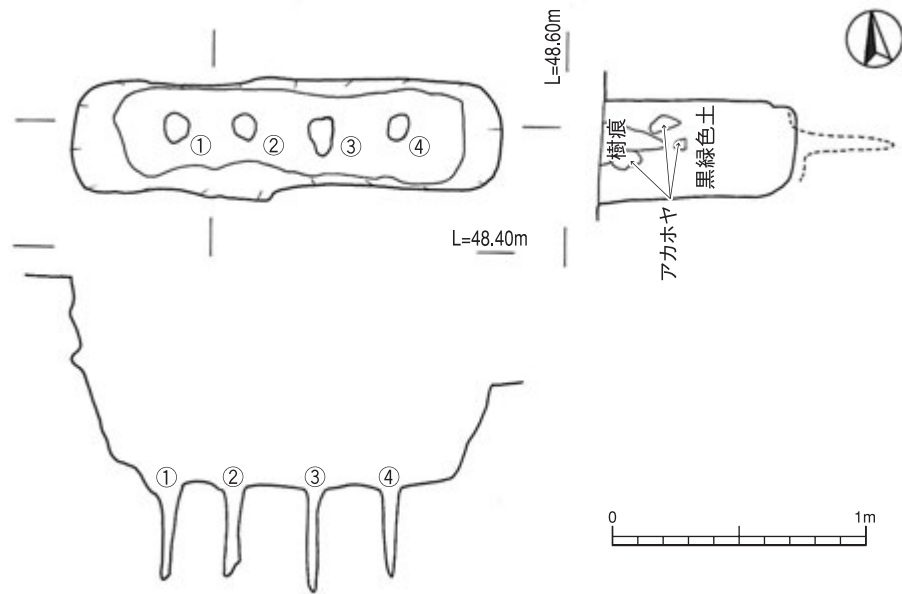
本遺構はC-17区で検出した。調査区の西端に位置し、周辺にこの時期の遺構は見られない。平面形は楕円形を呈し、断面は僅かに傾斜している。長軸の最大長は1.7mで、床面までの深さは85cmである。底面には小穴が4本確認された。小穴の径は、10～15cm、深さは35～40cmである。出土遺物は、上牛鼻産の黒曜石製剥片が3点出土した。

#### 3号落とし穴 (第71図)

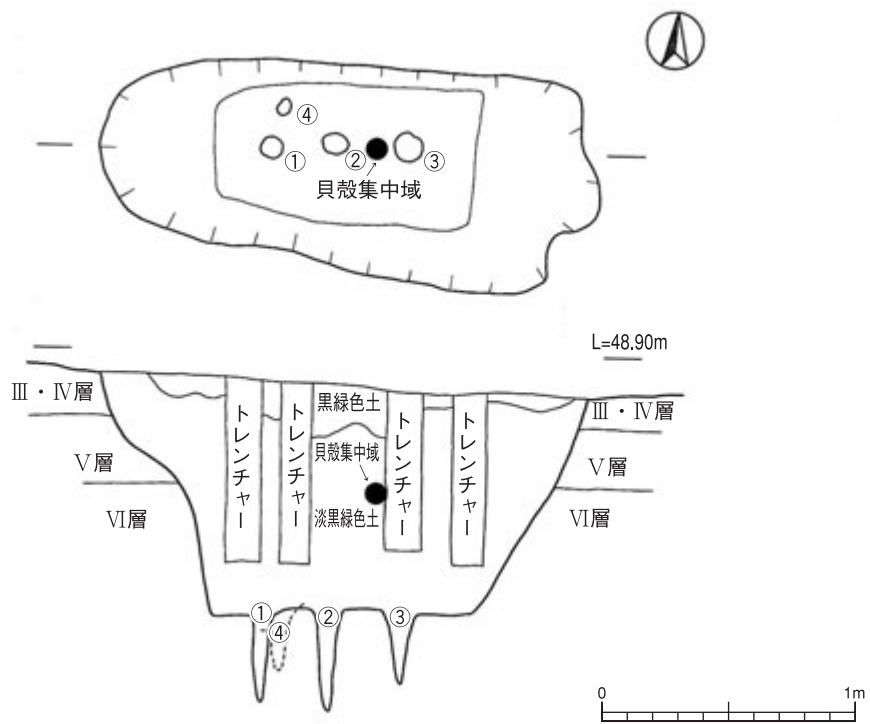
本遺構はC-12区で検出した。調査区の中央に位置しており、近隣に3号・4号掘立柱建物跡が所在している。これらの遺構は、本遺構と同じく東西を主軸としている。長軸の最大長は2mで、床面までの深さは95cmである。遺構のほぼ中央、深さ約40cmにおいて貝殻が集中して検出された。小穴は4本確認できる。小穴の径は約10cm、深さは25～40cmである。埋土は淡黒緑色土に黄褐色のシラスが僅かに混じっている。下部ほどシラスが多く混ざり、大変軟らかい。



第69図 1号落とし穴



第70図 2号落とし穴



第71図 3号落とし穴

④ 土坑（第72～74図）

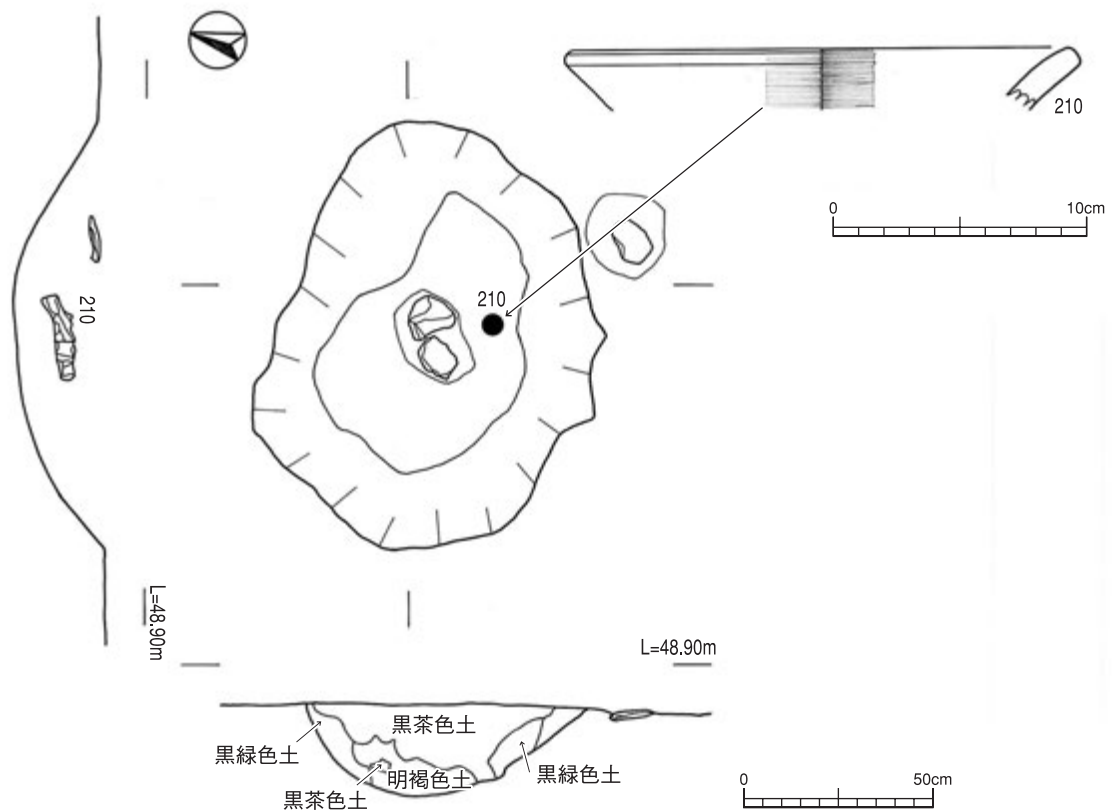
古代から中世のものと思われる土坑が3基検出された。いずれも検出面はⅢa層上面である。

1号土坑（第72図）

本遺構は、D-11区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径×短径は113cm×80cm、深さは約24cmである。中央部には炭化物の集中地域が見られ、礫が集中していた。埋土は3つの層から成る。上部の大半を占める黒茶色土は粘質があり、炭化物が確認された。210は口径20.4cmに復元できる土師器の甕の口縁部である。内外面ともに横方向のハケ目調整が施してある。色調は内外面ともに灰黄褐色であり、焼成は良い。古代のものである。

2号土坑（第73図）

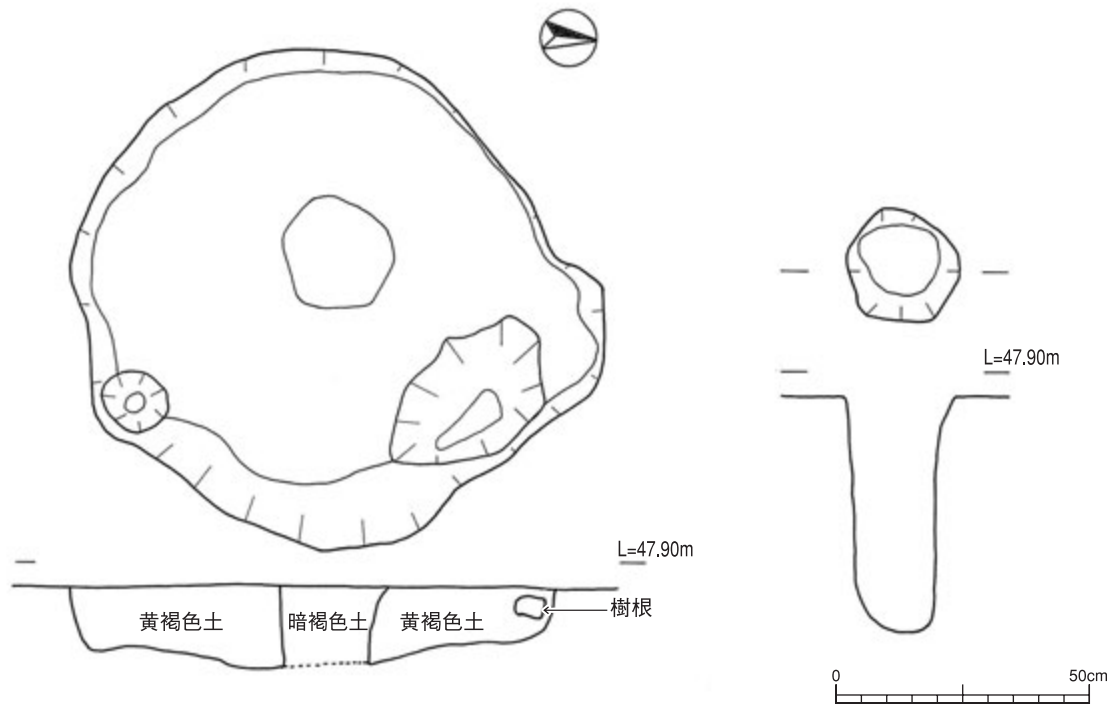
本遺構は、D-6区で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。長径×短径は約107cm×90cmであるが、深さは約16cmと浅い。土坑の中央にあるピットの深さは、約47cmであった。このピットは埋土から新しく掘られたものと考えられる。また、土坑の中には浅い窪みが多数見られたが、樹痕もしくは、後世の攪乱ではないかと思われるため図化しなかった。埋土は2つの層から成り、柱穴の暗褐色土と土坑の黄褐色土に分かれる。遺物は出土していない。



第72図 1号土坑

第17表 1号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土区	層位 遺構	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		焼 成	調整		備考
										外面	内面		外面	内面	
第72図	210	土師器	甕	D-11	2号土坑	口縁部	20.4	—	—	灰黄褐	灰黄褐	良	ハ	ケハ	ケ



第73図 2号土坑

### 3号土坑 (第74図)

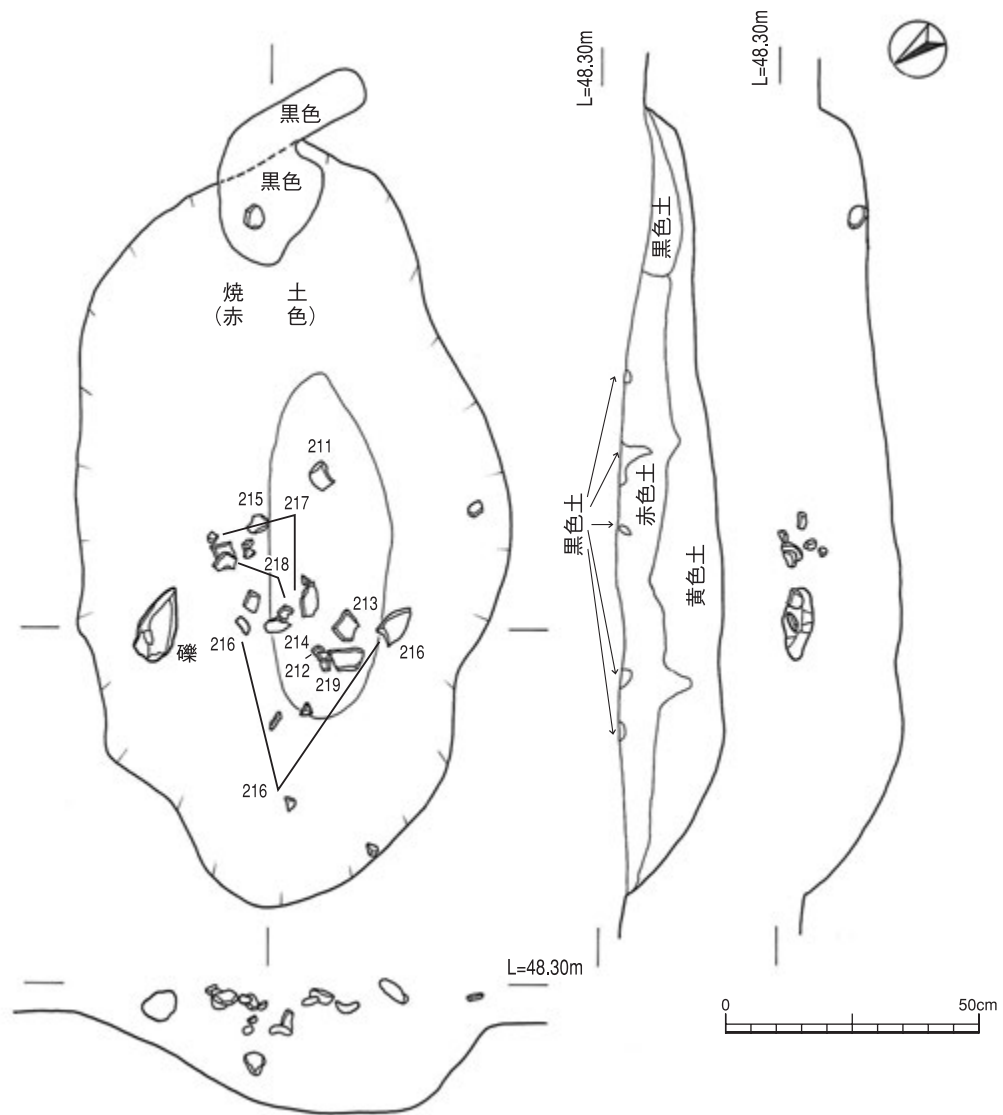
本遺構は、D・E-8区で検出した。この土坑は焼土を伴い、長径×短径が150cm×85cm、深さ20cmに及ぶ。楕円形を呈し、表面は赤色である。埋土は赤色土、黒色土、黄色土の3つに分類される。8～9世紀のものと思われる。

### 3号土坑内出土遺物 (第75図 211～219)

13点の土師器が出土した。211は壺の口縁部である。外面はナデにより、若干の稜がみられる。口縁部にいくに従って器壁が薄くなる。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色である。焼成は良い。212～214は甕の口縁部である。212の胎土には、軽石が含まれる。外面にはハケ目調整が施され、煤が付着している。213は口径30cmに復元されるもので、大型の甕である。外面はハケ目、内面は横方向のケズリが施してある。214は復元口径24cmあるもので、断面に粘土の繋ぎ目が見られる。215は胎土に長石が含まれる。内面は粗いケズリ調整が施されている。216～219は甕の胴部である。216は図の3点が接合されたものである。内面はケズリ、外面にはナデが施され、煤が付着している。217は図の2点が接合されたものである。断面に粘土の繋ぎ目が見られる。218は図の2点が接合されたものである。外面は破損が甚だしい。219は胎土に2mm大の軽石を含んでいる。

### 焼土域 (第76図)

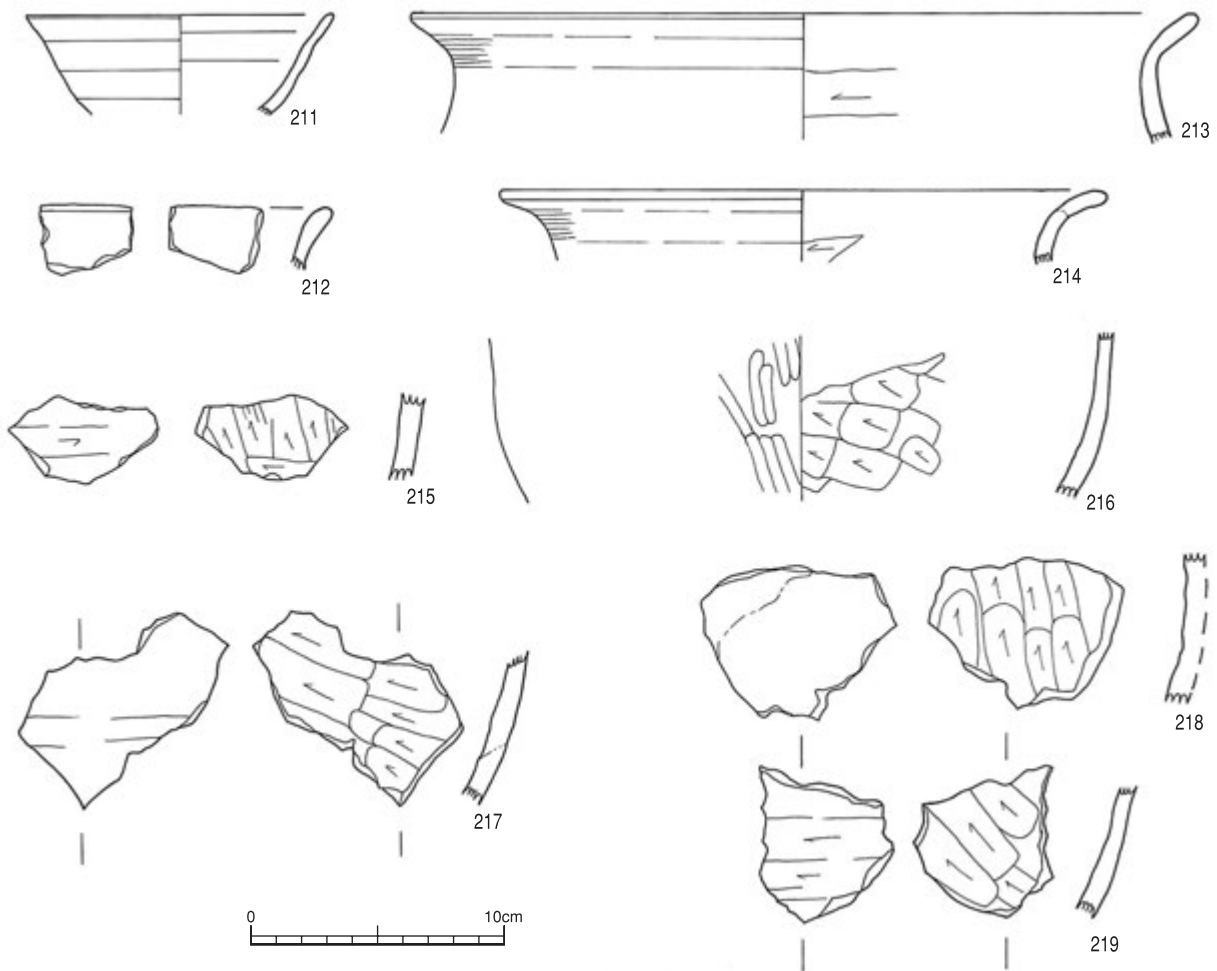
焼土1の規模は長径×短径が55cm×35cmになり、深さは約6cmである。埋土は赤褐色土と黄褐色土の2層からなる。礫が1点出土した。同じく焼土2の規模は、20cm×10cmで楕円形を呈す。この土坑も規模は小さいが、焼土を伴うものである。



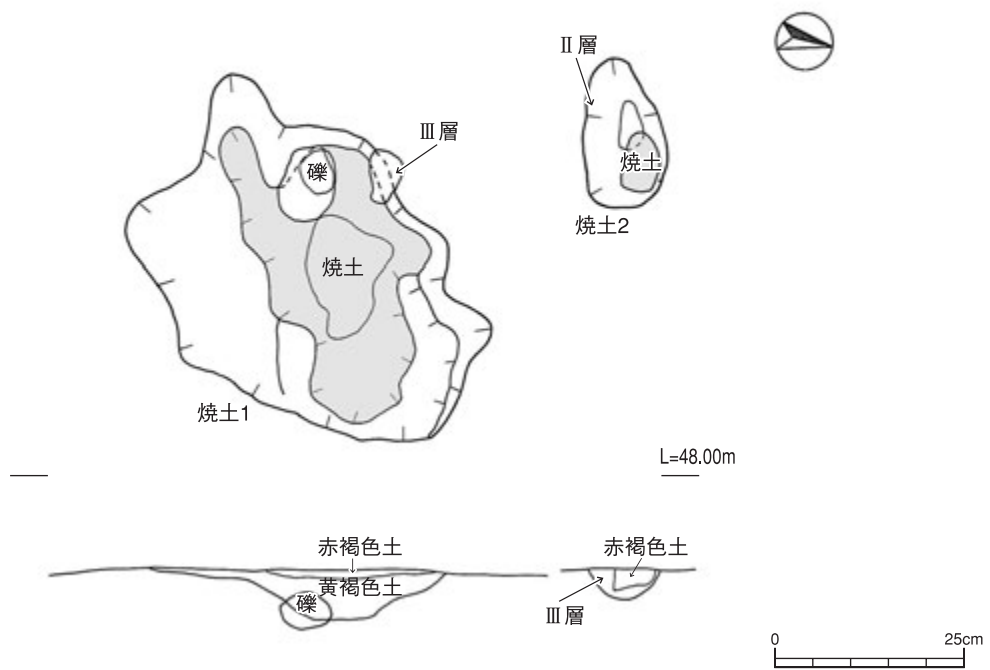
第74図 3号土坑

第18表 3号土坑出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土区	層位 遺構	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		焼 成	調整		備考				
										外面	内面		外面	内面					
第 75 図	211	土師器	碗	D・E-8	3号土坑	口縁部	12.2	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ナ	デ	ナ	デ			
	212	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	口縁部	—	—	—	褐 灰	にぶい黄橙	良	ハ	ケ	目	ナ	デ	煤附着(口)	
	213	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	口縁部	30	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ナ	デ	ナ	デ			
	214	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	口縁部	24	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ケ	ズ	リ	後	ナ	デ	
	215	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	胴部	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ケ	ズ	リ	後	ナ	デ	
	216	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	胴部	—	—	—	にぶい黄橙	黄 橙	良	ナ	デ	ケ	ズ	リ		
	217	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	胴部	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ナ	デ	ヘ	ラ	ケ	ズ	リ
	218	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	胴部	—	—	—	黒 褐	にぶい黄橙	良	ナ	デ	ケ	ズ	リ	風化(外面)	
	219	土師器	甕	D・E-8	3号土坑	胴部	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ケ	ズ	リ	ケ	ズ	リ	



第75图 3号土坑内遺物



第76图 烧土域



その他の遺構内遺物（第77図 220～224）

都合上遺構の図化を行わなかったため、その他の遺構として遺物のみここで示す。

土師器－坏（第77図 220）

220はD-11区の焼土の一括層から出土した坏である。口径は12cmである。調整は内外面ともにハケメが観察できる。

土師器－高台付皿（第77図 221）

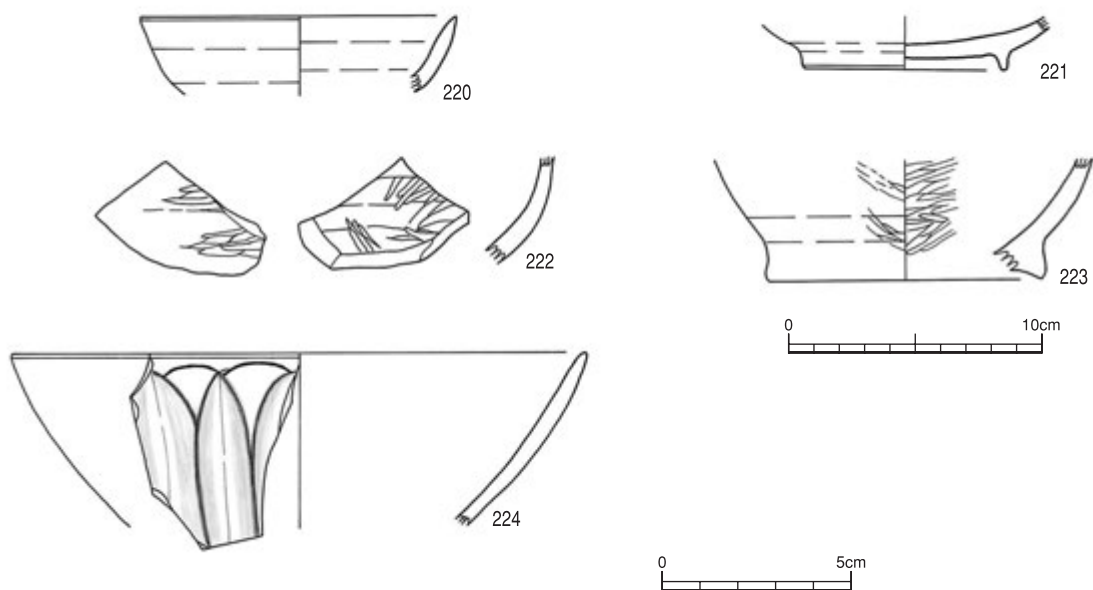
221はD-12区の土坑から出土した土師器の高台付皿と思われる。高台径は8cmを測る。胎土に長石が確認できる。

黒色土器A－碗（第77図 222, 223）

222, 223は黒色土器Aに分類されるもので、内黒土師器と呼ばれるものである。ともに内外面には、ミガキが施してある。222はD-13区のピット8から出土したものである。223はD-13区のピット9から出土したもので、高台径は11cmある。2点とも焼成は良い。

龍泉窯青磁－碗（第77図 224）

224はD-14区のピットから出土した龍泉窯の青磁碗である。器形は体部から口縁部にかけてやや内湾し、全体的に開くものである。外面に鑄蓮弁文を有し、口縁部では二重に施されている。弁の中央は稜を有するものである。胎土は緻密で、全体にオリブ灰色の釉がかかる。口径は15.3cmある。Ⅲ類に比定され、13世紀のものである。



第77図 古代～中世の出土遺物（1）

第19表 その他の遺構内遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土区	層位 遺構	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		焼 成	調整		備考	
										外面	内面		外面	内面		
第 77 図	220	土師器	坏	D-11	焼土一括	口縁部	12.0	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ハ	ケハ	ケ	
	221	土師器	高台付皿	D-12	土坑	底部	—	8.0	—	淡黄	淡黄	良	ナ	デナ	デ	
	222	内黒土師器	碗	D-13	P8	胴部	—	—	—	にぶい黄橙	黒	良	ミガキ	ミガキ	ミガキ	黒色土器A
	223	内黒土師器	碗	D-14	P9	底部	—	11	4.8	灰黄	黒	良	ミガキ	ミガキ	ミガキ	黒色土器A
	224	龍泉窯・青磁	碗	D-14	P1	口縁部	15.3	—	—	灰白(胎土)	オリブ灰(釉薬)	良	—	—	—	鑄蓮弁文(外)

## (2) 古代～中世の出土遺物 (第78～80図 225～269)

遺物包含層であるⅡ層, Ⅲa層から出土した。様々な遺物が出土しており, これらは大きく土師器, 須恵器, 磁器, 金属製品に分けられる。いずれも小破片で完形品はなかった。以下, 種別, 器種ごとに示す。

### 土師器 (第78図 225～242, 第79図 243)

土師器は全調査区を中心に多量に出土した。ただ, 小破片のため, 図化できたのは僅かである。ここでは黒色土器A 1点を含め, 19点を図化した。これらは須恵器を含め, 主に遺構の集中するC～E-9～11区を中心に出土している。

### 碗 (第78図 225～231)

225～231は碗である。底部切り離しは, 篋切りである。色調は主に浅黄橙を基調とする。231には底部外面に記号のようなものが記してある。

### 皿 (第78図 232～238)

232～238は皿である。232には底部外面に記号のようなものが記してある。232を除いて233～238は底部切り離しは全て糸切りである。

### 甕 (第78図 239～242)

239～242は甕である。239, 240の口縁部は僅かに外反する。調整は共にハケであるが, 内面に一部ケズリが見られる。焼成は良い。241は胴部である。外面に粗い条痕が見られる。242も同様に内外面ともに, 条痕が見られる。色調はにぶい橙である。

### 黒色土器A-碗 (第79図 243)

243は黒色土器Aに分類されるもので, 内黒土師器と呼ばれるものである。復元口径は14.2cmである。調整は外面にヘラミガキ, 内面にミガキが施してある。8世紀のものである。

### 須恵器 (第79図 244～250)

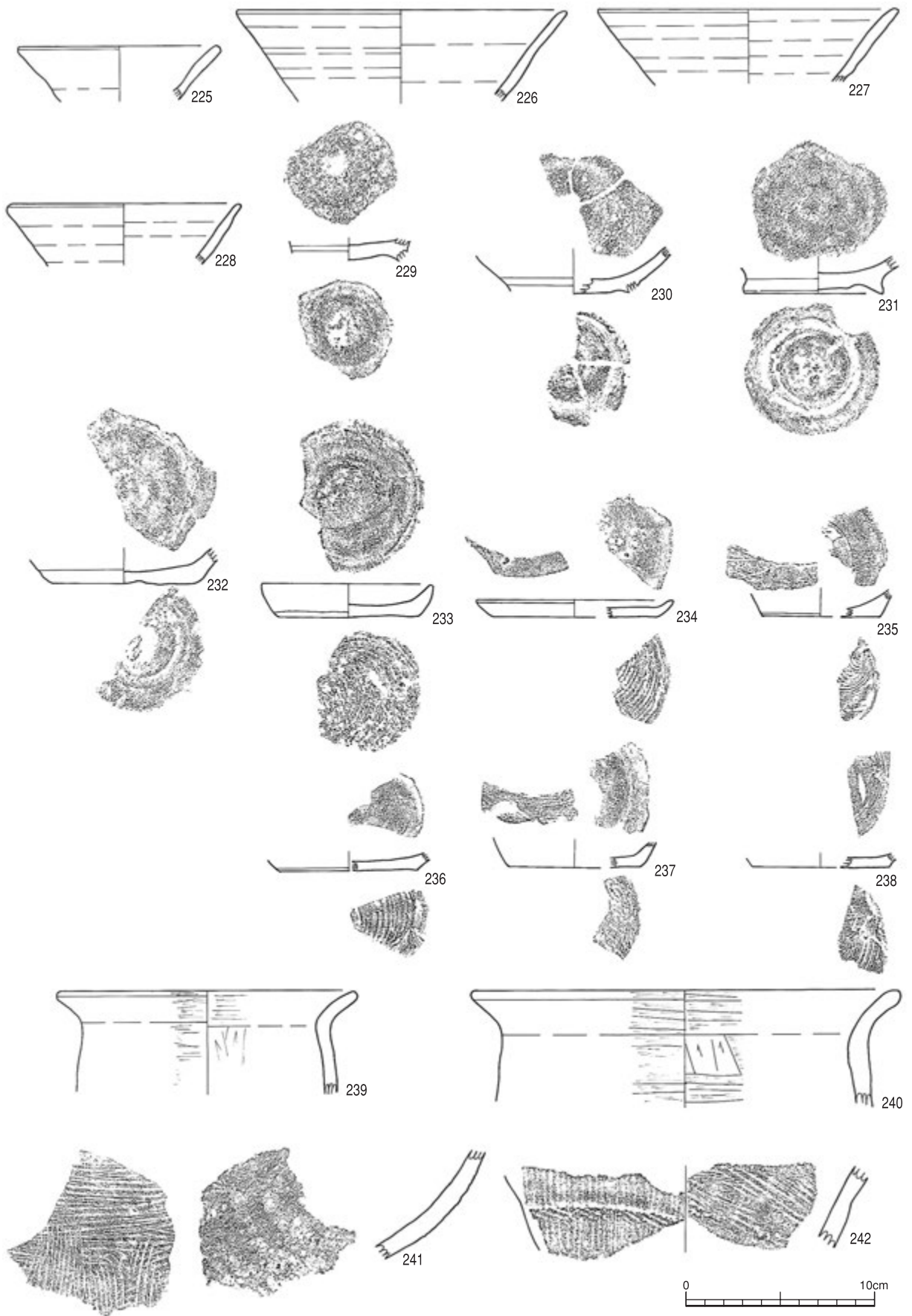
須恵器は7点を図化した。どれも小片であるため, 器種は不明である。244～246は須恵器の胴部である。244, 246には外面に格子叩き, 内面は条痕状の当て具痕がある。245は外面に条痕, 内面は条痕状の当て具痕がある。9世紀頃のものである。

### 樺万丈窯-甕 (第79図 247)

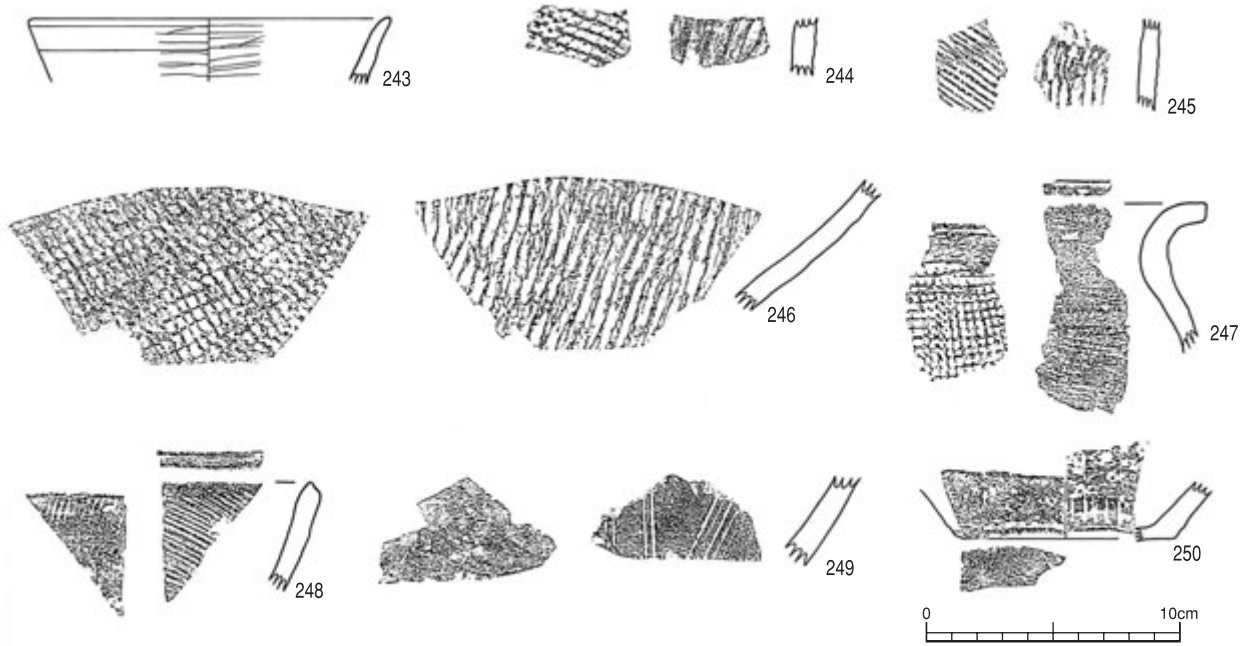
247は樺万丈窯産の須恵質陶器である。外面に格子目状の叩き痕, 内面に横方向のハケ調整が施してある。胎土は内外ともに, 灰色を呈す。13世紀後半のものである。

### 捏鉢・播鉢 (第79図 248～250)

248は捏鉢である。内面には条痕が斜線状に施してある。色調は内外面ともに, 灰色である。13世紀のものである。249, 250は内面にクシ状の条線が見られる播鉢の一部である。一部のみの出土であるため, 全体器形は明らかではない。250は2層の粘土で形成されていることが, 断面よりわかる。器壁は底部より胴部が厚く, 斜め上方へ開くが, 底部の器形は明らかではない。ともに14世紀のものである。



第78図 古代～中世の出土遺物 (2)



第79図 古代～中世の出土遺物 (3)

#### 磁器 (第81図 251～268)

全調査区から103点の磁器が出土した。主に白磁、青磁、青花に分けられる。これらは、表土層から一括して採取したものが多く。それらについては第80図に示した。図からA～E-7～14区に集中して出土しているのがわかる。ここでは18点を図化した。それぞれの項で器種、形態ごとに説明する。なお、分類ができるものについては、大宰府陶磁器分類に基づいて分類を行なった。

#### 白磁 (第81図 251～256)

中世の白磁を5点図化した。どれも中国産の輸入磁器である。251, 252は閩南沿海窯系の皿である。251は口はげ口縁であり、13世紀のものである。252は玉縁口縁であり、12～13世紀のものである。IV-2類にあたる。253は閩江上流域のもので、16世紀の皿である。254は中国産の白磁皿で、口縁部は口はげである。外面は、胴部から底部にかけて釉垂れが見られる。255は同安窯の皿である。青磁であるが、皿は1点のみであるためここで記した。口縁部に釉垂れが見られる。256は閩江上流域のもので、15世紀の高台付皿である。

#### 青磁 (第81図 257～261)

青磁は、主に全調査区から龍泉窯青磁が54点出土し、5点を図化した。

#### 龍泉窯青磁 (第81図 257～261)

257の口縁部は内面に劃花文を有する碗で、12世紀前半のものである。釉は灰オリーブで、胎土は緻密である。258, 259は外面に鎬蓮弁文を有する碗で、弁の中心は稜を呈する。共に13世紀のものである。258の碗はやや端反りのある口縁部であり、III類にあたる。259は胎土が緻密である。明緑灰色の施釉が厚く、僅かに気泡が混じる。260は丸小皿である。都合上ここで示す。外面に鎬蓮弁文を有するもので、14世紀のものである。261は、外面に線劃蓮弁を有する15世紀の碗である。III・IV類にあたる。

青花（第81図 262～268）

青花は景德鎮と漳州窯のものに分けられる。景德鎮青花は、調査区の南端A B - 7～17区に集中している。31点中、5点を図化した。漳州窯青花については12点中2点を図化した。

景德鎮青花（第81図 262～266）

碗（第81図 262, 263）

262は蓮子碗と呼ばれるもので、16世紀のものである。263も同じく蓮子碗で、16世紀前半期のものである。高台は断面からわかるように、内部際のケズリが深く、肉薄なものである。高台内には、同心円状にケズリの跡が残る。全面施釉後、高台畳付の釉を掻き取ってある。

皿（第81図 264～266）

264は16世紀の皿の口縁部である。内外面ともに、2条の線が描かれてある。265, 266は共に16世紀の皿である。碁笥底をもち、畳付は釉剥ぎされている。265は表面がひどく劣化している。266は外面に芭蕉文が描かれている。

漳州窯青花（第81図 267, 268）

267は蓮子碗で、高台が一部欠損している。16世紀前半期のものである。268は碁笥底をもつ皿で、16世紀のものである。見込みに「寿」一文字の書がある。

その他の遺物

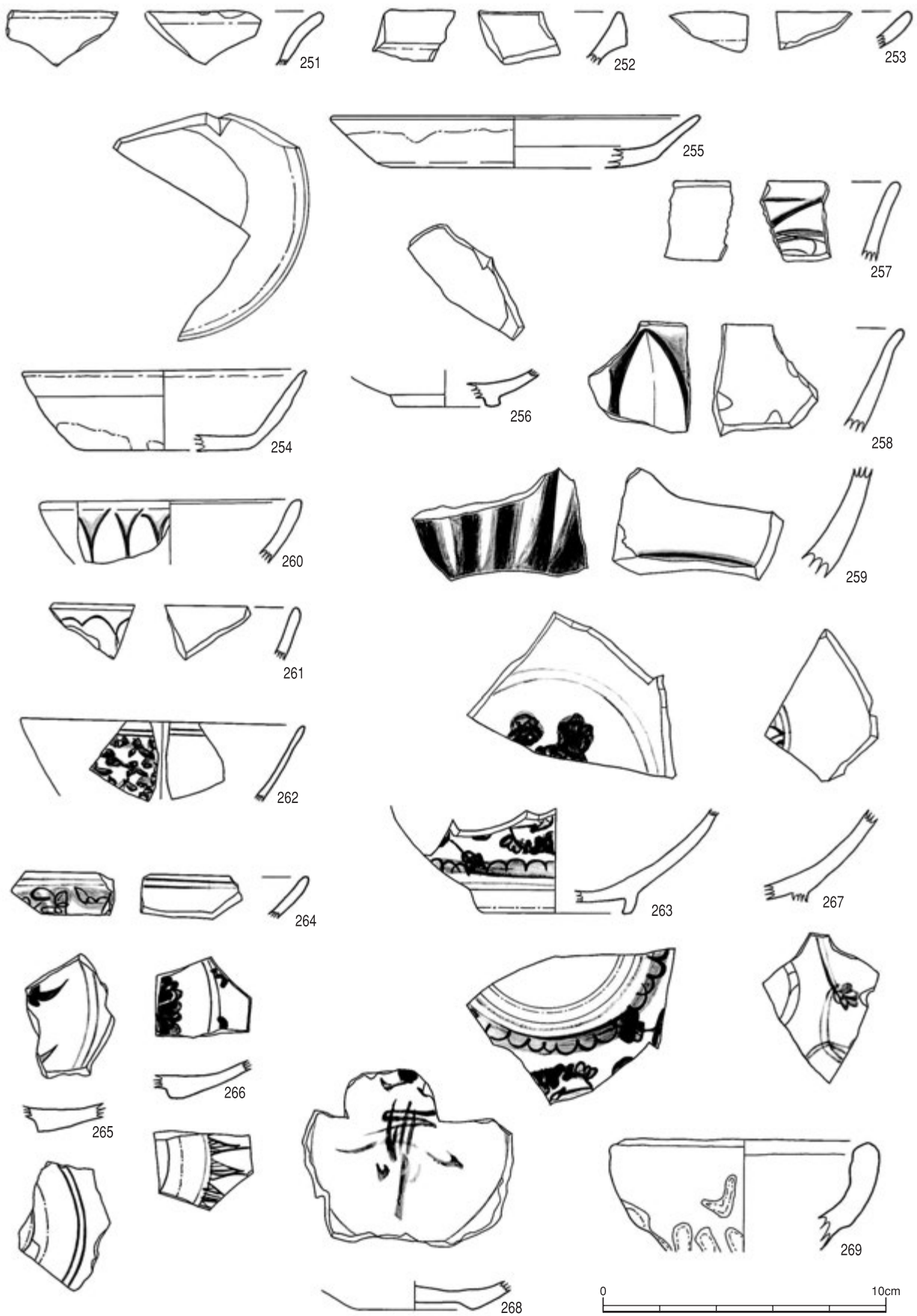
坩堝（第81図 269）

269は坩堝である。溶解した青銅などを鋳型に注入する際に入れておく一種の容器である。厚手であり、小型の碗状を成している。一部のみの出土で、注ぎ口があるかは定かではない。外面はオリーブ黒色で、一部は赤みをおび、溶解している。

	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	
	景德鎮①			龍泉窯①										G
		龍泉窯①												F
	漳州窯①	景德鎮① 漳州窯①				漳州窯①			龍泉窯①	漳州窯①				E
							龍泉窯①			景德鎮②		龍泉窯①	龍泉窯②	D
				景德鎮①		漳州窯① 同安窯①		龍泉窯②	景德鎮①	龍泉窯①		龍泉窯①		C
			景德鎮①		景德鎮①	漳州窯①	龍泉窯② 景德鎮③	中国産①	景德鎮① 閩江上流域①	景德鎮①	龍泉窯②		景德鎮① 漳州窯①	B
						龍泉窯①	龍泉窯① 景德鎮①	龍泉窯③ 景德鎮① 閩南沿海窯①	龍泉窯② 漳州窯③	龍泉窯①				A

第80図 中世の磁器出土分布

(○の中の数字は出土点数)



第81図 古代～中世の出土遺物（4）

第20表 古代～中世の出土遺物観察表(1) (土師器・須恵器)

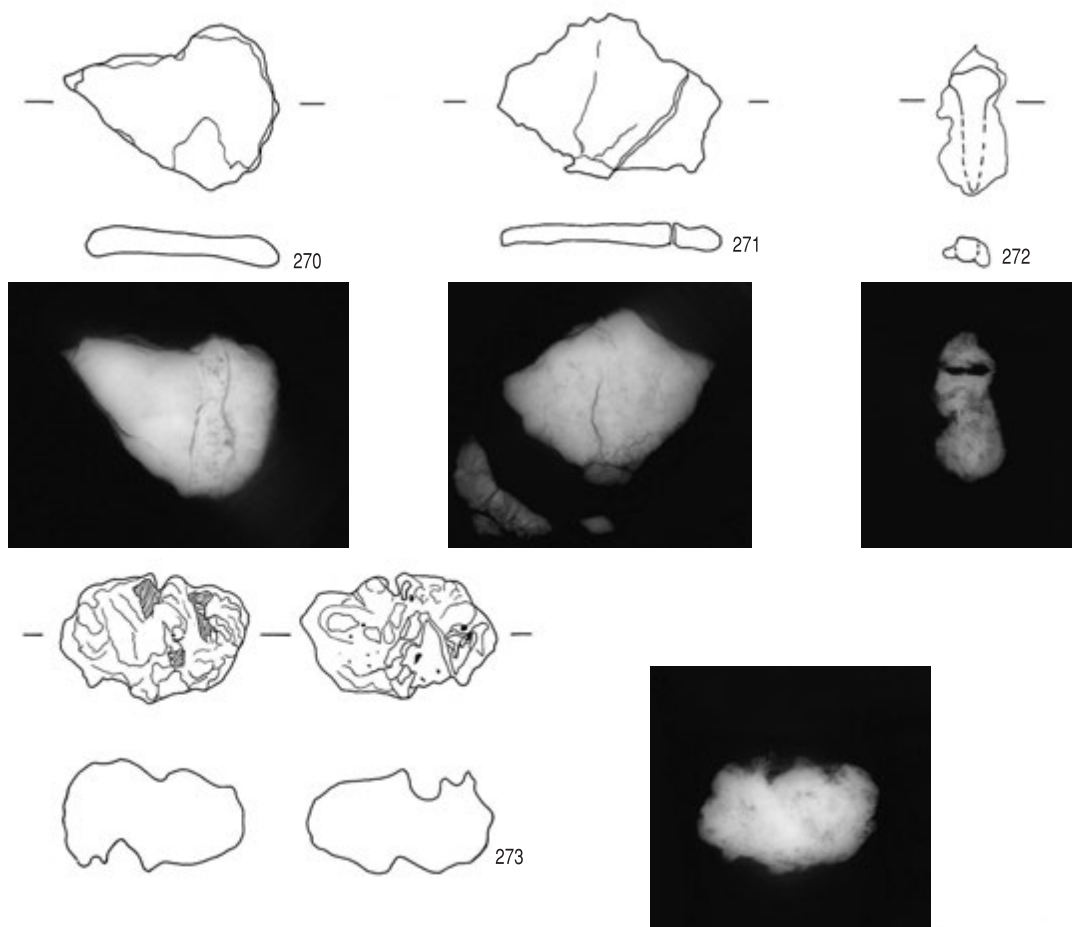
挿図 番号	遺物 番号	種類	器種	出土区	層位 遺構	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		焼 成	調整		備考						
										外面	内面		外面	内面							
第 78 図	225	土師器	碗	D-9	一括	口縁部	10.8	—	3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ハ	ケ	ハ	ケ					
	226	土師器	碗	E-7	Ⅲ a	口縁部	17.6	—	4.7	浅黄橙	浅黄橙	良	ナ	デ	ナ	デ					
	227	土師器	碗	G・H-19	Ⅲ a	口縁部	8	—	—	浅黄橙	浅黄橙	良	ハ	ケ	ハ	ケ					
	228	土師器	碗	D-9	Ⅱ	口縁部	12.4	—	—	浅黄橙	浅黄橙	良	ハ	ケ	ハ	ケ					
	229	土師器	碗	D-9	一括	底部	—	6	—	浅黄橙	浅黄橙	良	ナ	デ	ナ	デ					
	230	土師器	碗	D-10	表土層一括	底部	—	6.6	—	浅黄橙	浅黄橙	良	ナ	デ	ナ	デ					
	231	土師器	碗	—	表土層一括	底部	—	—	1.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ナ	デ	ナ	デ					
	232	土師器	皿	イモ穴	F-19	底部	—	7.4	—	にぶい黄橙	浅黄橙	良	ハ	ケ	ハ	ケ	記号あり(底)				
	233	土師器	皿	A-14	一括	底部	—	7.2	1.7	灰黄	灰黄	良	ナ	デ	ナ	デ	底部回転系切り				
	234	土師器	皿	D-9	Ⅱ	底部	—	8.8	0.9	橙	にぶい橙	良	糸	切り	ハ	ケ	底部回転系切り				
	235	土師器	皿	—	—	底部	—	6.2	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	糸	切り	ハ	ケ	目	底部回転系切り			
	236	土師器	皿	E-9	表土層一括	底部	—	7.2	—	明黄褐	明黄褐	良	糸	切り	ハ	ケ	目	底部回転系切り			
	237	土師器	皿	G-19	Ⅲ a	底部	—	7	—	浅黄	浅黄	良	糸	切り	ハ	ケ	目	底部回転系切り			
	238	土師器	皿	—	—	底部	—	7.2	—	にぶい褐	にぶい褐	良	糸	切り	ハ	ケ	目	底部回転系切り			
239	土師器	甕	G・H-19	一括	口縁部	16	—	5.3	黒褐	橙	良	ハ	ケ	目	ハ	ケ	目	煤付着(外面)			
240	土師器	甕	E-9	Ⅱ	口縁部	22.4	—	6.1	明黄褐	にぶい黄橙	良	ハ	ケ	目	ハ	ケ	目				
241	土師器	甕	12T	Ⅲ a	胴部	—	—	—	にぶい黄橙	明黄褐	良	条	痕	ケ	ズ	リ					
242	土師器	甕	C-11	Ⅲ a	胴部	—	—	—	にぶい褐	にぶい橙	良	条	痕	条	痕						
第 79 図	243	土師器	内黒碗	C-10	一括	口縁部	14.2	—	—	浅黄橙	黒	良	ヘ	ラ	ミ	ガ	キ				
	244	須恵器	—	H-19	一括	胴部	—	—	—	灰	灰白	良	格子	叩	キ			条痕状当て具痕			
	245	須恵器	—	—	表土層一括	胴部	—	—	—	灰黄	黄灰	良	条	痕	条	痕			条痕状当て具痕		
	246	須恵器	—	D-11	Ⅱ	胴部	—	—	—	褐	灰黄	良	格子	叩	キ			条痕状当て具痕			
	247	須恵器	甕	A-10	一括	口縁部	—	—	—	灰	灰	良	格子	目状の叩	キ			ハ	ケ	目	榊万丈窯産
	248	須恵器	捏鉢	D-9	表土層一括	口縁部	—	—	—	灰	灰	良	ナ	デ	ナ	デ	条	痕			
	249	須恵器	搦鉢	D-16・17	一括	胴部	—	—	—	浅黄	浅黄	良	ナ	デ	ナ	デ	条	痕			
	250	須恵器	搦鉢	—	表土層一括	底部	—	8.6	2.3	灰黄	灰黄	良	ナ	デ	ナ	デ	条	痕			

第21表 古代～中世の出土遺物観察表(2) (陶磁器)

挿図 番号	遺物 番号	種類	器種	部位	出土区	層位 遺構	胎土	釉 (薬)	露胎	焼 成	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考		
第 80 図	251	閩南沿海窯系白磁	皿	口縁部	—	表土層一括	灰白	灰白	口唇付近	良	14.2	—	—	口はげ口縁		
	252	閩南沿海窯系白磁	皿	口縁部	A-12	一括	灰白	灰白	無	良	13.8	—	—	玉縁口縁		
	253	閩江上流域白磁	皿	口縁部	B-11	一括	灰白	灰白	口縁部下位以下	良	8.6	—	—			
	254	中国産・白磁	皿	口～底部	B-12	一括	灰白	明緑	灰	口唇・底部付近	良	—	5.6	2.8	口はげ口縁	
	255	同安窯・青磁	皿	口～底部	C-14	一括	灰白(小空洞あり)	灰オリーブ	無	良	—	—	5.6			
	256	閩江上流域白磁	高台付皿	底部	—	表土層一括	灰白	灰白	底部付近	良	—	3.6	—			
	257	龍泉窯・青磁	碗	口縁部	D-13	表土層一括	黄灰	灰オリーブ	無	良	12	—	—		劃花纹(内)	
	258	龍泉窯・青磁	碗	口縁部	—	表土層一括	灰白	灰オリーブ	無	良	12	—	—		鎚蓮弁文(外)	
	259	龍泉窯・青磁	碗	胴部	D-4	Ⅲ a	灰白	明緑	灰	無	良	—	—	—	鎚蓮弁文(外)	
	260	龍泉窯・青磁	丸小皿	口縁部	—	表土層一括	灰白(砂粒混)	オリーブ	灰	無	良	9.2	—	2.1	鎚蓮弁文(外)	
	261	龍泉窯・青磁	碗	口縁部	D-8	Ⅱ	灰白	灰オリーブ	無	良	15.4	—	—		線劃蓮弁文(外)	
	262	景德鎮・青花	碗	口縁部	C-16	一括	灰白	灰白	無	良	11	—	—		蓮子碗	
	263	景德鎮・青花	碗	底部	G-19	一括	灰白	明青	灰	無	良	5.2	—	3.7		蓮子碗
	264	景德鎮・青花	皿	口縁部	C-11	一括	灰白	明緑	灰	無	良	22	—	—		
	265	景德鎮・青花	皿	底部	—	—	灰白	灰白	無	良	—	—	—		碁笥底	
	266	景德鎮・青花	皿	底部	B-7	一括	灰白(やや粗)	明オリーブ	灰	無	良	—	5	—		碁笥底・芭蕉文(外)
	267	漳州窯・青花	碗	底部	E-18	一括	灰白	灰白	無	良	—	7.2	—			蓮子碗
268	漳州窯・青花	皿	底部	C-14	一括	灰白(やや粗)	灰白	無	良	—	4	0.7			碁笥底・見込みに寿の文字	
269	—	—	埴塼	口縁部	—	表土層一括	灰	オリーブ	黒	無	良	9.4	—	3.9		外面が溶解

金属製品 (第82図 270~273)

金属製品は4点を図化した。270, 271は鉄製の鍋である。断面図からわずかに弯曲しているのがわかる。272は鉄製の釘である。厚い錆に覆われ、全体形は不明である。273は椀形鉄滓である。表面は凹凸を成し、丸みを帯びている面が底部にあたる。木炭痕があり、煤が確認された。至る所に気泡が見られる。この他に、銅滓が1点出土したので図版に示した(図版19)。直径は2cm程で、表面は緑青に覆われている。



第82図 古代~中世の出土遺物 (5)



第22表 古代~中世の出土遺物観察表(3) (金属製品)

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	材質	部位	全長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第82図	270	鍋	D-8	II	鉄	胴部	5.7	4.2	1.1	43.07	
	271	鍋	F-7	III a	鉄	胴部	—	—	0.5	35.55	
	272	釘	G-18	III a	鉄	—	4.3	2.3	2.2	13.17	
	273	椀形鉄滓	E-10	III a	鉄	—	4.9	3.8	2.9	47.69	煤付着



## 第6節 近世の調査

近世の遺構と考えられる溝状遺構が、3条検出された。調査区の西側に1条、南側には2条が集中して検出された。古道は、調査区南部を横切るように1条検出された。調査区は高低差が3mあり、東部へ向かって緩やかに傾斜している。遺構も全体的に傾斜に沿っている。そのほかに、ピットが1基検出されている。このピットには古銭と礎石が伴って検出された。遺物としては、近世の薩摩焼や国内産の陶器が出土した。薩摩焼は土瓶や羽釜、播鉢などが主であるが、どれも小片で完形品はなかった。

### (1) 遺構

近世の遺構は溝状遺構3条、古道1条、古銭を伴うピット1基である。この内、東西に走る古道と南北に走る溝状遺構2は、B-12区でほぼ垂直に交わっている。(第83図参照)

#### 溝状遺構1 (第85図)

本遺構は、C~G-16~18区から検出された。調査区の最標高地から、北へ緩やかに傾斜するように下方へ続いている。検出された長さは約40m、幅が約1mである。埋土は上部が黒褐色土、中部から下部が暗緑色土である。遺物は黒曜石のフレークの他に、近世の薩摩焼や磁器が出土している。いずれも小片であり、図化は行わなかった。

#### 溝状遺構2・3 (第83図)

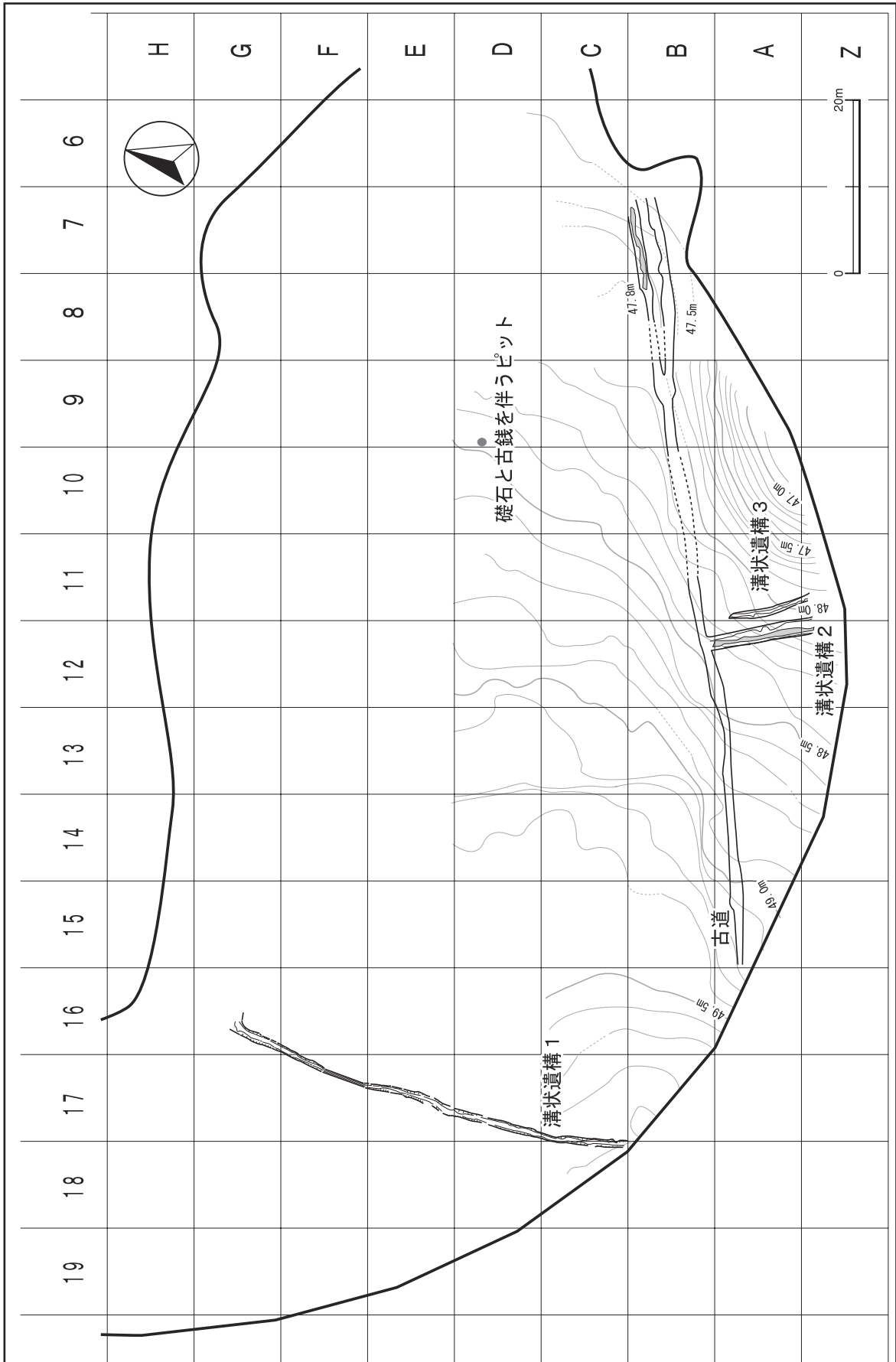
溝状遺構2はA-12区で検出された。ほぼ南北に走っており、B-12区で古道と交わる。検出された長さは約12m、幅約2m、深さ約40cmであった。埋土は茶褐色土と黄褐色土の2層から成る。また、上面の茶褐色土層からは同一方向に約11mの硬化面が走っていた。遺構配置図のスクリントン部がそれにあたる。本遺構は、Z-12区で切られているが、調査区外へ南下しているものと考えられる。溝状遺構3も同じく南北に走り、溝状遺構2に並ぶように位置している。幅は0.5m~1m、深さは約25cmである。

#### 古道 (第83図)

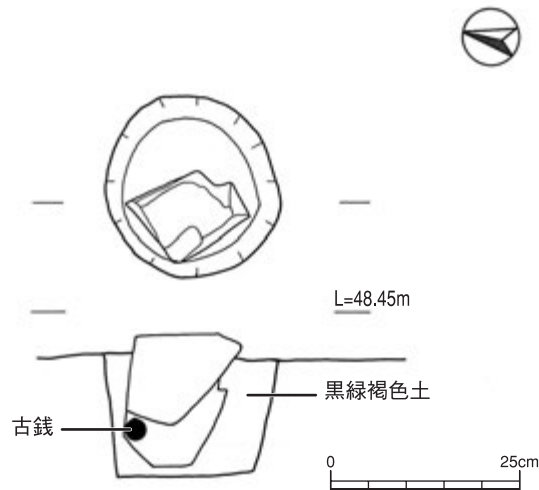
本遺構は東西に走るもので、直線的に約80m検出された。A-15区から東へ向かって緩やかに傾斜している。幅は約1.5m程である。B-9区で2股に分岐しており、その内の一方には硬化面が検出された。B-7区で切られているが、道は東部へ続いていると考えられる。

#### 礎石と古銭を伴うピット (第84図)

この遺構はIV層上面から検出された。直径が23cm、深さは17cmで円形を呈す。深さが浅いが、これは削平されたためと考えられる。ピット内には礎石がある。古銭は礎石の下部から出土した。用途は明らかではないが、地鎮の可能性も考えられる。埋土は黒緑褐色土である。



第83図 近世の遺構配置図



第84図 礎石と古銭を伴うピット

## (2) 遺物

全調査区において多くの近世陶磁器が出土した。近世薩摩焼が主である。多くは表土層で検出されたため、一括して取り上げた。ここでは14点を示す。

### 近世陶磁器 (第86図 274~285)

#### 白磁一皿・猪口 (第86図 274, 275, 279)

274, 275は波佐見焼の白磁碗である。総釉の見込みを蛇の目釉剥ぎしている。17世紀代のものと思われる。279は肥前系平佐焼の猪口である。19世紀のものである。

#### 陶器一皿・蓋 (第86図 276~278, 280)

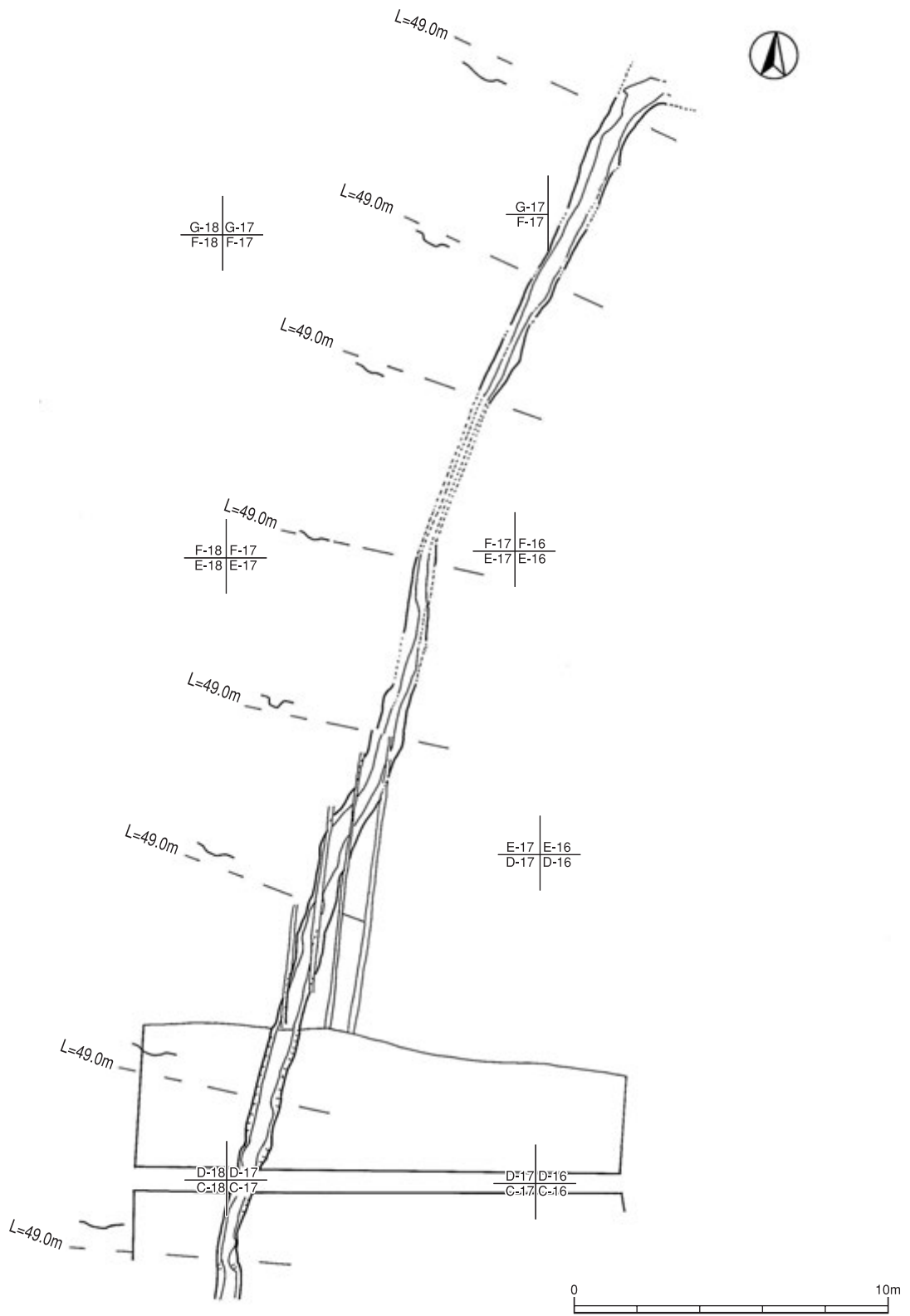
276は龍門司焼で、陶製の碗である。畳付と高台内面が無釉である。277は内野山系陶器の碗である。蓮子碗と呼ばれるもので、外面には銅緑釉が施されている。IV-2類に分類され、17世紀のものである。278は京都産の陶器である。碗と思われるが、定かではない。外面は明黄褐色の釉に覆われ、赤絵が施されている。280は薩摩焼の蓋である。

#### 播鉢 (第86図 281~284)

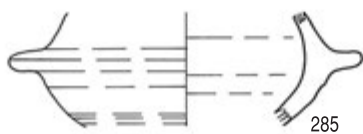
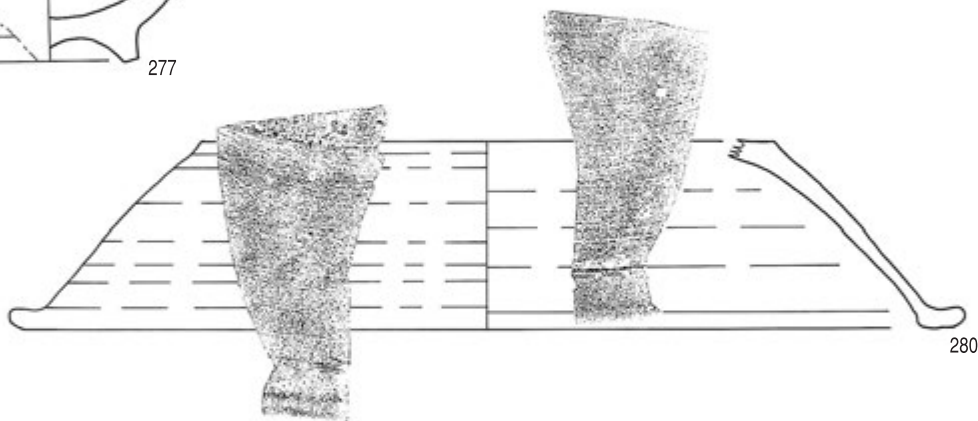
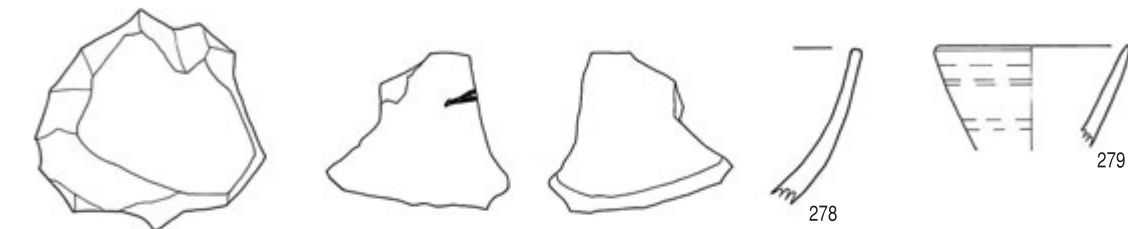
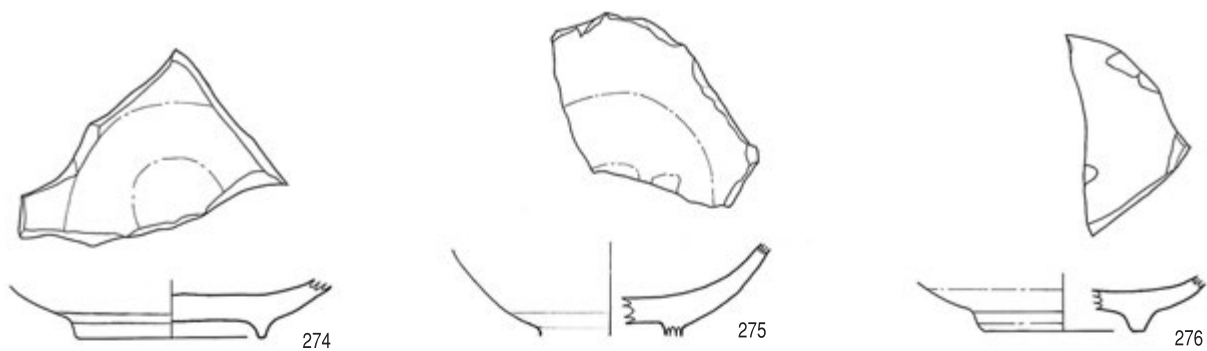
281~284は播鉢である。281は備前焼である。口縁部はやや外反する。口縁部付近は内面に条線が見られ、下部の方にわずかに、鑿痕が確認できる。外面には釉垂れがある。282・283は薩摩焼の播鉢である。282の口縁部は外縁帯が逆L字状に張り出している。283の口縁部は垂直に立ち上がる。外面は中部以下から露胎を呈する。284は胴部で、内面には粗い櫛目が7条1単位で入っている。

#### 羽釜・土瓶蓋・土瓶 (第86図 285~287)

285は薩摩焼の羽釜である。286は堂平窯系の蓋である。外面天井部にボタン型のつまみが付くものである。土瓶類に用いられていたと考えられる。19世紀のものである。同じく287も土瓶である。脚が付いていたかは不明である。19世紀のものである。



第85図 近世の溝状遺構



第86図 近世の出土遺物

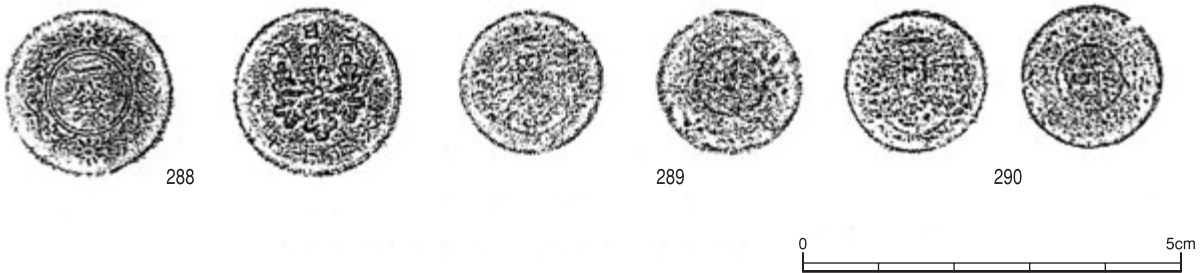
第23表 近世の出土遺物観察表（陶磁器）

挿図番号	遺物番号	種類	器種	部位	出土区	層位遺構	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
第85図	274	波佐見焼・白磁	碗	底部	12T	一括	灰白(砂粒混)	灰 白	無	良	—	5.1	—	見込みは蛇の目釉剥ぎ
	275	波佐見焼・白磁	碗	胴部	—	表土一括	灰白(砂粒混)	灰 白	無	良	—	4	—	見込みは蛇の目釉剥ぎ
	276	龍門司焼・陶器	碗	底部	—	表土一括	灰	灰 白	畳付～高台内	良	—	4.2	1.8	二彩
	277	内野山系陶器	碗	底部	14T	一括	灰 黄 赤	灰 白	高台付近	良	—	4.4	—	銅緑釉(外)
	278	京都産・陶器	—	口縁部	B-7・8	—	浅 黄	明 黄 褐	無	良	10.6	—	—	赤色絵(外)
	279	肥前系平佐焼・白磁	猪口	口縁部	—	表土一括	灰 白	灰 白	無	良	5	—	—	
	280	薩摩焼	蓋	口縁部	D-11	一括	灰	オリーブ黒	無	良	38	—	—	
	281	備前焼	播鉢	口縁部	D-11	一括	赤	黒 褐	無	良	32	—	—	条線
	282	薩摩焼	播鉢	口縁部	ABC-15-16	一括	灰	黒 褐	無	良	—	—	—	
	283	薩摩焼	播鉢	口縁部	—	表土一括	褐 灰	灰 黄 褐	口縁部下位以下	良	—	—	—	
	284	陶器	播鉢	胴部	14T	一括	にぶい 黄	明 赤 褐	無	良	—	—	—	
	285	薩摩焼	羽釜	胴部	D-13	一括	灰	黒 褐	無	良	—	—	—	
	286	薩摩焼	土瓶蓋	口縁部	—	表土一括	赤 褐	黒 褐	無	良	6.8	—	2.1	
	287	薩摩焼	土瓶	口縁部	D-16・17	一括	橙	赤 褐	無	良	6.2	—	—	

第7節 近・現代の調査

銭貨（第87図）

表土中から3点の銭貨が出土した。288は大正時代の1銭の銭貨である。表面に「大日本大正10年」とかかっている。289, 290は昭和時代の1円の銭貨である。289は、錆による劣化で文字の判別が困難であった。290は昭和24年製であることが確認できた。



第87図 近現代の出土遺物

第24表 近・現代の出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層	材質	部位	全長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
第86図	288	銭貨	D-18	一括	青銅	—	2.3	—	1.0	3.50	1銭・大正10年製
	289	銭貨	B-13	一括	青銅	—	2.0	—	1.1	2.77	1円・昭和時代
	290	銭貨	C-12	Ⅲa	青銅	—	2.0	—	1.0	2.68	1円・昭和24年製

## 第8節 調査のまとめ

本遺跡は、旧石器時代の第Ⅰ文化層（ナイフ形石器文化期）、第Ⅱ文化層（細石刃文化期）、縄文時代早期、中期・後期、晩期、古代～中世、近世、近・現代など幅広い年代の複合遺跡である。以下、明確になったことや課題等について各時代ごとにまとめていきたい。

### 1 旧石器時代

#### (1) 第Ⅰ文化層（ナイフ形石器文化）の調査

本時代はナイフ形石器、台形石器や、Ⅵ層から出土した遺物を基準として一括した。ブロックが1基確認されたが、遺跡全体の総出土数としては少量である。ブロック内のフレイクや剥片石器類等の石材の割合をみると、比較的近距离である。薩摩川内市樋脇町の上牛鼻産の黒曜石が約7割を占め、ついで鹿児島市吉野町の三船産の黒曜石が約1割を占める。

#### (2) 第Ⅱ文化層（細石刃文化期）の調査

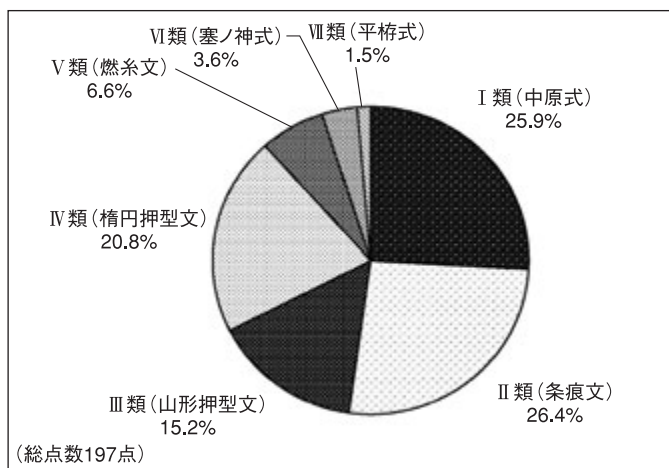
第Ⅱ文化層も礫群1基が確認されたが、出土遺物は少量である。石器群の石材の割合をみると第Ⅰ文化層同様、上牛鼻産の黒曜石が半分以上を占めているが、桑ノ木津留産、針尾産、日東産の黒曜石がみられ、県内原産地及び近隣の石材が増えたことが伺える。

### 2 縄文時代

縄文時代の土器は、Ⅰ類～Ⅸ類土器と縄文時代晩期の土器に分類される。Ⅰ類からⅦ類は早期の土器で、Ⅷ類は中期、Ⅸ類は後期の土器である。

#### (1) 縄文時代早期の調査

Ⅰ類土器は、口縁部から胴部にかけて貝殻復縁による横方向の条痕文が施され胴部は中央下より無文であることから早期中葉の中原式土器に比定できる。Ⅱ類土器は胴部に貝殻条痕を意識したものであると考えられることから条痕文土器である。Ⅲ類土器は器面調整や器形等から縄文時代早期中葉の山形押型文土器、Ⅳ類土器は楕円押型文土器、Ⅴ類土器は捺糸文土器、Ⅵ類土器は塞ノ神式土器、Ⅶ類は平楯式土器である。第88図の縄文時代早期の出土点数の割合からⅠ類土器の中原式土器、Ⅱ類土器の条痕文土器、Ⅲ類土器の山形押型文土器、Ⅳ類土器の楕円押型文土器が全体の約88%であり早期前葉及び中葉の土器である。さらに分布状況からみてもE-9区に集石遺構が検出され、近隣のD-9区北部に楕円押型文土器、中原式土器等が集中して出土している。また、この周辺の調査区からは、後に述べる古代から中世の掘立柱建物跡や竪穴建物跡の遺構や土師器、須恵器等の遺物が多数発見されていることから、生活の選地が同一であることが想定される。



第88図 縄文時代早期の土器出土点数の割合

早期の石器は遺跡全体で出土しており、特に石鏃は南部に集中している。他にはスクレイパー、使用痕石器、石斧、礫器、磨石、叩石、石皿が出土している。石鏃の石材をみると、上牛鼻産黒曜石5点、西九州産黒曜石2点、針尾産黒曜石5点、桑ノ木津留産黒曜石1点、安山岩5点、砂岩2点、珪質頁岩1点、鉄石英1点となり多様な産地、種類の石材を使用していることが分かる。

## (2) 縄文時代中期・後期の調査

G-19区で検出された集石遺構からは、Ⅷ類土器が出土している。Ⅷ類土器は器形や器面調整等から中期の阿高式土器に比定される。深鉢形の土器で指圧の押圧や沈線文が施されて、滑石を含むのが特徴である。また、Ⅸ類土器は外面にケズリ調整の後、細い沈線文等が施されるなどの特徴から後期の南福寺式土器に比定される。

## (3) 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は、集石遺構が2基検出されたが、周辺から遺物は確認されなかった。遺物は遺跡全体からまばらに出土している。土器は深鉢、浅鉢、組織痕土器が存在する。当該期のほとんどの粗製深鉢や、精製浅鉢は入佐式土器に該当する。組織痕土器はE-9から数点確認され、中華鍋風の大型の器形を呈する。黒川式土器に該当する土器も1点のみではあるが確認された。石器は石鏃、スクレイパー、石匙、楔形石器、石斧、礫器、磨石、石皿等が出土しており、特に石鏃は調査区の南西部に散布がみられる。このことから南西部は「狩猟の場」であった可能性が考えられる。さらに石鏃には、上牛鼻産6点、西九州産3点、三船産2点、針尾産2点の各種の黒曜石と、安山岩、砂岩、玉髓等多くの石材が使用されていることが明らかとなった。

## (4) 古代から近世の調査

### ア 遺構について - 竪穴建物を中心に -

古代から中世は、掘立柱建物跡5棟、竪穴建物跡4基、落とし穴3基、土坑3基、焼土域1か所が検出された。ここでは主に竪穴建物跡について他の遺跡の資料や文献等を参考にしながらまとめてみたい。

報告書によっては方形竪穴遺構、方形土坑、方形竪穴建築址など様々な表現が用いられているが、単に住居としてではなく、「倉」、「工房」など他の用途が指摘されているのでここでは「竪穴建物跡」とした。馬淵和雄氏は、遺構の立地について「非日常的な建物であり、穢れなどの禁忌にかかわる可能性があり、川や道路、船着き場、そして海岸といった『無縁』の場に集まる傾向が強い」と述べている(馬淵1993)。また、堂込秀人氏は、鎌倉幕府(得宗)の形成過程や、それにとまなう関東御家人の下向を指摘している。そして、皮革製品などの加工作業を行う「工房」や、流通物資を保管する「穴蔵」としての機能を挙げる(堂込1999)。本遺跡では、遺構の用途を具体的に実証することはできなかった。しかし、科学分析の結果から、2号竪穴建物跡から採取した炭化物がAD1250~1300年の値を示し、鎌倉時代中期~後期に相当する可能性があることがわかった。これは関東御家人が九州に下向した時期と一致する。本遺跡の4基にみられる特徴をまとめると次のようになるので、おおむね県内出土の竪穴建物と同じ様相を持つといえよう。

- ① 同時期と考えられる掘立柱建物跡と併存して検出される。
- ② 深さは20~50cmで、一辺が2~3mであり小規模である。
- ③ 床面の中央付近に炭化物の集中域がある。



- ④ 壁に沿って柱穴が確認される（ただし1号は建物に関係するものかは明らかではない）。
- ⑤ 1号及び2号には入り口の可能性がある硬化面の張り出し部が確認される。
- ⑥ 2号のみ壁帯溝（壁に沿って巡る溝）が確認される。
- ⑦ 遺物は礫が数点出土した。特に3号の堆積土から土師器壺2点、須恵器1点が出土した。
- ⑧ 埋土はブロック状の堆積がみられるので、人為的に埋め戻された可能性がある。

以上の①～⑧の項目は県内のすべての検出例に共通するものではない。例えば⑥の壁帯溝については、近隣では同薩摩川内市成岡遺跡の17・18号住居が挙げられるが県内での検出例は少ない。薩摩半島では、大口市新平田遺跡、阿久根市中之城跡、湧水町山崎B遺跡、大隅半島では鹿屋市新田遺跡で発見されている。また、遺物については⑦で挙げた他に、2号の埋土から粘土塊や土師器の小片、石鏃なども出土している。県内の事例では、床面で遺物を検出する例は少なく、埋土中の遺物がほとんどを占める。⑧のことをふまえると、埋土内の遺物や床面からの出土遺物の検討は建物の構築や廃棄の時期を考える上で重要な課題となるであろう。

近年の発掘では、竪穴建物は鹿屋市根本原遺跡D地点や同益畑遺跡など大隅半島での検出例が徐々に増加している。また、円形のものが南さつま市馬塚松遺跡や小蘭遺跡で認められている。これらは、形態の違いやピット、炭化物、硬化面などの有無、検出面からの深さの違いなどによって異なる機能を持つ可能性がある。下記の表では県内の検出事例を示した。これは三垣恵一氏（現国分中央高校教諭）に協力をいただいて作成したものである。今回の成果によって、中世の研究の進展がはかれれば、望外の喜びである。

### イ 遺物について

本遺跡の出土遺物には土師器、須恵器、陶磁器などがある。中でも中国からの輸入磁器が103点と最も多い。中世の白磁の中で「閩南」や「閩江上流域」と表現したが、閩とは今の福建省辺りを指す言葉である。第89図には福建省周辺の窯と港湾の位置図を示した。この地域周辺に代表的な窯が集中することが理解されよう。

12・13世紀の皿が2点と、15・16世紀の皿が2点出土した。他には、同安窯青磁の皿は1点のみの

遺跡名	所在地	時期	遺構名	検出数	出土遺物	備考	文献
野田島遺跡	出水市	13世紀	竪穴建物跡	1基	土師器・須恵器・青磁	・壁帯溝あり	市(18)2007
中之城遺跡	阿久根市	中世	方形土坑	4基	下層から6個の礫。破砕されており、赤変・磨面がみられる(3)・土師器・青磁ほか	・貼床と壁帯溝あり(1) ・中央に炭化物集中(2) ・3基とも壁沿いにピットがある	市報(4)2003
新平田遺跡	大口市	12世紀中頃～13世紀	竪穴建物跡	7基	土師器・黒色土器A・瓦器・榎万丈系須恵器・青磁・白磁ほか	・全ての壁沿いにピットがあるが、(2)のみ竪穴の外側にもピットがある ・中央部に炭化物集中	市報(20)1997
通山遺跡	さつま町	中世	竪穴遺構	2基	土師器・黒色土器A・青磁ほか	—	町報(3)2001
山崎B遺跡	湧水町	12世紀～16世紀	竪穴建物遺構	1基	土師器・須恵器・青磁	・壁帯溝あり	県報(18)1982
成岡遺跡	薩摩川内市	鎌倉時代	竪穴住居跡	3基	土師器・内黒土師器・白磁	・壁帯溝あり(17)(18)	県報(28)1983
上野城跡	薩摩川内市	12世紀～13世紀	竪穴遺構	5基	土師器・黒色土器A・青磁・白磁ほか	・床面に硬化面あり ・中央部に炭化物集中	セ報(68)2004
霜月田遺跡	薩摩川内市	13世紀後半	竪穴建物跡	4基	土師器・須恵器	・壁帯溝あり(2) ・壁沿いにピットあり(2)(3)(4)	本報告書
檜城跡	いちき串木野市	中世	竪穴建物跡	3基	床面から木炭	・ピットあり	未刊
安茶ヶ原遺跡	いちき串木野市	中世	竪穴建物跡	1基	滑石製品・土師器・須恵器・白磁	・壁沿いにピットあり	セ報(118)2007
向檜城跡	日置市東市来	14世紀	竪穴遺構	3基	土師器・東播系須恵器・青磁	・柱穴なし(1)(3) ・壁帯溝とピットあり(2)	セ報(129)2008
小中原遺跡	南さつま市金峰	13世紀	竪穴遺構	1基	土師器・陶磁器	・壁沿いにピットあり	県報(57)1991
小蘭遺跡	南さつま市金峰	古代～中世	竪穴遺構	1基	土師器・東播系須恵器・青磁・白磁・炭化材ほか	・礫による配石 ・円形を呈し、張り出し部がある	町報(11)2000
芝原遺跡	南さつま市金峰	中世	竪穴建物跡	6基	炭化物	・1基は焼失	未刊
上水流遺跡2	南さつま市金峰	中世	竪穴建物跡	2基	土師器・青磁	・ピット、焼土あり	セ報(121)2008
持鉢松遺跡	南さつま市金峰	中世前期	竪穴建物跡	1基	土師器・東播系須恵器・瓦器・青磁ほか	・ピットあり	セ報(120)2007
市場遺跡	南さつま市金峰	中世	竪穴状遺構	1基	—	・壁沿いにピットあり ・正方形を呈する	セ報(97)2006
馬塚松遺跡	南さつま市金峰	中世	竪穴状遺構	1基	土師器	・円形を呈する	セ報(97)2006
後迫遺跡	大崎町	古代～中世	竪穴建物跡	1基	多量の軽石 土師器	・正方形を呈する	セ報(66)2003
新田遺跡	鹿屋市輝北	11世紀末～14世紀末	竪穴建物跡	21基	土師器・東播系須恵器・滑石製品・青磁・白磁ほか	・円形を呈する ・壁帯溝あり(5)(10)	町報(2)2005
益畑遺跡	鹿屋市串良	13世紀末	竪穴遺構	4基	壺形土器・土師器・東播系須恵器・白磁・青磁・甕の羽口・鉄滓・灯明皿	・半円状の張り出し部あり(2) ・円形を呈する(1)	町報(11)2005
須家西遺跡	鹿屋市	中世	竪穴遺構	5基	炭化木	—	未刊

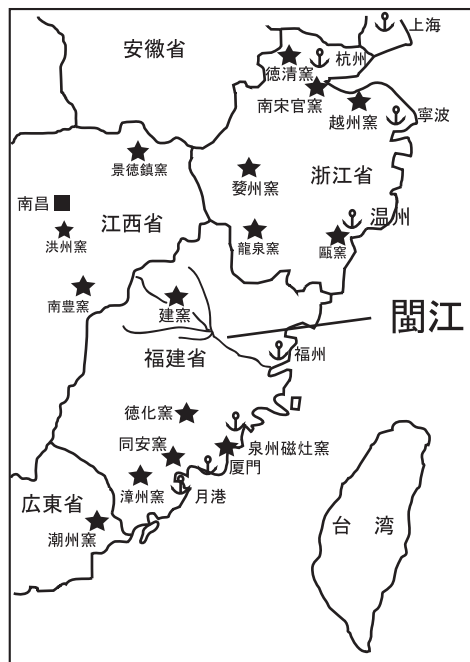
※備考欄の( )の数字は遺構番号を表す

第25表 県内竪穴建物跡検出遺跡一覧表

出土で、13世紀頃のものである。龍泉窯青磁は5点の碗を  
 図化した。内1点はピットからの出土である。Ⅲ類、Ⅳ類  
 にあたるもので、時期は12世紀から15世紀のものまで確認  
 できる。青花には景德鎮と漳州窯産がある。それぞれ碗と  
 皿があり、16世紀代のものである。全て小破片で完形品は  
 みられなかった。

これらの磁器は、5号掘立柱建物跡（A-13区）のある  
 調査区南部に集中している。本遺跡の掘立柱建物跡は、遺  
 構の周辺から龍泉窯や景德鎮の磁器片が出土していること  
 から中世のものである可能性が高いといえよう（第80図）。

近世の遺物では、波佐見焼の白磁碗が2点出土している。  
 他には京都産陶器や内野山系陶器などがある。



第89図 中国窯・港湾位置図

〈参考文献〉論文・概説本・発掘調査報告書

- 堂込 秀人1999 「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究創刊号』南九州城郭談話会編
- 鈴木 弘太2006 「中世竪穴建物の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学第21号』日本考古学協会編
- 大野 亨2001 「竪穴建物とは何か」『掘立と竪穴－中世遺構論の課題－』東北中世考古学会編
- 小野 正敏1998 「15、16世紀の染付碗、皿の分類と染付碗」『貿易陶磁研究 No.1～5』日本貿易陶磁研究会編
- 森村 健一2006 「12・13世紀における閩南沿海窯系白磁碗から龍泉窯系青磁碗へ」『陶磁器の社会史』  
吉岡康暢先生古希記念論集刊行会編
- 鹿児島県教育委員会1983 『成岡遺跡・西ノ平・上ノ平遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
- 大口市教育委員会1997 『新平田遺跡・辻町B遺跡』大口市埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
- 串良町教育委員会2005 『益畑遺跡』串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 輝北町教育委員会2005 『新田遺跡・吉元遺跡』輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002 『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)
- 〃 2002 『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39)
- 〃 2003 『前畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(56)
- 〃 2004 『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(68)
- 〃 2005 『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)
- 〃 2005 『京田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(81)
- 〃 2005 『柳原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(94)
- 〃 2006 『尾ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(98)
- 〃 2006 『市ノ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105)
- 〃 2007 『前山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(115)

## 放射性炭素年代測定結果報告書

(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### (1) 遺跡の位置

霜月田遺跡は、鹿児島県薩摩川内市都町6701-1他（北緯31° 36′，東経130° 19′）に所在する。

### (2) 測定の目的

遺構の年代を明らかにする。

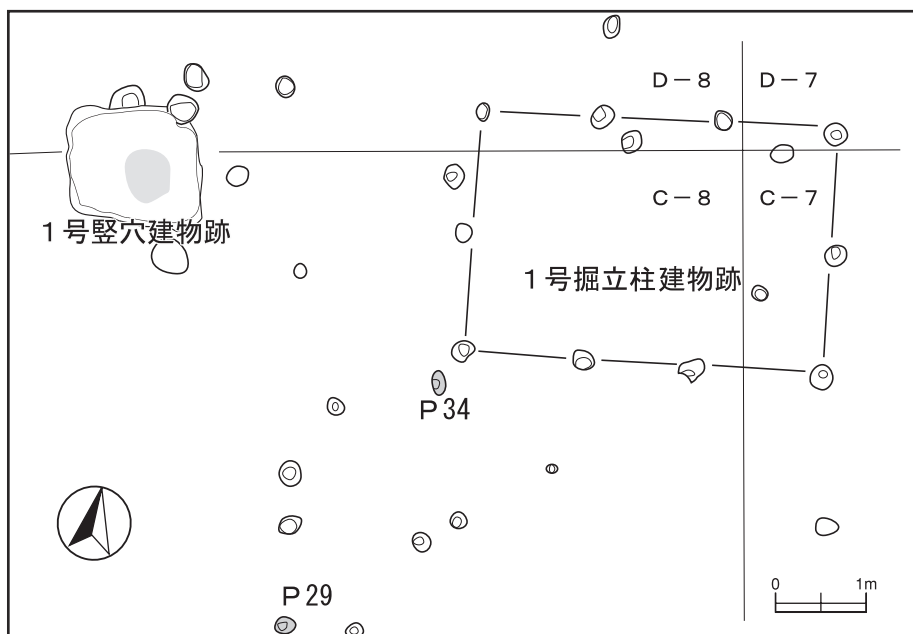
### (3) 測定対象試料

C-8区のピット内(P29)から出土した炭化材(1:IAAA-70702), C-8区のピット内(P34)から出土した炭化材(2:IAAA-70703), E-6区の2号竪穴建物跡から出土した炭化材(3:IAAA-70704), C-12区の2号と落とし穴から出土した貝殻(4:IAAA-70705), 合計4点である。

### (4) 化学処理工程

#### 1) 炭化材の化学処理

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- ② AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理, アルカリ処理, 酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1 Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1 Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1 Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後, 超純水で中性になるまで希釈し, 90℃で乾燥する。希釈の際には, 遠心分離機を使用する。
- ③ 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め, 真空下で封じ切り, 500℃で30分, 850℃で2時間加熱する。
- ④ 液体窒素とエタノール・ドライアイ



炭化物が出土したピット位置

スの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。

- ⑤ 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- ⑥ グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

## 2) 貝殻の化学処理

- ① メス・ピンセットを使い根・土等の表面的な不純物を取り除き、超純水に浸し、超音波洗浄を行なう。
- ② 試料の表面を 1 N の塩酸を用いてエッチング処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈し、80℃で乾燥する。
- ③ 試料を元素分析装置で強熱し、二酸化炭素を発生させる。
- ④ 鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。その後、上記の⑥の工程へ進む。

## (5) 測定方法

測定機器は、3 MV タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時に行う。

## (6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る<sup>14</sup>C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。  
複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。  
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [ (^{14}\text{As} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR} ] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [ (^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB} ] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、

$^{14}\text{A}_\text{S}$  : 試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度 :  $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_\text{S}$ または  $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_\text{S}$

$^{14}\text{A}_\text{R}$  : 標準現代炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度 :  $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_\text{R}$ または  $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{A}_\text{S} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$  (‰) であるとしたときの $^{14}\text{C}$ 濃度 ( $^{14}\text{A}_\text{N}$ ) に換算した上で計算した値である。(1) 式の $^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_\text{N} = ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [ (^{14}\text{A}_\text{N} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R} ] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

$^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [ (\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1 ]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10 較正プログラム (Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(7) 測定結果

C-8区のピット内(P29)から出土した炭化物(1:IAAA-70702)の<sup>14</sup>C年代が930±30yrBP, C-8区のピット内(P34)から出土した炭化物(2:IAAA-70703)の<sup>14</sup>C年代が760±30yrBP, E-6区の2号竪穴建物跡から出土した炭化物(3:IAAA-70704)の<sup>14</sup>C年代が720±40yrBP, C-12区の2号落とし穴から出土した貝殻(4:IAAA-70705)の<sup>14</sup>C年代が680±30yrBPである。暦年較正年代(1σ=68.2%)は, 1が1040~1160ADであり平安時代後期後半, 2が1225~1235AD(2.3%)・1240~1280AD(65.9%)であり鎌倉時代前半, 3が1250~1300AD(61.7%)・1360~1380AD(6.5%)であり鎌倉時代中頃に相当する。また, 4は海産の貝殻であり, 暦年較正する上では海洋リザーバー効果を考慮する必要がある。海洋試料は海洋リザーバー効果によって数百年ほど古い値の<sup>14</sup>C年代が提示されることが多いが, 海洋リザーバー効果は地域的な差が大きく, 地域や時期を絞って基礎データを蓄積し, それに基づいて暦年較正を行なう必要がある。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363  
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389  
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

試料 Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70702 #1824-1	試料採取場所: 鹿児島県薩摩川内市都町6701-1 他 霜月田遺跡 試料形態: 炭化物 試料名(番号): 1	Libby Age (yrBP) : 930 ± 30 δ <sup>13</sup> C (‰), (加速器) = -27.02 ± 0.58 Δ <sup>14</sup> C (‰) = -109.2 ± 3.1 pMC (%) = 89.08 ± 0.31
	(参考) δ <sup>13</sup> Cの補正無し	δ <sup>13</sup> C (‰) = -112.9 ± 2.9 pMC (%) = 88.71 ± 0.29 Age (yrBP) : 960 ± 30
IAAA-70703 #1824-2	試料採取場所: 鹿児島県薩摩川内市都町6701-1 他 霜月田遺跡 試料形態: 炭化物 試料名(番号): 2	Libby Age (yrBP) : 760 ± 30 δ <sup>13</sup> C (‰), (加速器) = -23.56 ± 0.58 Δ <sup>14</sup> C (‰) = -90.3 ± 3.1 pMC (%) = 90.97 ± 0.31
	(参考) δ <sup>13</sup> Cの補正無し	δ <sup>13</sup> C (‰) = -87.6 ± 2.9 pMC (%) = 91.24 ± 0.29 Age (yrBP) : 740 ± 30
IAAA-70704 #1824-3	試料採取場所: 鹿児島県薩摩川内市都町6701-1 他 霜月田遺跡 試料形態: 炭化物 試料名(番号): 3	Libby Age (yrBP) : 720 ± 40 δ <sup>13</sup> C (‰), (加速器) = -30.02 ± 0.77 Δ <sup>14</sup> C (‰) = -85.7 ± 4.8 pMC (%) = 91.43 ± 0.48
	(参考) δ <sup>13</sup> Cの補正無し	δ <sup>13</sup> C (‰) = -95.1 ± 4.6 pMC (%) = 90.49 ± 0.46 Age (yrBP) : 800 ± 40
IAAA-70705 #1824-4	試料採取場所: 鹿児島県薩摩川内市都町6701-1 他 霜月田遺跡 試料形態: 貝殻 試料名(番号): 4	Libby Age (yrBP) : 680 ± 30 δ <sup>13</sup> C (‰), (加速器) = -7.98 ± 0.84 Δ <sup>14</sup> C (‰) = -80.6 ± 3.6 pMC (%) = 91.94 ± 0.36
	(参考) δ <sup>13</sup> Cの補正無し	δ <sup>13</sup> C (‰) = -48.2 ± 3.3 pMC (%) = 95.18 ± 0.33 Age (yrBP) : 400 ± 30

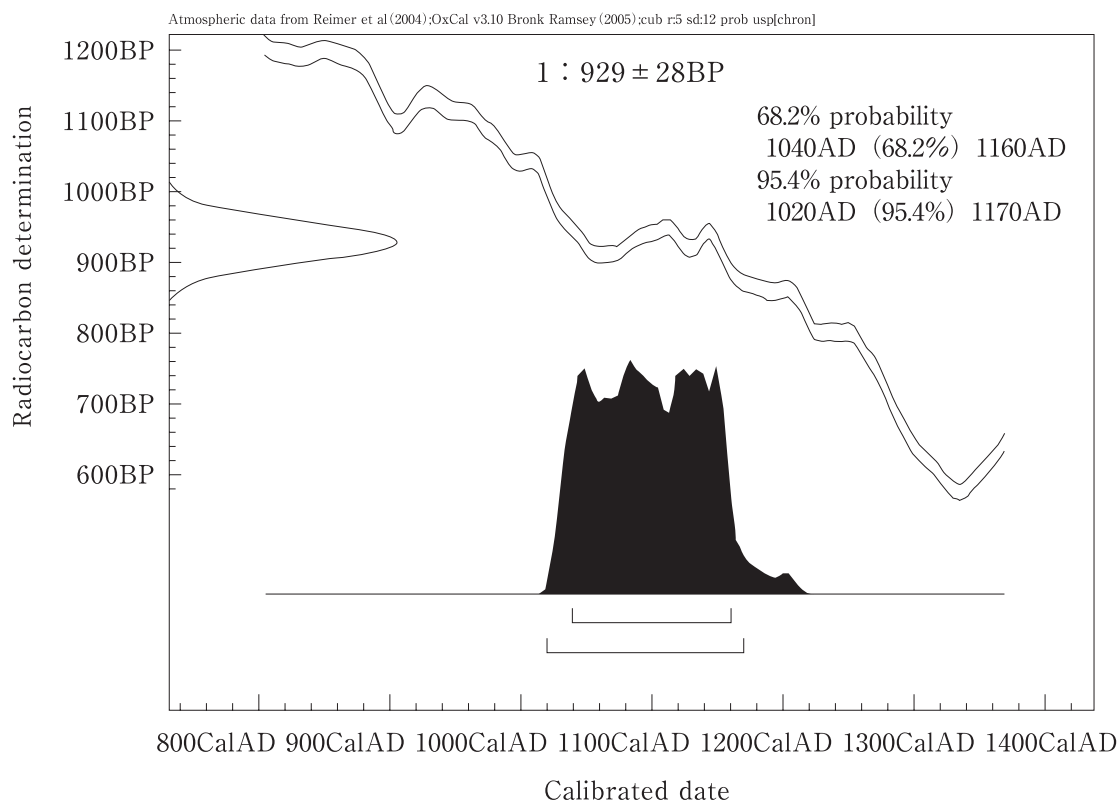
参考資料：暦年較正用年代

IAA

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-70702	1	929 ± 28
IAAA-70703	2	759 ± 27
IAAA-70704	3	719 ± 42
IAAA-70705	4	675 ± 31

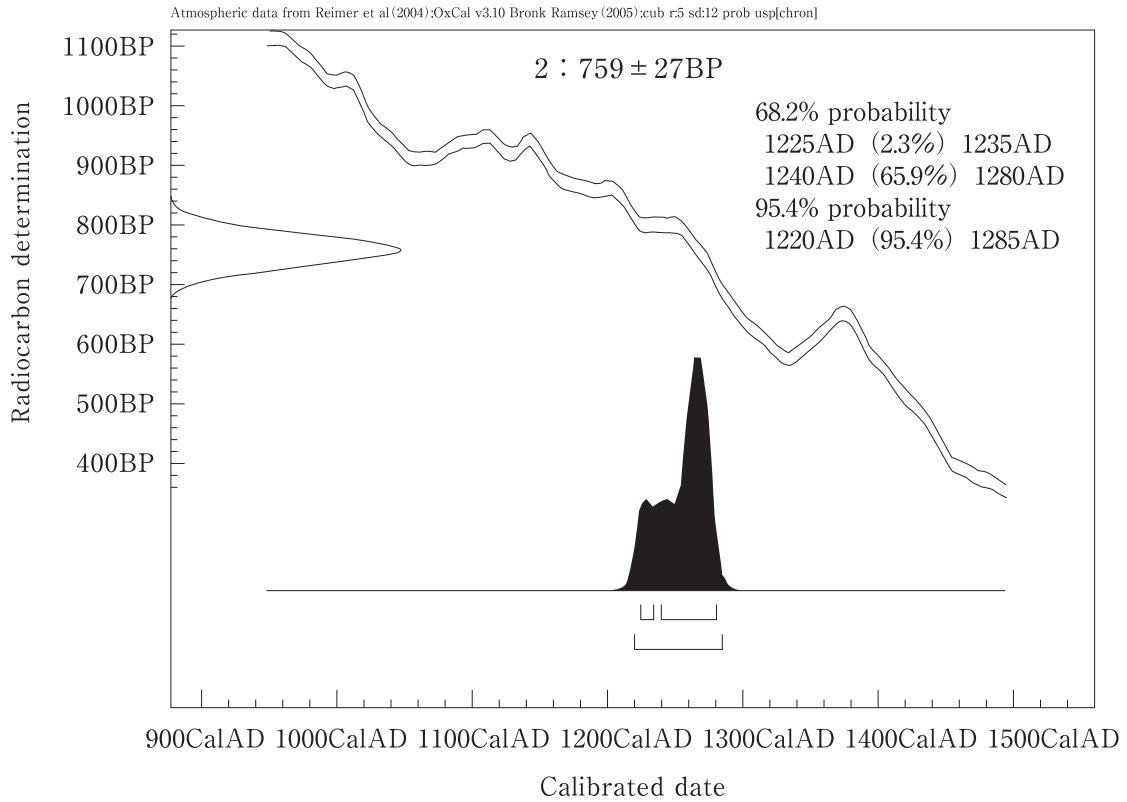
ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



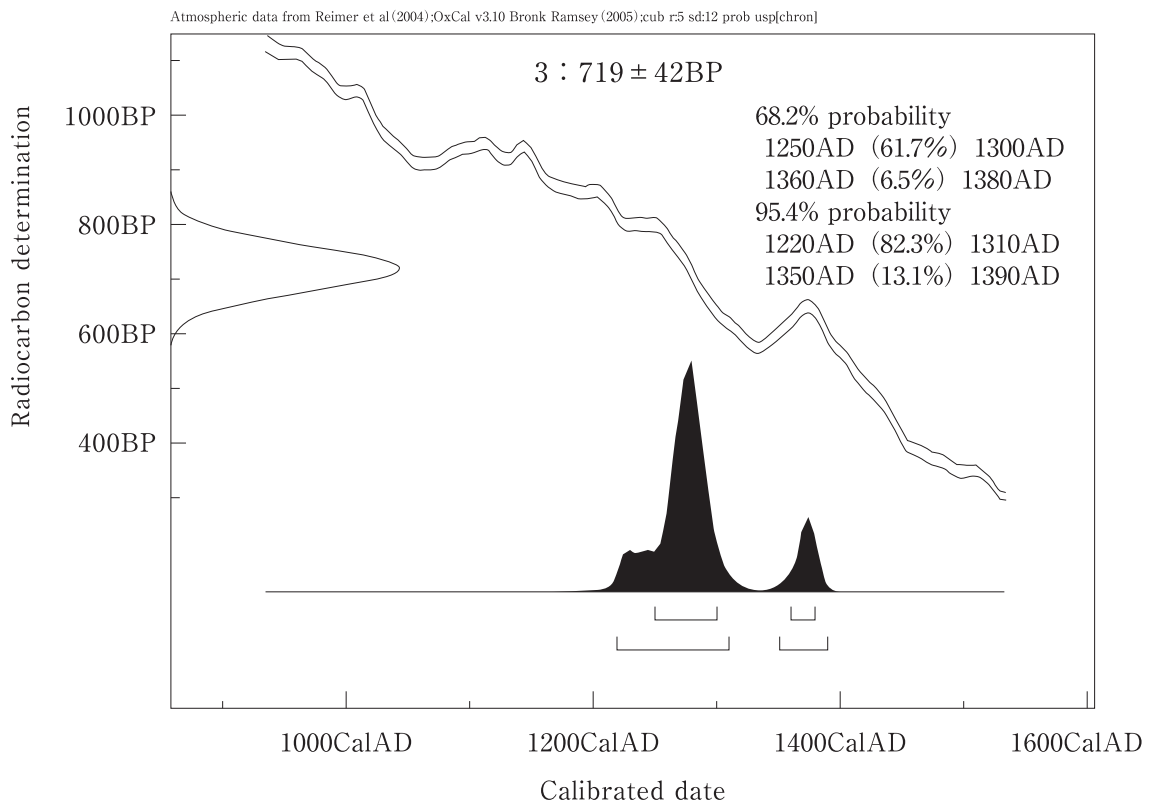
使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10



## 霜月田遺跡より出土した炭化材の樹種

出土した炭化材の試料はステンレス剃刀で横断面，放射断面，接線断面の3方向の断面を割取り，プレパラートに固定して反射照明型顕微鏡で観察，同定をおこなった。以下に同定された分類群を示し，木材解剖学的記載を行う。

No.1 (C-8区 ピット内 (P29)) ナナカマド属

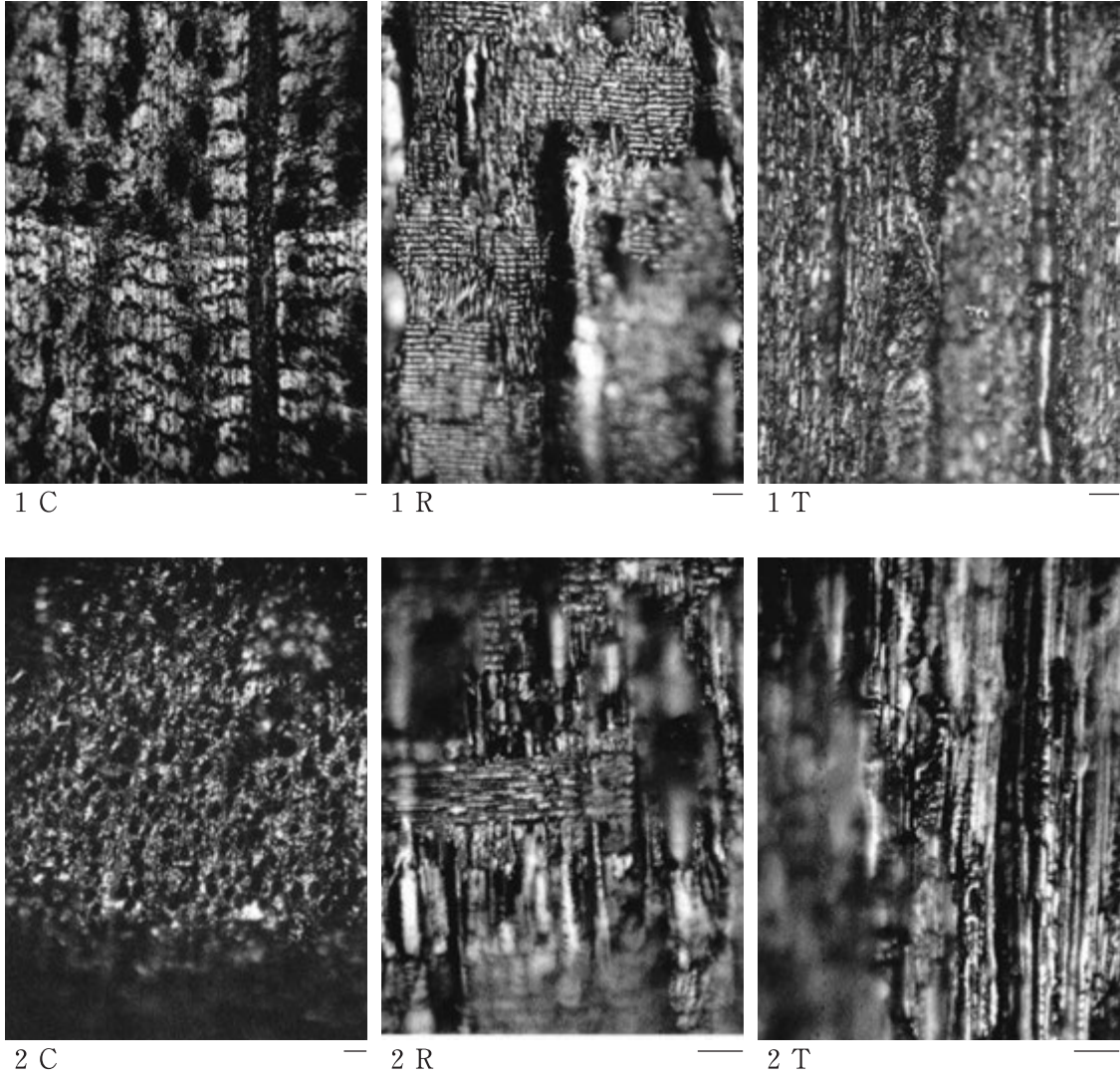
No.2 (C-8区 ピット内 (P34)) コジイ

No.3 (E-6区 2号竪穴建物跡内) コジイ

コジイ (*Castanopsis cuspidata* Schottky) : 年輪はじめに大道管が不連続に並び，その後径を減じながら放射方向に集まって晩材部ではやや角張った小道管が火炎状に配列する放射孔材で，年輪界は明瞭である。道管の穿孔板は単一，放射組織は同性で，単列と集合放射組織の2種類がある。分布は関東以西の暖温帯から亜熱帯である。

ナナカマド属 (*Sorbus*) : 小道管が5,6個斜めに連結して年輪内にほぼ均一にやや密に分布する散孔材で，年輪はじめの道管はやや大きい。道管の穿孔板は単一で内壁には，らせん肥厚がある。放射組織は2細胞幅の紡錘形で10~15細胞高程度，ほぼ同性である。ナナカマド属にはナナカマドのほかアズキナシやウラジロノキなどがあり，いずれも本州から九州の山地に自生する。

※) 本測定は，当社協力会社・古代の森研究舎にて実施した。



図版1 霜月田遺跡出土炭化材の顕微鏡写真  
 1：コジイ（No.2 C-8区遺構内2） 2：ナナカマド属（No.1 C-8区遺構内1）  
 C：横断面， R：放射断面， T：接線断面， スケールは0.1mm

# 都 原 遺 跡

## 第Ⅵ章 都原遺跡の発掘調査成果

### 第1節 調査の成果

#### 1 調査の経過

第Ⅱ章で述べたように、国土交通省九州地方整備局が市来～隈之城間に南九州西回り自動車道川内道路の建設を計画したのに伴い、平成8年8月、市来インターチェンジと隈之城インターチェンジ間の分布調査が実施され、その結果、8か所の遺跡散布地及び確認調査が必要な地点が所在することが判明した。その一つが本遺跡であった。

都原遺跡については、平成12年12月4日から12月7日まで確認調査を実施し、遺跡の範囲や性格を把握した。その結果、約4,000㎡の範囲に縄文時代早期の包含層の残存していることが確認された。本遺跡については、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のため、緊急発掘調査（本調査）を平成14年8月21日から12月13日まで（実働日61日間、調査面積4,000㎡）鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

#### 2 調査の組織

##### 平成12年度（確認調査）

事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上明文
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	黒木友幸
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼	
		第三調査係長	牛ノ濱修
発掘調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	宮田洋一
	〃	文化財研究員	三垣恵一
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	有村貢
	〃	主 査	今村孝一郎

##### 平成14年度（発掘調査）

事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上明文

調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中文雄
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課長	新東晃一
	〃	調査課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼	牛ノ濱修
	〃	第三調査係長	
発掘調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	星野一彦
	〃	文化財研究員	菅牟田勉
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主査	脇田清幸

平成19年度（整理作業及び報告書作成作業）

事業主体者	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所		
整理主体者	鹿児島県教育委員会		
整理責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原景信
整理企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	平山章
	〃	次長	新東晃一
	〃	調査第二課長	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼	牛ノ濱修
	〃	第二調査係長	
	〃	主任文化財主事	宮田栄二
整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	木之下悦朗
	〃	文化財主事	鶴田静彦
整理事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲池俊一

報告書作成検討委員会 平成19年12月17日 宮原所長ほか11名

報告書作成指導委員会 平成19年12月13日 新東次長ほか3名

企画担当者 寺原 徹, 上床 真

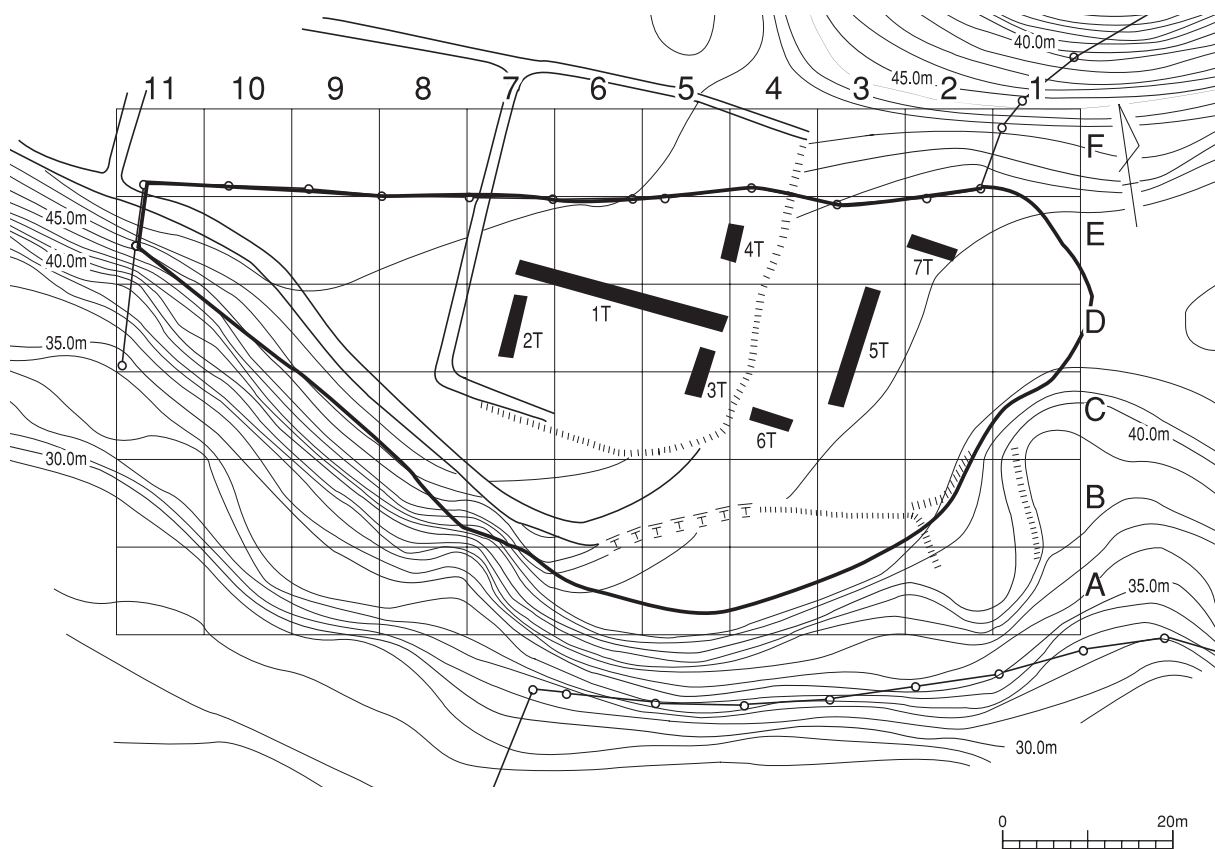
### 3 調査の経緯（日誌抄）

#### 平成12年度確認調査

本調査に入る前に、平成12年12月4日から12月7日まで確認調査を行った。その際、7つのトレンチを設定して確認調査を実施した。

調査区は、標高50mのシラス台地状に位置し、調査区のほぼ中央部に約2mの段差がある。この西側を上段部、東側を下段部として上段部に4か所、下段部に3か所のトレンチを設定して発掘調査を行った。その結果、下段部に設定した第5・6・7トレンチは表土の下がシラス層で遺物包含層は確認できなかったが、第5トレンチからは遺構が確認できなかった。上段部に設定した第1・2・3・4トレンチからは遺物が出土し、第1・2トレンチからは遺構が確認できた。

第1トレンチは、幅2m×長さ30mのトレンチを設定した。遺構としては、近世の溝状遺構を、遺物は変形捺糸文を施した手向山式土器が確認できた。Ⅲa層（アカホヤ）以下の残存を確認した。第2トレンチは幅2m×8mのトレンチを設定した。遺構としては近世の溝状遺構を確認でき、山形押型文土器が出土し、Ⅲa層（アカホヤ）以下の残存を確認した。第3トレンチは、幅2m×長さ6mのトレンチを設定した。遺構は確認できなかったが、遺物は、変形捺糸文を施した手向山式土器が確認できた。Ⅲa層（アカホヤ）以下の残存を確認した。第4トレンチは、幅2m×長さ4mのトレンチを設定した。変形捺糸文を施した手向山式土器が出土した。第5トレンチは幅2m×長さ16mのトレンチを設定した。遺構としては、溝状遺構を確認した。



第1図 トレンチ配置図

## 平成14年度本調査

平成14年 8月

遺跡は、現在まで主に耕作地として利用されている。測量基準は都公民館の敷地内にある水準点（17.766m）を基準として、グリッドは道路幅杭No.E-8054とNo.E-8053を結ぶ基準に東から西へ1・2・3～、南から北へA・B・C～とする10m区画（グリッド）を設定した。未買収地の関係から、当分の間はA～E-1～7区のみが発掘作業を行うことになる。下段部の表土剥ぎに取りかかったが、シラス面を検出した。中世の溝状遺構を検出したため、掘り下げ、地形実測作業を行った。上段部も、下段部に続き表土剥ぎに取りかかる。アカホヤを検出する。

平成14年 9月

下段部は、大型遺構を検出する。使用目的が突き止められず。上段部では、Ⅲ層からは近世の溝状遺構を検出し、掘り下げ、写真撮影、平断面の実測、遺物取り上げを行った。Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ層を検出し、南側（C-5・6・7区）のⅤ層は遺物を取り上げ、写真撮影をする。最下部からは、シラス面を検出し、中世の溝状遺構を検出、掘り下げ、実測、コンタ図を作成した。

平成14年10月

下段部は、大型遺構について判断ができないので、トレンチ掘りを行った。17日まで掘り下げたが、使用目的が判明できないまま掘り下げを中断した。上段部は、Ⅳ、Ⅴ層掘り下げ終了。遺物実測、取り上げを行った。Ⅴ層では、土坑掘り下げ、実測、写真撮影を行った。下層確認トレンチ掘りを行った。

平成14年11月

上段部は、C-5・6・7区、D-5・6・7区北側土層断面実測を行う。15日からは、西側を掘り下げた。Ⅲ層アカホヤ正面まで重機で表土を剥ぎ、以前検出された近世の溝状遺構の続きを検出することができた。結果として、E・F-8・9区まで続いているのが確認された。C-8区では縄文時代早期の集石、E-10区からは中世の道跡が確認された。共に掘り下げ、実測、コンタの作成をおこなった。21日からはⅣ層を、28日からはⅤ層を掘り下げた。下段部で、先月から判断が下せないままであった大型遺構は、7日に造成痕であることが判明し、8日に完掘する。県文化財課の吉永課長、井ノ上文化財主事来跡する。

平成14年12月

上段部のみの発掘作業となる。Ⅴ層上面遺構検出作業及び地形実測を行う。C・D-9区、E-10区の下層確認トレンチ掘りをし、シラス上面まで掘り下げる。E-8・9区土坑掘り、E-11区、道跡の平面実測をする。B・C-8区表土剥ぎを行い、C-8区からは埋納土器（須恵器）が出土する。埋納土器の遠景写真の撮影及び実測を行う。そのまま、シラス上面まで掘り下げる。E-4～10区の土層断面図を作成する。須恵器・集石の断面実測、須恵器取り上げ、遺構内の撤収作業を行い、すべての発掘調査を終了する。

## 整理・報告書作成

平成19年度に整理作業と石器実測委託、報告書作成を行った。

整理作業従事者：坂口裕子、新田洋美、田中周子、徳重貴子、久長律子

## 4 発掘調査の概要

### (1) 発掘調査の方法

発掘調査は、測量基準は、都公民館の敷地内にある水準点(17.766m)を基準とし、道路幅杭No. E-8054とE-8053を結ぶ線を基準に東から西に1・2・3……列、南から北へA・B・C……列として、10m×10m区画(グリッド)を設定した。調査区は、標高約50mのシラス台地にあり、調査区のほぼ中央に約2mの段差がある。この段差を上段部、東側を下段部・最下段部として調査を行った。発掘調査は、当初は未買収地があったため、そこを除いた調査区の伐採、重機による表土の除去を行い、時代ごとに調査し、発掘調査完了と同時に国土交通省へ引き渡した。

### (2) 遺跡の層序

本遺跡の基本的な層序を柱状模式図で示す。

- II b 層 濃暗灰色腐植土である。層厚は10~60cmあった。  
近世、主に江戸時代の遺物包含層である。
- III a 層 黄褐色土をした、約64,000年前に噴出したアカホヤ火山灰の二次堆積層である。層厚は、8~35cmあった。  
古代・中世の遺物包含層である。
- III b 層 黄橙色パミスで、III a層下部にあるアカホヤの軽石層である。南九州を中心に厚く堆積している火山灰である。鬼界カルデラの爆発による幸屋火砕流によって形成された層である。遠くは朝鮮半島南部から関東地方でも確認される超広域火山灰である。南九州最大級の火山爆発で形成された火山灰層である。
- IV 層 暗黄褐色でやや硬質な土層で、層厚は、12~20cmあった。縄文時代早期の遺物包含層であり、本遺跡を特徴づける文化層の一つである。
- V 層 暗褐色土をしており、遺跡全域に安定して堆積している。サツマ火山灰層で、約11,000年前に桜島の形成の時期に形成された層である。噴出源は桜島である。層厚は、20~40cmあった。
- VI 層 暗黄白色土で、遺跡全域に安定して堆積している。層厚は、8~30cmあった。
- VII 層 シラス。始良T n火山灰の噴出物であり、入戸火砕流とも言われ、約24,000年前に始良カルデラから噴出した火山灰である。

表 土
II a 層
II b 層
III a 層
III b 層
IV 層
V 層
VI 層
VII 層

第2図 柱状模式図

シラス 角礫混明黄白色砂質土。  
入戸火砕流(シラス)、  
A Tと表示される。遺跡の基盤層。

※P = パミス = 軽石  
桜島の噴出物はP-1(大正3年)を基準に、新しいものから順に番号を付している。薩摩火山灰は、P-14とよんでいる。



B-8|C-8

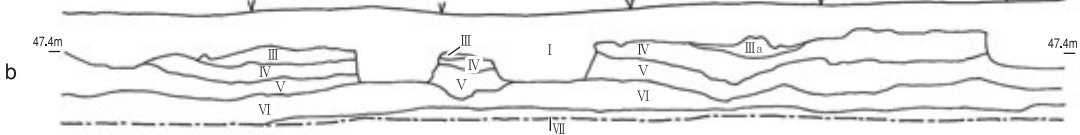
① C-8区 西側土層断面図



D-8

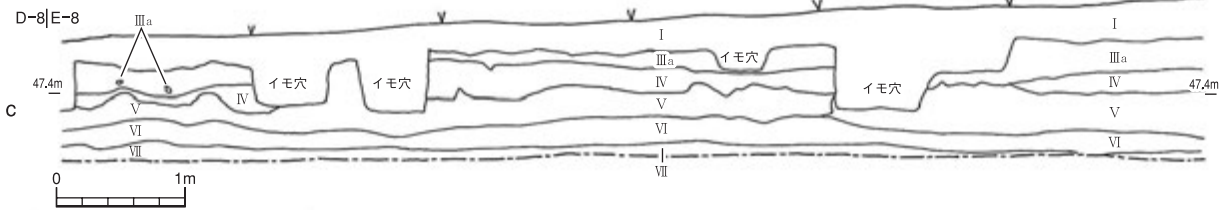
② D-8区 西側土層断面図

D-8|C-8



③ E-8区 西側土層断面図

E-8



(3) 遺跡の地形

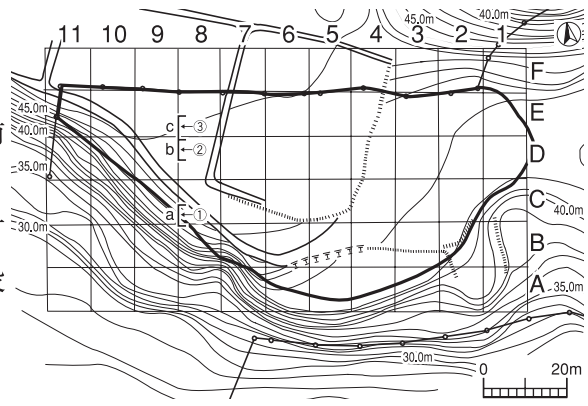
地形は、山の尾根の部分台地状になっており、発掘区域は3段になっている。南部の最下段部、南東部の下段部、北西部の上段部に分かれている。

具体的に最下段部は、A～B-2～6区で、下段部はB-2～8区、C-5～8区の一部、上段部は、C-1～4区、D-1～4、E-1～3、E-4の一部に分かれる。

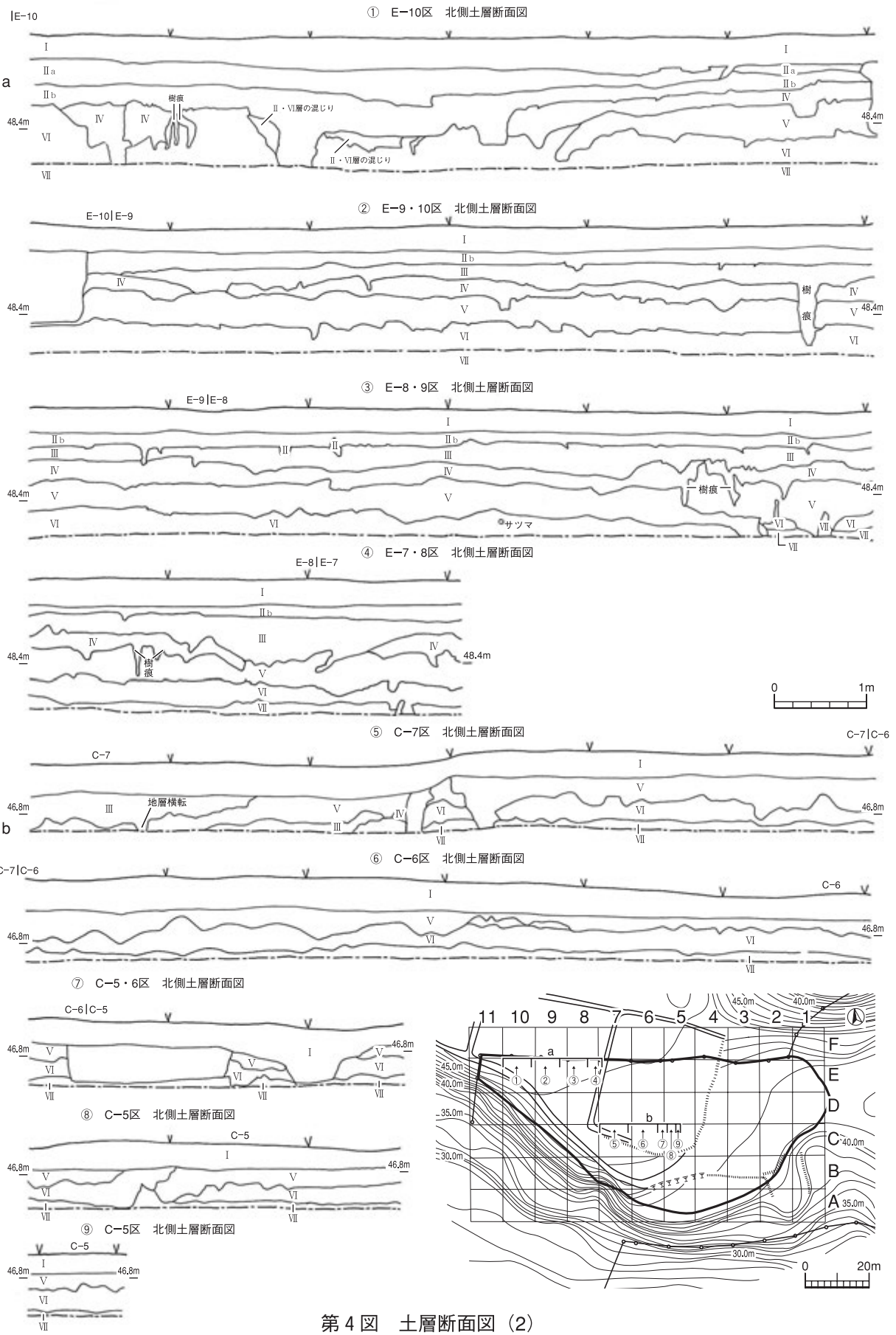
本遺跡の一番標高の高い上段部のE-9～10区では、層が良好の状態に残っていた。しかし、E～D-8区ではイモ穴等で若干削平をうけていた。また、Y字状に農道が入りこんでいるD-5～7区では耕作のためIV層までが削平されたことにより縄文時代早期以後の遺構・遺物が確認できなかった。

下段・最下段部は、さらに削平が著しく、VII層で中世の溝状遺構とともに近代のイモ穴の痕跡が確認された。また、近世の土坑が検出された。遺物もほとんど確認されなかった。E-1区、E、D-2～4区については、シラス採掘業者の重機による掘り込み、攪乱が確認されるなど、近・現代に耕地を造成するためにIV層まで削平をうけたものと考えられる。また、最下部についても、溝状遺構を1条確認し、人工的に山の斜面を削平をした痕跡を確認した。溝状遺構の中から中世の土師器が確認できたので中世に削平を受けたものと考えられる。また、表土の下にVII層を確認したので最下部での発掘を終了した。

縄文時代早期から古代・中世の長い期間にわたり本遺跡の位置づけを理解する上で非常に参考になるのは、D・E-8・9区、C-8区、E-10区、F-11区である。

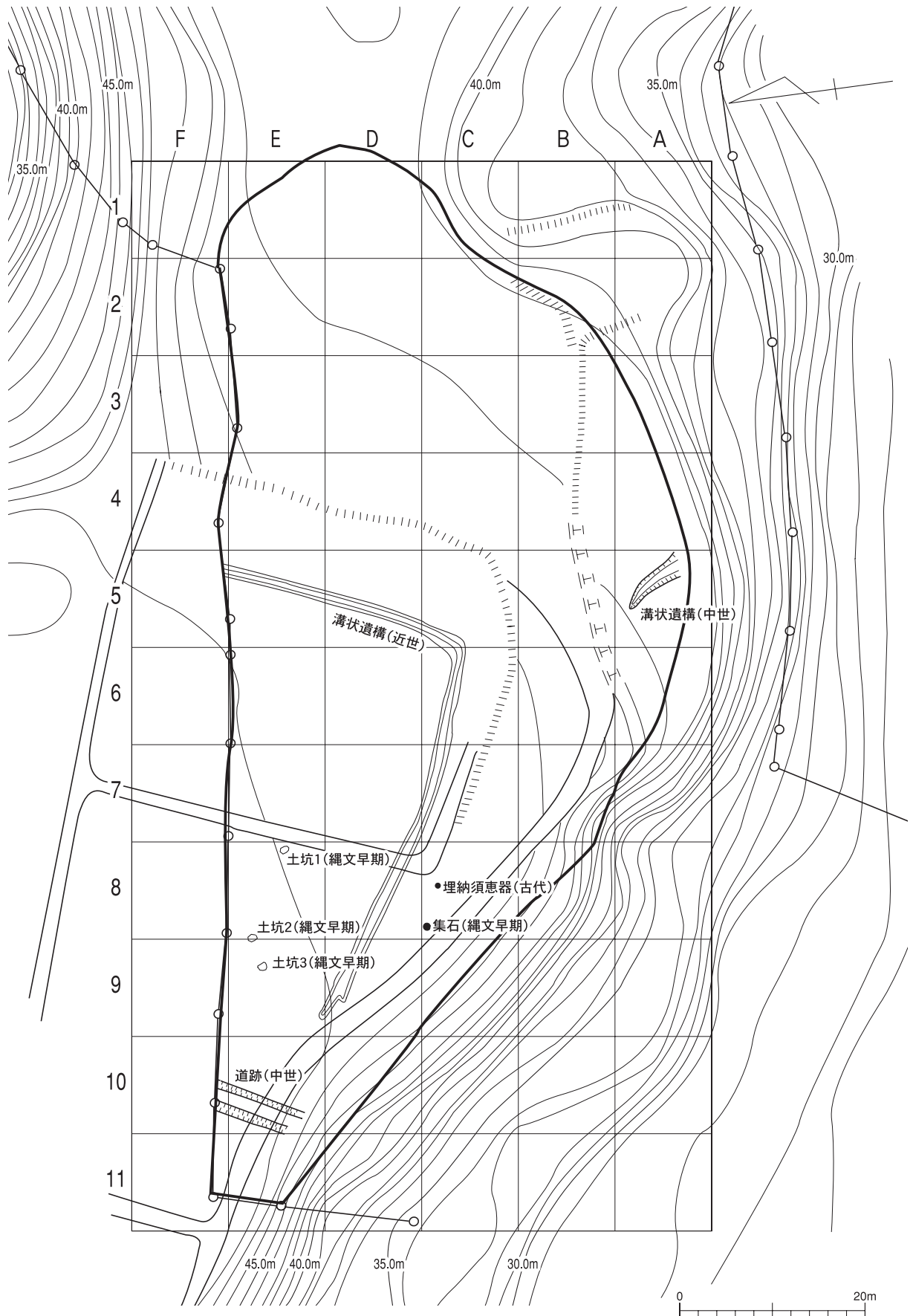


第3図 土層断面図 (1)





第 5 図 周辺地形及び発掘範囲



第6図 全遺構配置図(縄文時代~近世)

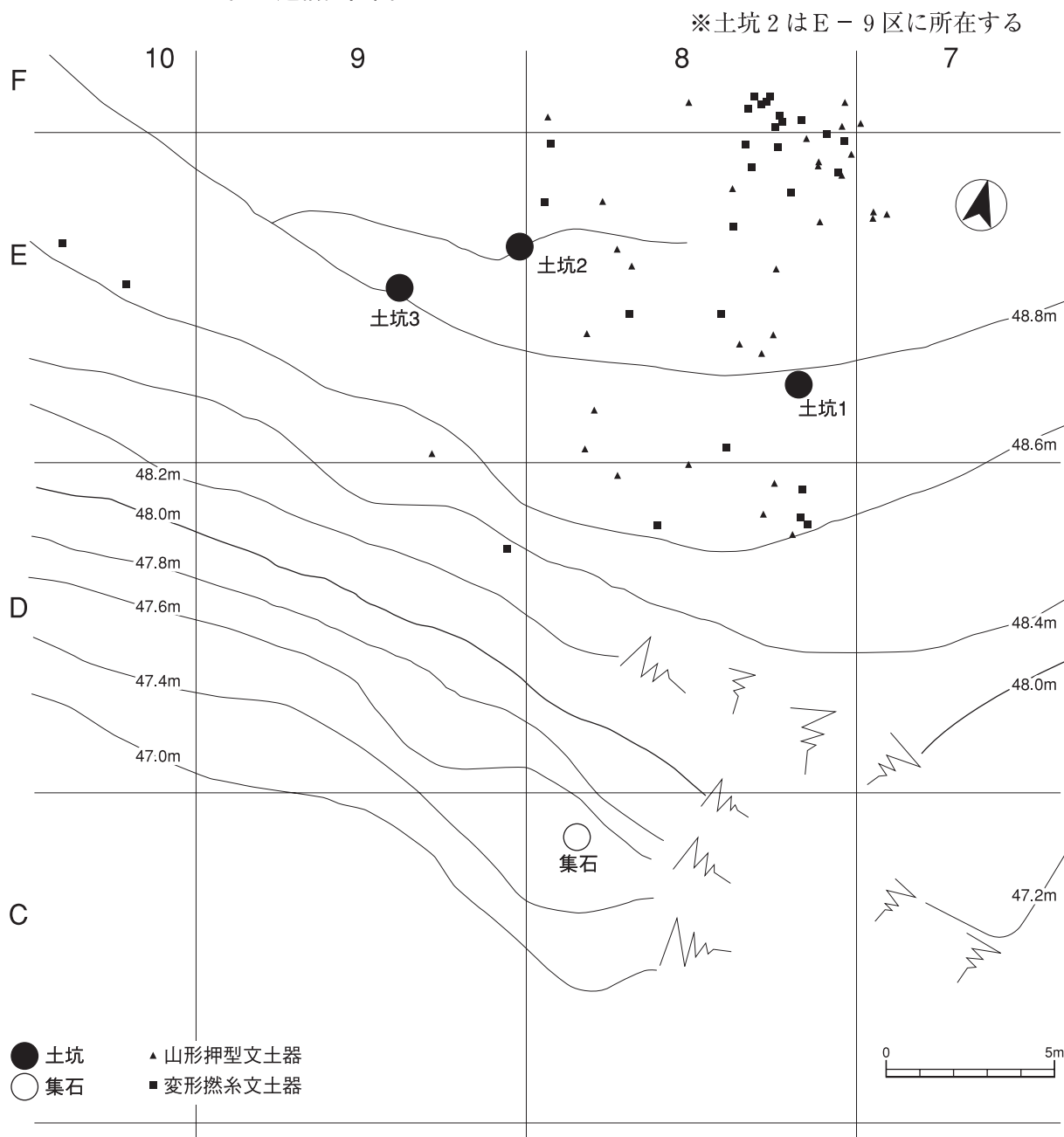
## 第2節 縄文時代の調査

### 1 遺構



第7図 縄文時代早期の遺構配置図

2 C～F－7～10区の遺構配置図

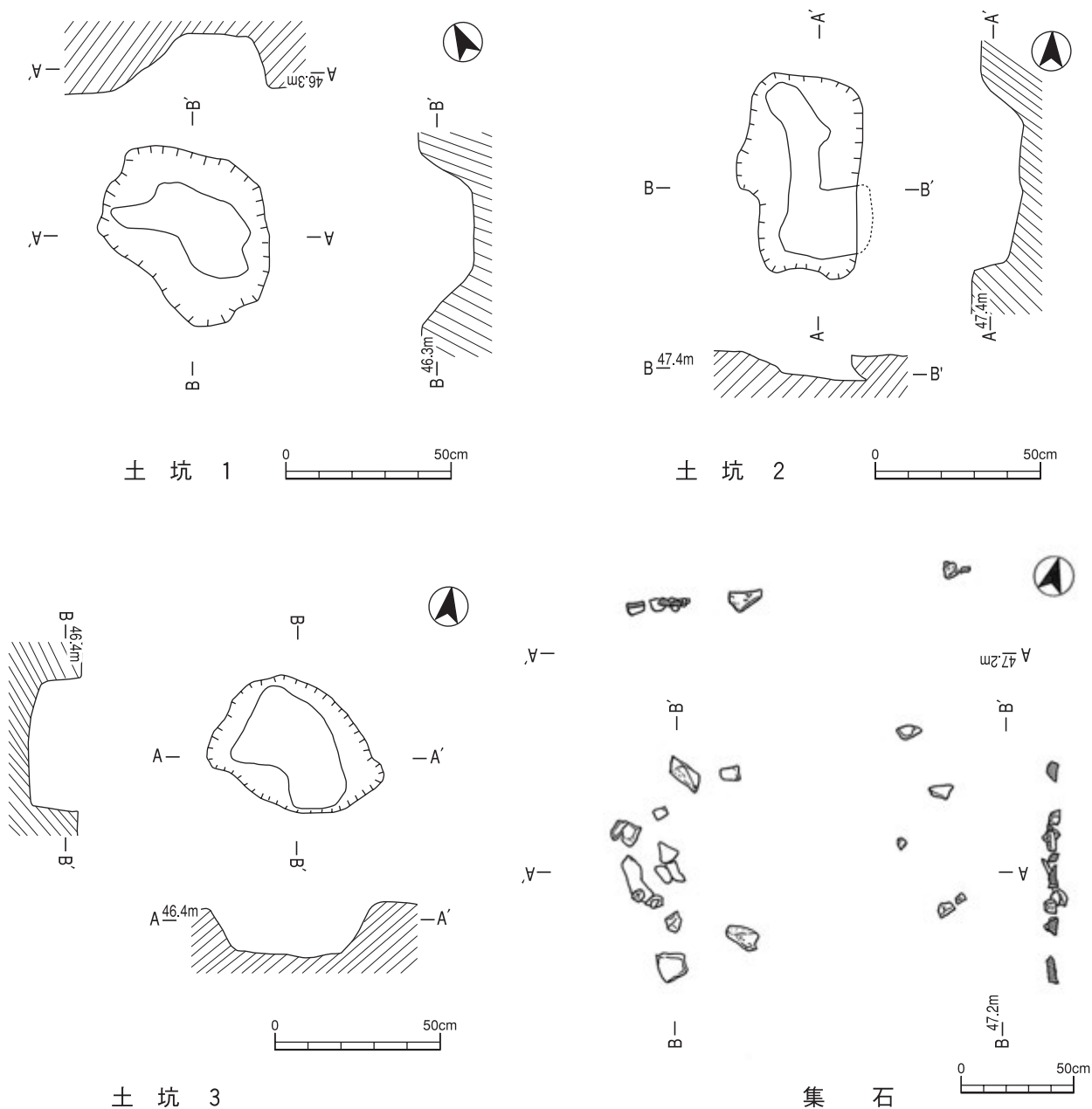


縄文時代早期の遺構は、土坑が3基、集石が1基検出されたが、主に、C～E－8・9に集中している。

遺物は、土坑の周辺で検出されている。縄文時代早期の山形押型文土器や変形撚糸文土器を例にとれば、E・F－7・8区を中心にF－7・8区、E－7～10区、D－8・9区に分布しているのが「第8図」で理解できるであろう。

集石は、谷部付近の崖の上で土坑2から約20m離れた場所に位置していた。

他の調査区では、縄文時代早期の包含層がほとんど確認できなかった。この時代の多くの遺物や遺構は、現在に至るまで、壊され消失したと思われる。



第9図 縄文時代早期の土坑及び集石遺構

### 集石遺構（第9図）

集石遺構は調査区の南端で、一基検出された。拳大の石が10個ほど散在した状態で、掘り込み等は検出されなかった。この集石の東側は、後世に削平あるいは崩落の痕跡があることから、集石の中心は検出された集石の東側に存在していた可能性もある。

### 土坑（第9図）

土坑は、土器や石器が出土した場所に近い部分で3基検出された。土坑1は長径60cm・短径42cmの不定形をしたもので、深さ16cmで楕錐状を呈し床面は平坦である。土坑2は、長径65cm・短径29cmで深さ約13cmの不整形な掘り込みである。土坑3は、長径55cm・短径37cmで深さ約15cmの不整形をしている。

番号	区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	形態	埋土内遺物	備考
1	E-8	60	42	16	不定形	なし	
2	E-9	65	29	13	不定形	なし	
3	E-9	55	37	15	不定形	なし	

第1表 縄文時代早期の土坑観察表

## 2 遺物 (第10図～第22図)

### (1) 土器 (第10図～第15図)

本遺跡のⅣ層では、縄文時代早期の土器が出土した。E、F-8区の境界を中心に変形撚糸文土器が集中して出土している。山形押型文土器も変形撚糸文土器と同様にE、F-8区を中心に、広がりにはD-8区の崖付近まで及んでいる。ただ変形撚糸文土器の出土集中域は、非常に密集しているが、山形押型文土器はE-9区を中心に疎らに出土している。

#### I 類土器 (第10図)

貝殻条痕で器面の調整を施す土器である。5点中4点を図化した。

1～3は、外面の調整は、斜位ないし縦位に条痕を施し、内面の調整は口縁部へ向けて縦位もしくは斜位方向にヘラケズリを施している。器形は、円筒形になると考えられる。胎土は石英が多く黒雲母を含む。

4は、外面の施文は、貝殻刺突文を押しきりに施す土器である。内面の調整は横位にケズリが施されている。

#### II-1 類土器 (第10図～第11図)

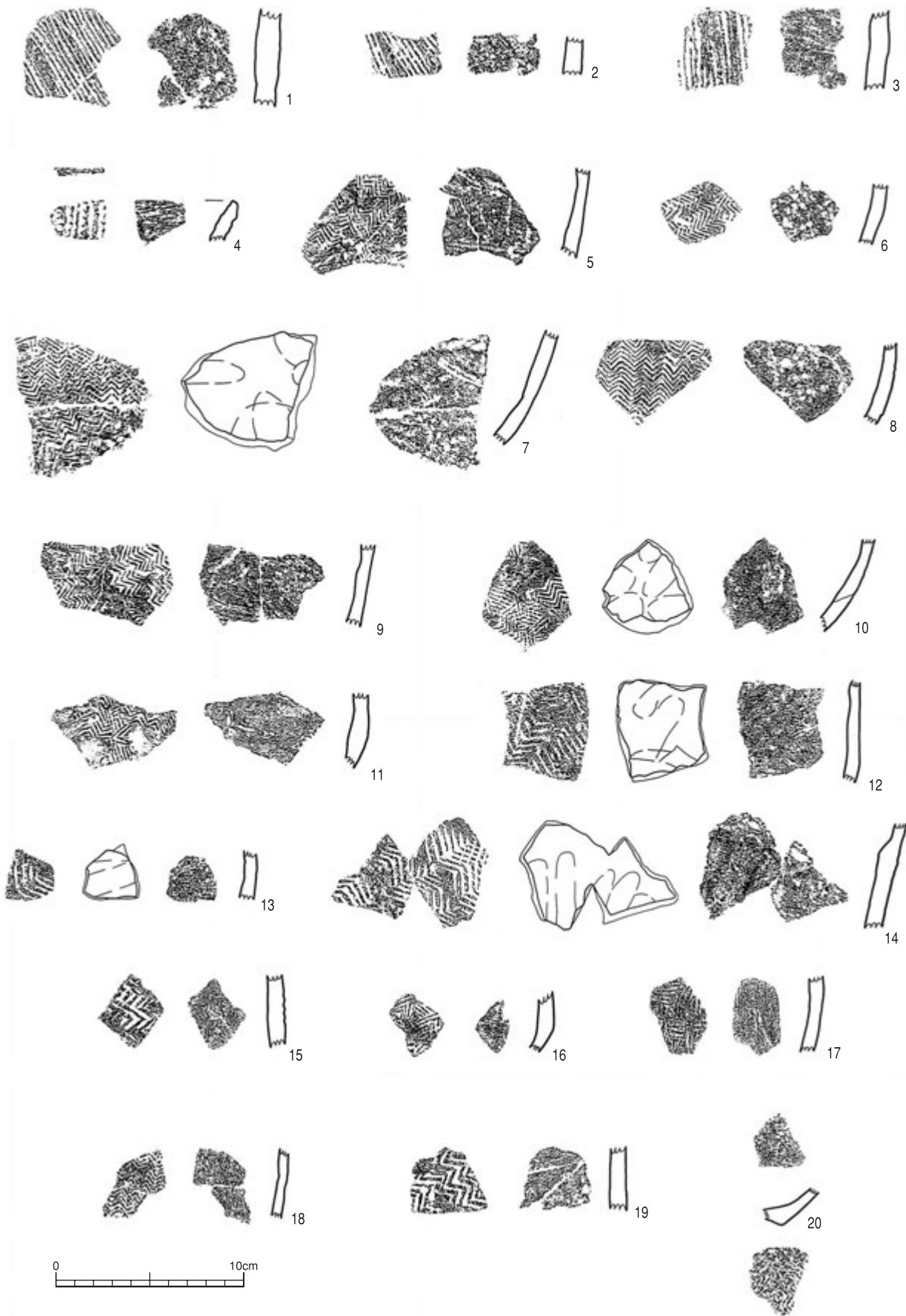
押型文で器面調整を施す土器である。出土した35点中21点を図化した。21・22以外は、山形押型文土器である。

5～11は、押型が同一のものと確認され、胎土や焼成内面調整の状態から同一個体と考えられる。胴部の中位部分から下位部分のものと考えられる。内面の調整は、5・9・11ではヘラケズリ、7・10では指頭圧痕、9・10ではナデ調整を行っている。

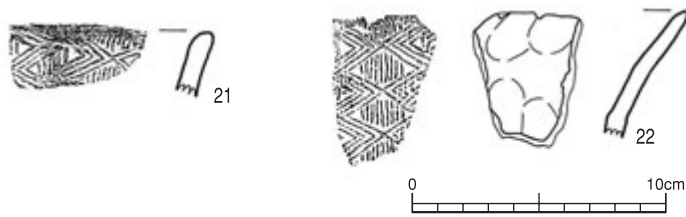
12～14は胎土に金雲母を多量に含む。12・13の内側は指頭圧痕の後、ナデ調整を行っている。外面の施文は、山形押型文が同一のものと考えられるので同時期に作られたものであると考えられる。幅は大きい若干凹凸が浅い。12は他の2つに比べ凹と凸が不明瞭である。内面の調整については、13では横位のケズリが施されている。また、14は指頭圧痕を上方へ引き上げた痕跡が確認される。

15～17は、山形押型の凹凸も明瞭に観察され、山形の幅も大きい。16の外側は、山形押型文が重複することにより、ほぼ平坦な面が3面観察できる。屈曲部は粘土の都合上、下部の器壁が薄くなっている。厚い面と薄い面への境界を調整するため加圧したのと考えられる。17は土器片の中央部にわずかながら屈曲部が確認できる。また外面の施文は、押型文が摩耗・剥離しているためわずかながら押型文が確認できる。





第10図 縄文時代早期のⅡ-1類土器(1)



第11図 縄文時代早期のⅡ-1類土器(2)

18は器壁が極端に薄く、文様は密で小さく、凹凸も浅い。

19の外面の施文は山形押型の凹凸も明瞭に観察され、山形の幅も大きい。一部剥離が観察される。内面の調整はケズリの痕跡が確認できる。

20は底部である。若干上げ底になっ

ており接地面間際まで山形押型文が確認できる。

21・22の外側の押型は、4条の格子文が斜位に、格子の中には縦位9条の直線の文様が施され、山形文と菱形文両者の特徴を併せ持つものである。21は、左側口縁部から1.5cmあたりから1cm程度の押型文の重なり、22は口縁部の左右に押型文の重なりが観察される。

また、21は約4cm幅の円筒形の棒に文様を刻み、縦位に転がして施文されたものと推察される。口唇部には押型は施されていない。内側は、丁寧なナデで調整されているが、22は指頭圧痕が多数観察される。この2つの土器片は、別個体であるものの、施文具が同一のものであることから同時期に製作されたものと考えられる。

## Ⅱ-2類土器(第12図～第14図)

変形撚糸文で器面の調整を施す土器である。出土した78点中33点を図化した。

23・25～48は同一個体と考えられる。23・24は口縁部。26～29は胴部の屈曲部、30～40は口縁部～屈曲部、上位から中位の部分。41～48は屈曲部から底部の中位から下位の部分と考えられる。外面の施文的特徴については、口縁部から底部まで縦位に施文をしており、口縁部の外面及び内面は無文である。調整の特徴については、内面は左から右への工具によるケズリが観察できる。底部付近から口縁部に向けて、工具による掻き上げたケズリ、胴部付近から口縁部までは斜位への工具のケズリの痕跡が観察される。一部縦位のケズリの痕跡も観察された。口縁部付近は横位ないし斜位方向への工具によるケズリがあり、口縁部に近づけば横位方向のケズリ、口唇部付近は左から右へのケズリを指でナデ消した痕跡が観察できる。

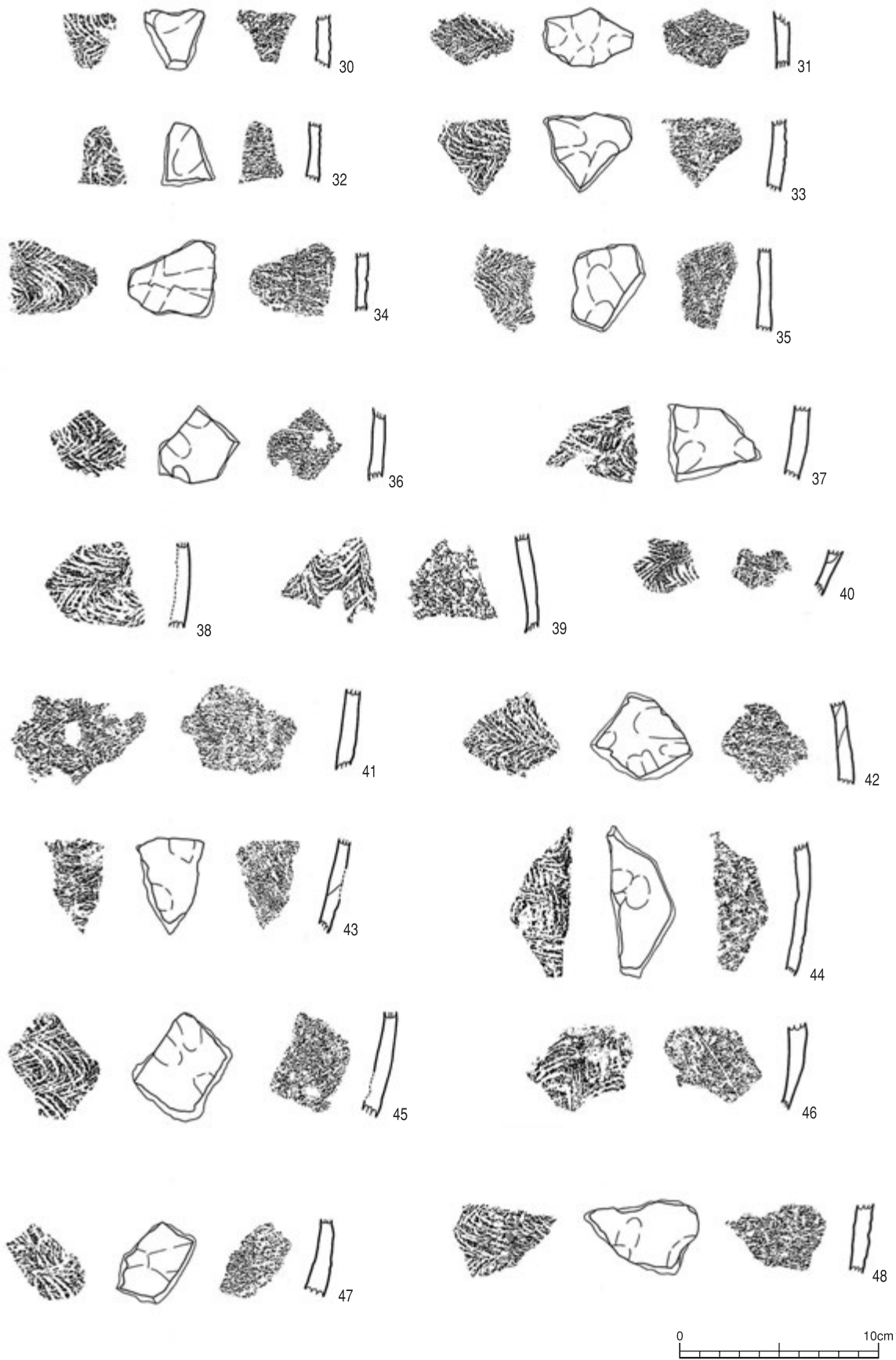
胴部の屈曲部付近には、指頭圧痕が最も多くあり、その他の胴部でも、観察された。そのほとんどが仕上げの段階で工具によるケズリにより不明瞭ではあるがよく注意して観察すれば確認できる程度であった。

器形的特徴としては、口縁部が大きく緩やかに外反する形態を呈し、頸部から胴部上半部付近にかけてすぼまり胴部中部では緩やかに膨らみ、胴部下半部では丸みをもちながらすぼまる形態を呈する土器である。胴部の上位と下位の境界付近は器壁が厚くなり屈曲部が複数観察され、重複する部位も確認される。全体形は不明である。

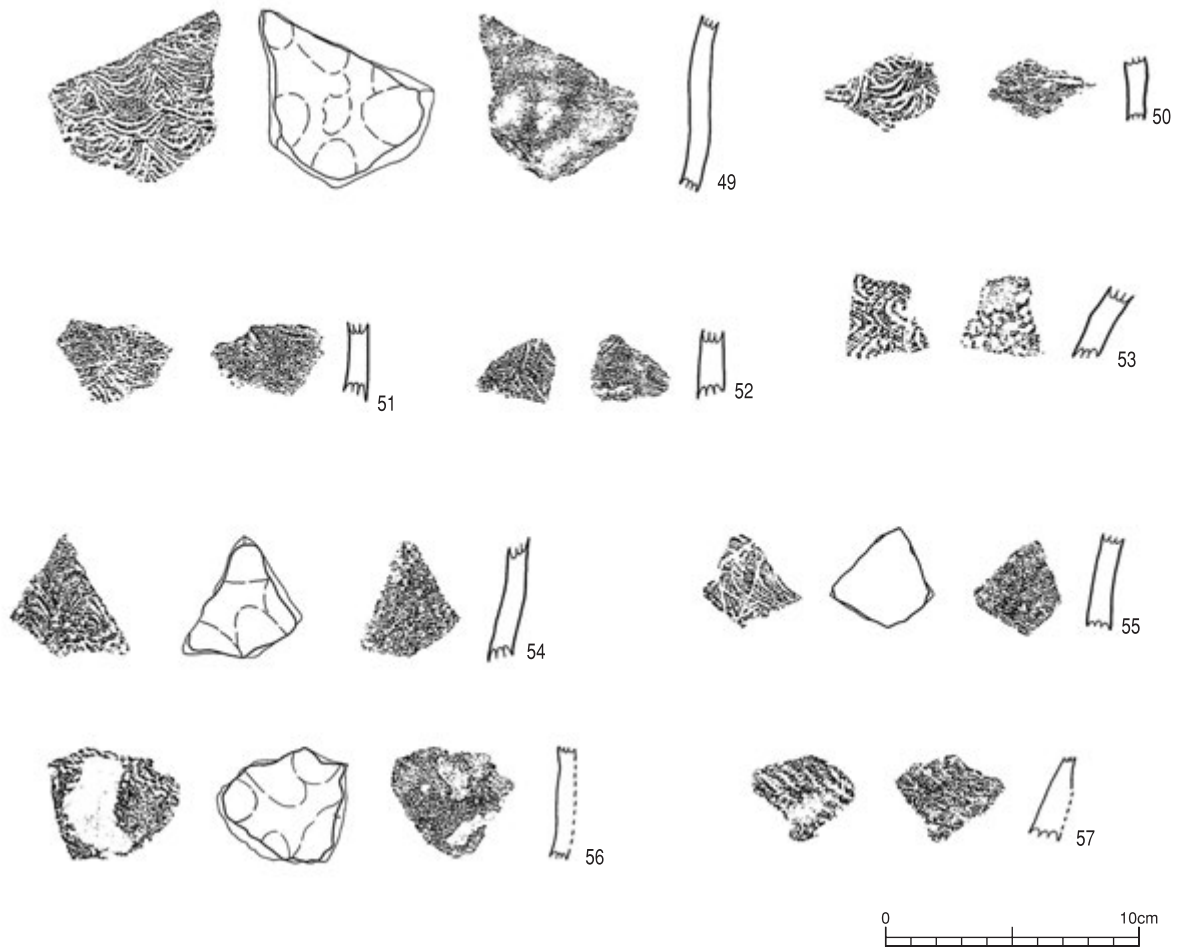
24は23・25～48とは別個体である。24の施文的特徴は、変形撚糸文が斜位方向に施されている。23に比べ、口唇部では、一部施文がなく施文にムラがあり丁寧に欠けるところがあることが観察できる。器形的特徴としては、口縁部が23に比べ、若干外反しており、頸部では緩やかにかつ、まっすぐに立ち上がっている。



第12図 縄文時代早期のⅡ-2類土器 (1)



第13図 縄文時代早期のⅡ-2類土器 (2)



第14図 縄文時代早期のⅡ-2，Ⅱ-3類土器

49・50は同一個体と考えられる。外面の施文的な特徴は、縦位に変形撚糸文が施されている。内側の調整は多数の指頭圧痕が施されているが、ナデ調整で仕上げが施されている。50は、内面で接合部が2か所確認できる。

51・52は、同一個体と考えられる。外面の調整は変形撚糸文が施された後、擦り消されている。内側は、丁寧なナデ調整が施されている。

53の外面の施文の特徴は、風化が著しい。縦位に撚糸文が施されている。内面も風化が著しい。部位については、頸部から胴部上位付近と考えられる。

54の外面の施文の特徴は、土器製作時にかなり表面に水分を含んでいたため、変形撚糸文を施した後模様の特徴が自然に崩れてしまったようである。かろうじて撚糸文が確認できる部分やナデ消された痕跡を観ることができる。内面は、風化のため、指頭圧痕の痕跡を多数観察できる程度である。部位については、胴部下位付近と考えられる。

55は、54とは、胎土、内面の焼成や風化の状態については同一ではあるが、外側の器面の状態から同一個体とするのは難しい。部位については、頸部と考えられる。縦位に変形撚糸文が施されている。

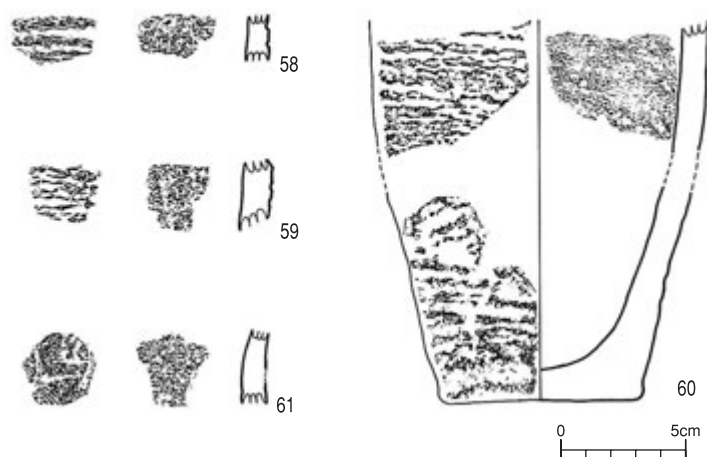
### II-3 類土器 (第14図)

出土した2点のみを図化した。56の外面の施文的特徴は、風化が著しく剥離した部分もある。所々でナデ消された痕跡があり、撚糸文土器の可能性の高い施文が観察できる。内面は、風化の部分もあるが、指頭圧痕の痕跡を多数観察できる。

57の外面の施文的特徴は、風化が著しく、小片のため撚糸文の可能性が高い。内側は左から右へのケズリの調整が施されている。

### III 類土器 (第15図)

58~60は、同一個体である。円筒で底部から緩やかに外側に開き、途中から垂直に立ち上がる。施文については、風化が著しいが、山形押型文であると考えられる。



58・59ともに接合できなかったが、58は60の上位部分に位置し、59は60の底部付近に位置するものと考えられる。

### IV 類土器 (第15図)

出土した5点中1点を図化した。

61は、外面の施文的特徴は土器作成時に工具による5条の櫛搔き状のハケ目が全面に施されていた痕跡は確認できるが、風化が著しく、小片のためわずかに観察できる。内面の調整は、ケズリが施されている。

第15図 縄文時代早期のIII・IV類土器

出土した5点中1点を図化した。61は、外面の施文的特徴は土器作成時に工具による5条の櫛搔き状のハケ目が全面に施されていた痕跡は確認できるが、風化が著しく、小片のためわずかに観察できる。内面の調整は、ケズリが施されている。

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	分類	部位	色 調		胎 土					焼 成	調 整		備 考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	その他		外面	内面	
10	1	E-8	IV	I	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○		良	貝殻条痕文	剥離	
	2	E-8	IV		胴部	橙	明赤褐	○	○		○		良	貝殻条痕文	ナデ	
	3	E-8	IV		胴部	黒褐	灰黄褐	○	○	○			良	貝殻条痕文	ハケ,ナデ	
	4	E-8	IV		口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○			砂粒	良	貝殻条痕文	ケズリ	
	5	E-8	IV		胴部~底部	にぶい黄橙	橙	○			○	砂粒	良	山形押型文	ナデ	
	6	—	表土		胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		砂粒	良	山形押型文	ナデ	
	7	E-8	IV		胴部~底部	にぶい黄橙・橙	橙	○				砂粒	良	山形押型文	ナデ,指頭圧痕	
	8	E-8	IV		胴部	にぶい黄橙	橙	○		○		砂粒	良	山形押型文	ナデ	
	9	E-8	IV		胴部~底部	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○		砂粒	良	山形押型文	ナデ	
	10	E-8	IV		胴部	にぶい黄橙	橙	○			○	砂粒	良	山形押型文	ナデ	
	11	E-8	IV	底部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		砂粒	良	山形押型文	貝殻条痕のちナデ消し		
	12	E-8	IV	胴部	明赤褐	にぶい褐	○			○	金雲母	良	山形押型文	ナデ,指頭圧痕		
	13	E-8	IV	胴部	褐	褐	○				小石,金雲母	良	山形押型文	ナデのち指頭圧痕		
	14	E-8	IV	胴部	にぶい褐	褐	○				砂粒,金雲母	良	山形押型文	ナデ		
	15	—	表土	胴部	橙	灰黄	○	○		○		良	山形押型文	ナデ		
	16	—	表土	底部	にぶい黄橙	にぶい橙	○		○	○	砂粒	良	山形押型文	ナデ		
	17	D-9	III	胴部	にぶい黄	浅黄	○				砂粒	良	山形押型文	ナデ		
	18	E-8	III	胴部	オリーブ黒	褐灰	○	○				良	山形押型文	ハケ		
	19	—	表土	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		金雲母	良	山形押型文	ナデ		
	20	E-8	III	底部	浅黄	暗灰黄	○		○	○		良	山形押型文	ナデ,ヘラケズリ		
11	21	E-8	IV	口縁部	黒	にぶい黄橙	○	○		○	砂粒	良	山形押型文	ハケ,ナデ		
	22	D-8	III	口縁部	黒褐	にぶい黄橙	○		○		砂粒	良	山形押型文	ナデ		
12	23	E-8	IV	口縁部	浅黄	にぶい黄	○	○	○	○	砂粒	良	変形捺糸文	ヘラケズリ,ハケのちナデ		
	24	D-8,E-8	IV	口縁部	黒褐	にぶい黄橙	○		○		砂粒,小石	良	変形捺糸文	ナデ		
	25	E-8	IV	頸部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		砂粒	良	変形捺糸文	ケズリ		
	26	E-8	IV	胴部	浅黄	にぶい黄	○		○	○	砂粒	良	変形捺糸文	ケズリ,ハケのちナデ		
	27	E-8	IV	胴部	浅黄	浅黄	○	○		○		良	変形捺糸文	ハケ,ナデ		
	28	E-8	IV	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○				砂粒	良	変形捺糸文	ナデ,ヘラケズリ		
	29	E-8	IV	胴部	浅黄	浅黄	○	○			砂粒	良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
13	30	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	黒褐,灰黄褐	○	○			砂粒	良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
	31	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				良	変形捺糸文	ナデ		
	32	E-8	IV	胴部	褐灰	オリーブ黒	○		○			良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
	33	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			良	変形捺糸文	ナデ		
	34	E-8	IV	胴部	にぶい黄	黒褐,灰黄	○	○				良	変形捺糸文	ナデ,ヘラケズリ		
	35	E-8	IV	胴部	にぶい黄	黄灰	○	○		○		良	変形捺糸文	ハケ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
	36	E-8	IV	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○		○		良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
	37	E-8	IV	胴部	にぶい黄	灰黄	○	○			砂粒	良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
	38	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	黒褐	○	○	○			良	変形捺糸文	ハケ,ナデ		
	39	E-8	IV	胴部	浅黄	黄褐	○		○			良	変形捺糸文	ハケ,ナデ		
	40	—	表土	胴部	にぶい黄	灰オリーブ	○		○		砂粒	良	変形捺糸文	ナデのち指頭圧痕,ハケ		
	41	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		砂粒	良	変形捺糸文	ヘラケズリ		
	42	E-8	V	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			良	変形捺糸文	ケズリ		
	43	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		砂粒	良	変形捺糸文	ケズリ		
	44	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	褐灰	○		○		砂粒	良	変形捺糸文	指頭圧痕		
	45	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	黒褐	○	○		○		良	変形捺糸文	ナデ,ヘラケズリ		
	46	E-8	III	胴部	にぶい黄橙	浅黄	○	○	○			良	変形捺糸文	ケズリ,ナデ		
	47	E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
	48	E-8	IV	胴部	浅黄	黄褐	○	○	○			良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちケズリ		
	14	49	E-8	III	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○		○			良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ	
50		D-8	III	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○		良	変形捺糸文	ナデ		
51		E-8	III	胴部	浅黄	黄橙	○	○		○		良	変形捺糸文	ナデ,ヘラケズリ		
52		E-8	IV	胴部	浅黄	灰黄	○	○		○		良	変形捺糸文	ナデ,ヘラケズリ		
53		E-8	IV	胴部	橙	橙	○	○	○		砂粒,金雲母	良	変形捺糸文	ナデ		
54		E-8	IV	底部	橙	にぶい橙	○	○			砂粒	良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕		
55		E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○		○	砂粒	良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
56		E-8	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○		良	変形捺糸文	ナデ,指頭圧痕のちヘラケズリ		
57		D-8	IV	胴部	黄灰	灰黄褐	○				砂粒	良	船元式	ナデのちヘラケズリ		
15	58	E-10	表	III	胴部	橙	にぶい褐	○		○	砂粒	良	貝殻条痕文	ナデ		
	59	E-8	IV		胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ		
	60	E-8	IV	胴部~底部	褐灰	にぶい黄橙	○	○	○		砂粒	良	貝殻条痕文	ナデ		
	61	—	表土	IV	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○		○	砂粒	良	櫛搔文	ナデ,ヘラケズリ	

第2表 縄文時代早期の土器観察表

## (2) 石器

Ⅳ層では、縄文時代早期の土器の周辺から、石鏃5点、スクレイパー2点、石核1点、磨石2点、敲石2点、石皿3点が出土した。

石材には、黒曜石、チャート、安山岩、砂岩がある。

### 石鏃（第16図62～68）

出土した層についてはⅣ層から4点、Ⅲ層から2点、Ⅱ層からは1点出土した。石材は62～67は、黒曜石（上牛鼻産・桑ノ木津留産・腰岳産）、チャートである。

62は、上牛鼻産の黒曜石である。先端が欠けてはいるが、鋭さは見られる。側辺は若干外弯的で、わずかに鋸歯状を呈している。基部の挟りが浅く、逆刺は丸い。63は、桑ノ木津留産の黒曜石で半透明を呈する。他の石鏃の長さや幅に比べて、縦断面が厚く先端は鋭く、側辺は若干内弯を呈し、基部の逆刺は鋭く、挟りが浅く、逆刺の脚の長さが違う。64は、佐賀県腰岳産の良質な黒曜石を石材に用い、先端部は欠損しているが、側辺は、直線的で鋸歯状を呈している。基部は逆刺は丸く挟りは浅い。65は、上牛鼻産の黒曜石である。先端は鋭く、側辺は直線的である。わずかに鋸歯状を呈している。基部の逆刺は、左右共に欠損しているが、挟りが浅い。66は、桑ノ木津留産の黒曜石で半透明を呈する。先端と逆刺は欠損が甚だしく、側辺は直線的である。片側面は欠損している。基部の挟りは浅い。67の石材は、安山岩である。先端部は丸く、側辺は、直線的で二等辺三角形を呈する。基部は、直線的で側辺は丸みを帯びている。68の石材はチャートである。基部、片側辺には調整剥離が施され、先端部及び片側辺に調整がなされていないことから未製品と考えられる。側辺は外弯的で最大幅が下方にあり、基部の逆刺は鋭く挟りは浅い。

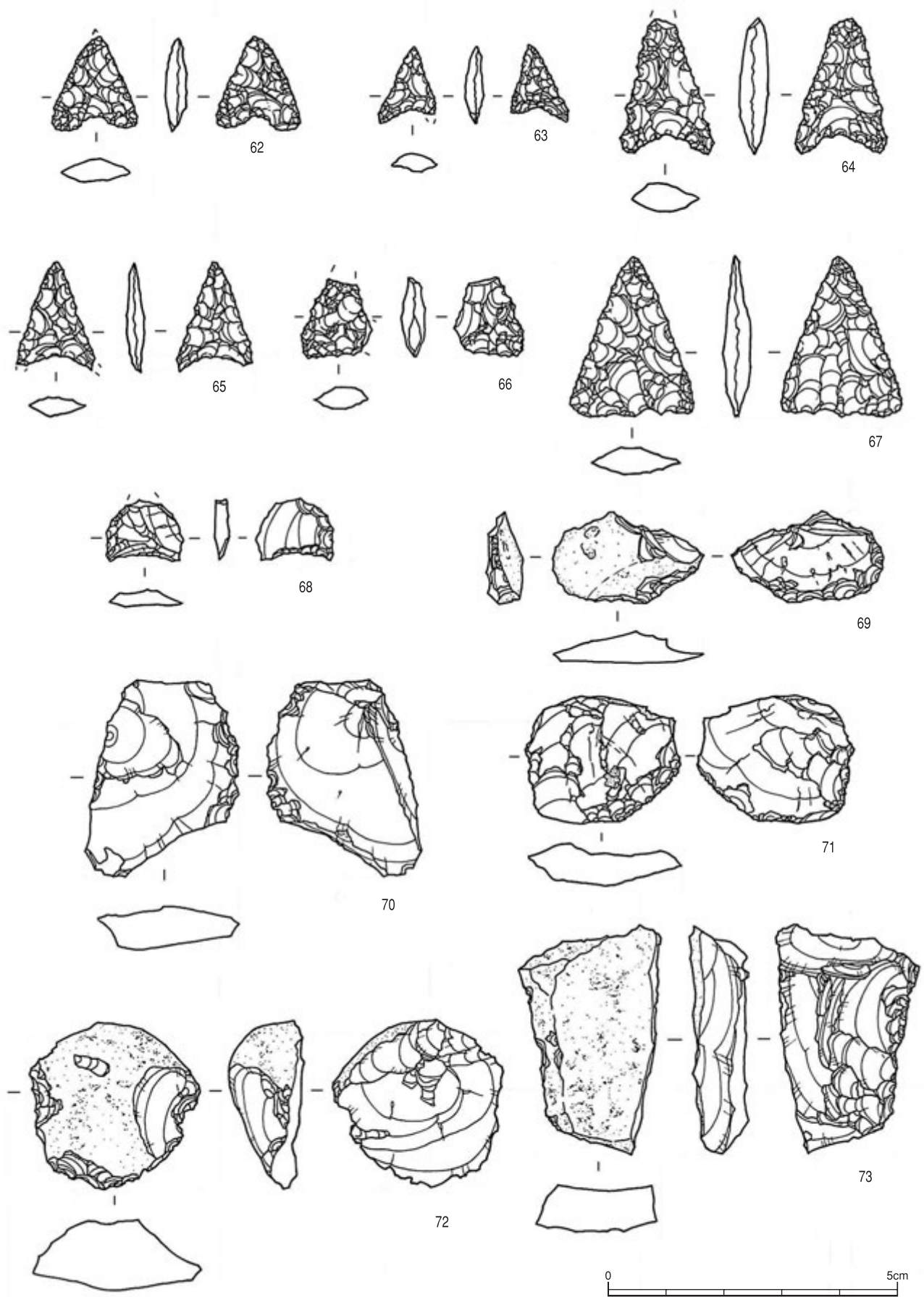
### スクレイパー（第16図69～73）

出土した層についてはⅣ層から5点出土した。石材は全て薩摩川内市の上牛鼻産の黒曜石である。横長剥片を利用したもので、側辺部2か所に調整剥離を加え、70は、自然面の残る剥片を利用したもので、側辺部に両面加工による調整剥離を行っている。71は、原石から剥離した剥片を用いたもので自然面が残った石材を用いたスクレイパーである。側辺部半周に調整剥離を施している。72は、縦長剥片を利用したもので、一側辺部による調整剥離を加えている。73は、やや厚みのある自然面を残した剥片を使用し、一側片による調整剥離が加えられているものであるが、製作途中の石器とも考えられる。

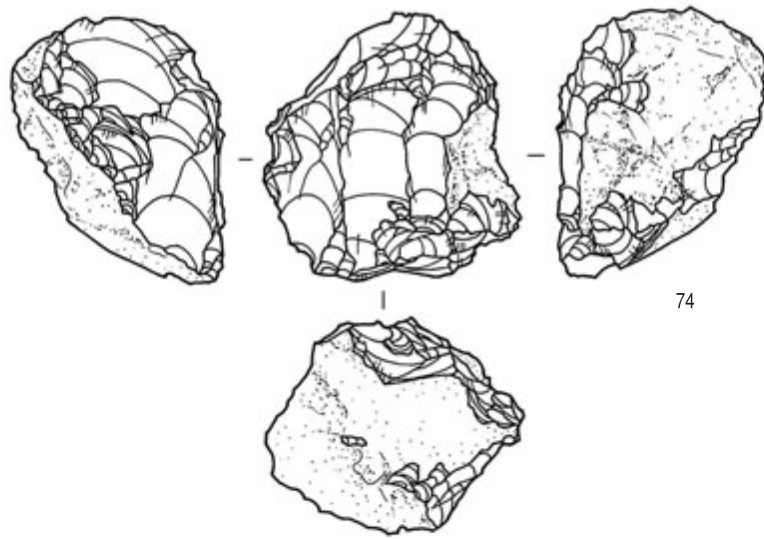
### 石核（第17図74・75）

出土した層についてはⅣ層から1点、Ⅲ層からは1点出土した。74は、原石を半截し、剥片を二面剥ぎ出した石核である。75は一部自然面を残しているが、剥出面のみられる石核である。

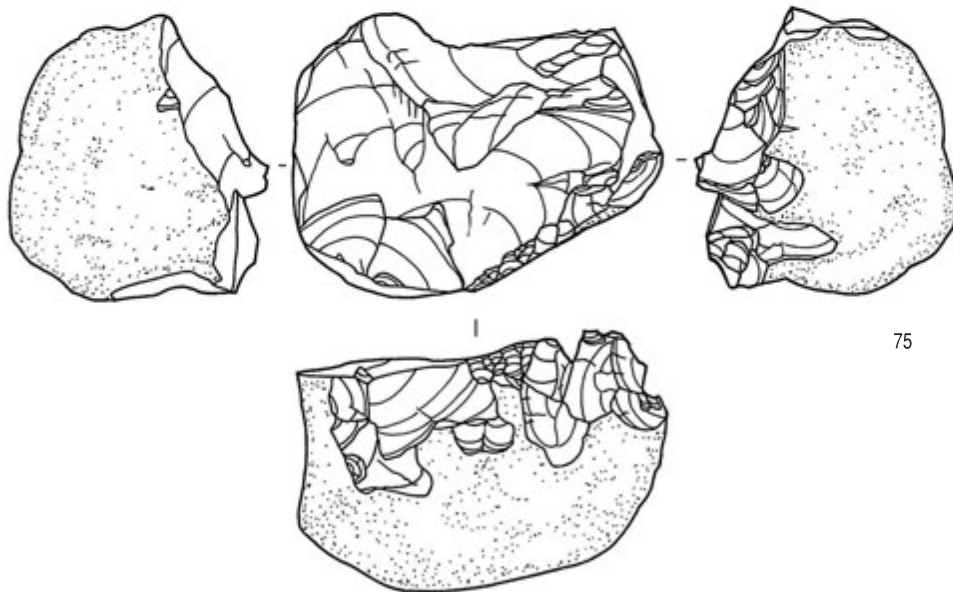




第16図 縄文時代早期の出土石器 (1)



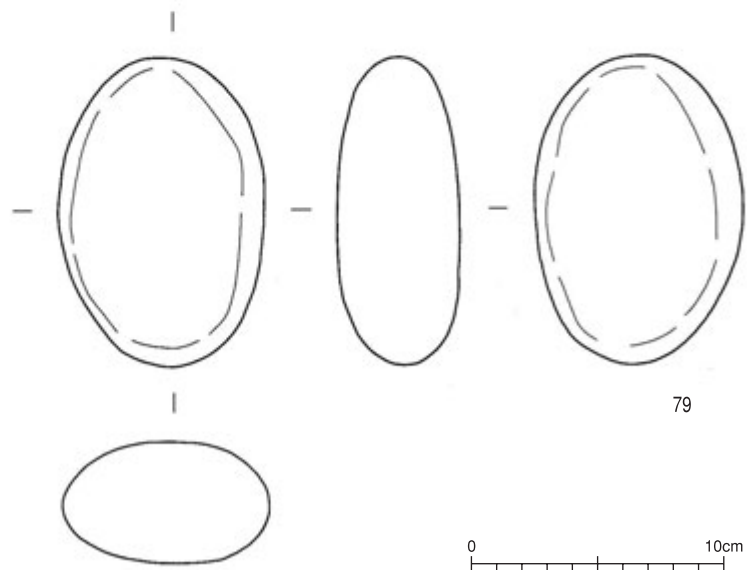
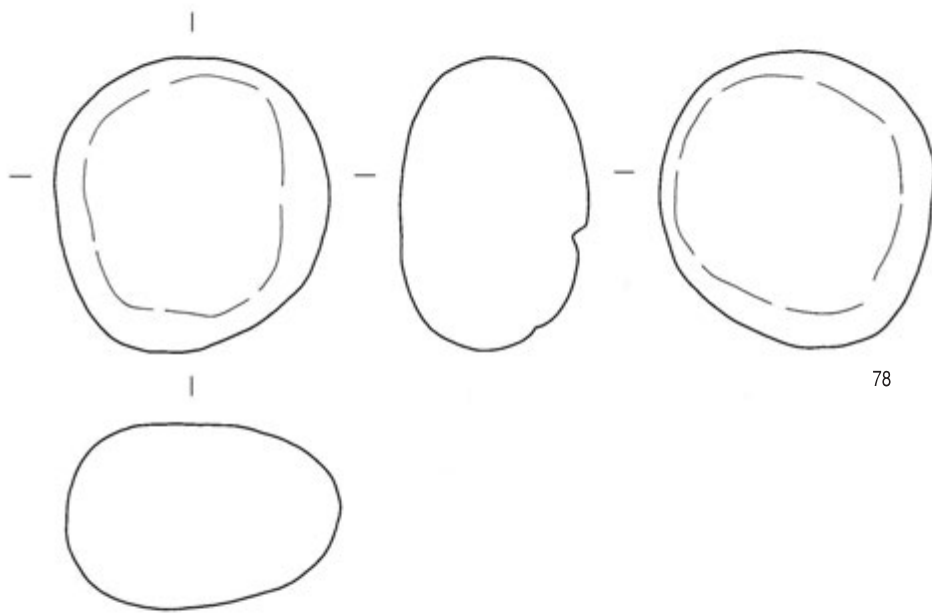
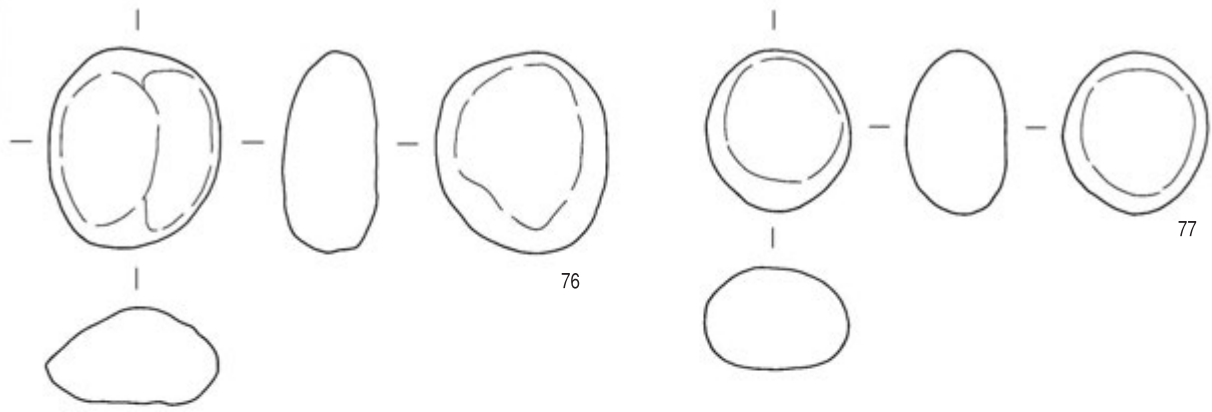
74



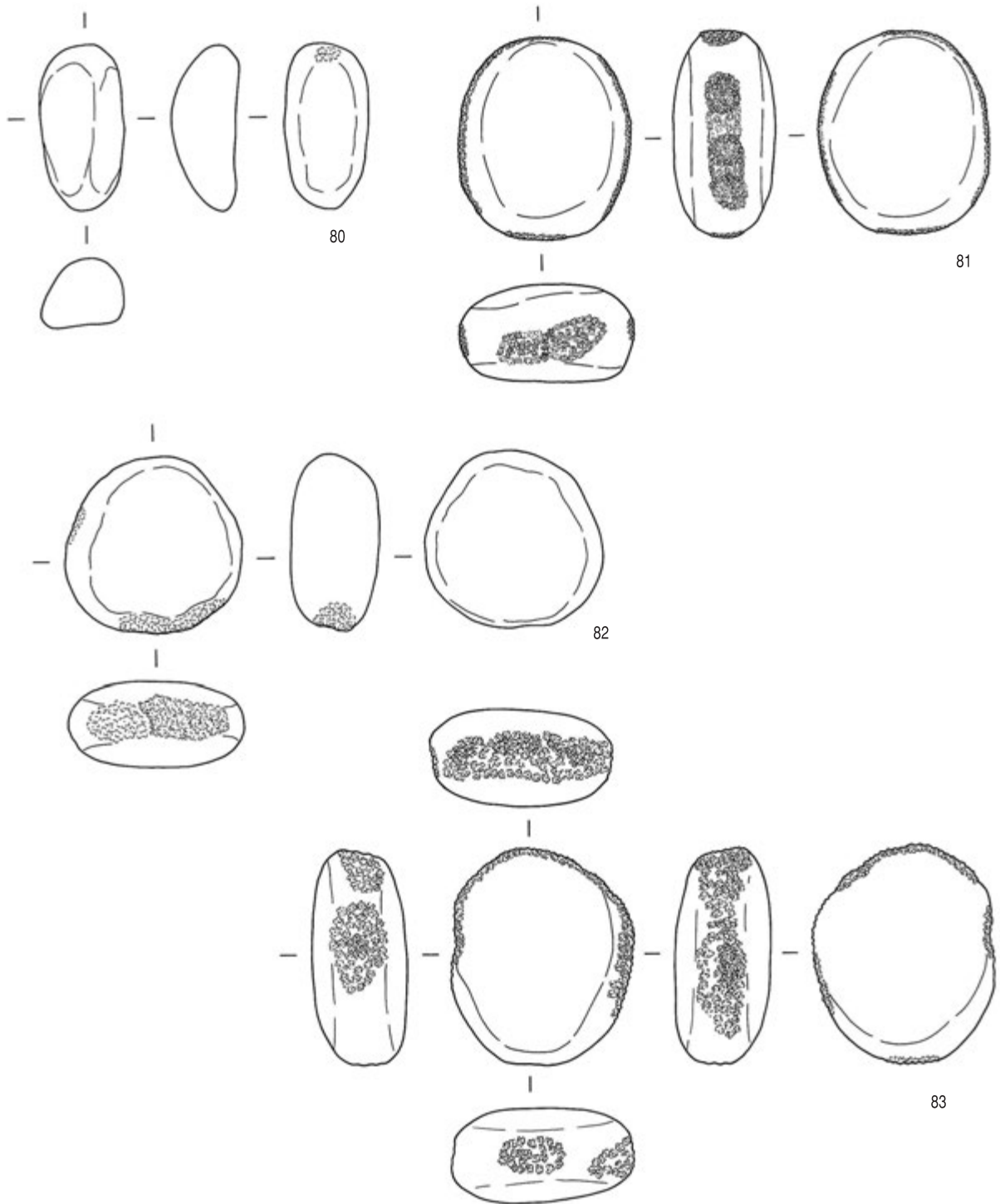
75



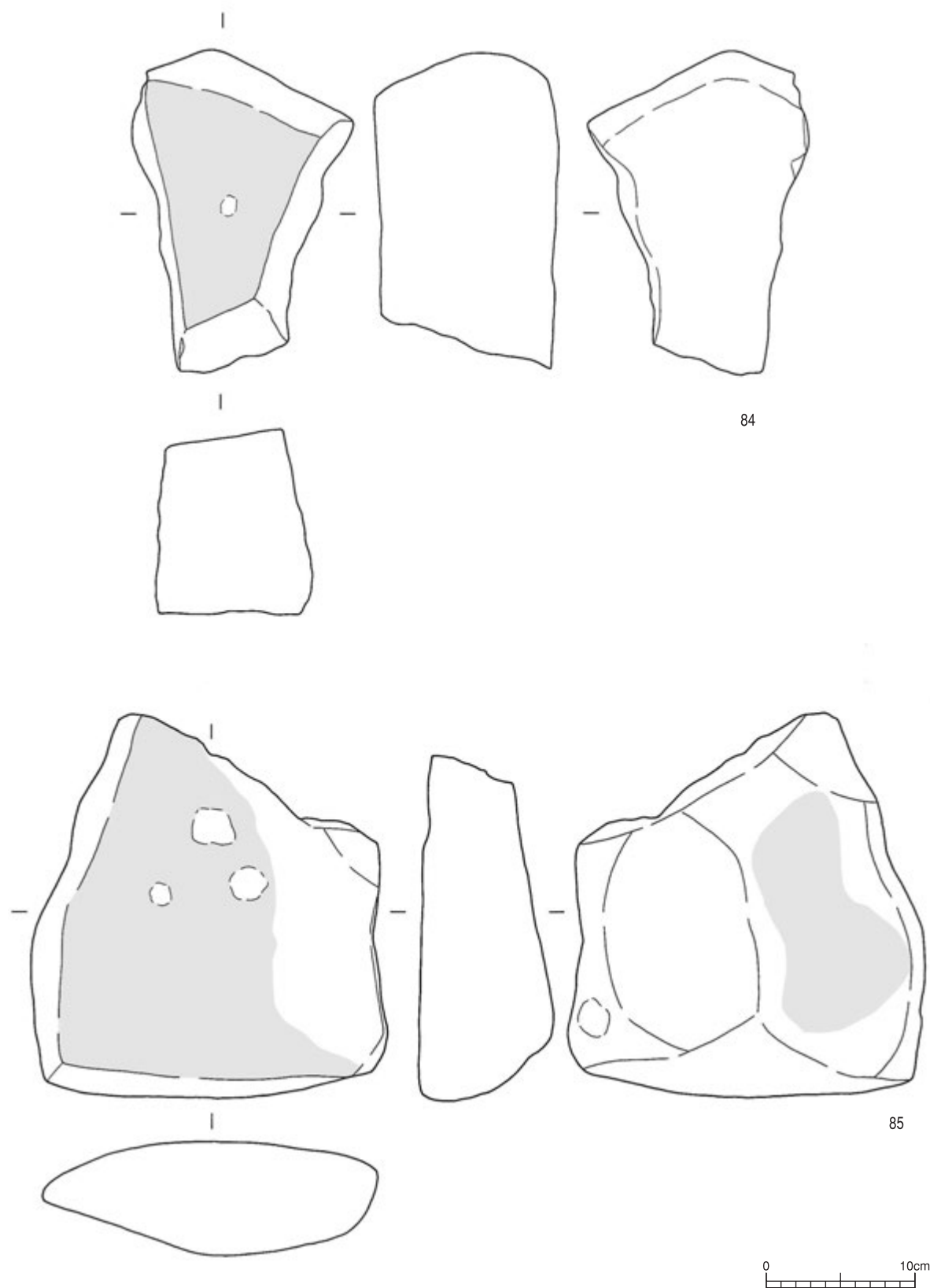
第17図 縄文時代早期の出土石器 (2)



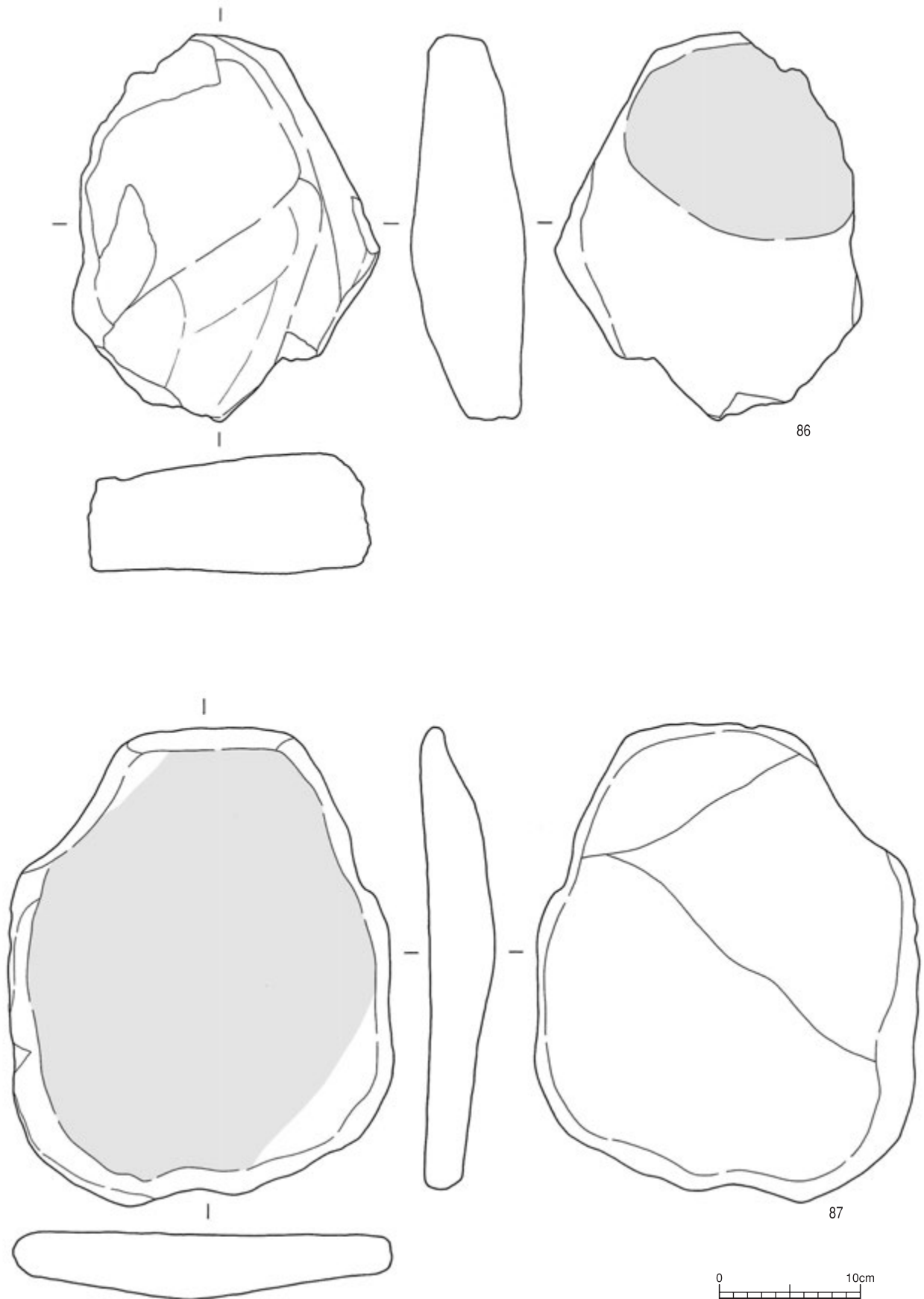
第18図 縄文時代早期の出土石器 (3)



第19図 縄文時代早期の出土石器 (4)



第20図 縄文時代早期の出土石器（5）



第21図 縄文時代早期の出土石器 (6)

### 磨石・敲石（第18図76～79，第19図80～83）

出土した層についてはⅣ層から7点，溝から2点出土した。磨石及び敲石には，磨石のみの機能をもった円礫状のものと，磨石と敲石の二つの機能を持ったものがある。遺物の量は，多くないが，使い込まれたものが多い。76～79の4点は，磨石の機能を持つ円礫で全て良く使い込まれており，表面は滑らかである。80は，棒状を呈し先端部のみに敲打の痕跡が認められる。表面も滑らかであることから，棒状ではあるが，何らかのかたちで磨石として用いられた可能性もある。81～83の3点は表面及び裏面を磨石として用い，側面を敲石として用いている。特に83は全ての側面が敲石として用いられている。なお，78は近世の溝状遺構から出土したものであるが，この遺跡では，縄文時代の遺物は早期以外に出土していないため，早期の遺物として取り扱った。

### 石皿（第20図84・85，第21図86・87）

出土した層についてはⅣ層から4点出土した。84は，石皿の破片で，図の左面の滑らかなものである。85も同様に図の左面のみが滑らかであり，特に中央上部の凹面から左側にかけての使用が著しい。86は，他の石皿ほど顕著な滑らかさはないが，部分的に使用の痕跡が認められるものである。87は，本遺跡で最大の石皿である。図の左面は，全面に使用の痕跡が認められるが，裏面には使用の痕跡がほとんど認められない。

挿図番号	遺物番号	器種	出土区	層位遺構	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
16	62	打製石鏃	E-8	Ⅳ	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.6	
	63	打製石鏃	E-8	Ⅳ	黒曜石	1.4	1.0	0.3	0.2	
	64	打製石鏃	表土	Ⅱ	黒曜石	2.3	1.7	0.5	1.3	
	65	打製石鏃	E-9	Ⅳ	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.5	
	66	打製石鏃	E-9	Ⅲ	黒曜石	1.4	1.2	0.4	0.5	
	67	打製石鏃	E-8	Ⅳ	黒曜石	2.8	2.1	0.5	1.8	
	68	打製石鏃	D-9	Ⅲ	チャート	1.3	1.1	0.2	0.3	
	69	スクレーパー	E-6	Ⅳ	黒曜石	2.6	1.5	0.6	2.3	
	70	スクレーパー	C-6	Ⅳ	黒曜石	2.6	2.2	0.7	5.0	
	71	スクレーパー	E-6	Ⅳ	黒曜石	2.9	2.9	1.2	10.0	
	72	スクレーパー	E-7	Ⅳ	黒曜石	3.4	2.6	0.7	6.9	
73	スクレーパー	C-7	Ⅳ	黒曜石	4.0	2.4	1.0	10.7		
17	74	石核	D-6	Ⅳ	黒曜石	3.3	3.1	2.6	24.3	
	75	石核	E-8	Ⅲ	黒曜石	4.6	3.6	2.8	58.2	
18	76	磨石	D-9	Ⅳ	安山岩	7.8	6.7	3.8	230	
	77	磨石	E-7	Ⅳ	砂岩	6.5	5.5	4.0	200	
	78	磨石	C-7	溝	安山岩	12.0	11.0	7.5	1390	
	79	磨石	C-7	Ⅳ	安山岩	12.0	8.3	4.8	610	
19	80	磨石・敲石	3 T	Ⅳ	砂岩	8.0	4.0	3.3	160	
	81	磨石・敲石	E-10	Ⅳ	安山岩	10.0	8.5	4.7	500	
	82	磨石・敲石	E-9	Ⅳ	安山岩	8.5	8.5	4.5	470	
	83	磨石・敲石	E-10	Ⅳ	安山岩	10.5	8.8	4.6	590	
20	84	石皿	E-7	Ⅳ	安山岩	15.5	10.5	8.5	2200	
	85	石皿	E-8	Ⅳ	安山岩	50.0	23.0	9.0	6800	欠損
21	86	石皿	D-6	Ⅳ	安山岩	20.0	15.5	6.0	2600	欠損
	87	石皿	C-6	Ⅳ	安山岩	32.6	27.0	4.7	6400	欠損

第3表 縄文時代早期の石器観察表

### 第3節 古代・中世の調査

#### 1 古代の調査

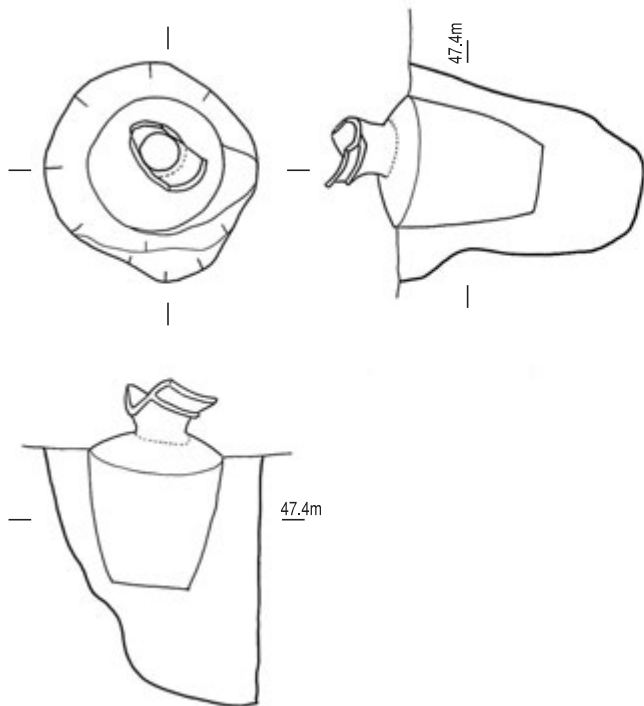
##### (1) 土器

##### 埋納須恵器

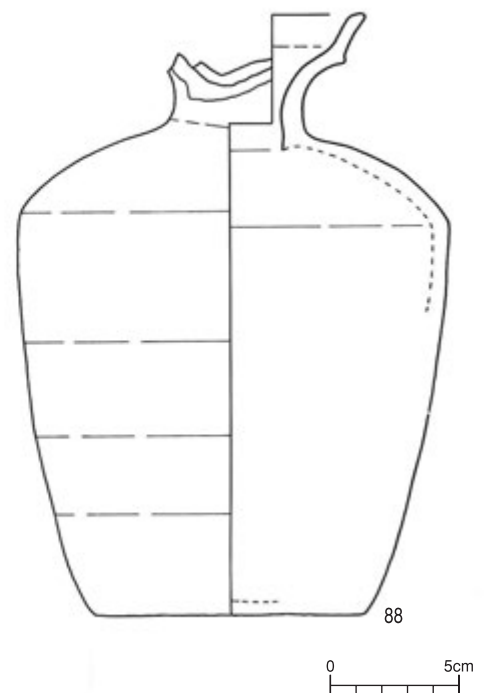
周辺には古代の遺物は出土していないが、C-8区のⅢa層からⅥ層もしくはⅦ層まで掘り込まれた土坑の中に須恵器の壺が埋納されていた。土坑は直径25.3cm、深さ約50cmである。壺の復元口径は約10.8cmある。頸部はしっかりしまっており、肩部の最大幅は17.1cm、底径は10.6cm、高さは24.3cmある。重さは1,410g、須恵器内の埋土の重さは1,590gあった。口縁部は二重口縁を成し、袋状で大半が欠けている。おそらく意図的に欠いたものと思われる。埋葬に関係する骨蔵器と思われる。

調整は、外面はタタキの後、ナデでタタキを丁寧に消している。また、左回りに表面をナデた痕跡があることから、轆轤を使って作られたものと思われる。内面も丁寧なナデ調整が成されている。色調は、灰青色を呈しているが、胎土や焼成、形状から9～10世紀頃の熊本県荒尾産の須恵器であろう。

須恵器内の土壌については、X線分析から2層に分かれていることが確認されたが、目視からは2層に分かれている状況は確認できなかった。また、土壌中には<sup>14</sup>C分析からは炭素の含有が確認された。なお、分析の結果については化学分析の頁を参照していただきたい。



第22図 埋納須恵器の出土状況



第23図 埋納須恵器



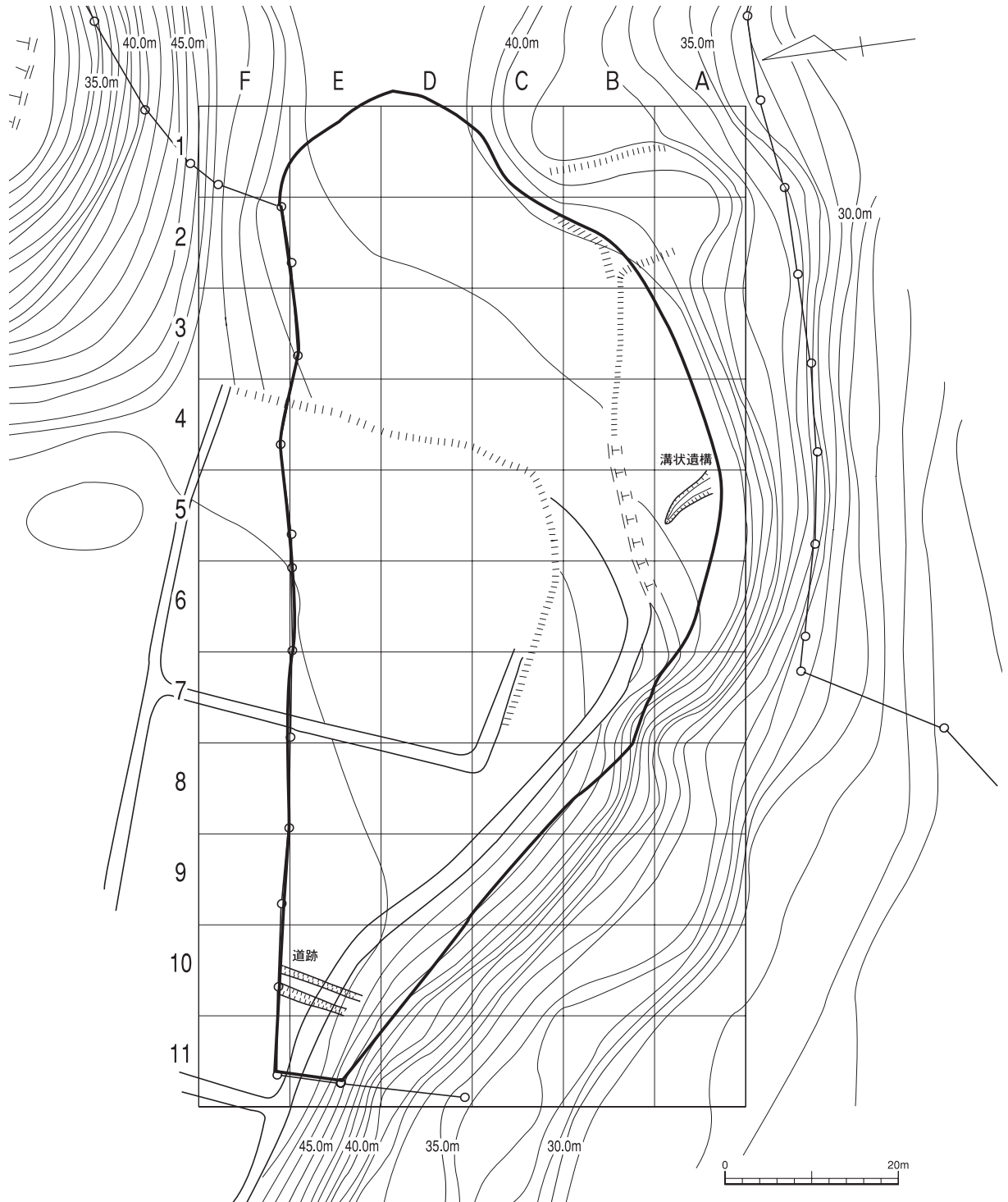


第24図 埋納須恵器出土位置図

#### 第4節 中世～近世の調査

中世から近世にかけては後世による削平が著しく、中世が溝状遺構及び道跡が各1条と、近世が溝状遺構1条が検出されたのみであった。

また、包含層はE-10区付近で僅かに残存するのみで、調査区内のほとんどの部分で消失していた。

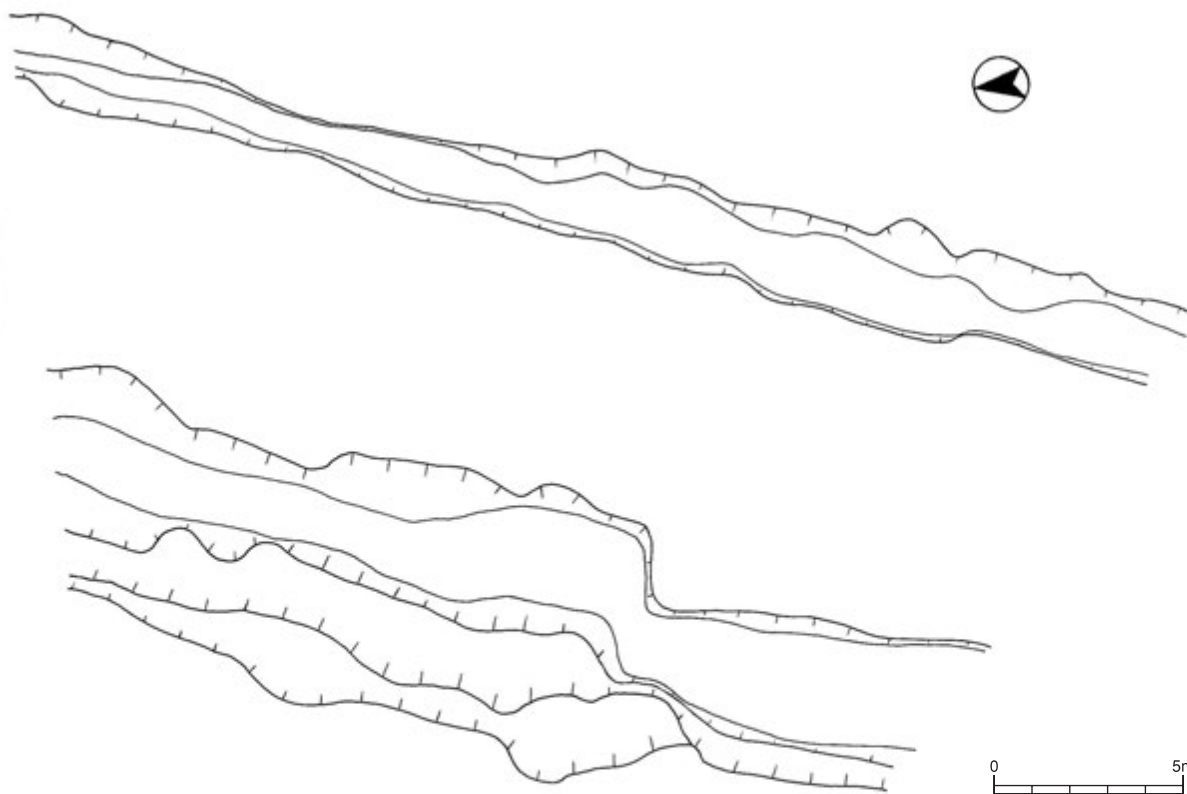


第25図 中世の遺構配置図

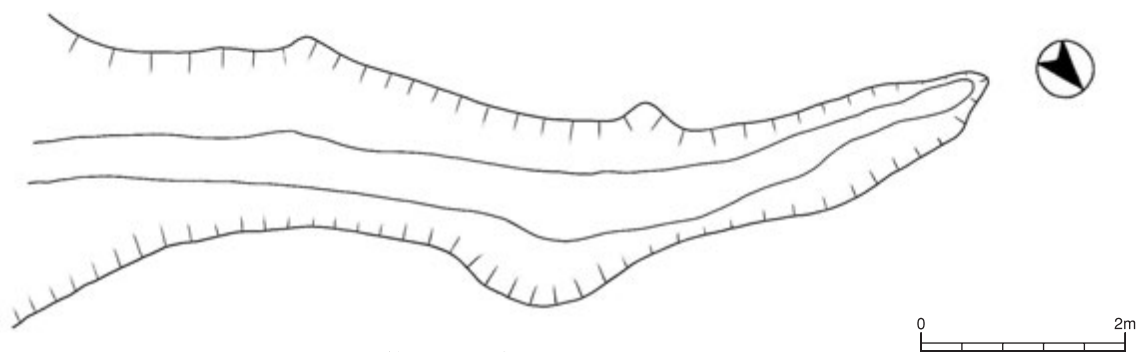
## 1 遺構（道跡・溝状遺構）

道跡（中世）は、E-10区において発見された。南北へ延びるように幅3m、長さ9mほどの大きさがあった。部分的にⅡ層及びⅢ層が硬化していることから、中世のものと思われる。北側の台地から南側の谷へ延びていたものと思われる。道の東側と西側にはさらに深く掘り込まれた溝状遺構が道に沿うように南北に延びていた。

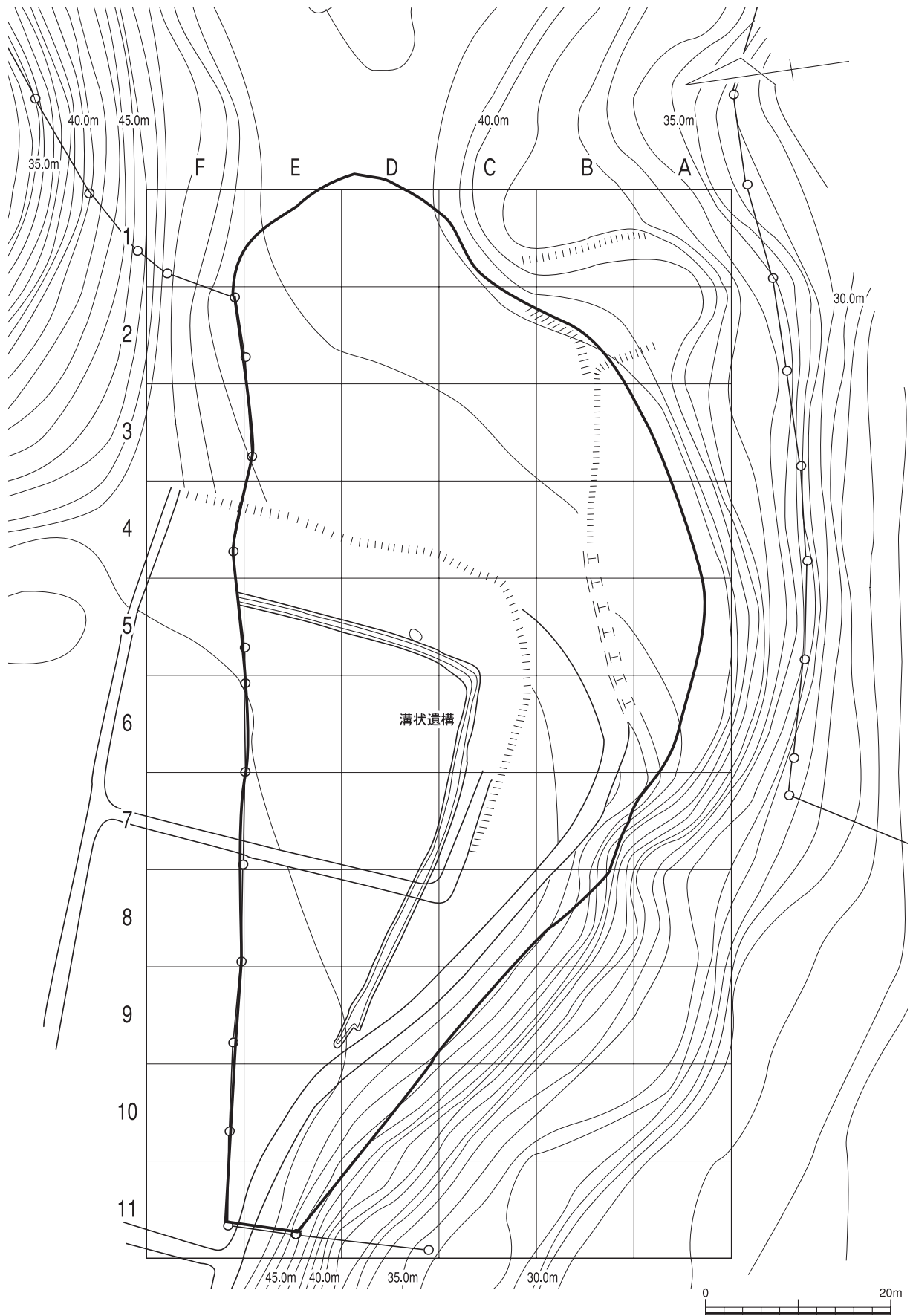
また、調査区の最下段のA-5区から長さ5mほどの溝状遺構が検出された。道跡と同様の埋土を含んでいることから、中世と考えられる。上段の調査区では、幅1mから80cmで南北に約20m東西に約40mのL字状の溝が検出された。埋土中には、薩摩焼や細かい軽石等が混入していることから、近世の遺構と思われる。また、現在の畑境に沿っていることから、以前の畑境に関するものの可能性もある。D-5区からは、近世の土坑が発見された。埋土は青灰色の腐敗土を呈していた。使用目的は不明である。



第26図 中世の道跡



第27図 中世の溝状遺構



第28図 近世の土坑及び溝状遺構

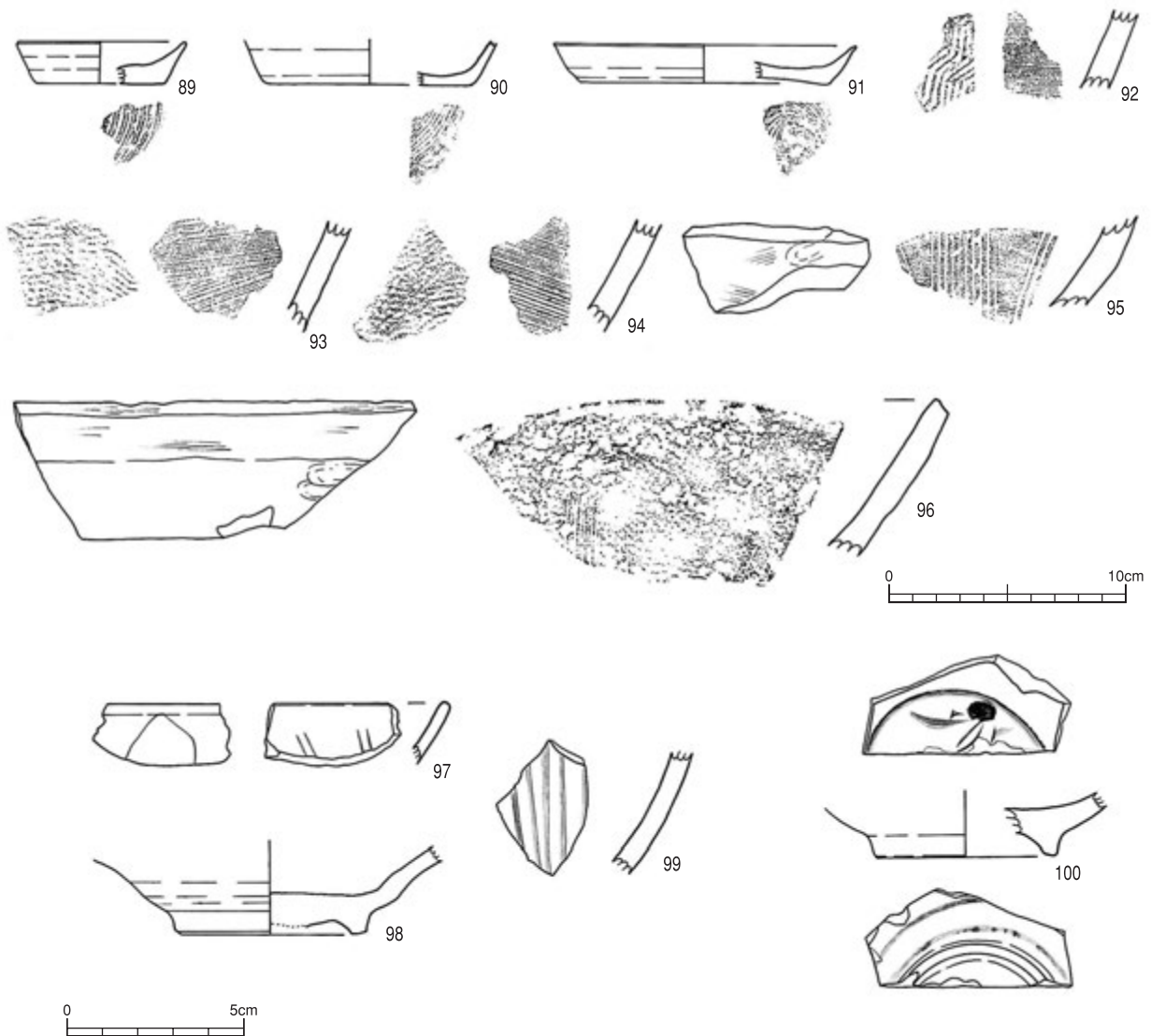
## 2 遺物（第29図）

前述のように、中・近世の包含層は削平が著しく、掲載遺物のほとんどがE-10区及び表土からの物である。

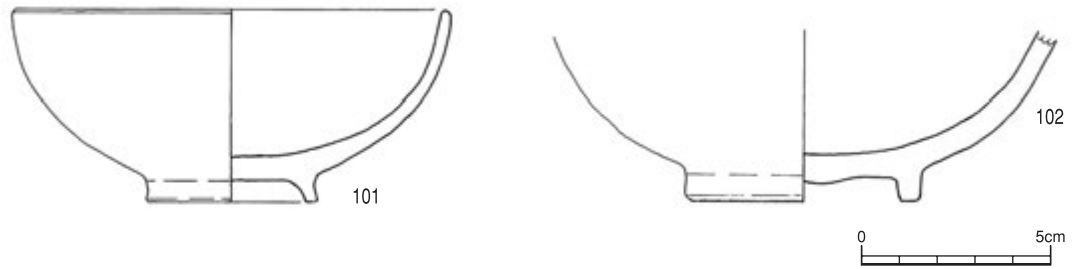
89は、復元口縁直径7.4cmで器高1.8cm、底径5.4cm、90は、復元底径8.6cm、91は、復元口縁径12.8cmで器高1.6cm、底径10.4cmの土師器でいずれも糸切りによる切り離しである。

92～94は灰褐色を呈し、外面がタタキ、内面がナデによる調整が施された中世の須恵質陶器の捏ね鉢である。95と96は、土師質の擂鉢である。

97から99の三点は青磁である。97は蓮弁文、99は線描き蓮弁文でともに碗である。98は、稜花皿の口縁部が欠損したもので、畳付は部分的に露胎となる。100は、染付で施釉は畳付及び高台内にまで及ぶ。



第29図 中・近世の出土遺物



第30図 近世の出土遺物

近世の遺物は、肥前・薩摩焼の陶磁器の小片が多く、図化し得たのは、第30図の101と102の2点のみであった。2点とも細かい貫入のはいる白薩摩で、畳付部分に砂目と思われる若干の細砂粒と思われるものが観察される。101は、復元口縁径11.6cmで、器高5.1cm、復元底径が4.6cm、102は、復元底径が6.2cmあった。

挿図 番号	報告書 番号	出土区	層位 遺構	種別	器種	部位	法量(cm)				胎土	焼成	色調	備考
							口径	底径	器高	高台高				
23	88	E-8	-	須恵器	壺	完形	(10.8)	10.6	24.3	-	精緻	良	灰青	
29	89	E-10	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	(7.4)	(5.4)	1.8	-	精緻	良	にぶい橙	
	90	E-10	Ⅲ	土師器	皿	底部	-	(8.6)	(2.0)	-	精緻	良	にぶい黄橙	
	91	E-10	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	(12.8)	(10.4)	(1.6)	-	精緻	良	にぶい橙	
	92	E-8	表土	須恵器	捏鉢	胴部	-	-	-	-	精緻	良	暗青灰	
	93	E-10	Ⅲ	須恵器	捏鉢	胴部	-	-	-	-	精緻	良	暗青灰	
	94	E-10	Ⅲ	須恵器	捏鉢	胴部	-	-	-	-	精緻	良	暗青灰	
	95	E-10	Ⅲ	土師質土器	播鉢	胴部	-	-	-	-	精緻	良	にぶい黄橙	
	96	E-10	Ⅲ	土師質土器	播鉢	胴部	-	-	-	-	精緻	良	黄橙	
	97	-	表土	青磁	碗	口縁部	-	-	-	-	精緻	良	明緑	
	98	-	表土	青磁	碗	胴部	-	5.4	(2.1)	0.7	精緻	良	明緑	
	99	E-10	Ⅲ	青磁	皿	底部	-	-	-	-	精緻	良	明緑	
	100	-	表土	染付	碗	底部	5.0	-	(1.6)	0.6	精緻	良	明青	
30	101	E-10	Ⅱb	薩摩焼	碗	口縁～底部	11.6	4.6	5.1	0.7	精緻	良	明灰白色	
	102	E-10	Ⅱ	薩摩焼	碗	胴部～底部	-	6.2	(4.6)	0.8	精緻	良	明灰白色	

第4表 古代以降の土器・須恵器・陶磁器観察表

## 第5節 都原遺跡のまとめ

都原遺跡では、縄文時代早期・古代・中世・近世の各時代の遺構・遺物が発見されている。

上段部のE-8～11区、D-8～10区、C-8・9区で層の残存状態が良く、下段部や最下段部では後世の削平を受けて、最下段部で中世の溝状遺構が確認されたのみであった。

### 縄文時代早期

#### 1 遺構

E-8・9区から土坑が3基、C-8区からは、集石が1基確認された。

#### 2 遺物

##### (1) 土器

縄文時代早期の土器の出土状況は、D・E-8区を中心に出土が多く、IV層で出土した。これについては、後世の削平の影響を受けた下段部、最下段部についても、本来は同じように土器が分布していたものと推察できる。

なお、出土した土器を分類すると下記の通り4類に分類される。

I類は、表面の調整に貝殻条痕文を施す土器類である。

II類は、器形としては、手向山式土器に比定されるものである。

II-1は、手向山式土器に山形押型文を中心とした文様が施されたものである。

II-2は、手向山式土器に変形撚糸文が施された土器である。

II-3は、手向山式土器に撚糸文が施された可能性の高い土器である。

III類は、押型文土器と思われるが、その施文が不明瞭なものである。

IV類は、縄文時代早期の土器と思われるが、撚糸文やその他の調整が若干観察されるが、詳細については不明である。

山形押型文の施文については、周辺遺跡の出土状況を見ると薩摩川内市では、近くの霜月田遺跡、旧入来町では中津原遺跡、市口遺跡、旧東郷町では、諏訪ヶ原遺跡から出土している。

また、山形押型文と変形撚糸文の両方施文されているものが出土している。代表的な遺跡としては、曾於市の桐木耳取遺跡が上げられる。

II-1については、旧樋脇町の小市原遺跡から2点出土している。

##### (2) 石器

縄文時代早期の石器の出土状況を見てみると、同時代の土器の分布と重なるので同時期の石器と考えられる。

### 古代

#### 1 遺物

鹿児島県の古代の骨蔵器は約60か所で発見されている。その8割が須恵器製である。ただし、出土状況の復元できるものは10例にも満たない。発掘調査による出土は、本遺跡のほか鹿児島市谷山弓場城遺跡、財部町財部城ヶ尾遺跡、南さつま市白樫野遺跡、薩摩川内市屋形ヶ原遺跡などである。したがって、本遺跡の骨蔵器は出土状況の明らかな貴重な資料といえる。

器形としては、左右対称でなく、若干斜位になり変形して歪な形状を呈しているが、二重口縁

を呈し、最大幅部分が肩部にある。この器形については、口縁部では、錦江町大根占の笑喜遺跡、肩部では知覧町の石坂上遺跡の骨蔵器に類似している。

松田朝由、上床真の両氏によれば、県内で発見された骨蔵器は、他地域で見られるのと同じように専用器を用いたものと日常品からの転用品とがあるという。

また転用品の場合、多くは口縁部を打ち欠いているが、笑喜遺跡（錦江町大根占）のように底部が打ち欠かれたものがある。これは打ち欠くことによって非日常的な容器とする意図が看取されるという。

この壺形をした埋納須恵器は、器面の調整、胎土や焼成等からして9～10世紀の熊本県の荒尾窯（熊本県荒尾市）もしくは中岳山麓遺跡群（南さつま市金峰町）の須恵器と考えられる。なお、この器形が骨蔵器として使用されるのは、9世紀段階に使用され、10世紀以降に激減するものであることから骨蔵器として用いられたことは明らかと思われる。

## 中世～近世

### 1 遺構

#### (1) 中世の道跡

道跡は北側の台地からなだらかではあるが南側の谷に向かって下りながら延びている。遺構を掘り下げていくと東側と西側の両端にさらに深い溝を1条ずつ計2条を検出した。溝間は若干高くなっており硬化面をもつ。東から西に傾斜する。この遺構は両側に水路をもつ道跡ではないかと考えられる。

#### (2) 中世の溝状遺構

道跡と同様の埋土を含んでいることから中世の遺構と考えられる。

#### (3) 近世の溝状遺構

上段の調査区（C～F-5, C-6・7, D-7～9, E-9）から発見された。埋土に薩摩焼や細かい軽石等が混入している溝状遺構が検出された。このことから、近世の遺構と考えられる。

#### (4) 近世の土坑

D-5区からは、小皿状の凹みがある近世の土坑が発見された。最深部は50cm程あった。性格は不明である。

### 2 遺物

遺物は、糸切り底の土師器の小皿、樺万丈窯（熊本県荒尾市）産の須恵器や、14世紀～15世紀頃の龍泉窯系の青磁及び青花（景德鎮・漳州窯産）などの中世の遺物や、白薩摩の碗などの近世の遺物も少量ではあるが出土した。

### 参考文献

- 松田朝由・上床真2005「鹿児島県内の骨蔵器」『財部城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(90)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『桐木耳取遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(91)  
黒川忠広2002『南九州貝殻文系土器1 鹿児島県』南九州縄文研究会



# 放射性炭素年代測定結果報告書

(AMS 測定)

都原遺跡

(株) 加速器分析研究所

## (1) 遺跡の位置

都原遺跡は、鹿児島県薩摩川内市都町6646-4（北緯31° 49′ ″，東経130° 19′ ″）に所在する。

## (2) 測定の目的

土坑と土坑内に埋納された土器の年代を明らかにする。

## (3) 測定対象試料

F-11区のⅢ層で検出された土坑から出土した炭化材 (No.8・9: IAAA-70709・70710), 合計 2 点である。

## (4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理, アルカリ処理, 酸処理により内面的な不純物を取り除く。  
最初の酸処理では 1 N の塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 0.001~1 N の水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。  
その後, 超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1 N の塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後, 超純水で中性になるまで希釈し, 90℃ で乾燥する。希釈の際には, 遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅 1 g と共に石英管に詰め, 真空下で封じ切り, 500℃ で 30 分, 850℃ で 2 時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し, 真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し, グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め, それをホイールにはめ込み, 加速器に装着し測定する。

## (5) 測定方法

測定機器は, 3 MV タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では, 米国国立標準局 (NIST) から提供されたシェウ酸 (HO<sub>x</sub> II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また, 加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時に行う。

## (6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には, Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は, 過去において大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定された, 1950年を基準年として遡る<sup>14</sup>C年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [ ({}^{14}\text{A}_\text{S} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R} ] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [ ({}^{13}\text{A}_\text{S} - {}^{13}\text{A}_\text{PDB}) / {}^{13}\text{A}_\text{PDB} ] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_\text{S}$ ：試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_\text{S}$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_\text{S}$

${}^{14}\text{A}_\text{R}$ ：標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_\text{R}$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度（ ${}^{13}\text{A}_\text{S} = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度（ ${}^{14}\text{A}_\text{N}$ ）に換算した上で計算した値である。（1）式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_\text{N} = {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [ ({}^{14}\text{A}_\text{N} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R} ] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [ (\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1 ]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

#### (7) 測定結果

土坑から出土した炭化材の $^{14}\text{C}$ 年代は、それぞれ1380 ± 30yrBP (No.8 : IAAA-70709) , 3590 ± 30yrBP (No.9 : IAAA-70710) である。暦年較正年代 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) は、No.8が630~670AD, No.9が2010~2000BC (1.8%) ・ 1980~1890BC (66.4%) である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

#### 参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2) , 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A) , 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A) , 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

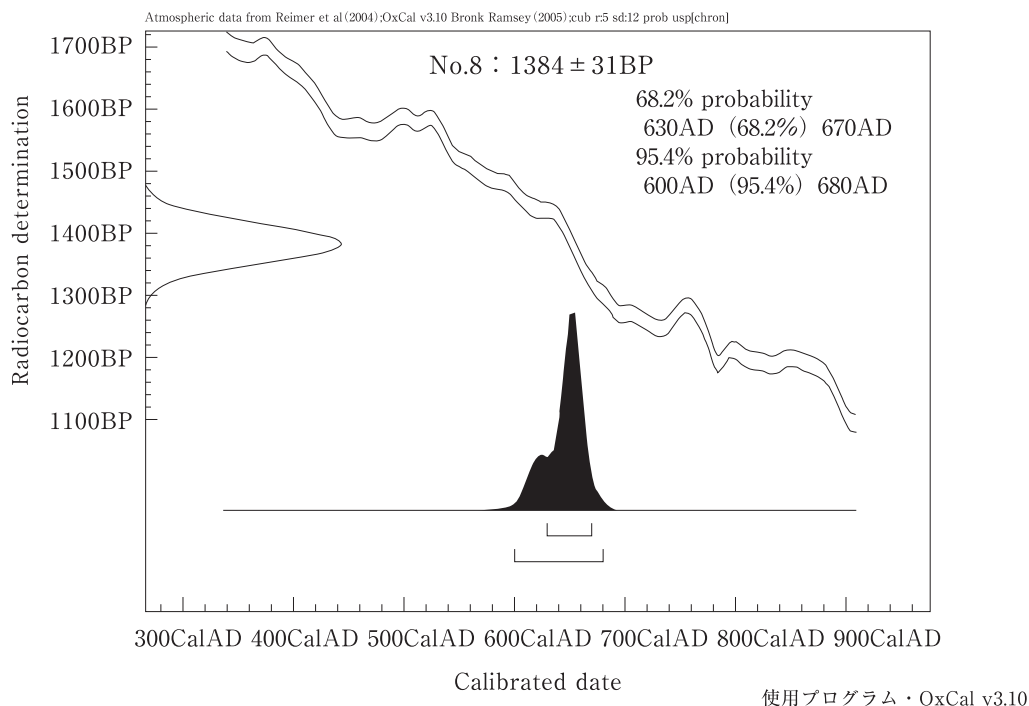
AAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70709  #1826-1	試料採取場所：鹿児島県薩摩川内市都町6646-4 都原遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.8	LibbyAge (yrBP) : 1380 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -23.58 ± 0.83 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -158.3 ± 3.3 pMC (%) = 84.17 ± 0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -155.9 ± 3.0 pMC (%) = 84.41 ± 0.30 Age (yrBP) : 1,360 ± 30
IAAA-70710  #1826-2	試料採取場所：鹿児島県薩摩川内市都町6646-4 都原遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：No.9	LibbyAge (yrBP) : 3590 ± 30 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -24.60 ± 0.95 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -360.0 ± 2.7 pMC (%) = 64.00 ± 0.27
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -359.5 ± 2.4 pMC (%) = 64.05 ± 0.24 Age (yrBP) : 3,580 ± 30

**参考資料：暦年較正用年代**

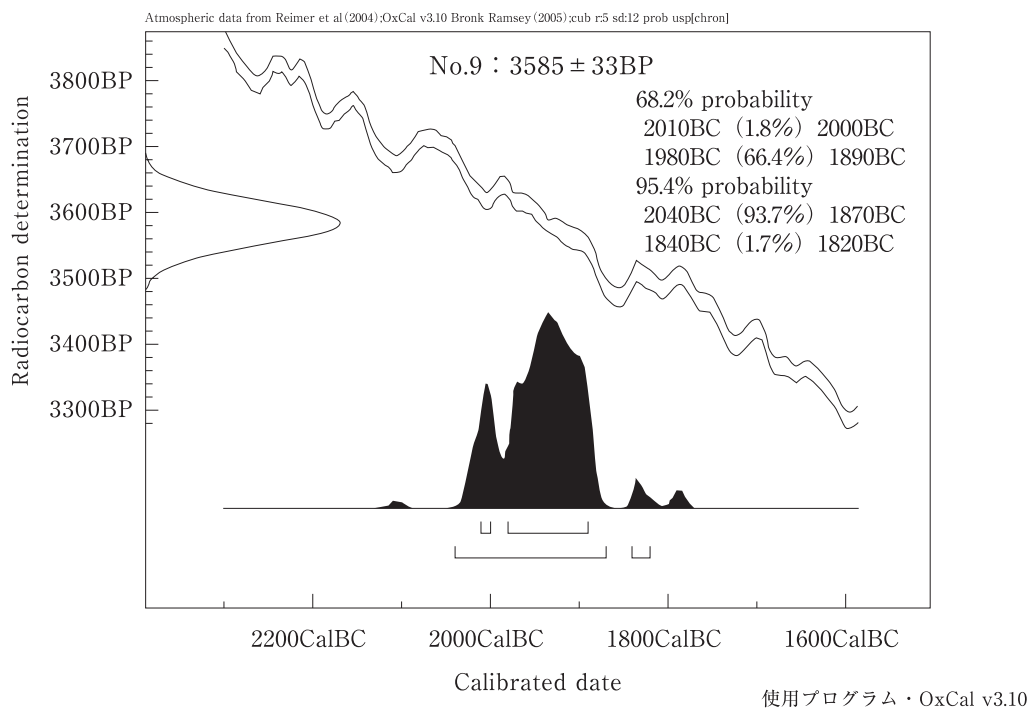
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-70709	No.8	1384 ± 31
IAAA-70710	No.9	3585 ± 33

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

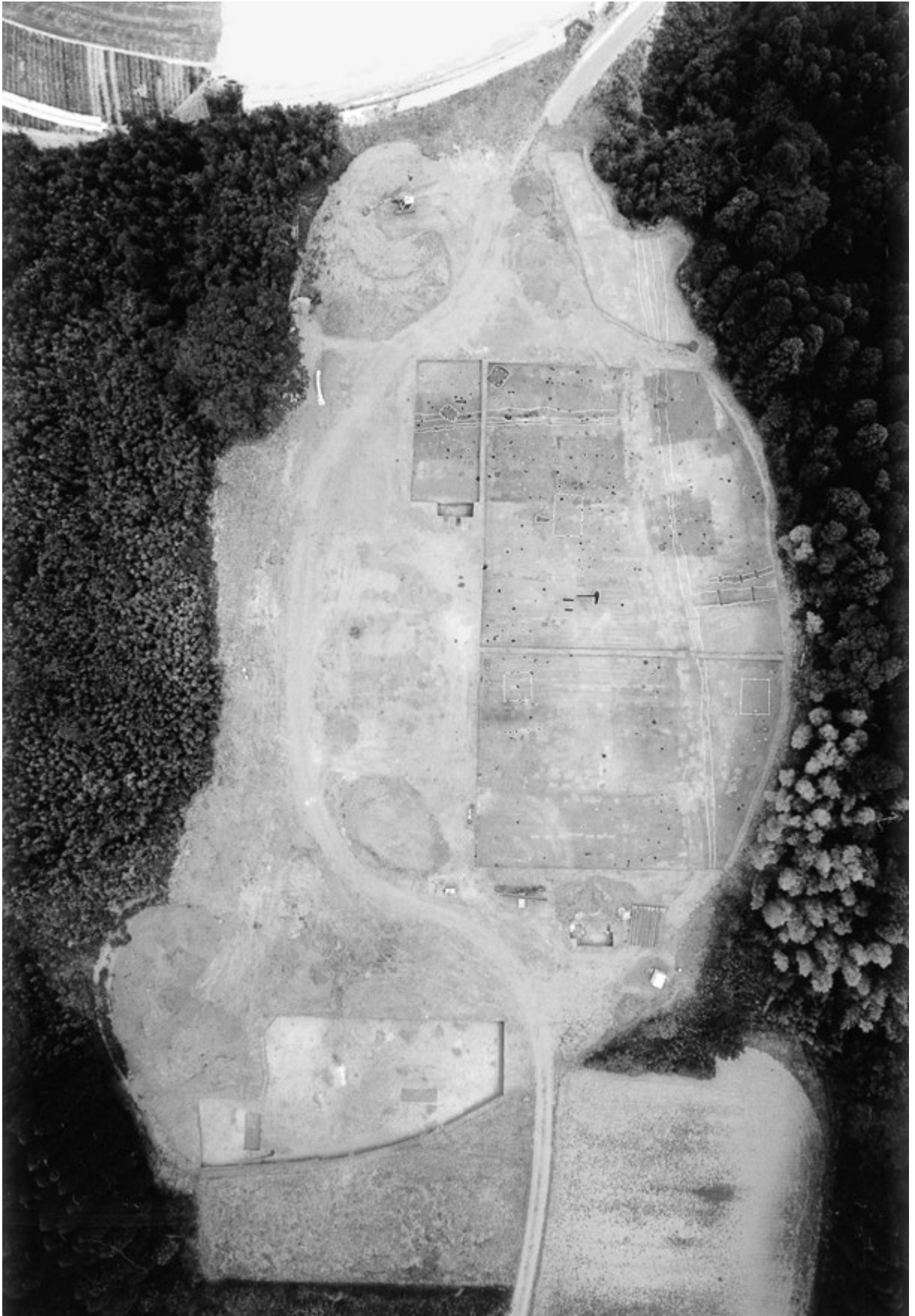
**【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】**



**【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】**



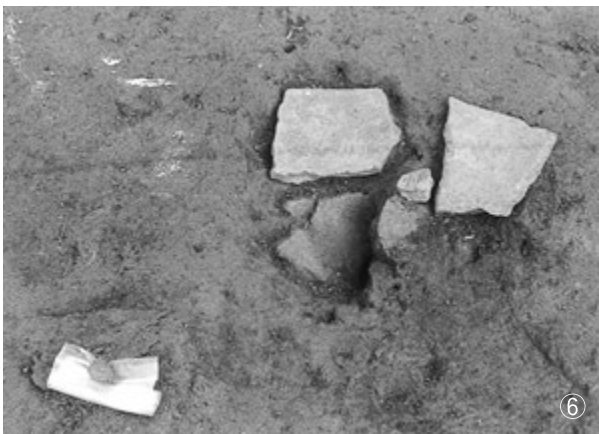
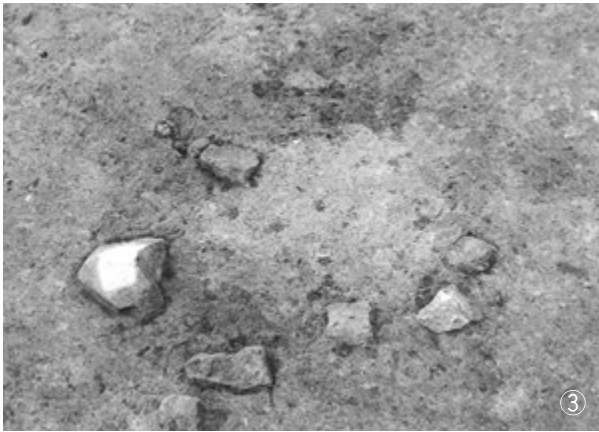
# 写真図版



遺構検出状況空中写真



土層断面図，旧石器時代のブロック検出状況，礫群検出状況

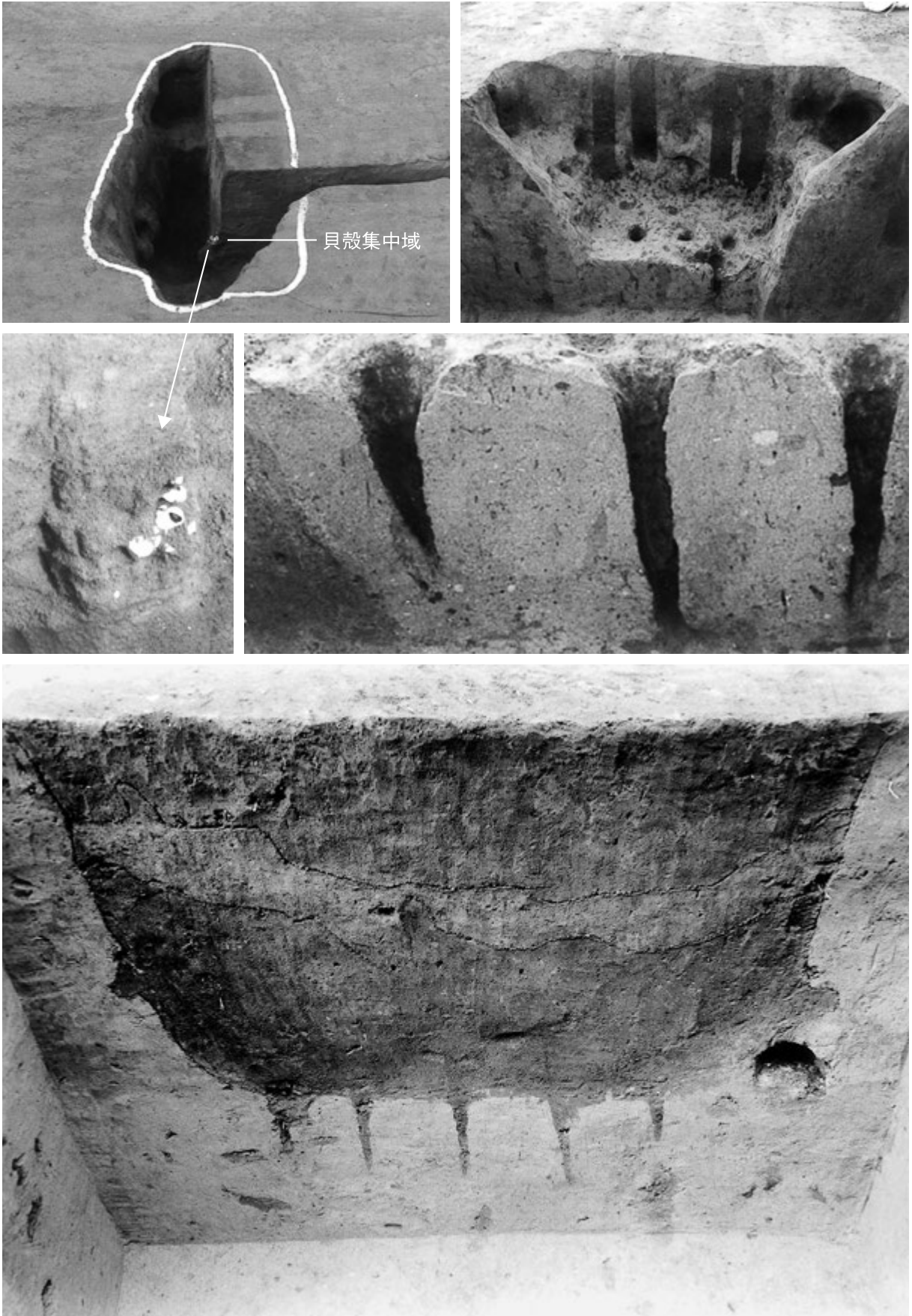


縄文時代早期の集石遺構①～③，遺物出土状況④～⑥  
縄文時代中期の集石遺構検出状況⑦

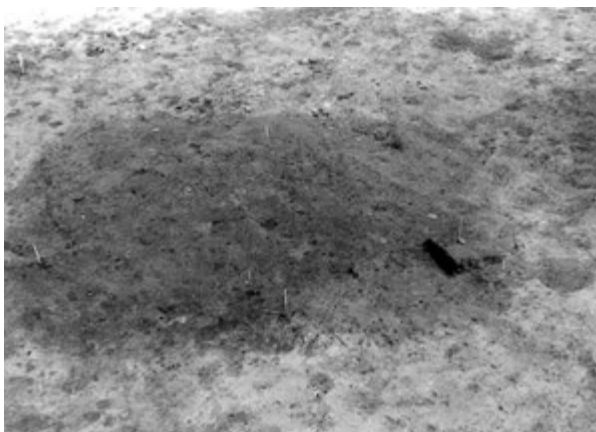




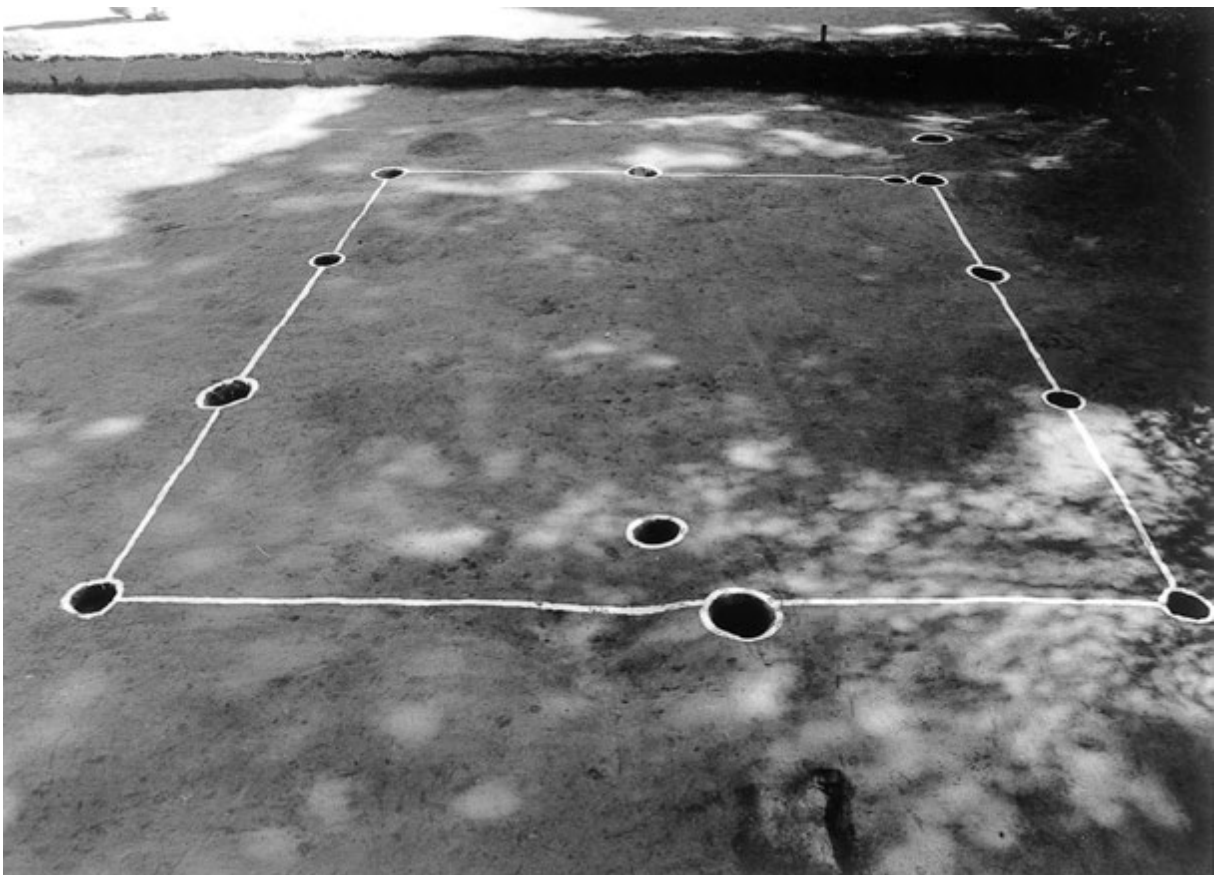
縄文時代晩期の集石遺構検出状況



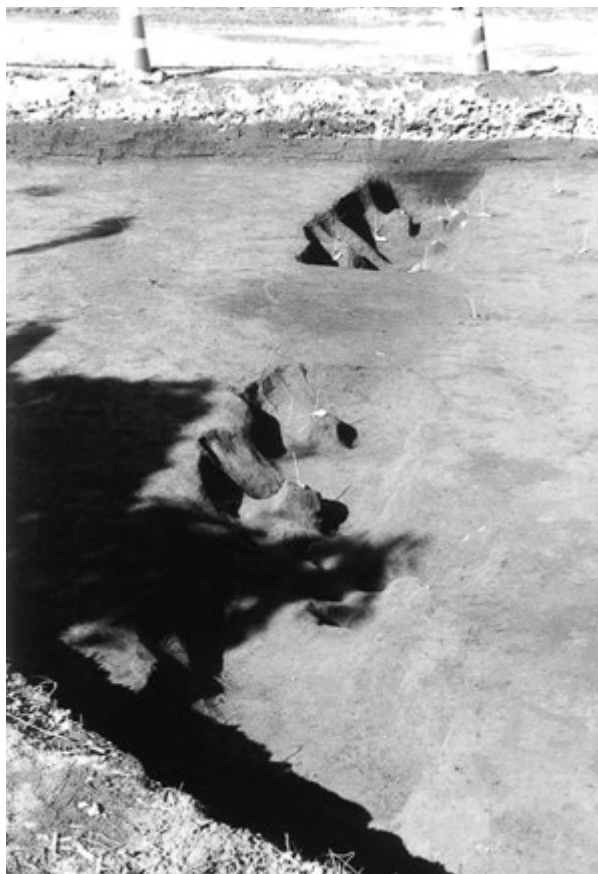
古代～中世の落とし穴完掘状況



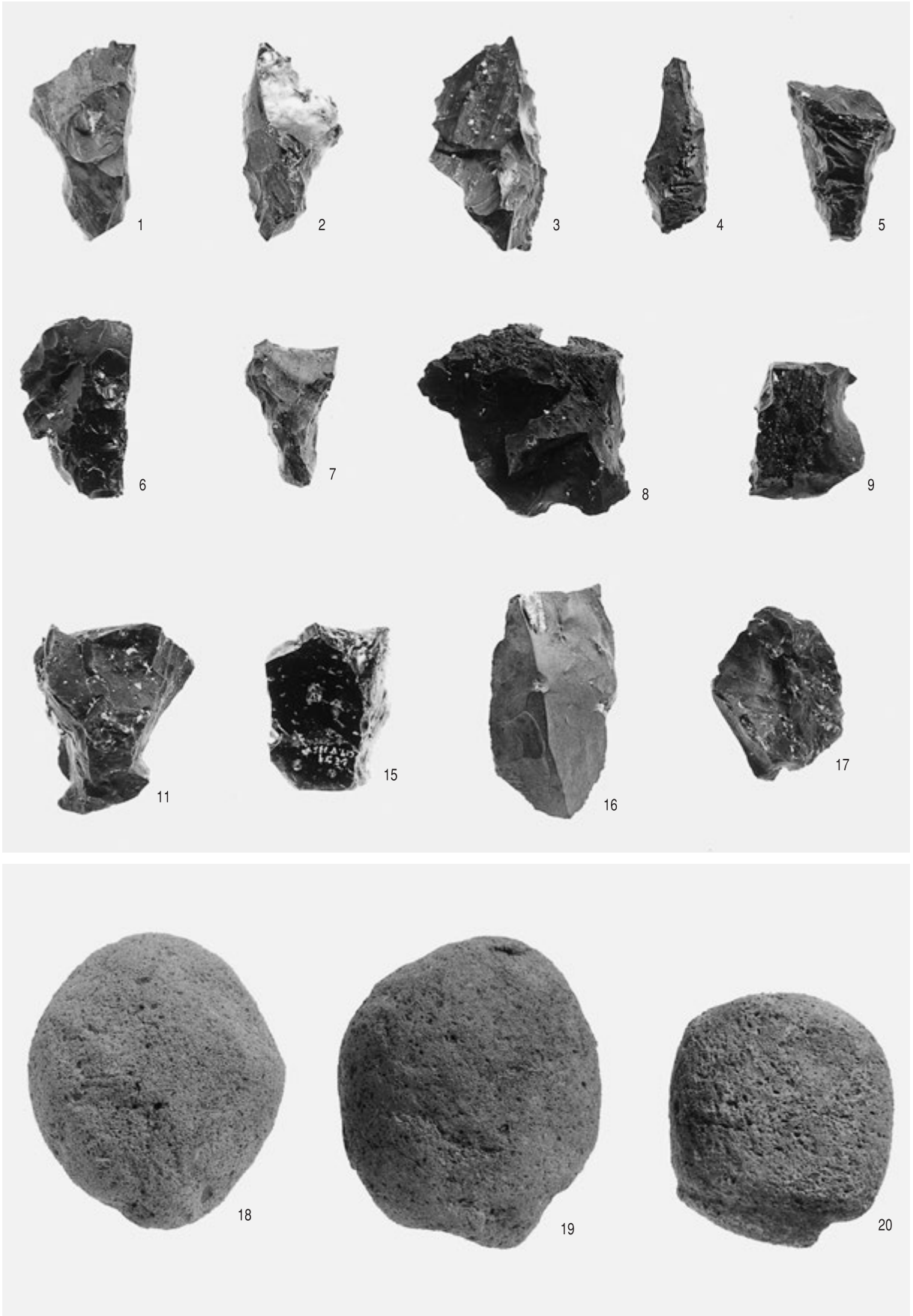
古代～中世の竪穴建物跡検出・完掘状況



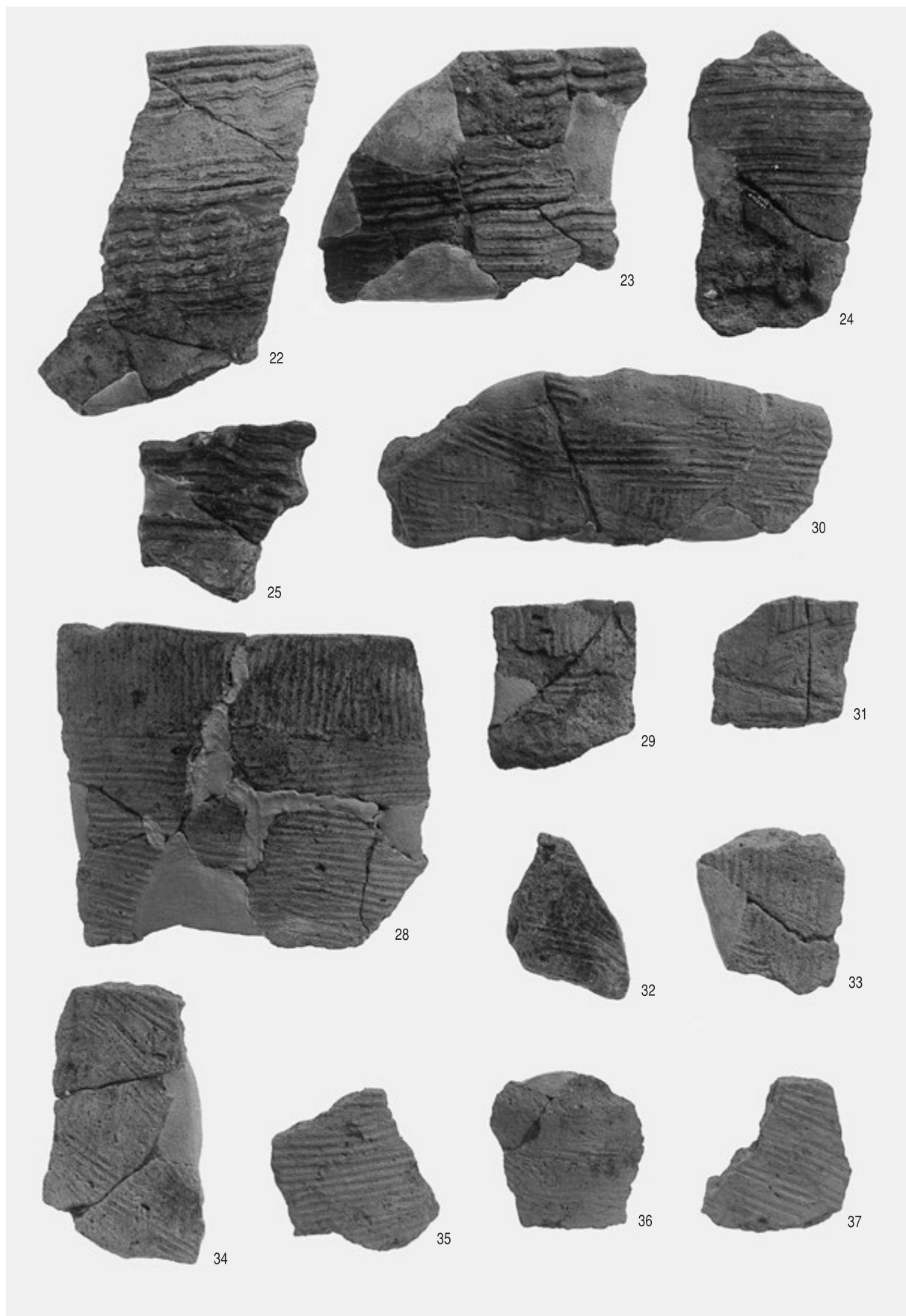
古代～中世の掘立柱建物跡完掘状況



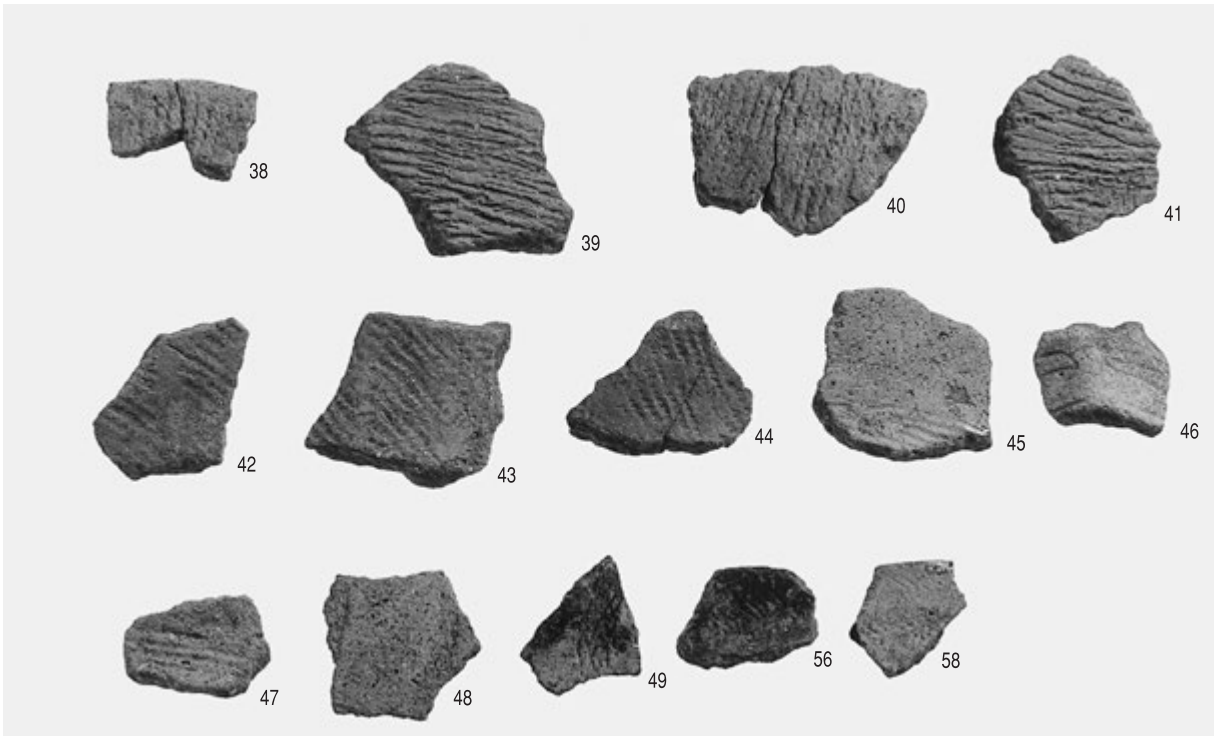
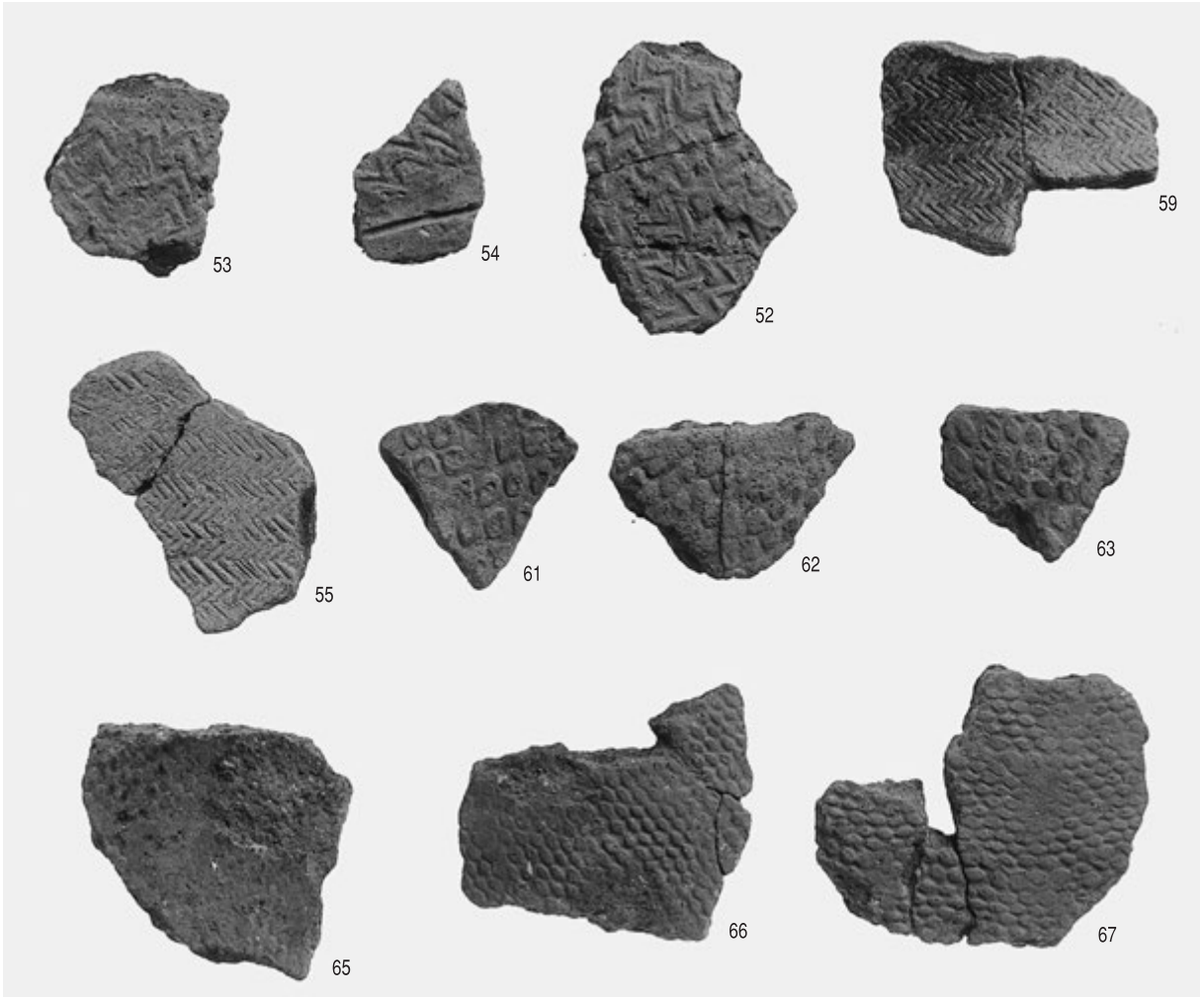
近世の溝状遺構検出・完掘状況



旧石器時代の石器

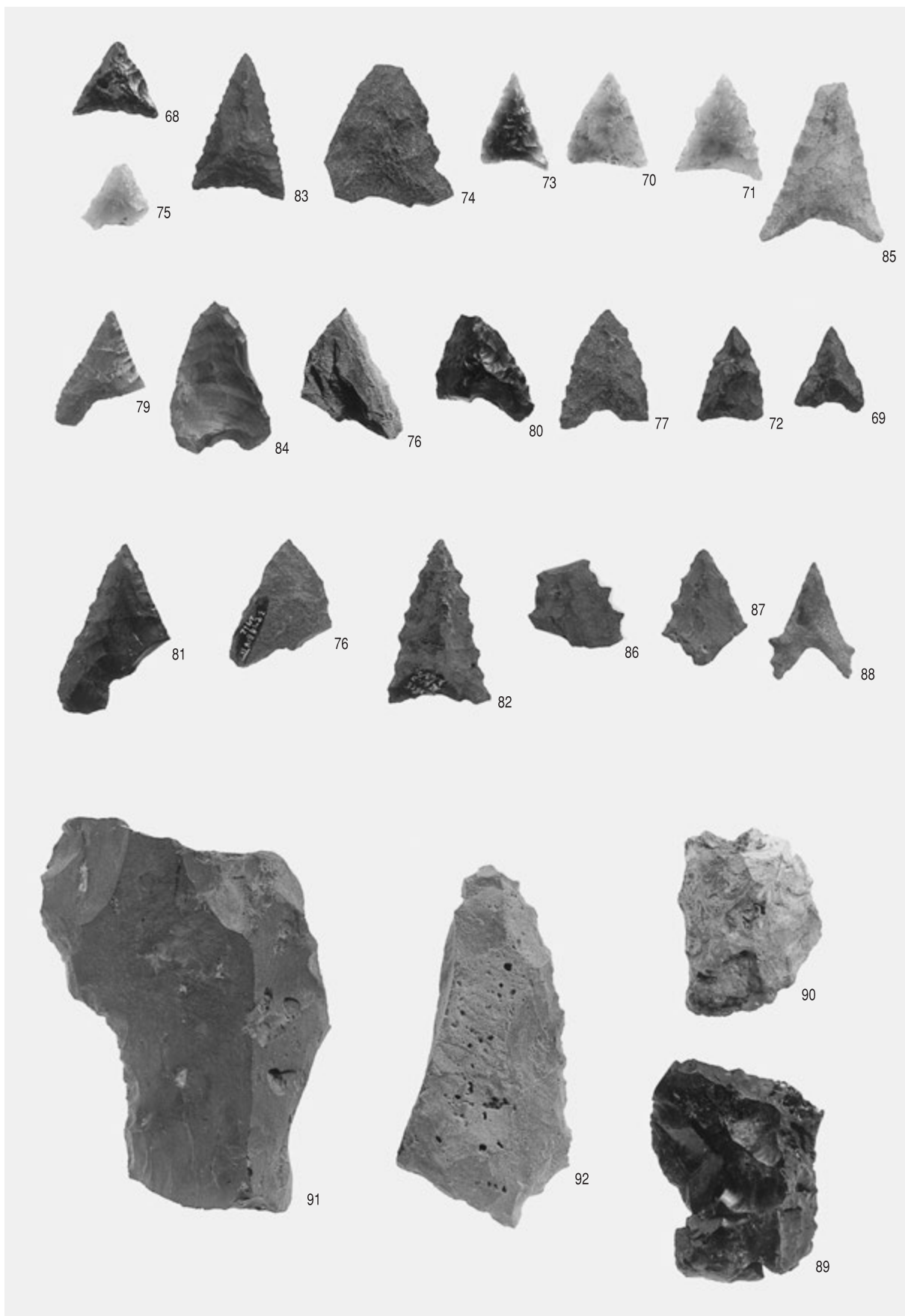


縄文時代早期の土器 (1)

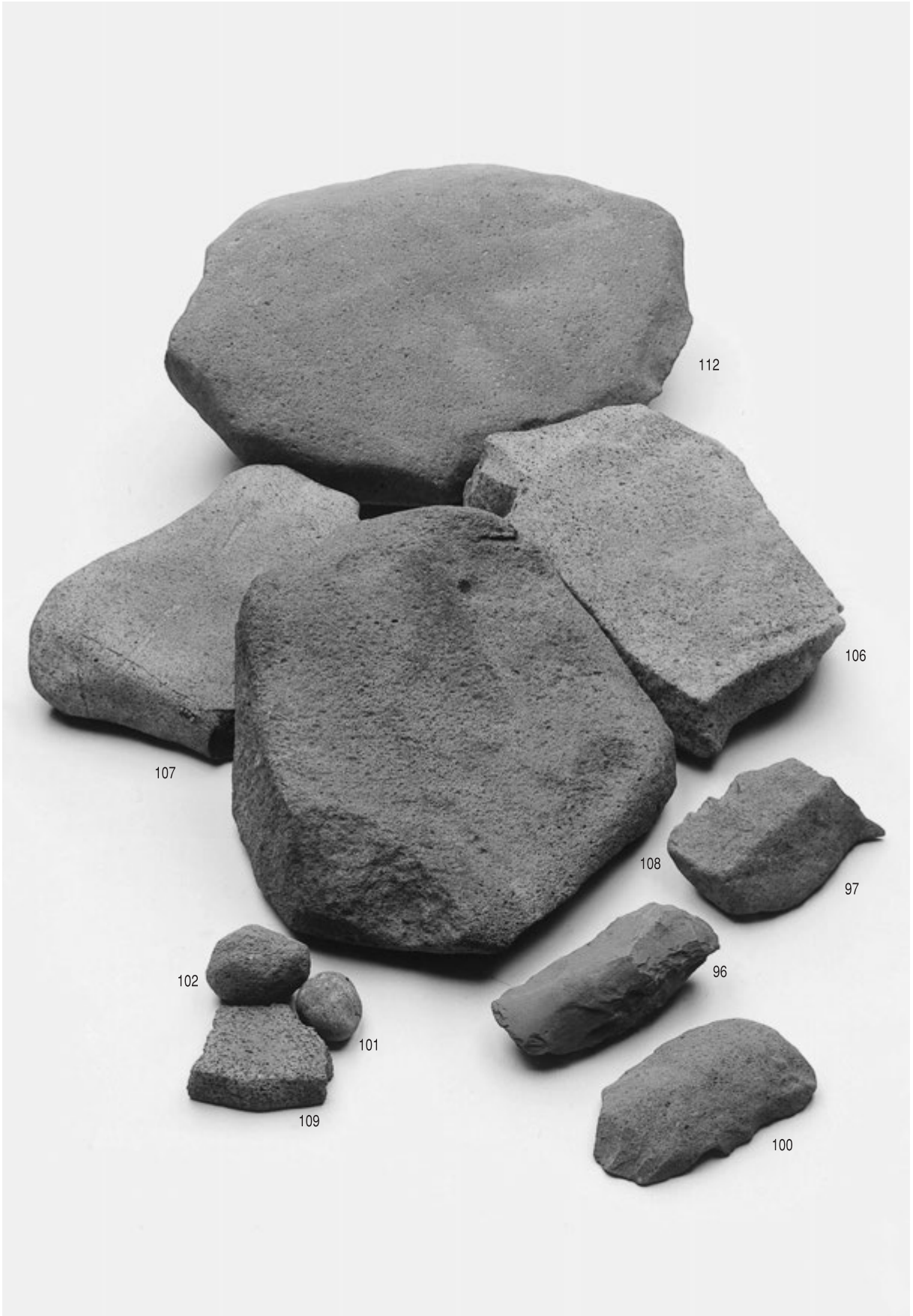


縄文時代早期の土器 (2)

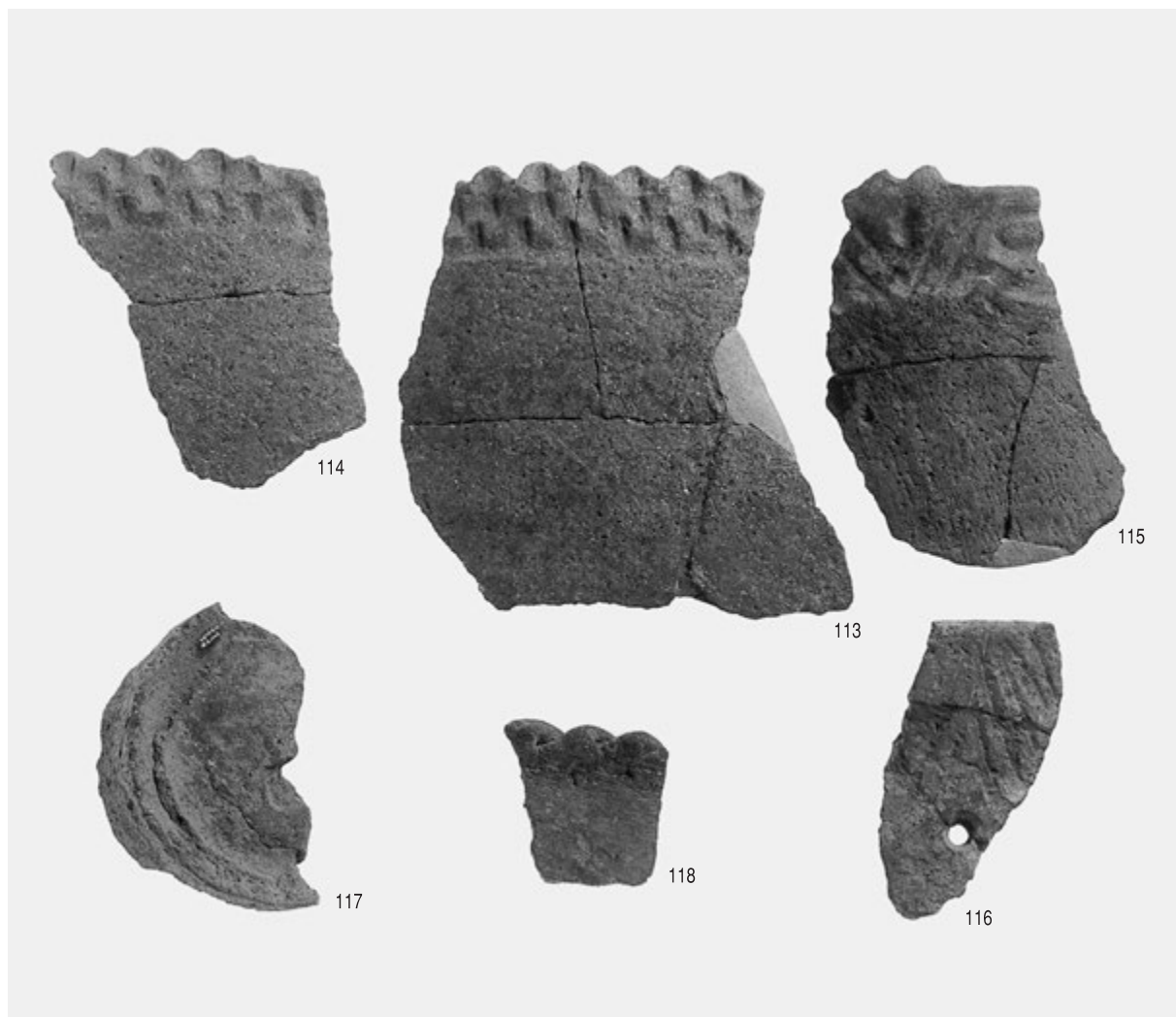




縄文時代早期の石器 (1)



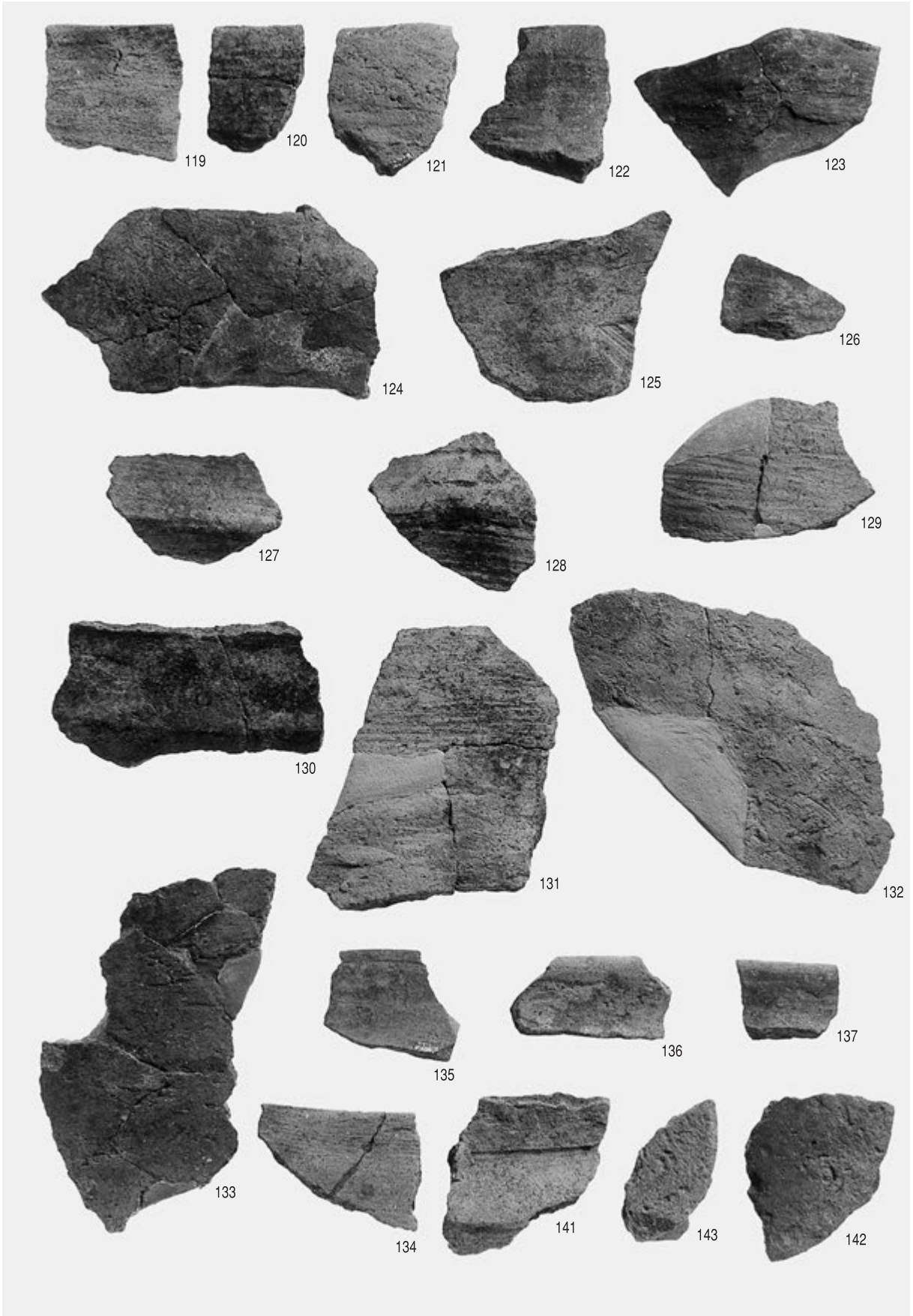
縄文時代早期の石器 (2)



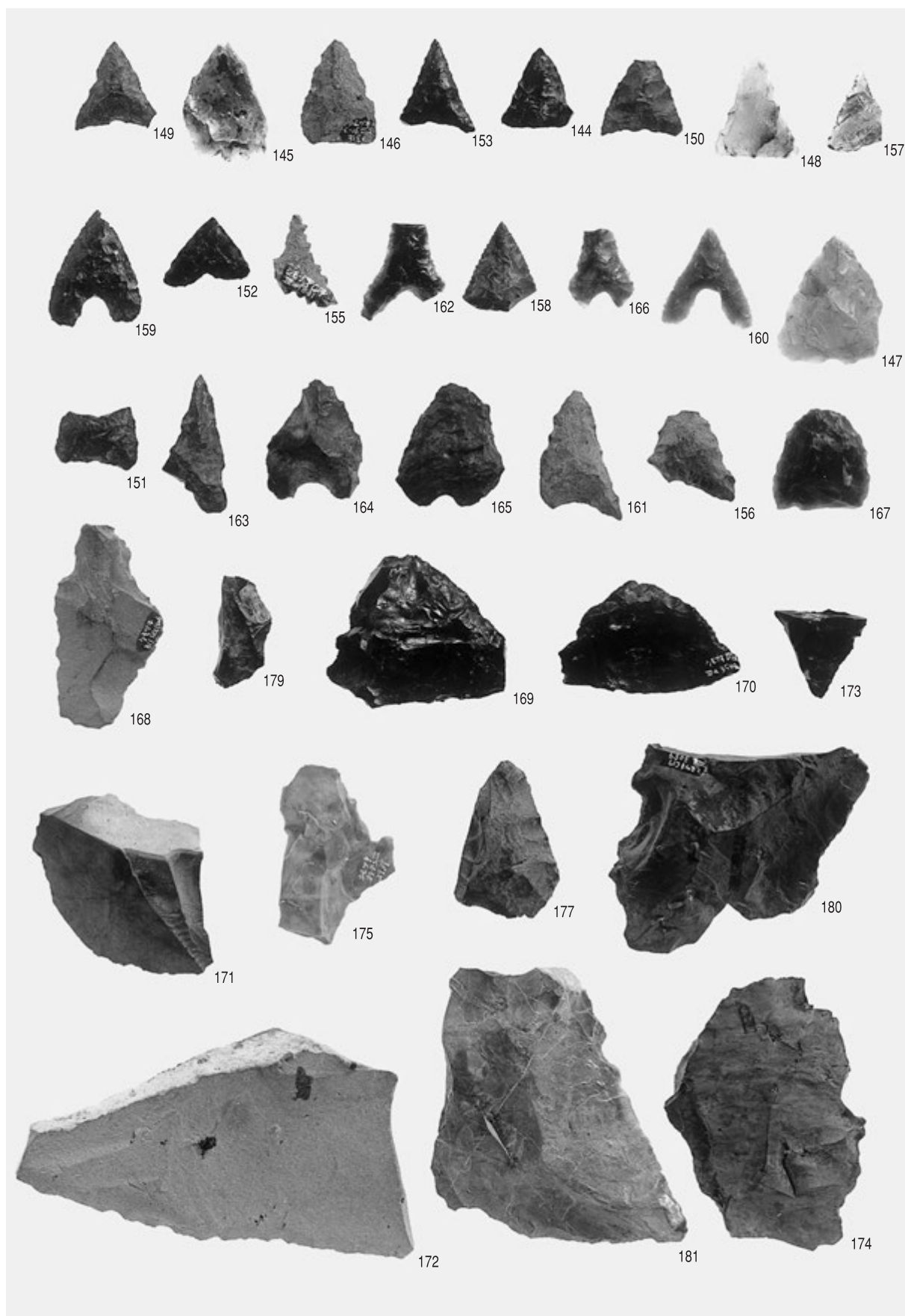
縄文時代中期・後期の土器



縄文時代晩期の土器 (1)



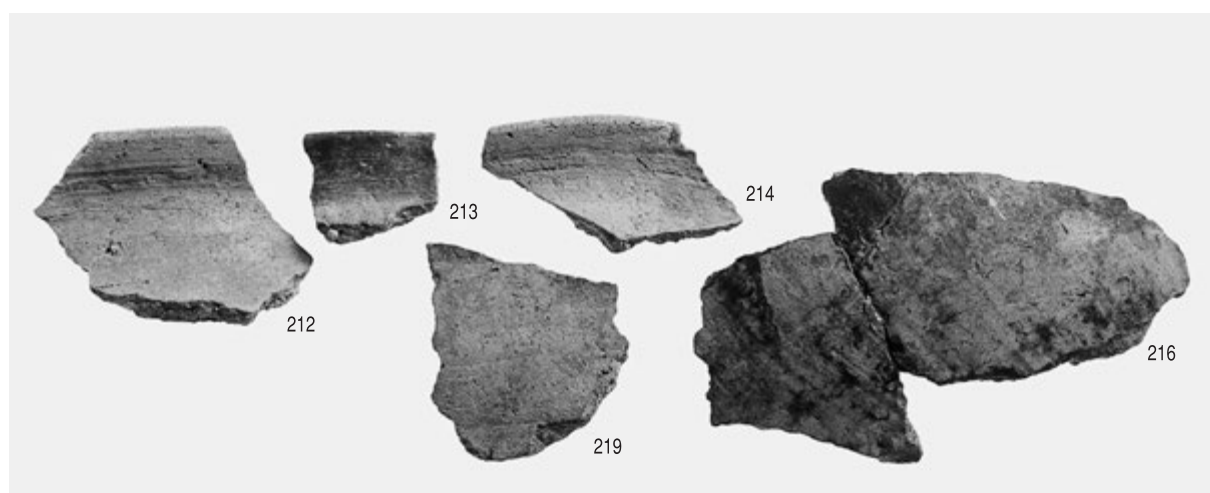
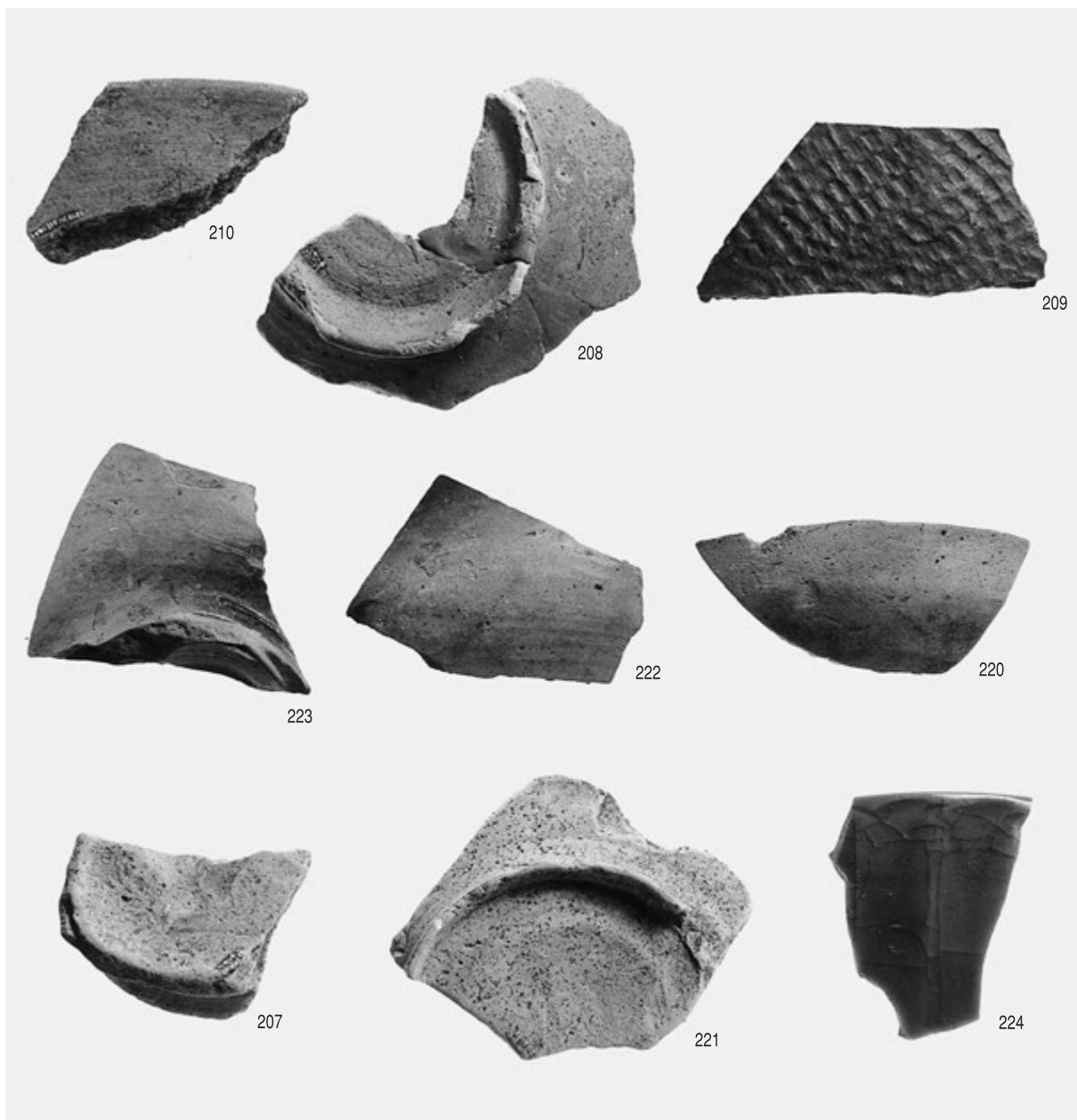
縄文時代晩期の土器 (2)



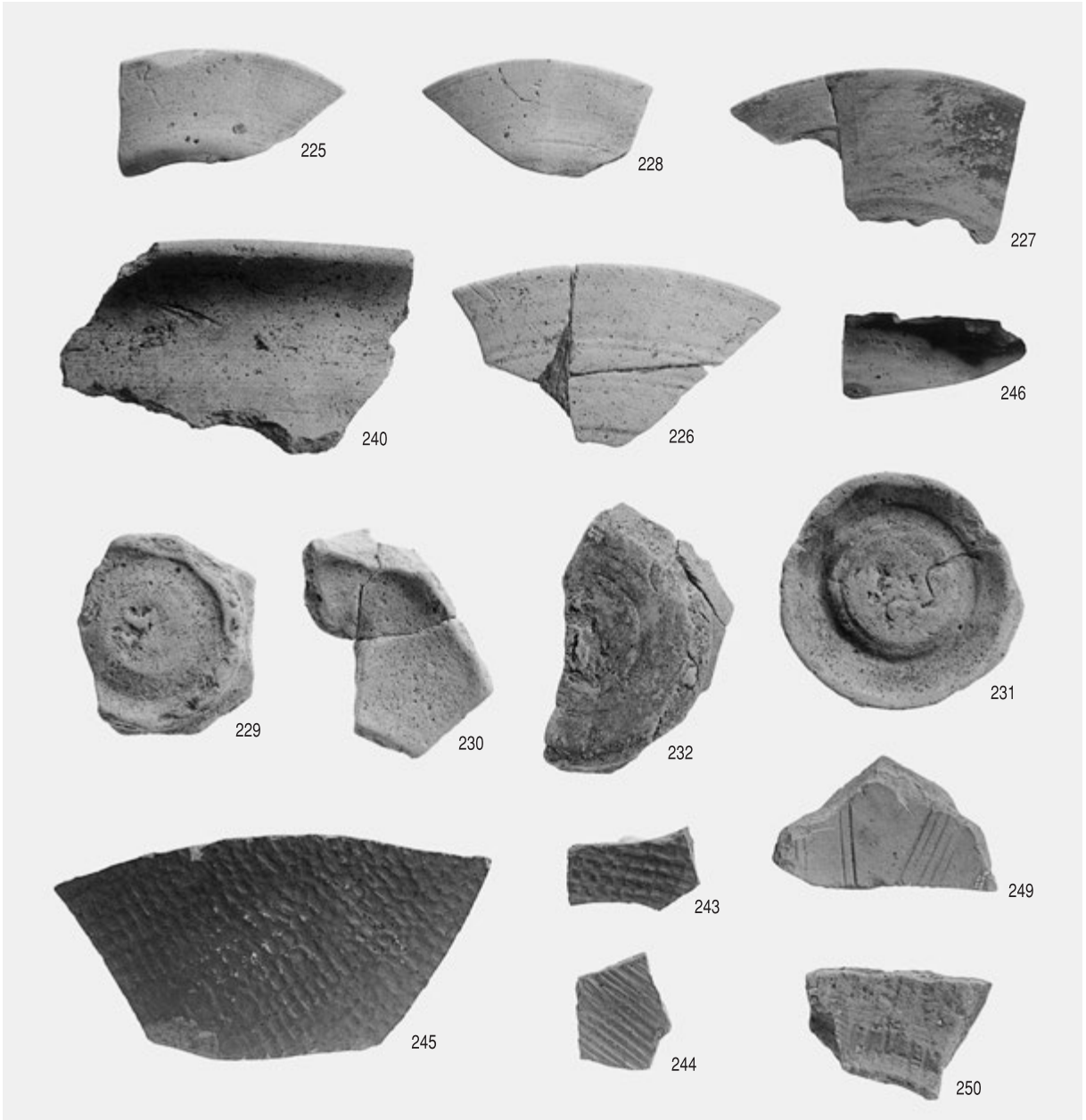
縄文時代晩期の石器 (1)



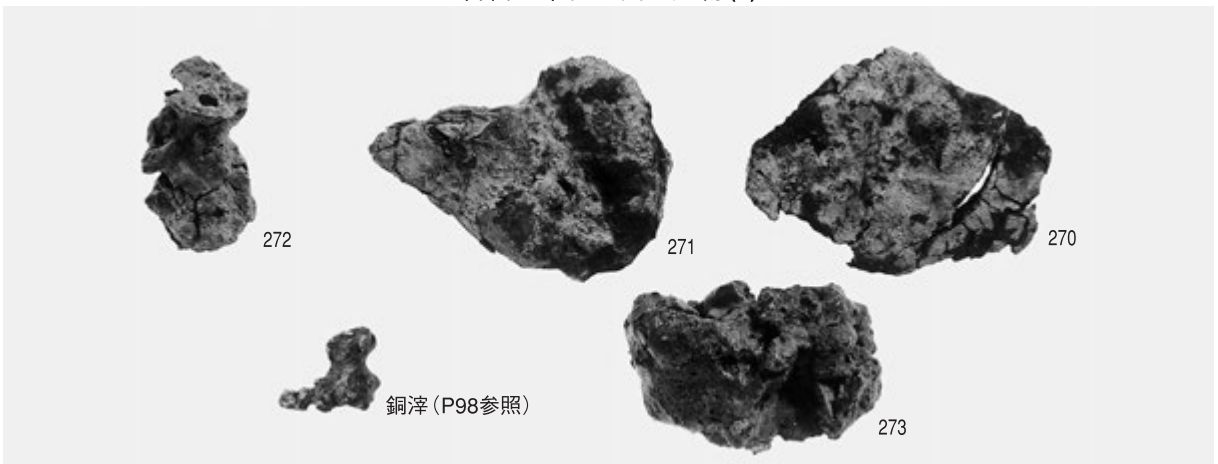
縄文時代晩期の石器 (2)



古代～中世の遺構内遺物（土師器・須恵器）

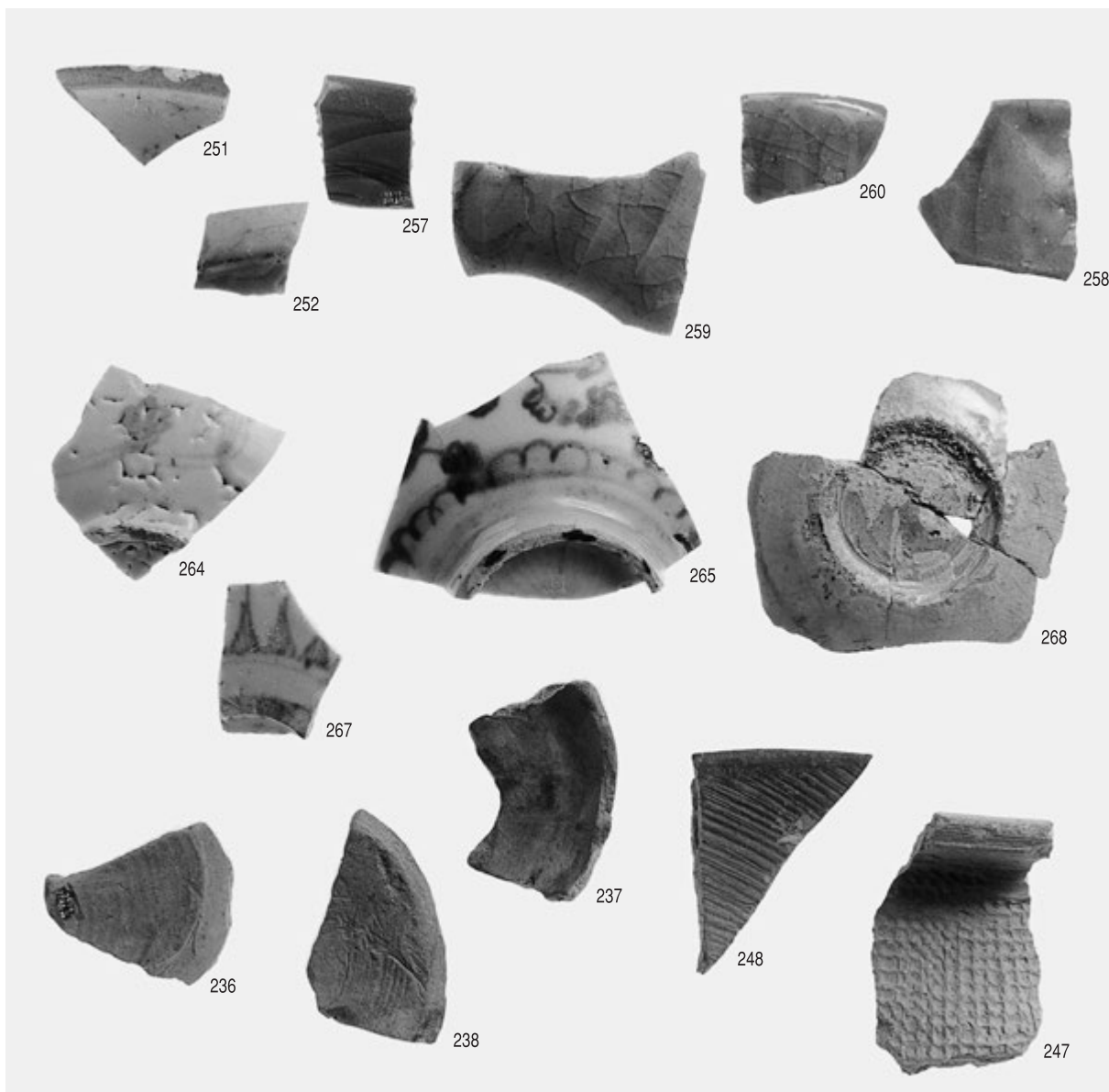


古代～中世の出土遺物(1)

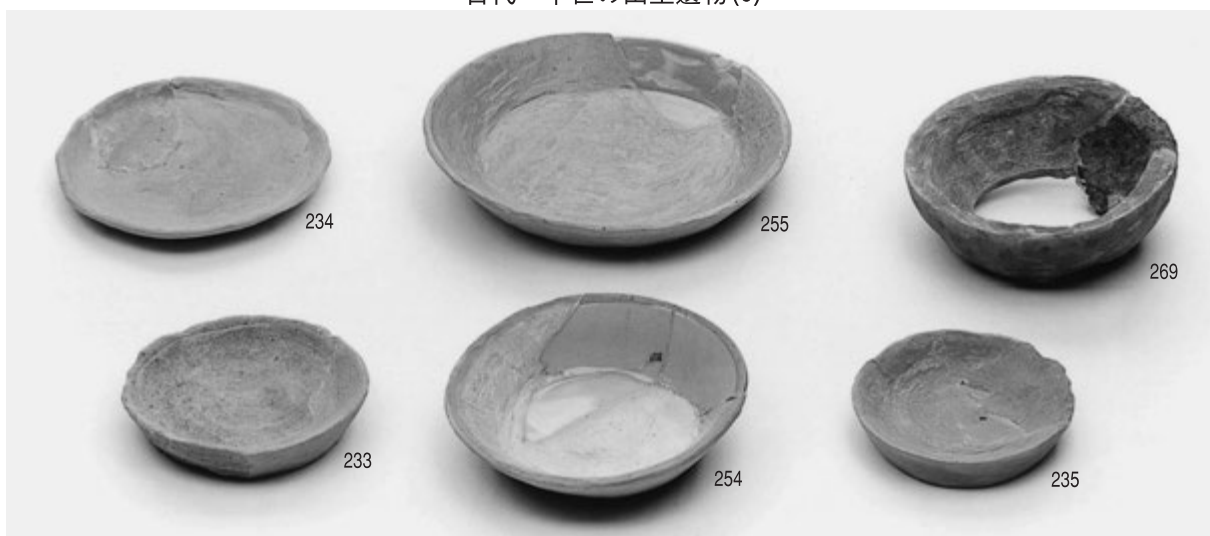


古代～中世の出土遺物(2), 古代～中世の金属製品





古代～中世の出土遺物(3)



中世の出土遺物 (土師器皿等集合)



都原遺跡の遠景



縄文時代早期の集石



縄文時代早期の2号土坑



縄文時代早期の土器出土状況



古代の骨蔵器出土状況



中世の道跡



中世の溝状遺構



近世溝状遺構検出状況



近世溝状遺構完掘状況



近世の土坑



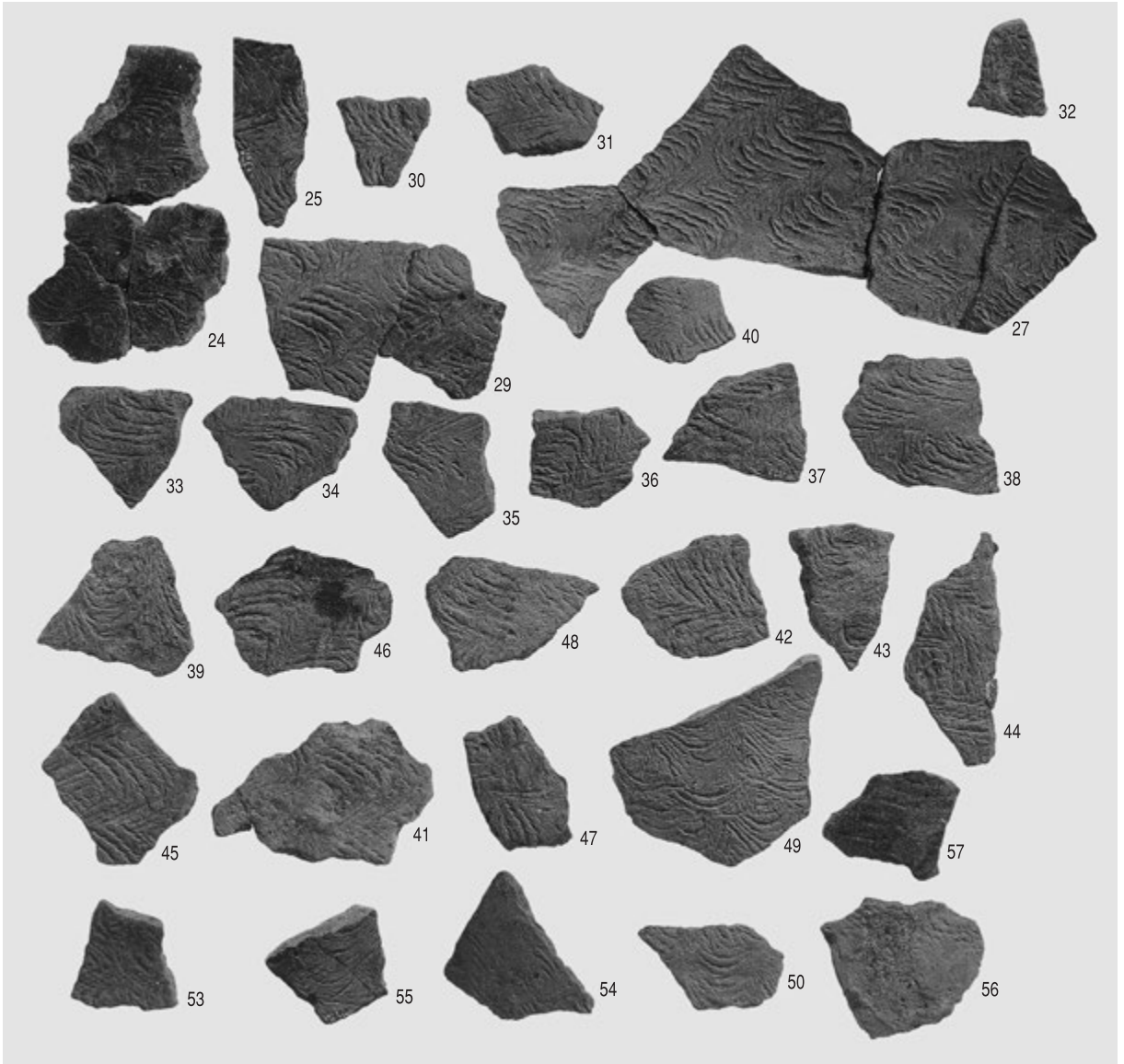
都原遺跡から霜月田遺跡を臨む



縄文時代早期の土器(変形撚糸文土器)①



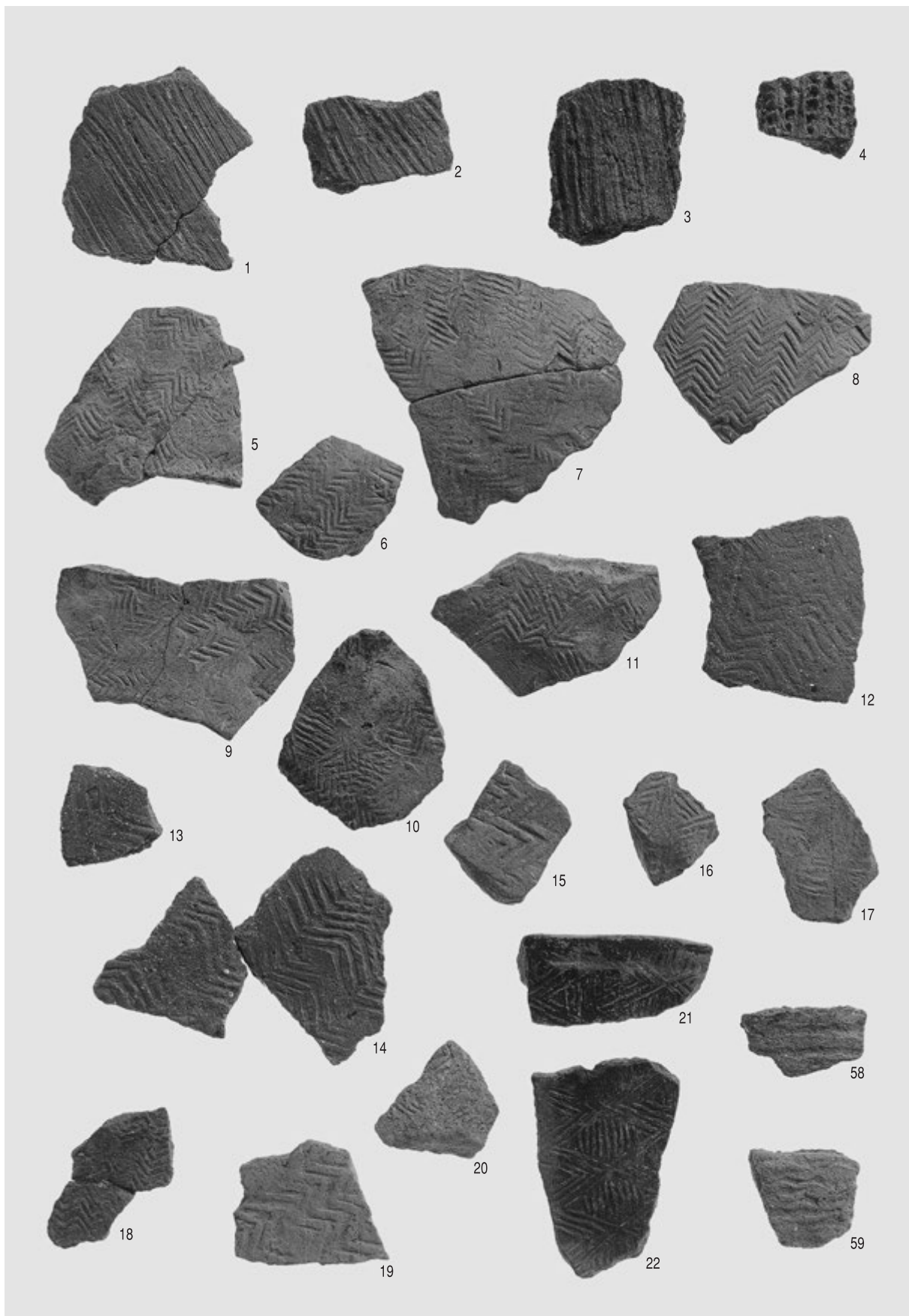
縄文時代早期の土器(山形押型文土器)



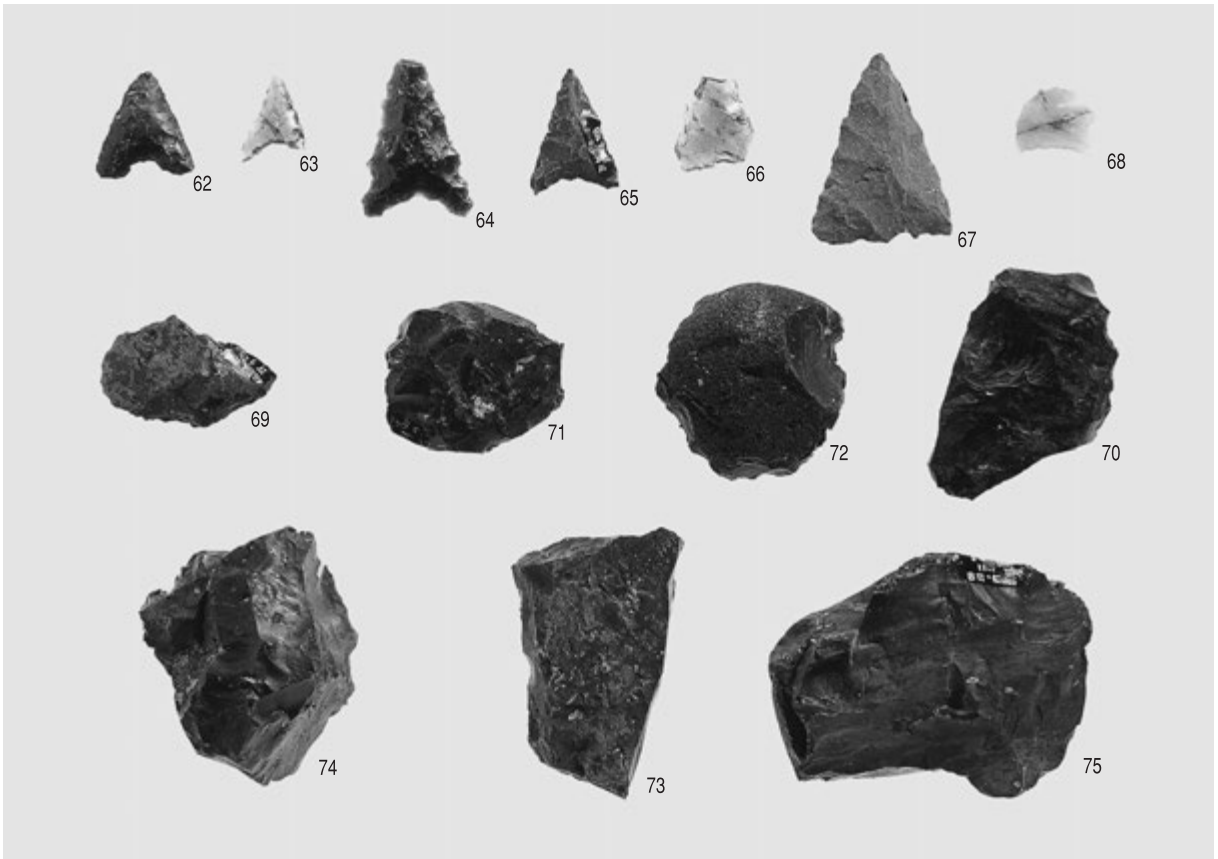
縄文時代早期の土器(変形撚糸文土器)②

縄文時代早期の土器(1)





縄文時代早期の土器 (2)



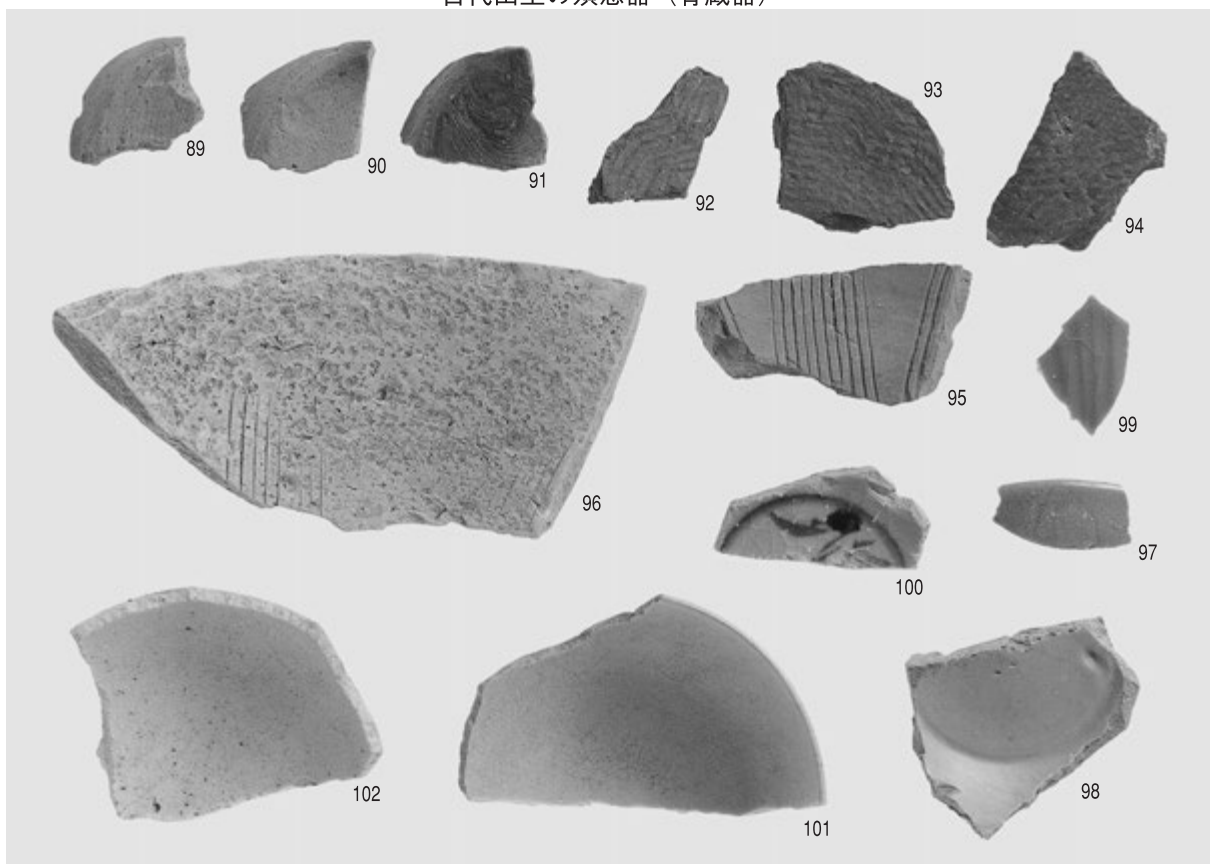
縄文時代早期の石器 (1)



縄文時代早期の石器 (2)



古代出土の須恵器（骨蔵器）



中世・近世の出土土器・陶磁器

## あ と が き

文化の進展に伴って、私たち現代人が忘れかけたことがあります。それは、郷土愛であり、脈々とつながる命のつながりであります。発掘調査や報告書作成を担当するに当たり、その忘れかけたことがしっかりと見えてきました。人々が住んでいたから遺構や遺物が発見される。当たり前のことのようにですが、そこは昔から住みよい場所であったからです。霜月田遺跡、都原遺跡の薩摩川内市都町も正に環境の整った住みよい場所であります。そして、そこには限りない方々の命がバトンされています。切れることもなく、先祖代々の命が皆さんに受け継がれているのです。郷土を愛する心、そして命のバトンを改めて遺跡から感じ取ってみては如何でしょう。

最後に、霜月田遺跡、都原遺跡の発掘調査、報告書作成に関わり御協力いただいた作業員の方々を始め、すべての皆様方に心より感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(131)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 X X VIII

(市来 I C ~ 薩摩川内都 I C)

霜月田遺跡・都原遺跡

(薩摩川内市)

発行日 2008年3月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318

鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

T E L (0995) 48-5811

印刷所 中央印刷 株式会社

〒892-0804

鹿児島県鹿児島市春日町12-16

T E L (099) 247-3300